

リファレンスマニュアル

iPlanet™ Messaging Server

Release 5.2

816-5018-01
2002 年 2 月

Copyright © 2002, Sun Microsystems, Inc. All rights reserved.

Sun、Sun Microsystems、Sun のロゴマーク、および iPlanet は、米国およびその他の国における米国 Sun Microsystems, Inc.(以下、米国 Sun Microsystems 社とします)の商標もしくは登録商標です。

Netscape は、米国およびその他の国における Netscape Communications Corporation 社の登録商標です。

UNIX は、X/Open Company, Ltd が独占的にライセンスしている米国およびその他の国における登録商標です。

Legato Networker は、Legato Systems, Inc. の登録商標です。

Federal Acquisitions: Commercial Software—Government Users Subject to Standard License Terms and Conditions.

本書で説明されている製品は著作権法により保護されており、その使用、複製、頒布および逆コンパイルを制限するライセンスのもとにおいて頒布されます。Sun および Sun のライセンサーの書面による事前の許可なく、本製品および関連する文書のいかなる部分も、いかなる方法によっても複製することが禁じられます。

本書は、「現状のまま」をベースとして提供され、商品性、特定目的への適合性または第三者の権利の非侵害の黙示の保証を含みそれに限定されない、明示的であるか黙示的であるかを問わない、なんらの保証も行われないものとします。

目次

表目次	9
このマニュアルについて	11
対象読者	11
予備知識	12
このマニュアルの構成	12
マニュアルの表記規則	13
モノスペースフォント	13
太字のモノスペースフォント	13
斜体フォント	13
角括弧	14
コマンドラインプロンプト	14
関連情報	15
オンラインで本書を入手するには	15
第1章 Messaging Server のコマンドラインユーティリティ	17
コマンドの説明	18
configutil	18
counterutil	22
deliver	23
hashdir	25
iminitquota	26
imsasm	27
imsbackup	30
imsexport	32
imsimport	34
imsrestore	36
imscripter	39

mboxutil	40
mkbackupdir	44
MoveUser	47
quotacheck	51
readership	59
reconstruct	60
start-msg	63
stop-msg	64
stored	64
第 2 章 Message Transfer Agent のコマンドラインユーティリティ	67
コマンドの説明	69
imsimta cache	69
imsimta chbuild	70
imsimta cnbuild	73
imsimta convertdb	77
imsimta counters	78
imsimta crdb	80
imsimta dirsync	83
imsimta find	85
imsimta kill	86
imsimta process	87
imsimta process_held	88
imsimta program	89
imsimta purge	91
imsimta qclean	92
imsimta qm	94
imsimta qtop	112
imsimta recover-crash	113
imsimta refresh	114
imsimta renamedb	115
imsimta restart	116
imsimta return	117
imsimta run	118
imsimta start	119
imsimta stop	120
imsimta submit	120
imsimta test	121
imsimta version	131
imsimta view	131

第 3 章 Delegated Administrator のコマンドラインユーティリティ	133
実行モード	135
コマンドファイルの形式	135
コマンドの説明	136
imadmin admin add	136
imadmin admin remove	138
imadmin admin search	139
imadmin domain create	141
imadmin domain delete	143
imadmin domain modify	144
imadmin domain purge	146
imadmin domain search	149
imadmin family create	150
imadmin family delete	152
imadmin family modify	153
imadmin family purge	155
imadmin family search	158
imadmin family-admin add	159
imadmin family-admin remove	161
imadmin family-admin search	162
imadmin family-member create	164
imadmin family-member delete	166
imadmin family-member remove	167
imadmin family-member search	169
imadmin group create	170
imadmin group delete	173
imadmin group modify	174
imadmin group purge	176
imadmin group search	178
imadmin user create	180
imadmin user delete	182
imadmin user modify	183
imadmin user purge	185
imadmin user search	189
第 4 章 Messaging Server の設定	191
configutil の各パラメータ	191
第 5 章 MTA の設定	213
MTA 設定ファイル	214
MTA 設定ファイル	216
imta.cnf ファイルの構造	216
ファイル内のコメント	216

他のファイルを含める	217
ドメイン書き換え規則	217
書き換え規則の構造	217
書き換え規則のパターンとタグ	219
書き換え規則テンプレート	221
テンプレートの置換と書き換え規則のコントロールシーケンス	221
チャンネル定義	224
チャンネル設定キーワード	225
エイリアスファイル	275
エイリアスファイルに他のファイルを含める	276
/var/mail チャンネルオプションファイル	277
SMTP チャンネルオプションファイル	278
ファイルの形式	278
使用可能な SMTP チャンネルオプション	279
変換	286
文字セット変換とメッセージフォーマット変換のマッピング	287
変換ファイル	288
マッピングファイル	295
マッピングファイルを検索する / 読み込む	295
マッピングファイルのファイルフォーマット	295
マッピングの動作	297
オプションファイル	301
MTA オプションファイルを探して読み込む	301
オプションファイルのフォーマットおよび使用可能なオプション	301
ヘッダーオプションファイル	313
ヘッダーオプションファイルの場所	314
ヘッダーオプションファイルのフォーマット	314
テイラーファイル	316
Dirsync オプションファイル	320
自動返信オプションファイル	321
ジョブコントローラの設定	322
ジョブコントローラ設定ファイル	322
ディスパッチャ	326
ディスパッチャ設定ファイル	326
設定ファイルのフォーマット	326
デバッグとログファイル	331
第 6 章 Messaging Multiplexor の構成	333
暗号化 (SSL) オプション	333
Multiplexor の設定	336
Multiplexor の設定ファイル	336
Multiplexor の設定パラメータ	338

付録 A サポート規格	351
メッセージング	351
基本的なメッセージ構造	351
アクセスプロトコルとメッセージストア	352
SMTP と拡張 SMTP	353
メッセージの内容と構造	354
配信ステータス通知	354
セキュリティ	355
ドメイン名サービス	356
テキストと文字セットの仕様	356
国内規格と国際規格	356
インターネットの参考資料	357
用語集	359
索引	389

表目次

表 1-1	Messaging Server のコマンド	17
表 2-1	MTA のコマンド	67
表 3-1	Delegated Administrator のコマンドラインユーティリティ	133
表 4-1	configutil の各パラメータ	191
表 5-1	MTA 設定ファイル	214
表 5-2	MTA データベースファイル	215
表 5-3	書き換え規則の特殊パターンの要約	220
表 5-4	書き換え規則のテンプレートの形式の要約	221
表 5-5	テンプレートの置換とコントロールシーケンスの要約	222
表 5-6	チャンネルキーワードのアルファベット順リスト	226
表 5-7	機能別チャンネルキーワード	271
表 5-8	ローカルチャンネルのオプション	277
表 5-9	SMTP チャンネルオプション	279
表 5-10	CHARSET-CONVERSION マッピングテーブルのキーワード	287
表 5-11	変換パラメータ	289
表 5-12	変換チャンネルで使用される環境変数	293
表 5-13	情報を変換チャンネルに戻すためのオプション	294
表 5-14	マッピングパターンのワイルドカード	298
表 5-15	マッピングテンプレートの代替とメタ文字	299
表 5-16	オプションファイルのオプション	302
表 5-17	USE_REVERSE_DATABASE のビット値	313
表 5-18	ヘッダーオプション	315
表 5-19	テイラーファイルのオプション	317
表 5-20	dirsync ファイルのオプション	320
表 5-21	autoreply ファイルのオプション	321
表 5-22	ジョブコントローラ設定ファイルの一般的なオプション	323
表 5-23	ジョブコントローラの POOL オプション	325

表 5-24 ジョブコントローラの CHANNEL オプション	325
表 5-25 ディスパッチャ設定ファイルのオプション	327
表 5-26 ディスパッチャデバッグビット	331
表 6-1 SSL の設定パラメータ	334
表 6-2 Messaging Multiplexor の設定ファイル	336
表 6-3 Messaging Multiplexor の設定パラメータ	338
表 A-1 基本的なメッセージ構造	351
表 A-2 アクセスプロトコルとメッセージストア	352
表 A-3 SMTP と拡張 SMTP	353
表 A-4 メッセージの内容と構造	354
表 A-5 配信ステータス通知	354
表 A-6 セキュリティ	355
表 A-7 ドメイン名サービス	356
表 A-8 国内および国際情報交換	356
表 A-9 インターネットの参考資料	357

このマニュアルについて

このマニュアルには、iPlanet™ Messaging Server 製品に関するリファレンス情報が掲載されています。iPlanet Messaging Server は、オープンインターネット規格を使用する様々な規模の企業およびメッセージングホストの電子メールに関するニーズに応え、強力で柔軟なクロスプラットフォーム対応のソリューションを提供します。

このマニュアルは、『iPlanet Messaging Server 管理者ガイド』といっしょにお使いください。管理者ガイドでは、iPlanet Messaging Server を設定、管理、監視する方法やトラブルシューティングについて説明しています。また、このリファレンスマニュアルでは、コマンドラインユーティリティや設定ファイルに関する情報を紹介しています。これらの情報を参考にして、iPlanet Messaging Server の設定、管理、監視、およびトラブルシューティングを行うようにしてください。

この章には、以下の項目があります。

- 対象読者
- 予備知識
- このマニュアルの構成
- マニュアルの表記規則
- 関連情報
- オンラインで本書を入手するには

対象読者

このマニュアルは、UNIX® または NT に精通した中級または上級のテクニカルネットワーク管理者を対象に書かれています。これらの管理者たちが、実際に iPlanet Messaging Server を設定、管理、および保守することになります。『iPlanet Messaging Server リファレンスマニュアル』は、アーキテクトや開発者たちによって利用されることもあります。このマニュアルは、エンドユーザ用に作成されたものではありません。

予備知識

このマニュアルは、**Messaging Server** ソフトウェアの設定および管理に携わる方たちを対象としており、以下の予備知識があることを前提に書かれています。

- インターネットおよび WWW (ワールドワイドウェブ)
- iPlanet Administration Server
- iPlanet Directory Server および LDAP
- Netscape™ Console

このマニュアルの構成

このマニュアルには、以下の章があります。

- このマニュアルについて (この章)
- 第 1 章「**Messaging Server** のコマンドラインユーティリティ」
Messaging Server の重要なユーティリティについて説明しています。
- 第 2 章「**Message Transfer Agent** のコマンドラインユーティリティ」
MTA ユーティリティについて説明しています。
- 第 3 章「**Delegated Administrator** のコマンドラインユーティリティ」
iPlanet Delegated Administrator for Messaging のユーティリティについて説明しています。
- 第 4 章「**Messaging Server** の設定」
この章では、Messaging Server の設定パラメータを紹介します。
- 第 5 章「**MTA** の設定」
チャンネルキーワード、書き換え規則の設定、MTA 設定ファイルについて説明しています。
- 第 6 章「**Messaging Multiplexor** の構成」
Messaging Multiplexor の設定ファイルおよび設定パラメータについて説明しています。
- 付録 A「サポート規格」
この付録では、iPlanet Messaging Server でサポートされている電子メッセージング関連の国内規格および国際規格、産業規格を紹介します。

マニュアルの表記規則

モノスペースフォント

モノスペースフォント (Monospaced font) は、コンピュータ画面に表示されるテキスト、またはユーザが入力するテキストを表します。また、ファイル名、識別名、機能、および使用例を表す場合にも使用されます。

太字のモノスペースフォント

太字のモノスペースフォント (**bold monospaced font**) は、コード例中のユーザが入力するテキストを表します。

斜体フォント

斜体フォントは、お使いのメッセージングサーバに固有な情報を使って入力するテキストを表します。サーバのパスや名前、およびアカウント ID などに使用します。

たとえば、パス参照は、以下のような形式で表記されています。

```
server-root/msg-instance/...
```

この場合、「*server-root*」はサーバをインストールするディレクトリパスを表し、「*msg-instance*」はインストールするときに使用するサーバインスタンスを表します。たとえば、サーバを `/usr/iplanet/server5` ディレクトリにインストールし、`tango` というサーバインスタンスを使用する場合、実際のパスは次のようになります。

```
/usr/iplanet/server5/msg-tango/
```

斜体フォントは、コマンドラインユーティリティの構文内で使われる変数を表すためにも使用されます。たとえば、`imadmin admin remove` コマンドの構文は、次のように表されます。

```
imadmin admin remove -D ログイン -l ユーザ id -n ドメイン -w パスワード  
[-d ドメイン] [-h] [-i 入力ファイル] [-p ida ポート] [-X ida ホスト]  
[-s] [-v]
```

この例では、オプションの引数が斜体になっています。たとえば、「*-w* パスワード」オプションは、`imadmin admin remove` コマンドを入力するときに、「パスワード」を最上位管理者のパスワードに置き換えることを意味しています。

角括弧

オプションのパラメータは、角括弧 `[]` で囲まれています。たとえば、`readership` コマンドの使い方を示す場合は、以下のように記述されます。

```
readership [-d 日数] [-p 月数]
```

次のように、`readership` コマンドを単体で実行すれば、`Messaging Server` のインストールを開始できます。

```
readership
```

ただし、`[-d 日数]` および `[-p 月数]` が存在することによって、`readership` コマンドにオプションのパラメータを付けられることがわかります。たとえば、以下に示すように、`readership` コマンドに `-d` オプションを付けると、指定した期間 (日数) に共有フォルダ内のメッセージを読んだ人の数を得ることができます。

```
readership -d 10
```

コマンドラインプロンプト

このマニュアルの各例では、コマンドラインプロンプト (たとえば、`C` シェルの `%`、`Korn/Bourne` シェルの `$` など) が表示されていません。お使いのオペレーティングシステム的环境によって、コマンドラインプロンプトが異なるためです。ただし、特に補足されていないかぎり、コマンドは本書で示すとおりに入力してください。

関連情報

iPlanet Messaging Server には、本書のほかに、管理者用の補足情報およびエンドユーザやディベロッパ用のマニュアルもあります。次の URL を使用すると、Messaging Server のすべてのマニュアルを参照できます。

<http://docs.iplanet.com/docs/manuals/messaging.html>

利用できる関連マニュアルは次のとおりです。

- 『iPlanet Messaging Server 管理者ガイド』
- 『iPlanet Messaging Server インストールガイド』
- 『iPlanet Messaging Server スキーマリファレンス』
- 『iPlanet Messaging Server プロビジョニングガイド』
- 『iPlanet Messaging Server 移行ガイド』
- 『iPlanet Delegated Administrator for Messaging and Collaboration インストールおよび管理ガイド』

オンラインで本書を入手するには

『iPlanet Messaging Server リファレンスマニュアル』はオンラインで入手することもできます (PDF および HTML 形式)。以下の URL をご利用ください。

<http://docs.iplanet.com/docs/manuals/messaging.html>

オンラインで本書を入手するには

Messaging Server のコマンドラインユーティリティ

iPlanet Messaging Server には、グラフィカルユーザインタフェースのほかに、一連のコマンドラインユーティリティが用意されています。この章では、Messaging Server の起動、停止、管理、メッセージアクセス、メッセージストアに関するユーティリティについて説明します。

MTA のコマンドラインユーティリティについては、第 2 章「Message Transfer Agent のコマンドラインユーティリティ」を参照してください。iPlanet Delegated Administrator for Messaging のコマンドラインユーティリティについては、第 3 章「Delegated Administrator のコマンドラインユーティリティ」を参照してください。

表 1-1 に、この章で説明するコマンドの一覧を示します。

表 1-1 Messaging Server のコマンド

コマンド	説明
configutil	Messaging Server の設定パラメータを一覧表示し、変更できる
counterutil	カウンタオブジェクトのすべてのカウンタを表示する。カウンタオブジェクトをモニタする
deliver	メールを、IMAP または POP メールクライアントがアクセスできるメッセージストアに直接配信する
hashdir	特定のアカウントのメッセージストアを含むディレクトリを識別する
iminitquota	LDAP ディレクトリから容量制限を再初期化し、使用中のディスクスペースを再計算する
imsasm	ユーザメールボックスの保存と回復を行う
imsbackup	保存したメッセージのバックアップを作成する
imsexport	iPlanet Messaging Server のメールボックスを UNIX /var/mail 形式のフォルダにエクスポートする

表 1-1 Messaging Server のコマンド (続き)

コマンド	説明
imsimport	UNIX /var/mail 形式のフォルダを iPlanet Messaging Server のメッセージストアに移行する
imsrestore	バックアップデバイスからメッセージストアへ、メッセージをリストアする
imscripiter	IMAP サーバのプロトコルスクリプティングツール。単独、または一連のコマンドを実行する
mboxutil	メールボックス (フォルダ) を一覧、作成、削除、名前変更、または移動することができる
mkbackupdir	バックアップディレクトリを作成、またはメッセージストア内の情報に合わせて同期化する
MoveUser	ユーザのアカウントを、別の Messaging Server に移動する
quotacheck	メッセージストア内の各ユーザのメールボックスサイズの合計を計算し、制限容量と比較する
readership	共有 IMAP フォルダ内のメッセージを、メールボックスの所有者以外に何人のユーザが読んだかをレポートする
reconstruct	1 つ、または複数のメールボックス、あるいはマスターメールボックスファイルを再構築し、矛盾がある場合は修復する
start-msg	Messaging Server のプロセスを開始する
stop-msg	Messaging Server のプロセスを停止する
stored	クリーンアップ操作と失効操作を実行する

コマンドの説明

この節では、主な iPlanet Messaging Server コマンドラインユーティリティの機能、および構文について説明するとともに、実際の使用例を紹介します。ユーティリティはアルファベット順に並べてあります。

configutil

configutil ユーティリティでは、iPlanet Messaging Server の設定パラメータを一覧表示し、変更することができます。

すべての設定パラメータの一覧は、第 4 章「Messaging Server の設定」に掲載されています。

iPlanet Messaging Server の設定パラメータと値のほとんどは、Directory Server の LDAP データベースに、その他のパラメータと値はローカルの `msg.conf` ファイルと `local.conf` ファイルに保存されます。起動パラメータは `msg.conf` ファイルに保存されており、インストール中に設定されます。`local.conf` ファイルを手作業で編集することは避けてください。これらのファイルに保存されているパラメータを編集する場合は、`configutil` を使用します。

注 管理者が言語に特定のオプション(メッセージなど)を定義している場合に、これらのオプションを一覧表示または変更するには、コマンドの最後に `language` オプションを指定します。`language` オプションを使用せずに入力したコマンドは、特定の言語パラメータを持たない属性のみに適用されます。

条件: Messaging Server でローカルに実行します。

場所: `server-root/bin/msg-instance/configutil`

`configutil` では、次の 4 つのタスクを実行できます。

- -o オプションを使用して、特定の設定パラメータを表示する
 - 言語パラメータが指定されているパラメータの一覧を表示するには、オプションの後ろに `;lang-xx` を追加する。たとえば、`;lang-jp` と追加すると、日本語用に指定されたオプションが一覧表示される
- -l または -p プレフィックスオプションを使用して、設定パラメータの値を一覧表示する
 - -l を使用すると、サーバのローカル設定ファイルから、ローカルの設定パラメータのみを一覧表示できる
 - -p プレフィックスを使用すると、名前がプレフィックスで指定した文字で始まる設定パラメータのみが一覧表示される
- -o オプションおよび -v 値のオプションを使用して、設定パラメータを設定する
 - サーバのローカル設定ファイルに新しい値を保存するには、-l オプションとともに -o オプションと -v 値を使用する
 - `stdin` から実際の値を読み取るには、コマンドラインでダッシュ (-) を値として指定する
 - 特定の言語パラメータに対してオプションを設定するには、オプションの後ろに `;lang-xx` を追加する。たとえば、`;lang-jp` と追加すると、日本語に指定したオプションが設定される
- -i オプションを使用して、`stdin` から設定パラメータの値をインポートする
 - すべての設定パラメータをサーバのローカル設定ファイルにインポートするには、-l オプションとともに -i オプションを使用する

構文

```

configutil [-f configdb ファイル] [-o オプション [; 言語] [-v 値]]

configutil [-f configdb ファイル] [-p プレフィックス] [; 言語]

configutil [-f configdb ファイル] -l [-o オプション [; 言語] [-v 値]]

configutil -i < 入力ファイル
    
```

オプション

このコマンドのオプションは、以下のとおりです。

オプション	説明
-f <i>configdb</i> ファイル	デフォルト以外のローカル設定ファイルを指定できる。デフォルトでは、CONFIGROOT 環境変数に保存されている情報が使用される
-i< 入力ファイル	ファイルから設定をインポートする。ファイル内のデータは、「オプション 値」の形式で、縦線の両側にはスペースを入れずに入力する 次のような UNIX コマンドラインは、 cat 入力ファイル configutil -i 有効な構文ではない
-l	ローカルサーバ設定ファイルに保存されている設定パラメータを一覧表示する。-v オプションとともに使用すると、設定パラメータの値を、ローカルサーバ設定ファイルに保存するように指定できる
-o オプション	表示または編集する設定パラメータの名前を指定する。-l オプションや -i オプションとともに使用できる。名前が local で始まる設定パラメータは、ローカルサーバ設定ファイルに保存される
-p プレフィックス	指定したプレフィックスを持つ設定パラメータを一覧表示する

オプション	説明
-v 値	設定パラメータの値を指定する。-o オプションとともに使用する。-l オプションも指定されている場合、または -o オプションで指定した設定パラメータ名が local で始まる場合、オプションの値は Directory Server ではなく、自動的にローカルサーバ設定ファイルに保存される

コマンドラインオプションを指定しなかった場合は、すべての設定パラメータが一覧表示されます。

例

Directory Server LDAP データベースとローカルサーバ設定ファイルの両方にある設定パラメータと各パラメータの値をすべて一覧表示するには：

```
configutil
```

config.cfg という入力ファイルから設定をインポートするには：

```
configutil -i < config.cfg
```

service.imap というプレフィックスが付いているすべての設定パラメータを表示するには：

```
configutil -p service.imap
```

service.smtp.port 設定パラメータの値を表示するには：

```
configutil -o service.smtp.port
```

service.smtp.port 設定パラメータの値を 25 に設定するには:

```
configutil -o service.smtp.port -v 25
```

service.imap.banner 設定パラメータの値をクリアするには:

```
configutil -o service.imap.banner -v ""
```

特定の言語のオプション

特定の言語に対するオプションを設定または一覧表示するには、オプションのすぐ後に、スペースを入れずに ;lang-xx を追加します。「xx」の部分には 2 文字の言語の識別子を入れます。たとえば、store.quotaexceededmsg というメッセージの日本語バージョンを表示するには、次のように入力します。

```
configutil -o "store.quotaexceededmsg;lang-jp"
```

counterutil

counterutil ユーティリティは、カウンタオブジェクト内のカウンタを表示および変更します。また、5 秒ごとにカウンタオブジェクトをモニタするのに使用することもできます。

条件: Messaging Server でローカルに実行します。

場所: *server-root/bin/msg/admin/bin*

構文

```
counterutil -o カウンタオブジェクト [-i 間隔] [-l] [-n 反復数]  
[-r レジストリ名]
```

オプション

このコマンドのオプションは、以下のとおりです。

オプション	説明
-i 間隔	レポートの間隔を秒数で指定する。デフォルトは 5
-l	-r オプションで指定したレジストリ内の使用できるカウンタを一覧表示する
-n 反復数	反復の回数を指定する。デフォルトは無限
-o カウンタオブジェクト	特定のカウンタオブジェクトの内容を、継続して 5 秒ごとに表示する
-r レジストリ名	使用するカウンタレジストリを示す。-r レジストリ名 オプションでレジストリ名を指定しなかった場合、デフォルトは <code>server-root/msg-instance/counter/counter</code> になる

例

任意のサーバのカウンタレジストリ内のカウンタオブジェクトをすべて一覧表示するには:

```
counter
```

カウンタオブジェクト `imapstat` の内容を 5 秒ごとに表示するには:

```
counterutil -o imapstat -r ¥
server-root/msg-instance/counter/counter
```

deliver

`deliver` ユーティリティは、IMAP または POP メールクライアントがアクセスできるメッセージストアに、直接メールを配信します。

統合されたメッセージ環境を管理する場合は、このユーティリティを使ってメールを別の MTA (たとえば、`sendmail` MTA) から `Messaging Server` のメッセージストアに配信することができます。

条件 : Messaging Server でローカルに実行します。stored ユーティリティが実行されていなければなりません。CONFIGROOT 環境変数が、*server-root/msg-instance/config* に設定されていることを確認します。

UNIX での場所 : *server-root/bin/msg/store/bin*

構文

```
deliver [-l] [-c] [-d] [-r アドレス] [-f アドレス] [-m メールボックス]
[-a 認証 ID] [-q] [-g フラグ] [ユーザ id]
```

オプション

このコマンドのオプションは、以下のとおりです。

オプション	説明
-a 認証 ID	差出人の認証 ID を指定する。デフォルトは anonymous
-c	メッセージストアにメールボックスがない場合、メールボックスが自動的に作成される
-d	このオプションは、 <i>/bin/mail</i> との互換性を維持するために deliver によって認識されますが、 deliver はこれを無視する
-g フラグ	配信されるメッセージに、システムフラグまたはキーワードフラグを設定する
-f アドレス	アドレスを含む転送パスヘッダーを挿入する
-l	LMTMP プロトコル (RFC 2033) を使用してメッセージを受理する
-m メールボックス	「メールボックス」にメールを配信する <ul style="list-style-type: none"> • ユーザ ID が指定されている場合は、各ユーザ ID のメールボックスへメールの配信が試みられる。メールボックスのアクセス制御により、差出人に「p」権限が与えられていない場合、または -m オプションが指定されていない場合は、inbox のアクセス制御の内容にかかわらず、ユーザ ID の Inbox にメールが配信される • ユーザ ID が指定されていない場合は、「メールボックス」へのメールの配信が試みられる。メールボックスのアクセス制御で差出人に「p」権限が与えられていない場合、配信は行われぬ

オプション	説明
-q	メールボックスの制限容量を無効にする。受信メールボックスの制限容量を超えている場合でも、メッセージの配信が行われる
-r アドレス	アドレスを含む Return-Path: ヘッダーを挿入する
ユーザ <i>id</i>	「ユーザ <i>id</i> 」に指定されたユーザの Inbox に配信する

オプションを指定しなかった場合、メールは **Inbox** に配信されます。

例

`message.list` というファイルの内容を **Fred** の `tasks` メールボックスに配信するには:

```
deliver -m tasks fred < message.list
```

上の例では、`tasks` メールボックスが差出人に「**p**」権限を与えない場合、`message.list` の内容はユーザ `fred` の **Inbox** に配信されます。

hashdir

`hashdir` コマンドは、特定アカウントのメッセージストアを含むディレクトリを識別します。このユーティリティは、メッセージストアへの相対パスをレポートします。このパスは、ユーザ **ID** に基づくディレクトリの1つ上のディレクトリレベルを基準にしたものです。`hashdir` は、パス情報を標準出力に送ります。

条件: `Messaging Server` でローカルに実行します。`CONFIGROOT` 環境変数が、`server-root/msg-instance/config` に設定されていることを確認します。

構文

```
hashdir [-a] [-i] アカウント名
```

オプション

このコマンドのオプションは、以下のとおりです。

オプション	説明
-a	出力にディレクトリ名を追加する
-i	コマンドをインタラクティブモードで使用できる

例

```
hashdir user1
```

iminitquota

`iminitquota` ユーティリティは、LDAP ディレクトリから容量制限を再初期化し、ユーザが使用している合計ディスクスペースを再計算します。これにより、メッセージストアの `mboxlist` ディレクトリにあるメッセージストア `quota.db` データベースが更新されます。`iminitquota` ユーティリティは、`reconstruct -q` ユーティリティの実行後に実行されます。

構文

```
iminitquota -a | -u ユーザ id
```

オプション

このコマンドのオプションは、以下のとおりです。

オプション	説明
-a	メッセージストアユーザごとに容量制限ファイルを初期化し、更新する
-u ユーザ <i>id</i>	指定したユーザの容量制限に関連する情報を再初期化し、更新する。ユーザ <i>id</i> パラメータが指定するのはユーザのメッセージストア ID であり、ユーザのログイン ID ではない

iminitquota コマンドは、-a オプションまたは -u オプションのいずれかといっしょに指定する必要があります。

imsasm

imsasm ユーティリティは外部の ASM (Application Specific Module: アプリケーションに特定のモジュール) で、ユーザメールボックスの保存と回復を行います。imsasm により imbackup ユーティリティと imrestore ユーティリティが呼び出され、データストリームが作成および解釈されます。

保存を行う場合、imsasm によって引数一覧内の各メールボックスまたはフォルダに対し保存レコードが作成されます。各ファイル、またはディレクトリに関連付けられたデータは、ユーザのメールボックスに imbackup コマンド、または imrestore コマンドを実行することで生成されます。

構文

```
imsasm [ 標準_ASM_引数 ]
```

オプション

imsasm ユーティリティで使用されるオプションは、標準 ASM 引数とも呼ばれ、Legato NetWorker® バックアップの標準です。

-s (保存)、-r (回復)、または -c (比較) のいずれかを必ず指定します。また、これらのオプションを他のオプションの前に配置します。保存の場合は、少なくとも1つのパス引数を指定します。パスには、ディレクトリまたはファイル名を使用できます。次のオプションはすべてのモードで使用できます。

オプション	説明
-n	ドライランを実行する。つまり、保存する場合は、ファイルシステムを実行するが、ファイルを開いて保存ストリームを作成することはない。回復や比較を行う場合は、入力保存ストリームを消費し、基本的なサニティチェックを行うが、回復のために実際にディレクトリやファイルを作成したり、実際にファイルデータを比較することはない

オプション	説明
-v	詳細モードをオンにする。処理中の現在の ASM、引数、ファイルが表示される。フィルタモードで機能する(つまり、ほかの ASM の保存ストリームを処理する)ASM のフィルタによってストリームが変更される場合は、ストリーム名、引数、および現在のファイルが角括弧の内に表示される

保存する場合 (-s) は、次のオプションを使用できます。

オプション	説明
-b	バイトカウントを作成する。このオプションは -n オプションに似ているが、バイトカウントモードでは実際にファイルのデータを読み取る代わりに、データ量の推測が行われる。このため、このオプションは -n オプションに比べて高速だが、精度は落ちる。バイトカウントモードでは、3つの数値が作成される。レコード(ファイルとディレクトリ)の数、ヘッダー情報のバイト数、およびファイルデータのバイト数の概算である。バイトカウントモードでは保存ストリームが作成されないため、出力を回復モードで別の ASM の入力として使うことはできない
-o	以前の NetWorker サーバで処理できる「旧式」の保存ストリームを作成する
-e	最終的な「保存ストリームの最後」ブール値を生成しない。このフラグは、ASM により外部の ASM が呼び出され、最適化のために生成した保存ストリームを消費しない方がよい場合にのみ使用する
-i	ディレクトリツリー内で見つかった .nsr 指示ファイルからのすべての保存指示を無視する
-f プロト	ファイル进行处理する前に解釈する .nsr 指示ファイルの場所を指定する。プロトで指定された指示ファイル内で、パス指示は、処理されるディレクトリツリー内のファイルを指し示す必要がある。そうでないと、後続の指示は無視される
-p プレフィックスパス	出力する際に、この文字列を各ファイル名の前に追加する。この引数は、ASM で他の外部 ASM を実行する際に、内部で使用される。プレフィックスパスは、現在の作業ディレクトリまたはその下位ディレクトリで、適切にフォーマットされていなければならない
-t 日付	ファイルを保存する前に変更が必要になる、最初の日付
-x	ファイルシステムの境界を越える。通常、処理の際にファイルシステムの境界を越えることはない

回復する場合 (-r) は、次のオプションを使用できます。

オプション	説明
-i 応答	<p>最初のデフォルト上書き応答を指定する。使用できるのは 1 文字のみ。回復するファイルと同じ名前のファイルが既に存在する場合、ユーザに上書きを確認するプロンプトが表示される。Return キーを押すと選択されるデフォルト応答は、角括弧の中に表示される。-i オプションで特に指定を行わないかぎり、最初のデフォルト上書き応答は n になる。デフォルト以外の応答を選択すると、その応答が新しいデフォルトになる。N、R、または Y を指定すると、名前変更接尾辞で終わるファイル名を自動変更する場合を除き、プロンプトは表示されない。その後の競合は、同じ文字の小文字を選択したものとして解消される。有効な上書き応答と、それらの意味を以下に示す</p> <ul style="list-style-type: none"> • n - 現在のファイルを回復しない • N - 名前が競合するファイルは回復しない • y - 既存のファイルを回復したファイルで上書きする • Y - 競合する名前のファイルを上書きする • r - 競合するファイルの名前を変更する。回復したファイルの名前に、ドット文字 (.) と接尾辞が追加される。それでも競合がある場合は、ユーザにプロンプトが表示される • R - ドット文字 (.) と接尾辞を追加して、競合するファイルの名前を自動的に変更する。競合するファイル名が既に . 接尾辞で終わる場合は、自動名前変更のループを避けるために、ユーザにプロンプトが表示される
-m <i>src=dst</i>	<p>作成されるファイル名をマップする。「src」で始まるファイルはすべて、パスの「src」の部分を「dst」に置き換えるようにマップされる。このオプションは、絶対パス名を使用して、回復したファイルを別のディレクトリに保存したい場合に有用である</p>
-z 接尾辞	<p>競合するファイルの名前を変更する場合に追加する接尾辞を指定する。デフォルトの接尾辞は R</p>
パス	<p>回復するファイルを制限する。プレフィックスのパスが一致するファイルのみを回復する。このチェックは、-m オプションで名前のマップが実行される前に行われる。パスを指定しないと、チェックは行われない</p>

例

imsasm を使用して、ユーザ joe のメールボックス INBOX を作成するには、システム管理者が次の内容でディレクトリファイル ADM_ ルート /backup/DEFAULT/joe/.nsr を作成します。

```
imsasm: INBOX
```

これにより、メールボックスが imsassm を使用して保存されるようになります。mkbackupdir ユーティリティを実行すると、自動的に .nsr ファイルが作成されます。44 ページの「mkbackupdir」を参照してください。

imsbackup

imsbackup ユーティリティは、選択したメッセージストアの内容を、シリアルデバイス (磁気テープ、UNIX パイプ、通常のファイルなど) に書き込む際に使用します。バックアップの全体または一部は、後から imssrestore ユーティリティを使って回復できます。imsbackup ユーティリティは、UNIX の tar コマンドと同様の基本的なバックアップ機能です。

場所: *server-root/bin/msg/store/bin*

imsbackup の詳細とメッセージストアのバックアップについては、『iPlanet Messaging Server 管理者ガイド』の「メッセージストアをバックアップ、リストアする」を参照してください。

構文

```
imsbackup -f デバイス [-a ユーザ id] [-b ブロック_係数] [-d 日付時刻]
[-i] [-l] [-m リンク_カウント] [-u ファイル] [-v] [パス]
```

オプション

このコマンドのオプションは、以下のとおりです。

オプション	説明
-a ユーザ <i>id</i>	指定したユーザを認証する

オプション	説明
-b ブロック_係数	バックアップデバイスに書き込まれるものはすべて、512x ブロック_係数のサイズのブロックごとに実行される。デフォルトは 20
-d 日付時刻	バックアップするメッセージの最初の日付で、 <code>yyyymmdd[:hhmmss]</code> の書式で指定する。たとえば、 <code>-d 19990501:13100</code> では、1999 年 5 月 1 日午後 1 時 10 分から現在までに保存されたメッセージをバックアップする。デフォルトでは、日付に関係なく、すべてのメッセージがバックアップされる
-f デバイス -	バックアップを書き込むファイルの名前、またはデバイスを指定する。 <code>device</code> が <code>' '</code> の場合、バックアップデータは <code>stdout</code> に書き込まれる
-i	リンクを無視する。POP ストアに使用される
-l	テープの最後になると、テープデバイスの自動ロードに使用される
-m リンク_カウント	ハッシュ用の最小リンクカウントを指定する
-u ファイル	バックアップするオブジェクト名のファイルを指定する。このファイルには、オブジェクト名 (ユーザ、グループ、メールボックス、またはストアインスタンス) が含まれる。オブジェクト名の形式については、パスを参照。たとえば、以下のように記述する ユーザを指定するには: <code>/mystore/ALL/joe</code> グループを指定するには: <code>/mystore/groupA</code>
-v	コマンドを詳細モードで実行する
パス	バックアップオブジェクトの論理パス名。バックアップパスは、次のフォーマットのいずれかで指定する。 <ul style="list-style-type: none"> • メールボックスを指定するには: <code>/メッセージ_ストア /グループ /ユーザ /メールボックス</code> • ユーザを指定するには: <code>/メッセージ_ストア /グループ /ユーザ</code> • グループを指定するには: <code>/メッセージ_ストア /グループ</code> • メッセージストアインスタンスを指定するには: <code>/メッセージストア</code>

例

次の例では、joe が /dev/rmt/0 にバックアップされます。

```
imsbackup -f /dev/rmt/0 /mystore/ALL/joe
```

mystore はデフォルトのパーティションにマップします。

次の例では、groupA のユーザすべてが backupfile にバックアップされます。

```
imsbackup -f- /mystore/groupA > backupfile
```

次の例では、メッセージストアインスタンス mystore の完全なバックアップが行われます。

```
imsbackup -f /dev/rmt/0 /mystore
```

imsexport

imsexport ユーティリティは、iPlanet Messaging Server のメールボックスを UNIX /var/mail 形式のフォルダにエクスポートします。

imsexport ユーティリティは、メッセージストアフォルダ内のメッセージを抽出し、管理者が指定するディレクトリの下に UNIX ファイルにメッセージを書き込みます。このファイルの名前は、IMAP フォルダの名前と同じです。メッセージストアフォルダにメッセージとサブフォルダの両方が含まれている場合、imsexport はそのフォルダ名を持つディレクトリと、フォルダ名に .msg 拡張子が付いたファイルを作成します。folder.msg ファイルにはフォルダ内のメッセージが含まれています。フォルダディレクトリにはサブフォルダが含まれています。

構文

```
imsexport -d dir -u ユーザ [-a ユーザ] [-c y|n] [-g]
[-s メールボックス] [-v モード]
```

オプション

このコマンドのオプションは、以下のとおりです。

オプション	説明
-a ユーザ	認証のためのユーザ名を指定する
-c yln	「続行しますか?」の質問に対して回答する。「はい」の場合は y、「いいえ」の場合は n を指定する
-d <i>dir</i>	フォルダが作成され書き込まれるデスティネーションディレクトリ名を指定する。これは必須のオプションである
-g	デバッグモードを指定する
-s メールボックス	エクスポートするソースフォルダを指定する
-u ユーザ	ユーザのメッセージストア ID を指定する。これは必ずしもユーザのログイン ID ではない。これは必須のオプションである
-v モード	詳細モードを指定する。モードの値は、0、1、および2。0 は出力なしを指定する。1 はメールボックスレベルの出力を指定する。2 (デフォルト) はメッセージレベルの出力を指定する

例

次の例で `imsexport` は、ユーザ `smith1` のすべての電子メールを抽出します。`smith1` は `iPlanet Messaging Server` のメッセージストアで有効なユーザアカウントです。ユーザ `smith1` は、メッセージストアに `INBOX` (通常のデフォルトのユーザフォルダ)、`private`、および `private/mom` という3つのフォルダを持っています。デスティネーションディレクトリは `/tmp/joes_mail` です。

```
% imsexport -u smith1 -d /tmp/joes_mail/
```

その後 `imexport` は、各メッセージストアフォルダを `/var/mail` 設定ファイルに転送します。このため、以下のファイルを入手します。

- `/tmp/joes_mail/INBOX`
- `/tmp/joes_mail/private`
- `/tmp/joes_mail/private.msg`
- `/tmp/joes_mail/private/mom`

imsimport

imsimport ユーティリティは、UNIX /var/mail 形式のフォルダを iPlanet Messaging Server のメッセージストアに移行します。

imsimport ユーティリティは、/var/mail メールボックスに保存されているメッセージを抽出し、iPlanet Messaging Server のメッセージストアにある対応するユーザのフォルダにそれらを追加します。ディレクトリ内で標準の UNIX メールボックス形式ではないファイルは省略されます。対応するユーザがメッセージストア内に存在しなければ、imsimport が作成します。ユーザの制限容量を超えた場合、imsimport がメッセージストアの制限容量の設定を行わないと、ユーザは「制限容量超過」メッセージを受け取りません。

注 imsimport は IMAP サーバを使用しません。ただし、メインストアの完全性を維持するために stored ユーティリティを実行している必要があります。imsimport が新しいユーザを作成する場合は、LDAP サーバが実行している必要があります。

構文

```
imsimport -u ユーザ -s ファイル [-a ユーザ] [-c y|n]
          [-d メールボックス] [-g] [-n] [-v モード]
```

オプション

このコマンドのオプションは、以下のとおりです。

オプション	説明
-a ユーザ	認証のためのユーザ名を指定する
-c y n	「続行しますか？」の質問に対して回答する。「はい」の場合は y、「いいえ」の場合は n を指定する
-d メールボックス	メッセージの保管先にするメールボックスを指定する
-g	デバッグモードを指定する

オプション	説明
-n	メールボックスが存在する場合、 <i>.date</i> 拡張子を使用して新規メールボックスを作成する。 <i>.date</i> 拡張子の形式は次のとおり <i>.mmddy.HHMMSS</i> 月は <i>mm</i> で指定する。日は <i>dd</i> で指定する。年は <i>yy</i> で指定する。たとえば、052097 は 1997 年 5 月 20 日のことである。時刻は <i>HHMMSS</i> で指定する。たとえば、110000 は午前 11 時のことである
-s ファイル	インポートするメッセージが存在する UNIX フォルダのファイルの名前を指定する。ファイルパラメータは完全なパス名にする必要がある。これは必須のオプションである
-u ユーザ	ユーザのメッセージストア ID を指定する。これは必ずしもユーザのログイン ID ではない。これは必須のオプションである
-v モード	詳細モードを指定する。モードの値は、0、1、および 2。0 は出力なしを指定する。1 はメールボックスレベルの出力を指定する。2 (デフォルト) はメッセージレベルの出力を指定する

例

`imsimport` は、指定したユーザの指定した `/var/mail/folder` を iPlanet Messaging Server のメッセージストアに移行します。移行先のフォルダを指定しなければ、`imsimport` がソースフォルダと同じ名前で行先フォルダを呼び出します。以下の例では、ユーザ `smith` のデフォルトの `/var/mail INBOX` が `INBOX` に移行されます。

```
imsimport -u smith -s /var/mail/smith -d INBOX
```

同様に、`/home/smith/folders/` から iPlanet Messaging Server のメッセージストアに `test` と呼ばれるフォルダを移動しようとする場合は、以下のコマンドを使用します。

```
imsimport -u smith -s /home/smith/folders/test -d test
```

`test` という移行先フォルダが iPlanet Messaging Server のメッセージストアに既に存在する場合、`imsimport` はメールボックスの既存のフォルダにメッセージを追加します。

imsrestore

imsrestore ユーティリティは、バックアップデバイスからメッセージストアへメッセージをリストアします。

場所 : *server-root/bin/msg/store/bin*

構文

```
imsrestore -f デバイス |- [-a ユーザ id] [-b ブロック_係数] [-c y | n]
[-h] [-i] [-m ファイル] [-n] [-t] [-u ファイル] [-v 0|1|2] [パス]
```

オプション

このコマンドのオプションは、以下のとおりです。

オプション	説明
-a ユーザ <i>id</i>	指定したユーザを認証する
-b ブロック_係数	ブロック係数を示す。デバイスで読み取られたものはすべて、512 x ブロック_係数のサイズのブロックごとに実行される。デフォルトは 20。この数値は、バックアップに使用したブロック係数と同じである必要がある
-c <i>y n</i>	「続行しますか?」の質問に対し、「はい (<i>y</i>)」または「いいえ (<i>n</i>)」と回答する
-f デバイス -	-f- が指定されている場合、stdin からのバックアップデータが読み取られる。指定されていない場合、バックアップデータは指定されたデバイス、またはファイル名から読み取られる
-h	ヘッダーを削除する
-i	既存のメッセージを無視する。リストアの前に、既存のメッセージのチェックは行われない -i オプションは重複をチェックする機能に優先されるため、-i オプションを指定した場合、リストア後にメッセージが重複することがある

オプション	説明
-m ファイル	<p>このマッピングファイルは、ユーザ ID を変更する際に使用する。マッピングファイルでの形式は現在の名前 = 新規の名前で、1 行ごとに 1 対の名前がある。たとえば、以下のように記述する</p> <pre>a=x b=y c=z</pre> <p>この場合、a、b、c は現在の名前で、x、y、z は新規の名前</p> <p>このオプションは、ユーザ ID の名前を古いバージョンの iPlanet Messaging Server から新しいバージョンの iPlanet Messaging Server に変更するときだけ使用される。ユーザを SIMS から iPlanet Messaging Server にリストアする場合は、-u オプションを使用する</p>
-n	<p>.date 拡張子を使用して、新規メールボックスを作成する (メールボックスが存在する場合)。特に設定を変更しないかぎり、メッセージは既存のメールボックスに追加される</p>
-t	<p>内容の一覧を印刷するが、リストアは行われない</p>
-u ファイル	<p>リストアに使用するオブジェクト名ファイルを指定する。iPlanet Messaging Server のバックアップデータのオブジェクト名の形式については、パスを参照。たとえば、以下のように記述する</p> <pre>/mystore/ALL/joe /mystore/groupA</pre> <p>SIMS データを iPlanet メッセージストアにリストアする場合、-u ファイルを使用してユーザ名を指定、または変更できる。ユーザを指定する場合は、ファイルの各行にユーザ 1 名の名前が必要。ユーザ名を変更する場合、ファイルの形式は、現在の名前 = 新規の名前で、1 行ごとに 1 対の名前がある。たとえば、以下のように記述する</p> <pre>joe bonnie jackie=jackie1</pre> <p>この場合、joe と bonnie がリストアされ、jackie はリストアされて jackie1 に名前が変更される</p>
-v [0 1 2]	<p>コマンドを詳細モードで実行する</p> <p>0 = 出力なし 1 = メールボックスレベルでの出力 2 = メッセージレベルでの出力</p>

オプション	説明
パス	<p>バックアップオブジェクトの論理パス名。パスは、次のいずれかのフォーマットで指定する</p> <ul style="list-style-type: none"> • メールボックスを指定するには: / メッセージストア / グループ / ユーザ / メールボックス • ユーザを指定するには: / メッセージストア / グループ / ユーザ • グループを指定するには: / メッセージストア / グループ • メッセージストアインスタンスを指定するには: / メッセージストア

例

次の例では、backupfile ファイルからメッセージがリストアされます。

```
imsrestore -f backupfile
```

次の例では、backupfile から user1 のメッセージがリストアされます。

```
imsrestore -f backupfile /mystore/ALL/user1
```

次の例では、backupfile ファイルの内容が一覧表示されます。

```
imsrestore -f backupfile -t
```

次の例では、mapfile ファイル内のユーザの名前が変更されます。

```
imsrestore -m mapfile -f backupfile
```

この場合、mapfile の形式は 現在の名前 = 新規の名前になります。

```
userA=user1
userB=user2
userC=user3
```

imscripter

imscripter ユーティリティは、IMAP サーバに接続し、単独または一連のコマンドを実行します。

条件: リモートでも実行できます。

場所: *server-root/bin/msg/admin/bin*

構文

```
imscripter [-h] [-f スクリプト | [-c コマンド] -f データファイル]
           [-c コマンド]
           [-s サーバ id | -p ポート | -u ユーザ id | -x パスワード | -v 詳細モード]
```

オプション

このユーティリティのオプションは次のとおりです。

オプション	説明
-c コマンド	コマンドを実行する。次のコマンドを実行できる create メールボックス delete メールボックス rename 旧メールボックス 新規メールボックス [パーティション] getacl メールボックス setacl メールボックス ユーザ <i>id</i> 権限 deleteacl メールボックス ユーザ <i>id</i> 上に挙げた変数を指定すると、コマンドはその変数を使って実行される。たとえば、create lincoln はユーザ lincoln のメールボックスを作成する。-f ファイル オプションを使用すると、指定したファイルに含まれる各変数に対してコマンドが実行される
-f ファイル	ファイルには、1つまたは複数のコマンド、またはコマンドを実行するメールボックスの一覧を含めることができる

オプション	説明
-h	このコマンドのヘルプを表示する
-p ポート	指定したポートに接続する。デフォルトは 143
-s サーバ	指定したサーバに接続する。デフォルトは localhost。 サーバの指定には、ホスト名または IP アドレスを使用できる
-u ユーザ <i>id</i>	ユーザ <i>id</i> として接続する
-v 詳細モード	さまざまな情報を印刷するためのオプションを指定する文字列。オプションは次のとおり E - エラーを表示 I - 情報メッセージを表示 P - プロンプトを表示 C - 入力コマンドを表示 c - プロトコルコマンドを表示 B - BAD または NO のタグなしの応答を表示 O - その他のタグなしの応答を表示 b - BAD または NO の完了結果を表示 o - OK の完了結果を表示 A - 上記すべてを表示 オプションを指定するための文字は、どのような順序でも入力できる。デフォルトは EPBibo
-x パスワード	このパスワードを使用する

mboxutil

mboxutil コマンドは、メールボックス (フォルダ) の一覧表示、作成、削除、名前変更、および移動を実行します。また、mboxutil を使って制限容量に関する情報をレポートすることもできます。

メールボックス名は、次のフォーマットで指定します。

user/ ユーザ *id*/ メールボックス

ユーザ *id* は、メールボックスを所有するユーザ、メールボックスはメールボックスの名前です。

条件: Messaging Server でローカルに実行します。stored ユーティリティが実行されていなければなりません。

場所: server-root/bin/msg/admin/bin

構文

```
mboxutil [-a] [-c メールボックス] [-d メールボックス] [-f ファイル]
          [-g グループ] [-r 現在の名前 新規の名前 [パーティション]] [-l]
          [-p パターン] [-q ドメイン] [-x] [-k cmd メールボックス]
          [-u [ユーザ id]]
```

オプション

このコマンドのオプションは、以下のとおりです。

オプション	説明
-a	すべてのユーザの制限容量に関する情報を表示する
-c メールボックス	指定したメールボックスを作成する 二次的なメールボックスの作成には、1つのメールボックスが存在していなければならない
-d メールボックス	指定したメールボックスを削除する -d オプションを使用してユーザを削除する場合は、多少の制限がある。-d オプションを使用してアクティブなユーザを削除する(メールボックス <code>user/ ユーザ id/ INBOX</code> を削除する)と、メールボックスは部分的に削除される。これは、ユーザがサーバに接続しているとき、またはサーバがユーザのメールボックスにメールを配信しているときに発生する 推奨されるユーザの削除方法は、ユーザのステータスをLDAPで削除済みとマーク(<code>imadmin user delete ユーティリティ</code> を使用)してから、 <code>imadmin user purge ユーティリティ</code> を使用して、削除済みとして指定した日数より長くマークされていたユーザをバージングすることである
-f ファイル	指定したデータファイルにリストされているメールボックスを、作成、削除、またはロックする。-f オプションは、-c、-d、あるいは-k オプションと併用には使用できない このデータファイルには、 <code>mboxutil</code> コマンドを実行するメールボックスが含まれる。データファイルのエントリの例は以下のとおり user/daphne/INBOX user/daphne/projx user/daphne/mm
-g グループ	指定したグループの制限容量に関する情報を表示する

オプション	説明
-k cmd メールボックス	<p>指定したメールボックスをフォルダレベルでロックし、指定したシェルコマンドを実行し、コマンドが完了したらメールボックスのロックを解除する</p> <p>メールボックスがロックされている間、所有者はメールボックス内のメッセージを表示することはできるが、新しいメッセージの追加や、既存のメッセージの削除、移動はできない。-k オプションは、バックアップを実行する前などに使用する</p>
-l	<p>サーバのすべてのメールボックスを一覧表示する</p> <p>異なる言語地域に対してマルチバイトのフォルダを作成する場合は、 <i>server-root/bin/msg/bundles/encbylang.properties</i> を編集して、適切な文字セットが LANG 環境変数に関連付けられるようにする</p>
-p パターン	-l オプションとともに使用した場合、名前がパターンと一致するメールボックスのみが一覧表示される。IMAP ワイルドカードを使用できる
-q ドメイン	指定したドメインの制限容量に関する情報を一覧表示する
-r 現在の名前 新規の名前 [パーティション]	メールボックスの名前を現在の名前 から 新規の名前に変更する。フォルダを別のパーティションに移動するには、パーティションオプションに新しいパーティションを指定する
-u [ユーザ id]	メッセージストアの現在のサイズ、制限容量 (設定されている場合)、制限容量のうち現在使用されている部分の割合など、ユーザのメッセージストアのサイズに関する情報を一覧表示する
-x	-l オプションとともに使用すると、メールボックスのパスとアクセス制御が表示される

例

全ユーザの全メールボックスを一覧表示するには：

```
mbxutil -l
```

すべてのメールボックスを、パスと acl の情報とともに一覧表示するには：

```
mboxutil -l -x
```

ユーザ daphne に対し、INBOX というデフォルトのメールボックスを作成するには：

```
mboxutil -c user/daphne/INBOX
```

ユーザ delilah に対し、projx という名前のメールフォルダを削除するには：

```
mboxutil -d user/delilah/projx
```

ユーザ druscilla に対し、INBOX というデフォルトのメールボックスとすべてのメールフォルダを削除するには：

```
mboxutil -d user/druscilla/INBOX
```

Desdemona のメールフォルダ memos を memos-april という名前に変更するには：

```
mboxutil -r user/desdemona/memos user/desdemona/memos-april
```

ユーザ dulcinea のメールフォルダ legal をロックするには：

```
mboxutil -k user/dulcinea/legal cmd
```

この場合の cmd は、ロックしたメールフォルダに実行するコマンドです。

ユーザ dimitria のメールアカウントを新しいパーティションに移動するには：

```
mboxutil -r user/dimitria/INBOX user/dimitria/INBOX partition
```

この場合、「partition」には新しいパーティションの名前を指定します。

ユーザ `dimitria` のメールフォルダ `personal` を新しいパーティションに移動するには:

```
mboxutil -r user/dimitria/personal user/dimitria/personal%
パーティション
```

使用状況に関する情報を表示するには:

```
mboxutil -u daphne

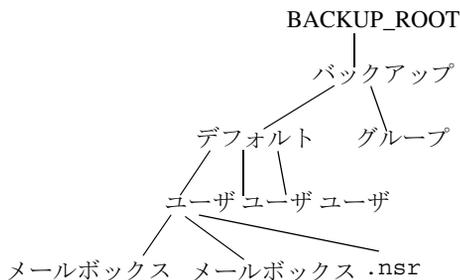
diskquota size(K) %use msgquota   msgs %use   user
10240     297          no quota   953 29%   daphne
```

mkbackupdir

`mkbackupdir` ユーティリティは、バックアップディレクトリを作成したり、メッセージストア内の情報に合わせてバックアップディレクトリを同期化します。**Legato Networker** の **Solstice Backup** とともに使用します。バックアップディレクトリは、メッセージストアのイメージです。実際のデータは含まれていません。`mkbackupdir` は、メッセージストアのユーザディレクトリをスキャンし、バックアップディレクトリと比較することにより、メッセージストアのユーザディレクトリ内にある新規のユーザ名とメールボックス名を使ってバックアップディレクトリを更新します。

バックアップディレクトリには、**Networker** でメッセージストアをさまざまなレベル（サーバ、グループ、ユーザ、メールボックス）でバックアップするために必要な情報が含まれます。図 1-1 に、その構造を示します。

図 1-1 バックアップディレクトリの階層



場所: *server-root/bin/msg/store/bin*

バックアップディレクトリコンテンツにおける変数は次のとおりです。

変数	説明
BACKUP_ROOT	<i>ims.cnf</i> ファイルに指定されている、メッセージストア管理者のルートディレクトリ。デフォルトディレクトリは <i>server-root/</i>
グループ	システム管理者が定義する、ユーザディレクトリを含むディレクトリ。メッセージストアをユーザディレクトリのグループに分割すると、複数のユーザメールボックスのグループを同時にバックアップすることができる グループを自動的に作成するには、 <i>server-root/msg-instance/config/backup-groups.conf</i> ファイル内にグループを指定する。グループの指定には、次の形式を使用する グループ名 = パターン グループ名は、ユーザとメールボックスのディレクトリを保存するディレクトリ名、パターンはグループ名ディレクトリ内に配置するユーザディレクトリ名を指定する IMAP ワイルドカード文字を含むフォルダ名
ユーザ	メッセージストアユーザの名前
フォルダ	ユーザメールボックスディレクトリの名前
メールボックス	ユーザメールボックスの名前

`mkbakupdir` ユーティリティでは、以下のものが作成されます。

- デフォルトのグループディレクトリ (ALL)、または backup-groups.conf 設定ファイルに定義されたグループディレクトリ。次に backup-groups.conf ファイルの例を示す

```
groupA=a*
groupB=b*
groupC=c*
.
.
.
```

- メッセージストアの各新規ユーザに対するバックアップディレクトリ内のユーザディレクトリ
- 各メールボックスに対する、長さ 0 のメールボックス
- ユーザメールボックスを含む各サブディレクトリに対する .nsr ファイル

.nsr ファイルは、Networker に imsasm を呼び出すように通知するための NSR 設定ファイルです。この通知が行われると、imsasm によりデータストリームの作成、解釈が行われます。

各ユーザのメールボックスには、長さ 0 のファイルが含まれています。これは、ユーザディレクトリに配置される INBOX にも含まれています。

注 メッセージストアの所有者 (mailsrv) がバックアップディレクトリに書き込み可能であることを確認してください。

構文

```
mkbackupdir [-a ユーザ id] [-i | -f] [-g] [-v] -p ディレクトリ
```

オプション

このコマンドのオプションは、以下のとおりです。

オプション	説明
-a ユーザ <i>id</i>	指定したユーザを認証する
-f	フォルダのみをバックアップする。デフォルトでは、すべてのメールボックスがバックアップされる

オプション	説明
-g	コマンドをデバッグモードで実行する
-i	Inbox のみをバックアップする。デフォルトでは、すべてのメールボックスがバックアップされる
-p ディレクトリ	バックアップイメージのディレクトリを指定する。これは必須のオプションである 注: Networker では、保存設定 の名前には最高 64 文字まで使用できる。デフォルトのバックアップディレクトリのパス名が長すぎる場合は、このオプションを使用して別のパス名を指定する
-v	コマンドを詳細モードで実行する

例

mybackupdir ディレクトリを作成するには、以下のように入力してください。

```
mkbackupdir -p /mybackupdir
```

MoveUser

MoveUser ユーティリティは、ユーザのアカウントを別の **Messaging Server** に移動します。ユーザアカウントを移動する場合は、ユーザのメールボックスおよびそこに含まれるメッセージも同じサーバに移動する必要があります。また、MoveUser を使用すると、メールボックスを別のサーバに移動できるほか、ユーザの新しいメールホスト名およびメッセージストアパスに合わせ、**Directory Server** のエントリも更新することができます。

条件: リモートでも実行できます。

場所: *server-root/bin/msg/admin/bin*

注 MoveUser ユーティリティを使用して LDAP 属性を変更する場合は、以下のコマンドを実行して、認証キャッシュタイムアウトの値を 0 に設定する必要があります。

```
configutil -o service.authcachettl -v 0
```

構文

```
MoveUser -s src メールホスト [: ポート] -x プロキシユーザ -p パスワード
-d 移動先メールホスト [: ポート]
[-u ユーザ id | -u ユーザ id -U 新規ユーザ id] -l ldapURL -D binDN -w パ
スワード [-r DCルート -t デフォルトドメイン]]
```

オプション

このコマンドのオプションは、以下のとおりです。

オプション	説明
-a 移動先プロキシユーザ	移動先の Messaging Server のプロキシ認証ユーザ
-A	LDAP エントリに代替の電子メールアドレスを追加しない
-d 移動先メールホスト	移動先の Messaging Server デフォルトで、MoveUser は IMAP ポート 143 を使用する。別のポートを指定するには、 <i>destmailhost</i> の後にセミコロンとポート番号を追加する。たとえば、 <i>myhost</i> にポート 150 を指定するには、次のように入力する -d myhost:150
-D バインド dn	指定した ldapURL のバインド dn
-F	メールボックスの移動が完了した後、移動元の Messaging Server のメッセージを削除する。このオプションを指定しなかった場合、移動元の Messaging Server 内のメッセージはそのまま残る
-h	このコマンドのヘルプを表示する
-l ldapURL	Directory Server との接続を確立するための URL ldap:// ホスト名 : ポート / ベース DN? 属性? 範囲? フィルタ LDAP URL の指定方法の詳細については、Directory Server のマニュアルを参照 -u オプションとともに使用することはできない
-L	Messaging Server のライセンスを追加する (まだ設定されていない場合)

オプション	説明
-m 移動先メッセージストア	移動先 Messaging Server のメッセージストアパス。指定しなかった場合は、デフォルトが使用される
-n メッセージカウント	一度に移動するメッセージの数
-o src メールドロップ	移動元 Messaging Server のメッセージストアパス。指定しなかった場合は、デフォルトが使用される
-p src プロキシパスワード	移動元 Messaging Server のプロキシ認証パスワード
-r DC ルート	-l オプションを使用して、ホストドメイン内でユーザを移動するのに使用する DC ルート
-s src メールホスト	移動元の Messaging Server デフォルトで、MoveUser は IMAP ポート 143 を使用する。別のポートを指定するには、 <i>destmailhost</i> の後にセミコロンとポート番号を追加する。たとえば、 <i>myhost</i> にポート 150 を指定するには、次のように入力する -s myhost:150
-S	各ユーザに対し、新しいメッセージストアパスを設定しない
-t デフォルトドメイン	-l オプションを使用して、ホストされたドメイン内でユーザを移動するのに使用するデフォルトドメイン
-u uid	移動するユーザメールボックスのユーザ ID。-l オプションと一緒には使用できない
-U 新規ユーザ <i>id</i>	移動するメールボックスの新規ユーザ ID (変更後の名前)。常に -u <i>uid</i> とともに使用する。この場合の -u <i>uid</i> は、使用をやめる現在のユーザ名。現在のユーザ ID と新規のユーザ ID は、ソースメールホストと移動先メールホストの両方に存在しなければならぬ。移動が完了したら、LDAP から元のユーザ ID を手作業で削除することができる
-v 移動先プロキシパスワード	移動先 Messaging Server のプロキシ認証パスワード
-w バインドパスワード	-D オプションで指定した バインド <i>dn</i> のバインドパスワード
-x src プロキシユーザ	ソース Messaging Server のプロキシ認証ユーザ

例

Directory Server の siroe.com の情報に基づき、すべてのユーザを host1 から host2 に移動するには:

```
MoveUser -l ¥
"ldap://siroe.com:389/o=Varrius.com???(mailhost=host1.domain.com)" ¥
-D "cn=Directory Manager" -w password -s host1 -x admin ¥
-p password -d host2 -a admin -v password
```

あるユーザを、Directory Server の siroe.com 内のアカウント情報に基づいて、ポート 150 を使用する host1 から host2 へ移動するには:

```
MoveUser -l ¥
"ldap://varrius.com:389/o=siroe.com???(uid=userid)" ¥
-D "cn=Directory Manager" -w password -s host1:150 -x admin ¥
-p password -d host2 -a admin -v password
```

Directory Server の server1.siroe.com に基づいて、ユーザ ID が「s」で始まるすべてのユーザを host1 から host2 へ移動するには:

```
MoveUser -l ¥
"ldap://server1.varrius.com:389/o=siroe.com???(uid=s*)" ¥
-D "cn=Directory Manager" -w password -s host1 -x admin ¥
-p password -d host2 -a admin -v password
```

コマンドラインでユーザ ID に admin を指定し、そのユーザのメールボックスを host1 から host2 に移動するには:

```
MoveUser -u uid -s host1 -x admin -p password -d host2 -a admin ¥
-v password
```

host1にある aldonza という名前のユーザを、dulcinea という新しいユーザ ID で host2 に移動するには：

```
MoveUser -u aldonza -U dulcinea -s host1 -x admin -p password ¥
-d host2 -a admin -v password
```

quotacheck

quotacheck ユーティリティは、メッセージストア内の各ユーザのメールボックスサイズの合計を計算します。また、このユーティリティでメールボックスのサイズとユーザに制限容量を比較することもできます。オプションとして、制限容量に対し一定の割合を超えたユーザに対し、電子メールによる通知を送信することができます。

条件：メッセージストアの所有者として実行すること。このユーティリティは iPlanet Messaging Server 共有ライブラリに依存します。LD_LIBRARY_PATH または SHLIB_PATH を適切に設定してください。これらのライブラリは、*server-root/bin/msg/lib* にあります。

依存性：quotacheck を機能させるには、配信エージェントの制限容量に関する警告機能をオフにする必要があります。これは、quotacheck と配信エージェントが、制限容量データベースの同じ要素を使用して、最後の警告時間を記録するためです。配信エージェントの制限容量の警告をオフにするには、ディレクトリ内の *nsmsgquotaexceededmsg;lang-en* の属性値を削除します。

場所：*server-root/bin/msg/admin/bin*

構文

ユーザが割り当てられた容量に対し一定の割合を超えた場合に通知を行う場合は、次の形式の quotacheck を使用します。

```
quotacheck [-e] [-d ドメイン] [-r 規則ファイル]
[-t メッセージテンプレート] [-D] -n
```

使用状況を stdout にレポートするには、次のように quotacheck を使用します。

```
quotacheck [-e] [-d ドメイン] [-r 規則ファイル]
[-t メッセージテンプレート] [-i] [-v] [-h] [-u ユーザ] [-D]
```

オプション

このコマンドのオプションは、以下のとおりです。

オプション	説明
-e	拡張レポートを可能にする。フォルダごとの使用状況はレポートに含まれる
-d ドメイン	指定したドメイン内のユーザのみを検索する
-r 規則ファイル	制限容量の使用状況を計算する際に使用する、一連の規則を指定する。-r が指定されていない場合は、デフォルトの規則ファイルが使用される。デフォルトの規則ファイルを設定するには、58 ページの「Rulefile の例」を <i>server-root/msg-instance/config</i> にコピーする。54 ページの「Rulefile の形式」を参照
-t メッセージテンプレート	<p>メールボックスの制限容量を超えた場合、ユーザに通知する。メッセージテンプレートの形式は次のようになる</p> <ul style="list-style-type: none"> • %U% - ユーザのメールボックス ID • %Q% - 使用中のメールボックス容量のパーセント • %R% - 制限容量の使用状況の詳細：割り当てられた容量、メールボックスのサイズの合計、および使用中の容量のパーセント。-e が指定されている場合、個々のフォルダのメールボックスの使用状況もレポートされる • %M% - 現在のメールボックスのサイズ • %C% - 制限容量属性の値 <p>-t が指定されていない場合、デフォルトのメッセージファイルが送信される。デフォルトのメッセージファイルを設定するには、59 ページの「通知ファイル」を <i>server-root/msg-instance/config</i> にコピーする</p>
-n	規則ファイルに定義された規則に基づいて、通知メッセージを送信する。このオプションを使用する場合、規則を定義しないとエラーが返される
-i	規則ファイルと、そのファイル内で定義されたすべてのアクティブな規則を無視する。メッセージストア内のすべてのユーザによる制限容量の使用状況が <i>stdout</i> に出力される。このオプションは、使用状況のレポートを希望する場合にかぎり使用できる。-i が指定されていない場合、最小のしきい値をもつアクティブな規則を使用して、すべてのユーザと各制限容量の使用状況の一覧が <i>stdout</i> に出力される

オプション	説明
-v	すべてのユーザのユーザ名、制限容量、メールボックスの合計サイズ、使用中のメールボックスのパーセントを出力する。 <code>quotacheck</code> を使用して使用状況をレポートする際、ほかのオプションが指定されていない場合は、このオプションがデフォルトとして使用される
-u ユーザ	指定したユーザ ID の制限容量の使用状況を入手する。 <code>-e</code> を使用して、ユーザの拡張レポートを入手することも可能。また、繰り返し使用して、複数のユーザを指定することもできる。たとえば、以下のように記述する <code>quotacheck -u user1 -u user2 -u user3</code>
-D	デバッグモード。 <code>stdout</code> に実行手順を表示する

例

デフォルトの `rulefile` にしたがって、すべてのユーザに通知を送信するには：

```
quotacheck -n
```

指定した `rulefile` (`myrulefile`)、および指定したメールテンプレートファイル (`mytemplate.file`) にしたがって、すべてのユーザに通知を送信するには：

```
quotacheck -n -r myrulefile -t mytemplate.file
```

制限容量が `rulefile` の最小しきい値を超えるすべてのユーザの使用状況を一覧表示するには：

```
quotacheck
```

`rulefile` を無視して、すべてのユーザの使用状況を一覧表示するには：

```
quotacheck -i
```

user1 および user2 のフォルダ使用状況別に一覧表示するには (rulefile を無視):

```
quotacheck -u user1 -u user2 -e
```

ドメインが siroe.com のユーザのみを一覧表示するには:

```
quotacheck -d siroe.com -i
```

Rulefile の形式

rulefile の形式は、一般のセクションと規則名のセクションで構成されています。一般のセクションには、すべての規則に共通な属性が含まれます。通常、一般のセクションで指定される属性は、mailQuotaAttribute と reportMethod です。規則名のセクションでは、通知の間隔、通知を行うパーセントなど、特定の制限容量規則を記述します。通常、規則名のセクションで指定される属性は、notificationTriggerPercentage、enabled、notificationInterval、および messageFile です。属性と、属性の値では大文字と小文字は区別されません。rulefile では次の形式を使用します。

[一般]

```
mailQuotaAttribute = [ 値 ]
```

```
reportMethod = [ 値 ]
```

[規則名 1]

```
attrname= [ 値 ]
```

```
attrname= [ 値 ]
```

[規則名 2]

```
attrname= [ 値 ]
```

```
attrname= [ 値 ]
```

[規則名 3]

```
attrname= [ 値 ]
```

```
attrname= [ 値 ]
```

一般の属性	必須かどうか	デフォルト値	説明
mailQuotaAttribute	×	quotadb の値	メールの制限容量に関するカスタム属性の名前を指定する。指定しない場合は、quotadb の値が使用される

一般の属性	必須かどうか	デフォルト値	説明
reportMethod	×		制限容量レポートの出力をカスタマイズできる。この属性の値は、ライブラリパス:機能として指定する。ライブラリパスは共有ライブラリのパス、機能はレポート機能の名前。属性の構造については、56 ページの「reportMethod の署名」を参照

規則の属性	必須かどうか	デフォルト値	説明
notificationTriggerPercentage	○		通知をトリガする制限容量のパーセントを指定する。値は固有の整数にする
messageFile	×	server-root/ config/ imq.msgfile	メッセージファイルの絶対パスを指定する
notificationInterval	○		新しい通知を生成するまでの時間数を示す
enabled	×	0 (FALSE)	特定の規則がアクティブかどうかを示す。使用できる値は 0 (FALSE) と 1 (TRUE)
notificationMethod	×		ユーザに送信する制限容量超過通知のメソッドをカスタマイズできる。この属性の値は、ライブラリパス:機能として指定する。ライブラリパスは共有ライブラリのパス、機能はレポート機能の名前 属性の構造については、56 ページの「notificationMethod の署名」を参照

reportMethod の署名

reportMethod() では、次の署名を使用できます。

```
int symbol(QuotaInfo* info, char** message, int* freeflag)
info is a pointer to the following structure:
typedef struct QuotaInfo {
    const char* username; /* user name (uid or uid@domain) */
    long quotakb; /* quota in kbytes */
    long quotamsq; /* quota in number of messages */
    ulong usagekb; /* total usage in kbytes */
    ulong usagemsg; /* total usage in number of messages */
    FolderUsage* folderlist; /* folder list (for -e) */
    long num_folder; /* number of folders in the folderlist */
    long trigger; /* not used */
    const char* rule; /* not used */
}

typedef struct FolderUsage {
    const char*foldername;
    ulong usagekb; /* folder usage in kbytes */
}
```

アドレス (message) が出力メッセージを指定します。レポート機能により、*message の値が入力され、必要に応じて message にメモリが割り当てられます。freeflag 変数は、呼び出しを行ったユーザが *message に割り当てられたメモリを空にしなければならないかどうかを示します。

返り値は成功した場合は 0、失敗した場合は 1 になります。

quotacheck 関数では、レポート出力を生成する reportMethod が呼び出されます。reportMethod で 0 が返され、*message で有効なメモリアドレスが指定されている場合、message は出力されます。

*freeflag が 1 に設定されている場合は、呼び出し元が message で指定されているメモリアドレスを空にします。-e オプションが指定されている場合、各フォルダの使用容量が folderlist (FolderUsage 内の配列) に保存されます。num_folder 変数は、folderlist 内のフォルダ数に設定されます。

notificationMethod の署名

notificationMethod() では、次の署名を使用できます。

```

The notification function has the following prototype:
int symbol(QuotaInfo* info, char** message, int* freeflag)
info is a pointer to the following structure:
typedef struct QuotaInfo {
    const char* username; /* user name (uid or uid@domain) */
    long quotakb; /* quota in kbytes */
    long quotams; /* quota in number of messages */
    ulong usagekb; /* total usage in kbytes */
    ulong usagemsg; /* total usage in number of messages */
    FolderUsage* folderlist; /* folder list (for -e) */
    long num_folder; /* number of folders in the folderlist */
    long trigger; /* the exceeded notificationTriggerPercentage */
    const char* rule; /* rulename that triggered notification */
}

typedef struct FolderUsage {
    const char *foldername;
    ulong usagekb; /* folder usage in kbytes */
}

```

アドレス (message) が通知メッセージを指定します。通知機能により、この変数の値が埋められ、必要に応じてメッセージにメモリが割り当てられます。freeflag 変数は、呼び出し元が message に割り当てられたメモリを空にする作業を担当するかどうかを示します。

返り値は成功した場合は 0、失敗した場合は 1 になります。

通知機能により 0 が返され、*message で有効なアドレスが指定されている場合は、quotacheck ユーティリティにより、メッセージがユーザに配信されます。

*freeflag が 1 に設定されている場合は、呼び出し元がメッセージを送信した後、メッセージに指定されているメモリアドレスを空にします。

-e オプションが指定されている場合、各フォルダの使用容量が folderlist 変数 (FolderUsage 構造の配列) に保存されます。num_folder 変数は、folderlist 内のフォルダ数に設定されます。

注 messageFile 属性が指定されている場合は、messageFile の属性は無視されます。

Rulefile の例

```
#
Rulefile の例
#
[ 一般 ]
mailQuotaAttribute=mailquota
reportMethod=/xx/yy/libzz.so:myReportMethod [for Solaris only]
           /xx/yy/libzz.sl:myReportMethod [for HP-UX only]
           ¥xx¥yylibzz.dll:myReportMethod [for Windows NT only]

[ 規則名 1 ]
notificationTriggerPercentage=60
enabled=1
notificationInterval=3
notificationMethod=/xx/yy/libzz.so:myNotifyMethod_60

[ 規則名 2 ]
notificationTriggerPercentage=80
enabled=1
notificationInterval=2
messageFile=/xx/yy/message.txt

[ 規則名 3 ]
notificationTriggerPercentage=90
enabled=1
notificationInterval=1
notificationMethod=/xx/yy/libzz.so:myNotifyMethod_90

#
# End
#
```

しきい値による通知のアルゴリズム

1. 規則の優先順位は、トリガするパーセントの高い順番に決定されます。
2. 通知の生成では、該当率の高いしきい値が使用されます。時刻と規則のしきい値が記録されます。
3. 前回の制限容量の通知後に、ユーザがより高いしきい値に移行した場合は、現在適用される規則セットに基づいて、新しい通知が配信されます。この通知は、使用容量が継続して増加しているユーザに対し、ただちに配信することができます。
4. 使用量が減少した場合、現在の規則（低いしきい値による）の通知間隔を使用して、前回の通知からの経過時間が確認されます。
5. 保存された特定のユーザへの通知の時刻としきい値は、ユーザのメールボックスのサイズが定義されたすべてのしきい値よりも小さくなった場合、ゼロにリセットされます。

通知ファイル

ユーティリティは、最低でも 1 つの **Subject** ヘッダーを所有するメッセージファイルに依存しています。**Subject** と本文を分けるために、最低でも 1 行の空白の行が必要です。その他必要なヘッダーは、ユーティリティによって生成されます。次に通知ファイルの形式を示します。

```
Subject:[Warning] quota reached for %U%
```

```
Hello %U%,
Your quota: %C%
Your current mailbox usage: %M%
Your mailbox is now %Q% full. The folders consuming the most space
are: %R%.
```

```
Please clean up unwanted diskspace.
```

```
Thanks,
-Administrator
```

readership

readership ユーティリティは、メールボックスの所有者以外に、何人のユーザが共有 IMAP フォルダ内のメッセージを読んだかを報告するユーティリティです。

IMAP フォルダの所有者は、フォルダ内のメールを読む権限をほかのユーザに与えることができます。ほかのユーザにアクセス権が与えられたフォルダは、共有フォルダと呼ばれます。管理者は **readership** ユーティリティを使用して、所有者以外に何人のユーザが共有フォルダにアクセスしたかを表示することができます。

このユーティリティを使うと、すべてのメールボックスがスキャンされます。

結果として、各共有フォルダにつき 1 行ずつ、アクセスしたユーザ数とメールボックスの名前が表示されます。ユーザ数とメールボックスの名前の間にはスペースが挿入されます。

アクセスしたユーザとは、過去の指定した日数内に共有フォルダを選択した、個別の認証を受けたユーザのことです。自分の個人用メールボックスを読んだユーザは、数には含まれません。個人用メールボックスは、フォルダの所有者以外に購読者がいない場合は、レポートされません。

条件 : Messaging Server でローカルに実行します。stored ユーティリティが実行されていなければなりません。

場所 : *server-root/bin/msg/admin/bin*

構文

```
readership [-d 日数] [-p 月数]
```

オプション

このコマンドのオプションは、以下のとおりです。

オプション	説明
-d 日数	指定した日数内に共有 IMAP フォルダを選択したユーザをすべてカウントする。デフォルトは 30
-p 月数	指定した月数内に共有 IMAP フォルダを選択しなかったユーザをカウントしない。デフォルトは無限で、これらのユーザから表示済みのフラグを削除する。また、このオプションは、ユーザの「表示済み」のフラグデータをストアから削除する

reconstruct

`reconstruct` ユーティリティは、1 つまたは複数のメールボックスあるいはマスターメールボックスファイル (メールボックスデータベース) を再構築し、すべての矛盾を修復します。このユーティリティを使うと、メッセージストアにおけるほとんどすべてのデータ破損を回復することができます。

メールボックスは、ユーザパーティションディレクトリの下の下にあるファイルで構成されます。メールボックスデータベースは、`mboxlist` データベースです。

条件: Messaging Server でローカルに実行します。stored ユーティリティが実行されていなければなりません。

場所: `server-root/bin/msg/admin/bin`

注	トランザクションの完了や、完了しなかったトランザクションのロールバックなど、低レベルのデータベースの修復には <code>stored -d</code> を使用します。
----------	---

構文

```
reconstruct [-n | -f] [-p パーティション] -r
 [ メールボックス [ メールボックス ... ] ]
```

```
reconstruct [-n | -f] [-p パーティション] メールボックス
 [ メールボックス ... ]
```

```
reconstruct [-p パーティション] -m
```

```
reconstruct -q
```

```
reconstruct -o [-d ファイル名]
```

オプション

このコマンドのオプションは、以下のとおりです。

オプション	説明
-f	reconstruct に 1 つまたは複数のメールボックスで修復を行うように強制する
-m	メールボックスのデータベースを修復し、整合性チェックを行う。このオプションを使用すると、スプールエリアで見つかったすべてのメールボックスがチェックされ、必要に応じてメールボックスデータベースのエントリの追加または削除が行われる。データベースでエントリの追加または削除が行われると、メッセージが標準出力ファイルに出力される
-n	メールボックスの修復を実行せずに、メッセージストアだけをチェックする。メールボックス名を指定せずに、-n オプションを単独で使用することはできない。メールボックスが指定されていない場合は、-n オプションと -r オプションをいっしょに使用する必要がある。-r オプションは -p オプションと組み合わせて使用できる。たとえば、以下のコマンドはすべて有効である

```
reconstruct -n user/dulcinea/INBOX
reconstruct -n -r
reconstruct -n -r -p primary
reconstruct -n -r user/dulcinea/
```

オプション	説明
-o	孤立したアカウントをチェックする。このオプションは、現在の Messaging Server ホスト内の Inbox で、対応するエントリが LDAP にはないものを検索する。たとえば、-o オプションは、所有者が LDAP から削除された、または別のサーバホストに移動された inbox を検索する。見つかった孤立アカウントのそれぞれに対し、reconstruct ユーティリティは標準出力に次のコマンドを書き込む mboxutil-d user/ ユーザ <i>id</i> /INBOX
-o -d ファイル名	-o オプションで「-d ファイル名」が指定されている場合、reconstruct は指定したファイルを開き、そのファイルに mboxutil -d コマンドを書き込む。このファイルをスクリプトファイルにして、孤立したアカウントを削除することができる
-p パーティション	パーティション名を指定する。完全なパス名は使用しないこと。このオプションを指定しない場合、reconstruct がすべてのパーティションのデフォルト
-q	制限容量サブシステムの矛盾 (メールボックスの制限容量ルートが正しくない、または制限容量ルートで誤った容量の使用状況がレポートされるなど)を修正する。-q オプションは、ほかのサーバプロセスの実行中に実行できる
-r [メールボックス]	指定した1つまたは複数のメールボックスのパーティションエリアを修復し、整合性をチェックする。また、-r オプションは、指定したメールボックス内のすべてのサブメールボックスも修復する。-r を指定してメールボックス引数を入力しなかった場合は、ユーザパーティションディレクトリ内にあるすべてのメールボックスのスパールエリアが修復される

「メールボックス」引数は、修復するメールボックスを示しています。1つまたは複数のメールボックスを指定できます。メールボックスは、「user/ ユーザ *id*/ サブメールボックス」というフォーマットの名前を使って指定します。この「ユーザ *id*」は、メールボックスを所有するユーザです。たとえば、ユーザ *dulcinea* の Inbox は、user/dulcinea/INBOX のように入力します。

例

特定のメールボックスで reconstruct を実行するには：

```
reconstruct user/dulcinea/INBOX
```

`reconstruct` を実行しないで指定したメールボックスをチェックするには次のコマンドを実行します。

```
reconstruct -n user/dulcinea/INBOX
```

メッセージストア内のすべてのメールボックスをチェックするには：

```
reconstruct -n -r
```

start-msg

`start-msg` ユーティリティは、すべての Messaging Server プロセス (smtp、imap、pop、store、http、ens) を開始します。また、オプションとして、1つのサービスを開始するように指定することもできます。

構文

```
start-msg [smtp | imap | pop | store | http | ens]
```

例

すべての Messaging Server プロセスを開始するには：

```
start-msg
```

imap プロセスを開始するには：

```
start-msg imap
```

stop-msg

stop-msg ユーティリティは、すべての Messaging Server プロセス (smtp、imap、pop、store、http、ens) を停止します。また、オプションとして、1つのサービスを停止するように指定することもできます。

構文

```
stop-msg [smtp | imap | pop | store | http | ens]
```

例

すべての Messaging Server プロセスを停止するには：

```
stop-msg
```

http サービスを停止するには：

```
stop-msg http
```

stored

stored ユーティリティは、次の機能を実行します。

- バックグラウンドと日常のメッセージングタスク
- デッドロックの検出とデッドロックしたデータベーストランザクションのロールバック
- 起動時の一時ファイルのクリーンアップ
- 存続期間決定ポリシーの実行
- サーバの状態、ディスクスペース、サービスへの応答時間などの周期的なモニタ
- 必要に応じて警告を発生

stored ユーティリティは、毎日深夜 12 時に自動的にクリーンアップと (有効期限による) 失効の操作を行います。また、これ以外の時間にもクリーンアップと失効の操作を行うように選択することもできます。

条件 : Messaging Server でローカルに実行します。

場所 : `server-root/bin/msg/admin/bin`

構文

コマンドラインから `stored` を実行して特定の処理を行うには :

```
stored [-1] [-c] [-n] [-v [-v]]
```

`stored` をデーモンプロセスとして実行するには :

```
stored [-d] [-v [-v]]
```

オプション

このコマンドのオプションは、以下のとおりです。

オプション	説明
-c	削除されたメッセージを消去するためにクリーンアップを 1 回実行する。1 回だけ実行し、終了する。-c オプションは 1 回だけの処理で、-1 オプションを指定する必要はない
-d	デーモンとして実行する。システムチェックを実行し、アラーム、デッドロック検出、およびデータベース修復をアクティブにする
-1 (数字の 1)	1 回だけ実行し、終了する
-n	トライアルモードでのみ実行する。メッセージを実際に期限切れにしたり、クリーンアップすることはない。1 回だけ実行し、終了する
-v	詳細モード出力を行う
-v -v	その他の詳細モード出力

例

有効期限ポリシーをテストするには：

```
stored -n
```

保存期間の終了とクリーンアップを1回実行するには：

```
stored -l -v
```

Message Transfer Agent のコマンド ラインユーティリティ

この章で説明するコマンドラインユーティリティを使うと、MTA (Message Transfer Agent) のさまざまな保守、テスト、管理などのタスクを行うことができます。

MTA のコマンドは、`imsimta` コマンドとも言われます。`imsimta` スクリプトは、`server-root/msg-instance/` ディレクトリにあります。

「`server-root`」はサーバをインストールするディレクトリパスを表し、「`msg-instance`」の変数「`instance`」はサーバをインストールするときに使うサーバインスタンス (またはホストマシン名) を表します。

表 2-1 に、各コマンドの一覧を示します。

表 2-1 MTA のコマンド

コマンド	説明
<code>imsimta cache</code>	キューキャッシュに関する操作を行う
<code>imsimta chbuild</code>	MTA 文字セット変換テーブルをコンパイルする
<code>imsimta cnbuild</code>	MTA 設定ファイルをコンパイルする
<code>imsimta convertdb</code>	MTA バージョン 5.2 以前の <code>crdb</code> データベースのエントリを読み取り、現在の <code>crdb</code> データベースのフォーマットに書き出す
<code>imsimta counters</code>	チャンネルカウンタに関する操作を行う
<code>imsimta crdb</code>	MTA データベースを作成する
<code>imsimta dirsync</code>	MTA ディレクトリキャッシュを作成し直すか、または更新する
<code>imsimta find</code>	指定バージョンの MTA ログファイルに対する正確なファイル名を探し出す
<code>imsimta kill</code>	指定されたプロセスを中止する

表 2-1 MTA のコマンド (続き)

コマンド	説明
<code>imsimta process</code>	現在実行中の MTA ジョブを一覧する
<code>imsimta process_held</code>	保留キューチャンネルに保存されているメッセージを処理する
<code>imsimta program</code>	MTA プログラムの配信オプションを操作する
<code>imsimta purge</code>	MTA ログファイルをパージする
<code>imsimta qclean</code>	エンベロープの From: アドレス、 Subject: 行、または内容に特定のサブ文字列が含まれているメッセージファイルを保持するか、または削除する
<code>imsimta qm</code>	MTA メッセージキューを管理する
<code>imsimta qtop</code>	チャンネルキューのメッセージファイルの中で、最も頻繁に発生しているエンベロープ From: 、 Subject: 、または内容フィールドを表示する
<code>imsimta recover-crash</code>	破損したデータベースを削除し、これらのデータベースをバックアップからリストアする
<code>imsimta refresh</code>	<code>imsimta cnbuild</code> および <code>imsimta</code> 再起動ユーティリティの機能を組み合わせる
<code>imsimta renamedb</code>	MTA データベースの名前を変更する
<code>imsimta restart</code>	分離した MTA プロセスを再起動する
<code>imsimta return</code>	メールメッセージを送信者に送り返す
<code>imsimta run</code>	指定されたチャンネルのメッセージを処理する
<code>imsimta start</code>	MTA ジョブコントローラとディスパッチャを起動する
<code>imsimta stop</code>	MTA ジョブコントローラとディスパッチャをシャットダウンする
<code>imsimta submit</code>	指定されたチャンネルのメッセージを処理する
<code>imsimta test</code>	マッピングテーブル、ワイルドカードパターン、アドレスの書き換え、URL に関するテストを実行する
<code>imsimta version</code>	MTA のバージョン番号を印刷する
<code>imsimta view</code>	ログファイルを表示する
<code>configutil</code>	Messaging Server の設定パラメータおよびいくつかの MTA 設定パラメータを一覧し、変更することができる。完全な構文と <code>configutil</code> の説明については、18 ページの「 <code>configutil</code> 」を参照

コマンドの説明

MTA コマンドを実行するには、ルート (UNIX の場合) または管理者 (Windows NT の場合) としてログインする必要があります。特に記載されていないかぎり、MTA コマンドは、すべて `mailsrv` (インストール時に作成されたメールサーバユーザ) として実行してください。

imsimta cache

MTA は、現在キューに入っているすべてのメッセージのメモリ内キャッシュを維持します。このキャッシュは、キューキャッシュと呼ばれます。このキューキャッシュの目的は、マスタープログラムがメッセージファイルをすべて開いて、どのメッセージをどの順番でキューから取り出すかを判断しなくてもいいようにすることにより、キューから取り出す操作をより効果的にします。

構文

```
imsimta cache -sync | -view [チャンネル]
```

オプション

このコマンドのオプションは、以下のとおりです。

オプション	説明
<code>-sync</code>	<code>/server-root/msg-instance/imta/queue/</code> サブディレクトリにある非保持メッセージすべてを反映するように、アクティブなキューキャッシュを更新する。 <code>-sync</code> オプションを使っても、エントリーはキューキャッシュから削除されない。実際にキューに入っているメッセージに対応しないキューキャッシュエントリーは、チャンネルマスタープログラムによって通達なしに破棄される
<code>-view [チャンネル]</code>	チャンネルに対し、MTA キューキャッシュにある非保持エントリーを表示する。「チャンネル」は、エントリーを表示するチャンネルの名前

例

キューキャッシュを同期させるには、以下のように入力します。

```
imsimta cache -sync
```

tcp_local チャンネルのキューキャッシュエントリを表示するには、以下のコマンドを実行します。

```
imsimta cache -view tcp_local
```

imsimta chbuild

imsimta chbuild コマンドは、文字セット変換テーブルをコンパイルし、その結果としてできるイメージファイルを共有メモリに読み込みます。MTA には、完全な文字セットテーブルが含まれているため、通常はこのコマンドを実行する必要はありません。文字セットを追加または修正した場合だけ、imsimta chbuild を使用します。

構文

```
imsimta chbuild [-image_file=ファイル_仕様 | -noimage_file]
  [-maximum | -nomaximum]
  [-option_file=[オプション_ファイル] | -nooption_file] [-remove]
  [-sizes | -nosizes] [-statistics | -nostatistics]
```

オプション

このコマンドのオプションは、以下のとおりです。

オプション	説明
-image_file=ファイル_仕様 -noimage_file	特に設定を変更しないかぎり、imsimta chbuild は、MTA テイラーファイル (msg-instance/imta/config/imta_tailor) の IMTA_CHARSET_DATA オプションによって名前が付けられたイメージファイルを出力として作成する。 -image_file オプションを使うと、別のファイル名を指定することができる。-noimage_file オプションを指定すると、imsimta chbuild は出力イメージファイルを作成しない。-noimage_file オプションを -option_file オプションとともに使用すると、その出力として、処理された入力ファイルによって必要とされるテーブルを保持するのに十分なテーブルサイズを指定するオプションファイルが作成されます
-maximum -nomaximum	-maximum を指定すると、MTA テイラーファイル (msg-instance/imta/config/imta_tailor) の IMTA_CHARSET_OPTION_FILE オプションによって名前が付けられたファイルのほかに、msg-instance/imta/config/maximum_charset.dat ファイルが読み取られる。このファイルは、-maximum テーブルサイズの近似値を指定するものだが、その他の設定が変更されることはない。現在のテーブルサイズが不適当な場合にのみ、このオプションを使用する。-noimage および -option_file オプションは、常にこのオプションとともに使用しなければならない。-maximum によって作成された巨大な設定を出力するのは無意味だが、-maximum を使ってサイズ制限を設けるのに使用できる。そうすることにより、次の imsimta chbuild で管理しやすい設定を構築できるよう、適切なサイズのオプションファイルを構築することができる

オプション	説明
<code>-option_file=[オプション_ファイル] -nooption_file</code>	<p>imsimta chbuild は、処理されたばかりの変換テーブルを維持する正しいテーブルサイズを含むオプションファイルを作成できる (これには、多少拡張の余地がある)。<code>-option_file</code> オプションは、このファイルを出力する。このファイルのデフォルトは、MTA テイラーファイル (<code>msg-instance/imta/config/imta_tailor</code>) の <code>IMTA_CHARSET_OPTION_FILE</code> オプションによって名前が付けられたファイルである。<code>-option_file</code> オプションの値を使うと、別のファイル名を指定することができる。<code>-nooption_file</code> オプションが指定されていると、オプションファイルは一切出力されない。imsimta chbuild は、既に存在するファイルであれば、どのオプションファイル (たとえば、MTA テイラーファイルの <code>IMTA_OPTION_FILE</code> オプションによって名前が付けられたファイル) でも読み取る。このオプションを使っても、この動作に変わりはない。ただし、<code>-maximum</code> オプションを使うと、imsimta chbuild は、<code>IMTA_CHARSET_OPTION_FILE</code> 以外に、<code>maximum_charset.dat</code> からオプションを読み取るようになる。このファイルには、最大テーブルサイズの近似値が指定されている。このオプションは、現在のテーブルサイズが不適当な場合、または新しいオプションファイルを作成する場合にだけ使用する。最大サイズのイメージは、非常に大きく非効率的であるため、<code>-noimage_file</code> オプションは、常に <code>-maximum</code> を使って指定する</p>
<code>-remove</code>	<p>既存のコンパイルされた文字セット変換テーブルを削除する。これは、MTA テイラーファイル (<code>msg-instance/imta/config/imta_tailor</code>) の <code>IMTA_CHARSET_DATA</code> オプションによって名前が付けられたファイルである</p>
<code>-sizes -nosizes</code>	<p><code>-sizes</code> オプションは、imsimta chbuild に、コンパイルされていない変換テーブルのサイズ情報を出力するか、または出力しないように指示する。デフォルトは <code>-nosizes</code></p>
<code>-statistics -nostatistics</code>	<p><code>-statistics</code> オプションは、imsimta chbuild に、コンパイルされた変換テーブルの情報を出力するか、または出力しないように指示する。この情報は、コンパイルの大まかな効率、および <code>-option_file</code> オプションを使った再構築が新たに必要かどうかを示す。デフォルトは <code>-nostatistics</code> オプション</p>

例

文字セット変換テーブルをコンパイルするために使用する標準のコマンドは、以下のとおりです。

```
imsimta chbuild
```

imsimta cnbuild

imsimta cnbuild コマンドは、テキストの設定、オプション、マッピング、変換、回路チェック、エイリアスファイルをコンパイルし、その結果できるイメージファイルを共有メモリに読み込みます。このイメージは、MTA テイラーファイル (`msg-instance/imta/config/imta_tailor`) の `IMTA_CONFIG_DATA` オプションによって名前が付けられた `msg-instance/imta/lib/config_data` というファイルに保存されます。

MTA のコンポーネント (たとえば、チャンネルプログラム) がコンパイルされた設定コンポーネントを読み取る必要がある場合は、常に、MTA テイラーファイルの `IMTA_CONFIG_DATA` オプションによって名前が付けられたファイルが共有メモリに読み込まれているかどうかを最初に確認します。コンパイルされたイメージは存在するが読み込まれていない場合には、MTA によってそのイメージが共有メモリに読み込まれます。MTA が共有メモリ内でコンパイルされたイメージを検出した (または検出しませんが、読み込める) 場合、実行中のプログラムはそのイメージを使用します。

設定情報をコンパイルするのは、パフォーマンスのためです。ただし、コンパイルすると、元の設定ファイルを編集するたびに、イメージを再コンパイルして読み込み直さなければならないという欠点があります。また、プログラムやチャンネルを起動する場合は、設定データを一度だけしか読み込まないプログラムまたはチャンネルを再起動するようにしてください。例: MTA マルチスレッド SMTP サーバ。

以下のファイルは、変更が加えられるたびに、設定を再コンパイルする必要があります。

- MTA 設定ファイル (またはそれが参照するファイル)
- MTA システムのエイリアスファイル
- MTA マッピングファイル
- MTA オプションファイル
- MTA 変換ファイル
- MTA セキュリティ設定ファイル
- MTA 回路チェック設定ファイル

- MTA システム全体のフィルタファイル

特に、これらのファイルは、MTA テイラーファイルの `IMTA_CONFIG_FILE`、`IMTA_ALIAS_FILE`、`IMTA_MAPPING_FILE`、`IMTA_OPTION_FILE`、`IMTA_CONVERSION_FILE`、および `IMTA_SECURITY_CONFIG_FILE` オプションがポイントするファイルで、通常は以下のファイルをポイントします。

- `msg-instance/imta/config/imta.cnf`
- `msg-instance/imta/config/aliases`
- `msg-instance/imta/config/mappings`
- `msg-instance/imta/config/option.dat`
- `msg-instance/imta/config/conversions`
- `msg-instance/imta/config/security.cnf`

注 設定が再構築されるまで、実行中の MTA システムはこれらのファイルへの変更を認識しません。

構文

```
imsimta cnbuild [-image_file= ファイル_仕様 | -noimage_file]
                [-maximum | -nomaximum]
                [-option_file=[ オプション_ファイル ] | -nooption_file] [-remove]
                [-sizes | -nosizes] [-statistics | -nostatistics]
```

オプション

このコマンドのオプションは、以下のとおりです。

オプション	説明
-image_file=ファイル_ 仕様 -noimage_file	特に設定を変更しないかぎり、imsimta cnbuildは、MTA テイラーファイル (msg-instance/imta/config/imta_tailor) の IMTA_CONFIG_DATA オプションによって名前が付けられたイメージファイルを出力として作成する。-image_file オプションを使うと、別のファイル名を指定することができる。-noimage_file オプションを指定すると、imsimta cnbuild は、イメージファイルを作成しない。このオプションを -option_file オプションとともに使用すると、処理された入力ファイルによって必要とされるテーブルを保持するのに十分なテーブルサイズを指定するオプションファイルが作成される。デフォルトは -image_file=IMTA_CONFIG_DATA
-maximum -nomaximum	MTA テイラーファイル (msg-instance/imta/config/imta_tailor) の IMTA_OPTION_FILE オプションによって名前が付けられたファイルのほかに、msg-instance/imta/config/maximum.dat が読み取られる。このファイルは、最大テーブルサイズの近似値を指定するものだが、その他のオプションファイルパラメータ設定が変更されることはない。現在のテーブルサイズが不都合な場合にのみ、このオプションを使用する。-noimage および -option_file オプションは、常にこのオプションとともに使用しなければならない。-maximum によって作成された巨大な設定を出力するのは無意味だが、-maximum を使ってサイズ制限を設けるのに使用できる。そうすることにより、次の imsimta cnbuild で適切なサイズの設定を構築することができる。デフォルトは -nomaximum

オプション	説明
-option_file=[オプション _ファイル] -nooption_file	<p>imsimta cnbuild は、コンパイルされたばかりの設定を維持する正しいテーブルサイズを含むオプションファイルを作成できる (これには、多少拡張の余地がある)。</p> <p>-option_file オプションは、このファイルを出力する。このファイルのデフォルトは、MTA テイラーファイル (<i>msg-instance/imta/config/imta_tailor</i>) の IMTA_OPTION_FILE オプションによって名前が付けられたファイルである。-option_file オプションの値を使うと、別のファイル名を指定することができる。</p> <p>-nooption_file オプションが指定されていると、オプションファイルは一切出力されない。imsimta cnbuild は、MTA テイラーファイル (<i>msg-instance/imta/config/imta_tailor</i>) の IMTA_OPTION_FILE オプションを使って、既に存在するファイルであればどのオプションファイルでも読み取る。このオプションを使っても、この動作に変わりはない。ただし、-maximum オプションを使うと、imsimta cnbuild は、IMTA_OPTION_FILE によって名前が付けられたファイル以外に、<i>msg-instance/imta/config/maximum.dat</i> ファイルから MTA オプションを読み取るようになる。このファイルには、最大テーブルサイズの近似値が指定されている。このオプションは、現在のテーブルサイズが不適当な場合、または新しいオプションファイルを作成する場合にだけ使用する。最大サイズのイメージは非常に大きく非効率的である、-maximum を指定した場合は、常に -noimage_file オプションを指定するようにする。デフォルトは、 -option_file=IMTA_OPTION_FILE</p>
-remove	<p>既存のコンパイルされた設定を削除する。たとえば、MTA テイラーファイル (<i>msg-instance/imta/config/imta_tailor</i>) の IMTA_CONFIG_DATA オプションによって名前が付けられたファイルなどを削除する</p>
-sizes -nosizes	<p>-sizes オプションは、imsimta cnbuild に、コンパイルされていない MTA テーブルのサイズ情報を出力するように指示する。デフォルトは -nosizes</p>
-statistics -nostatistics	<p>-statistics オプションは、imsimta cnbuild に、テーブルの使用状況を出力するように指示する。この情報は、コンパイルの大まかな効率、および -resize_tables オプションを使った再構築が新たに必要かどうかを示す。デフォルトは -nostatistics オプション</p>

例

コンパイルされた設定を再生成するには、以下のように入力します。

```
imsimta cnbuild
```

設定をコンパイルしたら、新規設定を読み込み直す必要のあるプログラムを再起動します。たとえば、SMTP サーバを再起動します。

```
imsimta restart dispatcher
```

注 `imsimta refresh` コマンドが呼び出されると、常に `imsimta cnbuild` が実行されます。

imsimta convertdb

MTA データベースのフォーマットは、PMDF または SIMS から変更されました。`imsimta convertdb` ユーティリティは、PMDF 6.0 または SIMS 4.0 データベースからエントリを読み取り、そのエントリを iPlanet Messaging Server データベースに書き出します。

`imsimta convertdb` ユーティリティは、入力として iPlanet Messaging Server 5.0 以降のデータベースを読み取ることもできます。

構文

```
imsimta convertdb 入力データベース仕様 出力データベース仕様
```

パラメータ

このコマンドのパラメータは、以下のとおりです。

パラメータ	説明
入力データベース仕様	エントリを読み取る MTA データベース (通常、以前のバージョンの関連 MTA を実行して作成されたもの) の名前

パラメータ	説明
出力データベース仕様	<p>入力 MTA データベースに保存されているエントリーを書き込む、バージョン 5.0 以降の MTA データベースの名前。</p> <p>IMTA_ALIAS_DATABASE、IMTA_REVERSE_DATABASE、IMTA_FORWARD_DATABASE、IMTA_GENERAL_DATABASE、IMTA_DOMAIN_DATABASE、IMTA_PIPE_DATABASE などの特殊なキーワードをサポートしている。こういった特殊なキーワードを使用すると、対応するテイラーファイルオプションによって指定されたデータベースに書き込むよう MTA に指示を与えることができる</p>

例

以下に、MTA エイリアスデータベースを最新のフォーマットに変換する場合の例を示します。入力データベースは、たとえば iPlanet Messaging Server 5.2 のフォーマットに変換される SIMS 4.0 のエイリアスデータベースなどです。

```
imsimta convertdb aliasesdb.dat IMTA_ALIAS_DATABASE
```

imsimta counters

MTA は、アクティブチャンネルごとにメッセージのトラフィックカウンタを総計します。これらの統計はチャンネルカウンタと呼ばれ、共有メモリに保存されます。これらのカウンタは、imsimta counters コマンドを使って操作できます。

構文

```
imsimta counters -clear

imsimta counters -create [-max_channels= 値]

imsimta counters -delete

imsimta counters -show [-associations | noassociations]
  [-channels | -nochannels] [-headers | -noheaders]
  [-output= ファイル_仕様] [-today | -notoday]
```

オプション

このコマンドのオプションは、以下のとおりです。

オプション	説明
-associations -noassociations	関連カウンタのインメモリキャッシュを表示するかどうかを指定する。デフォルトは <code>-associations</code> オプション。このオプションは、 <code>-show</code> オプションとともに使用する
-channels -nochannels	インメモリキャッシュまたはチャンネルカウンタを表示するかどうかを指定する。デフォルトは <code>-channels</code> オプション。このオプションは、 <code>-show</code> オプションとともに使用する
-clear	<code>-clear</code> コマンドは、インメモリチャンネルカウンタをクリアする
-create	インメモリチャンネルカウンタを作成する。既にインメモリカウンタがある場合は、このオプションを使用しない。 <code>imsimta start</code> は、インメモリカウンタを作成する。 <code>-delete</code> オプションを使ってカウンタを手動で削除した場合を除き、このオプションは決して使用しない
-headers -noheaders	カウンタテーブルの各列を説明するヘッダ行を出力するかどうかを指定する。デフォルトは <code>-headers</code> オプション。このオプションは、 <code>-show</code> オプションとともに使用する
-max_channels= 値	デフォルトで、インメモリチャンネルカウンタは <code>CHANNEL_TABLE_SIZE</code> チャンネルの情報を保持することができる。 <code>CHANNEL_TABLE_SIZE</code> は、同じ名前の MTA ファイルオプションによって指定された値。 <code>-max_channels= 値</code> オプションを使って、別のサイズを選択する。このオプションは、 <code>-create</code> オプションとともに使用する
-delete	インメモリチャンネルカウンタを削除する
-show	インメモリチャンネルカウンタを表示する
-headers -noheaders	カウンタテーブルの各列を説明するヘッダ行を出力するかどうかを指定する。デフォルトは <code>-headers</code> オプションこのオプションは、 <code>-show</code> オプションとともに使用する
-output= ファイル_仕様	指定されたファイルへの出力を指示する。デフォルトでは、ディスプレイにだけ出力が表示される。このオプションは、 <code>-show</code> オプションとともに使用する
-today -notoday	この日に処理されたメッセージの数の MTA カウントを表示するかどうかを指定する。デフォルトは <code>-today</code> オプション。このオプションは、 <code>-show</code> オプションとともに使用する

例

すべてのチャンネルのカウンタを表示するには、以下のように入力します。

```
imsimta counters -show
```

imsimta crdb

imsimta crdb コマンドは、MTA データベースファイルを作成し、更新します。imsimta crdb は、平文のファイルを MTA データベースレコードに変換します。そして、新規データベースを作成するか、または既存のデータベースにレコードを追加します。

一般に、入力ファイルの各行は、左側の部分と右側の部分とで構成されている必要があります。右側と左側は、1 つまたは複数のスペースかタブで区切られています。左側は、ショートデータベース (デフォルト) では 32 文字、ロングデータベースでは 80 文字に制限されています。右側は、ショートデータベースでは 80 文字、ロングデータベースでは 256 文字に制限されています。-quoted オプションを指定しないかぎり、左側にスペースとタブは表示されません。コメント行は、入力ファイルに含めることができます。コメント行は、カラム 1 において感嘆符 (!) から始まる行です。

構文

```
imsimta crdb 入力ファイル仕様 出力データベース仕様
[-append | -noappend] [-count | -nocount]
[-duplicates | -noduplicates] [-long_records | -nolong_records]
[-quoted | -noquoted] [-remove | -noremove]
[-statistics | -nostatistics] [-strip_colons | -nostrip_colons]
```

オプション

このコマンドのオプションは、以下のとおりです。

オプション	説明
入力ファイル仕様	データベースに配置されるエントリを含むテキストファイル。テキストファイルの各行に対して、対応するエントリが 1 つ必要。この属性は必須

オプション	説明
出力データベース仕様	データベースに書き込むファイルの最初の名前文字列 (-dump を指定していない場合)。 .db 拡張子がファイル名に追加される。この属性は必須
-append -noappend	デフォルトの -noappend オプションが有効になっている場合は、新しいデータベースが作成され、同じ名前の古いデータベースが上書きされる。-append オプションを使うと、既存のデータベースに新しいレコードを追加するよう MTA に指示が出される。デフォルトは -noappend オプション。重複するレコードがある場合は、-noduplicates を指定すると、追加したレコードが古いレコードを上書きする
-count -nocount	100 行の入力グループが処理されるたびにカウントを出力するかどうかを指定する。デフォルトは -count オプション
-duplicates -noduplicates	出力ファイルで重複レコードを許可するかどうかを指定する。現在、重複レコードは、ドメインのデータベース(書き換え規則データベース)とディレクトリチャネルに関連するデータベースでのみ使用されている。デフォルトは -noduplicates オプション
-long_records -nolong_records	出力レコードのサイズを制御する。デフォルトでは、左側が 32 バイト、右側が 80 バイトに制限されている。-long_records を指定すると、制限はそれぞれ 80 バイトと 256 バイトに変わる。デフォルトは -nolong_records オプション
-quoted -noquoted	引用符の処理を制御する。通常、imsimta crdb は二重引用符に注意を払わない。-quoted を指定すると、imsimta crdb は、各入力行の左側と右側の区切りを判断しながら二重引用符を確認する。スペースとタブは、引用符セットの中であれば入力することができる。これは、スペースがデータベースキーの一部になるタイプのデータベースには便利です。-remove オプションを指定しないかぎり、引用符は削除されない。デフォルトは -noquoted オプション
-remove -noremove	引用符を削除するかどうかを指定する。imsimta crdb が引用符に注意を払うように指示されている場合、引用符はそのまま保持される。-remove を指定すると、imsimta crdb は、各入力行の左側で、一番外側にある引用符セットを削除する。スペースとタブは、引用符セットの中であれば入力することができる。これは、スペースがデータベースキーの一部になるタイプのデータベースには便利です。-quoted が有効でない場合、-remove は無視される。デフォルトは -noremove オプション

オプション	説明
-statistics -nostatistics	imsimta crdb によって簡単な統計が出力されるかどうかを制御する。これには、変換されたエントリの数(行)、検出された例外の数(通常、重複レコード)、さらに、長すぎて出力データベースに収まらないため変換されなかったエントリの数が含まれる。-nostatistics を指定すると、この情報は出力されない。デフォルトは -statistics
-strip_colons -nostrip_colons	imsimta crdb に、入力ファイルから読み取る各行の左側において一番右端にあるコロンを削除するよう指示する。これは、エイリアスファイルのエントリをエイリアスデータベースに変える場合に有用である。デフォルトは -nostrip_colons

例

以下に、「長い」レコードエントリを持つエイリアスデータベースを作成する場合の例を示します。この作成は一時データベースを使って2段階のプロセスで行われるため、たとえばデータベース生成中にデータベースがロックされてMTAにアクセスできないような場合に、操作にかかる時間を最小限に抑えることができます。

```
imsimta crdb -long_records aliases-tmp
imsimta renamedb aliases-tmp IMTA_ALIAS_DATABASE
```

imsimta crdb -dump

imsimta crdb -dump コマンドは、MTA データベースのエントリを ASCII のフラットファイルに書き込みます。特に、古いフォーマットのデータベースの内容を imsimta crdb コマンドを使って構築された新しいフォーマットのデータベースファイルに書き込む場合に、このコマンドを使用します。出力は、コメント行から始まります。このコメント行には、データベースに ASCII 形式の出力を返すために使用する imsimta crdb コマンドが表示されます。

注 このコマンドを実行する前に、必ず mailsrv (メールサーバユーザ) としてログインするようにしてください。

構文

```
imsimta crdb -dump 入力データベース仕様 [出力ファイル仕様]
```

パラメータ

このコマンドのパラメータは、以下のとおりです。

パラメータ	説明
入力データベース仕様	エントリが読み取られるデータベース。特に設定を変更しないかぎり、MTA は所定の名前が付いた、現在のフォーマットのデータベースを探す。このデータベースが見つからない場合、MTA はその名前の古いフォーマットのデータベースを探す。IMTA_ALIAS_DATABASE、IMTA_REVERSE_DATABASE、IMTA_GENERAL_DATABASE などの特殊なキーワードをサポートしている。こういった特殊なキーワードを使用して、対応する MTA テイラーファイルオプションが指定したデータベースをダンプするよう MTA に指示を与えることができる
出力ファイル仕様	データベースに保存されているエントリが書き込まれる ASCII ファイル。このファイルは、書き込み権限のあるディレクトリにある。出力ファイルを指定しなかった場合、出力は stdout に書き込まれる

例

以下に、エイリアスデータベースの内容をファイルにダンプし、そのファイルからエイリアスデータベースを作成し直す場合の例を示します。

```
imsimta crdb -dump IMTA_ALIAS_DATABASE alias.txt
imsimta crdb alias.txt alias-tmp
imsimta renamedb alias-tmp IMTA_ALIAS_DATABASE
```

imsimta dirsync

imsimta dirsync ユーティリティは、MTA ディレクトリキャッシュを再作成および更新します。

このユーティリティは、通常ジョブコントローラで実行されるため、手作業で実行する必要がありません。メッセージの配信に影響のあるディレクトリデータが変更されたら `imta dirsync` を実行するようにします。

`imsimta dirsync` を実行するには、`stored` ユーティリティを実行している必要があります。このため、管理者がサービスをすべて起動しないで `imsimta dirsync` を実行したい場合は、`imsimta dirsync` を実行する前に `stored` サービスを起動する必要があります。

注 `imsimta dirsync` を実行するには、`root` としてログインしなければなりません。

注 このコマンドは、MTA がダイレクト LDAP モードで設定されている場合は必要ありません。

構文

```
imsimta dirsync [-l ローカルホスト 1, ローカルホスト 2, ...] [-F] [-L]
[-i ldap_ フィルタ] [-t] [-s] [-v] [-V]
```

オプション

このコマンドのオプションは、以下のとおりです。

オプション	説明
<code>-F</code>	完全同期を行う。特に設定を変更しないかぎり、 <code>imsimta dirsync</code> コマンドは、ディレクトリキャッシュを増分ずつ同期する。これにより、最後に同期が行われてからディレクトリに追加または修正されたエントリだけが同期される。 <code>-F</code> オプションは、ディレクトリキャッシュが完全に再生成されるため、信頼性の高いディレクトリイメージを作成する。完全同期が行われた後、SMTP サービスが再起動する
<code>-i ldap_ フィルタ</code>	デフォルトフィルタの代わりに、指定されたフィルタを使用する。つまり、前の <code>dirsync</code> タイムスタンプ以降の <code>modifytimestamp</code> または <code>createtimestamp</code> を持つエントリである

オプション	説明
-t	imsimta dirsync をテストモードで実行する。ディレクトリを検索し、無効なエントリがあればその詳細を印刷する。キャッシュは一切変更されない。すべてのエントリの詳細を得るには、詳細モード (-t と -v オプションを実行) でもテストする
-s	ディレクトリサーバでの持続的検索を登録し、即時データベース更新を行う。これにより、増分 dirsync を実行する必要がなくなる
-v	詳細モードでこのコマンドを実行する。トレースファイルは、ログディレクトリに作成される
-V	エイリアスとリバースデータベースに追加されたエントリの数を表示するサマリー行を印刷する

例

ディレクトリキャッシュの完全同期を行うには、以下のコマンドを実行します。

```
imsimta dirsync -F
```

imsimta find

imsimta find ユーティリティは、指定バージョンの MTA ログファイルに対する正確なファイル名を検索します。MTA ログファイルの名前には - 固有 *id* が追加されるため、複数のバージョンのログファイルを作成することができます。UNIX では、ファイル名の最後 (ファイル拡張子の最後) に - 固有 *id* が追加され、Windows NT では、ファイル拡張子を除いたファイル名の最後に - 固有 *id* が追加されます。imsimta find ユーティリティは、これらの固有の ID を識別し、要求に応じたファイル名を探し出すことができます。

構文

```
imsimta find ファイル - パターン [-f= オフセット - 最初から]
[-l= オフセット - 最後から]
```

オプション

このコマンドのオプションは、以下のとおりです。

オプション	説明
-f= オフセット - 最初から	指定されたバージョン (0 から開始) のファイルを探す。たとえば、ファイルの最も古いバージョンのファイルを検索するには、-f=0 と指定する。デフォルトで、 <code>imsimta find</code> はファイルの最新バージョンを検索するようになっている
-l= オフセット - 最後から	指定されたファイルの最後のバージョンを探す。たとえば、最新のバージョンのファイルを検索するには、-l=0 と指定する。デフォルトで、 <code>imsimta find</code> はファイルの最新バージョンを検索するようになっている
ファイル - パターン	検索するログファイルのファイル名パターンを指定する

例

以下のコマンドは、最近作成された「tcp_local_slave.log- 固有 id」ファイルのファイル名を印刷します。

```
imsimta find server-root/msg-instance/imsimta/log/tcp_local_slave.log
```

以下のコマンドは、最も古い「tcp_bitnet_master.log- 固有 id」ファイルのファイル名を表示します。

```
imsimta find ¥
server-root/msg-instance/imsimta/log/tcp_bitnet_master.log -f=0
```

imsimta kill

`imsimta kill` ユーティリティは、指定されたプロセスを即座に、かつ無差別に中止します。このコマンドは UNIX の `kill -9` コマンドと同じものです。電子メールを送信中のプロセスでも中止されます。したがって、定期的にプロセスを中止する `imsimta shutdown` ユーティリティを使うほうが、一般的には望ましいと言えます。

構文

```
imsimta kill コンポーネント
```

注 強制終了するプロセスと同じプロセス ID を持っているか、または root でなければなりません。このユーティリティは Windows NT では使用できません。

「コンポーネント」は、強制終了する MTA コンポーネントです。有効な値は `job_controller` と `dispatcher` です。

imsimta process

このコマンドは現在の MTA プロセスを表示します。メッセージが現在処理されている場合、または別の MTA コンポーネントが使用中である場合は、別のプロセスが表示されることもあります。

構文

```
imsimta process
```

例

以下のコマンドは、現在の MTA プロセスを表示します。

```
# imsimta process
```

imsimta process

USER	PID	S	VSZ	RSS	STIME	TIME	COMMAND
mailsrv	15334	S	21368	9048	17:32:44	0:01	/export/ims/bin/msg/imta/bin/dispatcher
mailsrv	15337	S	21088	10968	17:32:45	0:01	/export/ims/bin/msg/imta/bin/tcp_smtp_server
mailsrv	15338	S	21080	11064	17:32:45	0:01	/export/ims/bin/msg/imta/bin/tcp_smtp_server
mailsrv	15349	S	21176	10224	17:33:02	0:02	/export/ims/bin/msg/imta/bin/job_controller

imsimta process_held

imsimta process_held コマンドは、保留キューチャンネルにあるメッセージを処理します。メッセージの配信を試みます。

ユーザの配信オプションが「保留」に設定されていると、メッセージは保留チャンネルのキューに入れられます。ユーザの配信オプションが変更され、imsimta proces_held コマンドが実行されるまで、メッセージは配信されません。

構文

```
imsimta process_held -uid=xxx -domain=yyy [-new_uid=zzz]
[-new_domain=aaa] [-verbose]
```

オプション

このコマンドのオプションは、以下のとおりです。

オプション	説明
-uid=xxx	保留メッセージのメールユーザ ID を指定する。uid が指定されていない場合は、ドメインに属するユーザにアドレス指定されたすべてのメッセージが処理される

オプション	説明
-domain=yyy	移動中のユーザが属するメールユーザのメールドメインを指定する。指定されていない場合は、MTA の標準ドメインに属するユーザにアドレス指定されたメッセージだけが処理される
-new_uid=zzz	移動にユーザ ID の名前変更が含まれる場合は、新しいユーザ ID を指定する
-new_domain=aaa	移動にドメインの名前の変更が含まれる場合は、新しいドメイン名を指定する
-verbose	ユーティリティに操作情報の表示を要求する

imsimta program

imsimta program コマンドを使うと、プログラムの配信オプションを操作できます。

このコマンドは、root または mailsrv として実行できます。mailsrv は iPlanet Messaging Server のデフォルトのユーザですが、iPlanet Messaging Server がインストールされている場合は、Messaging Server の指定したユーザ名になります。

既存のプログラム配信オプションに対して行った変更は、次に完全な dirsync が実行されたときに有効になります。

プログラムは、stdin から構文解析されないメッセージ全体を渡します。これには、最初の行に From 行 (コロンなし) が含まれ、その後にヘッダーとメッセージ本体が続きます。メッセージの一部である MIME 添付ファイルが含まれることもあります。

構文

```
imsimta program -a -m メソッド -p プログラム [-g 引数_リスト]
[-e 実行_権限]

imsimta program -d -m メソッド

imsimta program -c -m メソッド -p プログラム | -g 実行_権限 |
-e 実行_権限
```

オプション

このコマンドのオプションは、以下のとおりです。

オプション	説明
-a	メソッドをプログラム配信メソッドのセットに追加する。このオプションは、-d、-c、-l、または -u オプションといっしょには使用できない
-c	引数を既に入力されているプログラムに変更する
-m メソッド	管理者が付けたメソッドの名前。これが、ユーザに知らされるメソッドの名前になる。メソッド名に、スペース、タブ、または等号(=)を含めることはできない。メソッド名を付けなかったり、ローカルにすることもできない。メソッド名は U.S. ASCII に限定されている。このオプションは、-a、-d、-c、-u オプションとともに使用する必要がある
-p プログラム	あるメソッドに対する実行ファイルの実際の名前。問題なく追加するためには、実行ファイルがプログラムディレクトリ (<i>server-root/msg-instance/imta/programs</i>) になければならない。これは、他のディレクトリ内にある実行ファイルへのシンボリックなリンクである場合がある。このオプションは、-a オプションとともに使用する必要がある
-g 引数_リスト	プログラムの実行中に使用される引数のリスト。追加の際にこのオプションが指定されていない場合、引数は一切使用されない。各引数はスペースで区切り、引数全体は二重引用符で囲む必要がある。引数リストで使われている %s タグは、ユーザが実行するプログラムではユーザ名に置き換えられ、 inetmail で実行されるプログラムでは「ユーザ名+プログラムラベル」に置き換えられる。プログラムラベルは、そのプログラムを識別する固有の文字列。このオプションは、-a および -c オプションとともに使用できる
-e 実行_権限	「実行_権限」は、ユーザまたは postmaster のいずれか。ユーザを指定すると、プログラムはユーザとして実行される。特に設定を変更しないかぎり、すべてのプログラムの実行権限は postmaster に設定されている。「実行_権限」をユーザに設定したプログラムは、UNIX アカウントを持つユーザだけしかアクセスすることができない。このオプションは、-a および -c オプションとともに使用できる。このプログラムをポストマスターとして実行しているディレクトリは、ポストマスターのホームディレクトリ。user と指定した場合、ユーザのホームディレクトリは、プログラムをユーザとして実行している環境である
-d	サポートされているプログラム配信メソッドのリストからメソッドを削除する。このオプションを -a、-c、-l、-u オプションといっしょに使用することはできない

オプション	説明
-h	このコマンドのヘルプ
-l	すべてのメソッドを一覧表示する
-u	-m オプションで指定したメソッドを使用するすべてのユーザを一覧表示する

例

引数「-d ユーザ名」を使って procmail プログラムを実行し、かつユーザとして実行するようなメソッド procmail1 を追加するには、以下のように入力します。

```
imsimta program -a -m procmail1 -p procmail -g "-d %s" -e user
```

imsimta purge

imsimta purge コマンドは、古いバージョンの MTA ログファイルを削除します。imsimta purge は、MTA ログファイル名の末尾にある「固有 id」文字列からログファイルの古さを判断します。

構文

```
imsimta purge [ファイル - パターン] -day=d 値 -hour=h 値 -num=n 値
```

オプション

このコマンドのオプションは、以下のとおりです。

オプション	説明
ファイル - パターン	ファイル - パターンが指定されている場合、その「ファイル - パターン」パラメータは、パージする MTA ログファイルを決断するためのファイル名パターンを意味する。何も指定されていない場合のデフォルトのパターンは、 <code>msg-instance/log/imta/log</code>
-day= <i>d</i> 値	過去「 <i>d</i> 値」日間のログファイルを除いて、すべてパージする

オプション	説明
-hour= <i>h</i> 値	過去「 <i>h</i> 値」時間のログファイルを除いて、すべてページする
-num= <i>n</i> 値	最も新しい「 <i>n</i> 値」個のログファイルを除いて、すべてページする。デフォルトは 5

例

msg-*instance*/log/imta ディレクトリにある各タイプのログファイルに対し、最も新しい 5 つのバージョンを残してすべてページするには、以下のように入力します。

```
imsimta purge
```

imsimta qclean

imsimta qclean ユーティリティは、エンベロープの From: アドレス、Subject: 行、または内容に特定のサブ文字列が含まれているメッセージファイルを保持するか、または削除します。

構文

```
imsimta qclean [-content= サブ文字列] [-from= サブ文字列]
[-subject= サブ文字列] [-to= サブ文字列] [-domain_to= サブ文字列]
[-database] [-delete | -hold] [-directory_tree] [-ignore_zz]
[-match= キーワード] [-min_length=n] [-threads | -nothreads]
[-verbose | -noverbose] [チャンネル]
```

オプション

このコマンドのオプションは、以下のとおりです。

オプション	説明
-content= サブ文字列 -from= サブ文字列 -subject= サブ文字列 -to= サブ文字列 -domain_to= サブ文字列	<p>検索するサブ文字列を指定する。-content、-from、-subject、-to、および -domain_to は、任意に組み合わせて指定することができる。ただし、それぞれのオプションを1つずつしか使用できない。これらのオプションを組み合わせて使用するときは、-match オプションを使って、オプションを制限 (-match=AND) と解釈するか、または代替 (-match=OR) と解釈するかを指定することができる</p> <p>-domain_to オプションは、頻繁に発生するエンベロープ To: アドレスをスキャンする。-to オプションと同じだが、-domain_to はエンベロープ To: アドレスの <i>host.domain</i> 部分だけを検索する</p>
-database	キューキャッシュによって識別されるメッセージファイルだけを検索するように指定する
-delete	一致するメッセージファイルを削除する
-hold	一致するメッセージファイルを保持する
-directory_tree	チャンネルキューのディレクトリツリーに実際にあるメッセージファイルをすべて検索する
-ignore_zz	キューに入れられたメッセージファイルのうち、名前が「ZZ」で始まるファイルを無視する。このオプションを使用すると、キューに入っているメッセージのうち、配信試行に少なくとも1回失敗したメッセージファイルだけをスキャンできる
-match= キーワード	メッセージファイルを保持または削除する条件として、指定したサブ文字列がすべて含まれていなければならないか (-match=AND)、またはそのうちの1つだけが含まれていればよいのか (-match=OR) を指定する。デフォルトは -match=AND
-min_length= <i>n</i>	検索するサブ文字列の最小の長さを指定する。デフォルトの場合、各サブ文字列の長さは24バイト以上でなければならない。この制限を変更するには、-min_length オプションを使う
-threads= <i>n</i> -nothreads	同時に実行される複数のスレッドに作業を分割することにより、マルチプロセッサシステムにおける検索をより高速に行う。 <i>n</i> 個の検索スレッドを同時に実行するには、-threads= <i>n</i> を指定する。 <i>n</i> の値は、1から8までの整数とする。デフォルトは -nothreads

オプション	説明
<code>-verbose</code> <code>-noverbose</code>	操作情報を表示するように要求する (<code>-verbose</code>)。デフォルトは <code>-noverbose</code>
チャンネル	メッセージを検索する MTA チャンネルエリアを指定する。チャンネルの指定には * または ? のワイルドカード文字を使用できる

imsimta qm

`imsimta qm` ユーティリティは、チャンネルキューディレクトリとキューに含まれるメッセージを検査および操作します。`imsimta qm` には、`imsimta cache` や `imsimta counters` コマンドと重複する機能がいくつかあります。

たとえば、`imsimta cache -view` で返される情報のいくつかは、`imsimta qm directory` コマンドでも得られます。しかし、`imsimta qm` が完全に `imsimta cache` や `imsimta queue` の代わりになるわけではありません。

`imsimta qm` を実行するには、`root` または `mailsrv` でなければなりません。

`imsimta qm` は、インタラクティブまたは非インタラクティブモードで実行できます。インタラクティブモードで `imsimta qm` を実行するには、以下のように入力します。

```
imsimta qm
```

その後、インタラクティブモードで使用できるサブコマンドを入力することができます。インタラクティブモードを終了するには、`exit` または `quit` と入力します。

非インタラクティブモードで `imsimta qm` を実行するには、以下のように入力します。

```
imsimta qm サブコマンド [ オプション ]
```

インタラクティブモードで使用できるサブコマンドの中には、非インタラクティブモードで使用できないものがあります。また、その逆も同様です。使用できるサブコマンドの詳細については、95 ページの「サブコマンド」を参照してください。各サブコマンドには、それを使用できるモードが示されています。

サブコマンド

clean

`clean` サブコマンドは、エンベロープの **From:** アドレス、**Subject:** 行、または内容に特定のサブ文字列が含まれているメッセージファイルを、保持するか、または削除します。

これはインタラクティブモードおよび非インタラクティブモードの両方で使用できます。

```
clean [-content= サブ文字列] [-from= サブ文字列] [-subject= サブ文字列]
      [-to= サブ文字列] [-domain_to= サブ文字列]
      [-database | -directory_tree] [-delete | -hold] [-ignore_zz]
      [-match= キーワード] [-min_length=n] [-threads=n | -nothreads]
      [-verbose | -noverbose] [チャンネル]
```

このサブコマンドのオプションは、以下のとおりです。

オプション	説明
-content= サブ文字列 -from= サブ文字列 -subject= サブ文字列 -to= サブ文字列 -domain_to= サブ文字列	検索するサブ文字列を指定する。各オプションを任意に組み合わせて使用することができる。ただし、それぞれのオプションを1つずつしか使用できない。これらのオプションを組み合わせて使用するときは、 <code>-match</code> オプションを使って、オプションを制限 (<code>-match=AND</code>) と解釈するか、または代替 (<code>-match=OR</code>) と解釈するかを指定できる -domain_to オプションは、頻繁に発生するエンベロープ To: アドレスをスキャンする。-to オプションと同じだが、-domain_to はエンベロープ To: アドレスの <i>host.domain</i> 部分だけを検索する
-database -directory_tree	検索するメッセージファイルが、キューキャッシュにエントリを持つものだけなのか (-database)、それともチャンネルキューのディレクトリツリーに実際にあるすべてのメッセージファイルなのか (-directory_tree) を指定する。-database または -directory_tree のどちらも指定しなかった場合は、 <code>view</code> サブコマンドで選択した表示が使用される。 <code>view</code> サブコマンドが指定されていない場合は、-directory_tree が代わりに使用される
-delete -hold	一致したメッセージファイルを保持するの (-hold)、それとも削除するの (-delete) を指定する。デフォルトは -hold オプション

オプション	説明
-ignore_zz	キューに入れられたメッセージファイルのうち、名前が「ZZ」で始まるファイルを無視する。このオプションを使用すると、キューに入っているメッセージのうち、配信試行に少なくとも 1 回失敗したメッセージファイルだけをスキャンできる
-match= キーワード	メッセージファイルを保持または削除する条件として、指定したサブ文字列がすべて含まれていなければならないのか(-match=AND)、またはそのうちの 1 つだけが含まれていけばよいのか(-match=OR)を指定する。サブ文字列は、-content、-env_from、および -subject のオプションによって指定される。デフォルトは -match=AND
-min_length= <i>n</i>	検索する各サブ文字列の長さ制限を変更する。特に設定を変更しないかぎり、制限は 24 バイト (-min_length=24)
-threads= <i>n</i> -nothreads	同時に実行される複数のスレッドに作業を分割することにより、マルチプロセッサシステムにおける検索をより高速に行う。 <i>n</i> 個の検索スレッドを同時に実行するには、-threads= <i>n</i> を指定する。 <i>n</i> の値は、1 から 8 までの整数とする。デフォルトは -nothreads
-verbose -noverbose	操作情報を表示するように要求する (-verbose)。デフォルトは -noverbose
チャンネル	メッセージを検索する MTA チャンネルエリアを指定する。チャンネルの指定には * または ? のワイルドカード文字を使用できる

counters clear

counters clear サブコマンドは、以下の操作を実行します。

1. セグメントがまだない場合に、チャンネルメッセージと関連カウンタの共有メモリセグメントを作成します。
2. すべてのカウンタ値をゼロに設定します。
3. -channels が指定されたときに、キューキャッシュデータベースを使って、保存されているメッセージの数、受信者、ボリュームを設定します。

これはインタラクティブモードおよび非インタラクティブモードの両方で使用できます。

```
counters clear [-channels] [-associations]
```

このサブコマンドのオプションは、以下のとおりです。

オプション	説明
-channels	メッセージカウンタをクリアする
-associations	関連カウンタをクリアする

いずれのオプションも指定しなかった場合は、両方のオプションが使用されます。
-associations を指定して -channels を指定しなかった場合、上記の手順 3 は実行されません。

counters create

counters create サブコマンドは、以下の操作を実行します。

1. セグメントがまだない場合に、チャンネルメッセージと関連カウンタの共有メモリセグメントを作成します。
2. キューキャッシュデータベースを使って、保存されているメッセージの数、受信者、ボリュームを設定します。

これはインタラクティブモードおよび非インタラクティブモードの両方で使用できます。

```
counters create [-max_channels=n]
```

このサブコマンドのオプションは、以下のとおりです。

オプション	説明
-max_channels= <i>n</i>	メモリセグメント内に許されるチャンネルの数を MTA に伝える。このオプションを設定しなかった場合、MTA は imta.cnf ファイルを検索して値を判断する

counters delete

counters delete サブコマンドは、チャンネルメッセージと関連カウンタ用の共有メモリセグメントを削除します。ただし、アクティブな MTA サーバプロセスとチャンネルによってそのメモリセグメントは再作成されるでしょう。

これはインタラクティブモードおよび非インタラクティブモードの両方で使用できません。

```
counters delete
```

counters show

`counters show` サブコマンドを使用すると、チャンネルメッセージカウンタを表示できます。オプションの「チャンネル名」パラメータを設定しなかった場合は、*(ワイルドカード)が代わりに使用され、すべてのチャンネルのメッセージカウンタが表示されます。チャンネル名パラメータには、*および?のワイルドカード文字を含めることができます。

`counters show` サブコマンドは、以下の操作を実行します。

1. セグメントがまだない場合に、チャンネルメッセージと関連カウンタ用の共有メモリセグメントを作成します。
2. キューキャッシュデータベースを使って、保存されているメッセージの数、受信者、ボリュームを設定します。
3. 指定されたチャンネルのメッセージカウンタを表示します。

これはインタラクティブモードおよび非インタラクティブモードの両方で使用できません。

```
counters show [-headers] [-noheaders] [-output= ファイル - 仕様] ¥  
[チャンネル名]
```

このサブコマンドのオプションは、以下のとおりです。

オプション	説明
-headers または -noheaders	ヘッダーを表示するかどうかを指定する。デフォルトは -headers オプション
-output= ファイル_仕 様	ファイルに出力を書き込む。出力ファイルと同じ名前の既存 のファイルは、上書きされる

counters today

1 日のこの時点までに処理されたメッセージの数を表示します。

これはインタラクティブモードおよび非インタラクティブモードの両方で使用できます。

```
counters today
```

date

RFC 822、1123 のフォーマットで現在の日付と時刻を表示します。

これはインタラクティブモードおよび非インタラクティブモードの両方で使用できます。

```
date
```

delete

最近生成されたメッセージキューリストの中で、指定されたメッセージを削除します。

```
delete [-channel=名前 [-all]] [-confirm | -noconfirm]
        [-log | -nolog] [id...]
```

id パラメータは、削除するメッセージです。

`-channel`、`-all`、`-confirm`、`-log` オプションの使い方の詳細については、109 ページの「`imsimta qm` オプション」を参照してください。

これはインタラクティブモードでしか使用できません。

directory

キューに入っているメッセージファイルのリストを生成します。デフォルトでは、`msg-instance/imta/queue` ディレクトリツリーが、キューに入っているメッセージ情報のソースとして使用されます。このデフォルトは、`view` サブコマンドで変更することができます。`-database` および `-directory_tree` オプションを使ってデフォルトを変更することも可能です。

これはインタラクティブモードおよび非インタラクティブモードの両方で使用できません。

```
directory [-held | -noheld] [-database] [-directory_tree]
[-envelope] [-owner= ユーザ名] [-from= アドレス] [-to= アドレス]
[-match= ブール] [-file_info | -nofile_info] [-total | -nototal]
[チャンネル名]
```

このサブコマンドのオプションは、以下のとおりです。

オプション	説明
-database	メッセージ情報をジョブコントローラから入手する
-directory_tree	メッセージ情報のソースとして、ディスク上のディレクトリツリーを選択する
-envelope	エンベロープアドレス情報も含むリストを生成する
-total -nototal	選択したチャンネルすべての合計サイズと合計数を生成する
-owner= ユーザ名	特定のユーザが所有するメッセージだけを一覧する。ローカルユーザによってキューに入れられたメッセージは、そのユーザが所有する。その他のほとんどのメッセージは、 <code>mailsrv</code> が所有する。-owner オプションの使用は、-database を包含する
-from= アドレス、 -to= アドレス、 -match= ブール	指定したアドレスに一致するエンベロープ From: または To: アドレスを含むメッセージだけを一覧表示する。-from および -to の両方を指定すると、そのエンベロープの From: または To: アドレスのいずれかが指定したアドレスと一致する場合はメッセージが一覧表示される。これは、-match=or オプションに対応している。-match=and を指定すると、指定した From: および To: アドレスの両方と一致するメッセージだけが一覧表示される。-from または -to の使用は、-envelope を包含する
-held -noheld	デフォルトでは、アクティブなメッセージが一覧される。-held を指定すると、「保持」マークの付いたメッセージが一覧される。-held は、-directory_tree を包含する
-file_info -nofile_info	ディレクトリツリーをスキャンしたときに、各メッセージファイルのサイズがブロック単位 (通常 1024 バイト) で判断される。この動作を省略して、リスト生成の速度を上げるには、-nofile_info を指定するキューキャッシュデータベースが使用されると、サイズ情報がデータベースに保存されるため、-nofile_info オプションが無視される

オプション	説明
チャンネル名	リストを1つまたは複数のチャンネルに制限する。チャンネル名パラメータを設定しなかった場合は、すべてのチャンネルに対してリストが作成される。チャンネル名パラメータには、*および?のワイルドカード文字を含めることができる

exit

`imsimta qm` ユーティリティを終了します。quit サブコマンドと同じです。

これはインタラクティブモードおよび非インタラクティブモードの両方で使用できます。

```
exit
```

held

「保持」マークが付けられているメッセージファイルのリストを生成します。このリストは、常に `msg-instance/imta/queue/` ディレクトリツリーから生成されます。

これはインタラクティブモードおよび非インタラクティブモードの両方で使用できます。

```
held [-envelope] [-file_info | -nofile_info] [-total | -nototal]
      [-from= アドレス] [-to= アドレス] [-match= ブール] [チャンネル名]
```

このサブコマンドのオプションは、以下のとおりです。

オプション	説明
<code>-envelope</code>	エンベロープアドレス情報も含むリストを生成する
<code>-total -nototal</code>	選択したチャンネルすべての合計サイズと合計数を生成する

オプション	説明
-from= アドレス、 -to= アドレス、 -match= ブール	指定したアドレスに一致したエンベロープ From: または To: アドレスを含むメッセージだけを一覧表示する。-from および -to の両方を指定すると、そのエンベロープの From: または To: アドレスのいずれかが指定したアドレスと一致する場合はメッセージが一覧表示される。これは、-match=or オプションに対応している。-match=and を指定すると、指定した From: および To: アドレスの両方と一致するメッセージだけが一覧表示される。-from または -to の使用は、-envelope を包含する
-file_info -no_file_info	ディレクトリツリーをスキャンするときに、各メッセージファイルのサイズがブロック単位 (通常 1024 バイト) で判断される。この動作を省略して、リスト生成の速度を上げるには、-no_file_info を指定する
チャンネル名	リストを 1 つまたは複数のチャンネルに制限する。チャンネル名パラメータを設定しなかった場合は、すべてのチャンネルに対してリストが作成される。チャンネル名パラメータには、* および ? のワイルドカード文字を含めることができる

履歴

最近生成されたメッセージキューリストの中で、指定されたメッセージに関する配信履歴情報を表示します。

これはインタラクティブモードでしか使用できません。

```
history [-channel=名前 [-all] ] [-confirm | -noconfirm] [id...]
```

id パラメータを使って、履歴を表示するメッセージを指定します。

-channel、-all、-confirm オプションの使い方の詳細については、109 ページの「imsimta qm オプション」を参照してください。

hold

最近生成されたメッセージキューリストの中で、指定されたメッセージに「保持」マークを付けます。

これはインタラクティブモードでしか使用できません。

```
hold [-channel=名前 [-all]] [-confirm | -noconfirm]
[-log | -nolog] [id...]
```

id パラメータを使って、「保持」マークを付けるメッセージを指定します。

-channel、-all、-confirm、-log オプションの使い方の詳細については、109 ページの「*imsimta qm* オプション」を参照してください。

quit

imsimta qm ユーティリティを終了します。exit サブコマンドと同じ機能です。

これはインタラクティブモードおよび非インタラクティブモードの両方で使用できます。

```
quit
```

read

最近生成されたメッセージキューリストの中から指定されたメッセージを表示します。

これはインタラクティブモードでしか使用できません。

```
read [-content | -nocontent ] [-channel=名前 [-all]]
    [-confirm | -noconfirm] [id...]
```

このサブコマンドのオプションは、以下のとおりです。

オプション	説明
-content -nocontent	エンベロープおよびヘッダー情報とともにメッセージの内容を表示するか (-content)、または表示しない (-nocontent) ようにする。デフォルトは -nocontent
<i>id</i>	表示するメッセージを指定する

-channel、-all、-confirm オプションの使い方の詳細については、109 ページの「*imsimta qm* オプション」を参照してください。

release

指定したメッセージファイルに「保持」マークが付いている場合は、「保持」マークを取り除いて名前を変更します。ジョブコントローラが起動している場合は、他のどのメッセージより先に、このメッセージをすぐに処理する必要があることが通知されます。

これはインタラクティブモードでしか使用できません。

```
release [-channel=名前 [-all]] [-confirm | -noconfirm]
        [-log | -nolog] [id...]
```

id パラメータを使って、.HELD 状態から解放するメッセージを指定します。

-channel、-all、-confirm、-log オプションの使い方については、109 ページの「imsimta qm オプション」を参照してください。

return

最近生成されたメッセージキューリストの中で、指定されたメッセージを未配信として送り返します。

これはインタラクティブモードでしか使用できません。

```
return [-channel=名前 [-all]] [-confirm | -noconfirm]
        [-log | -nolog] [id...]
```

id パラメータを使って、送り返すメッセージを指定します。

-channel、-all、-confirm、-log オプションの使い方については、109 ページの「imsimta qm オプション」を参照してください。

run

ファイルで指定されたコマンドを一行ごとに処理します。

これはインタラクティブモードおよび非インタラクティブモードの両方で使用できます。

```
run [-ignore | -noignore] [-log | -nolog] ファイル - 仕様
```

「ファイル - 仕様」が開き、その中の各行が読み取られて実行されます。

このサブコマンドのオプションは、以下のとおりです。

オプション	説明
-ignore -noignore	サブコマンドの1つにエラーが起これると、-ignore を指定していないかぎり、コマンドの実行は中止される

オプション	説明
-log -nolog	特に設定を変更しないかぎり、各コマンドは、実行される (-log オプション) 前に、端末にエコーする。-nolog を指定すると、このエコーを抑制できる

start

指定したチャンネル用にキューに入れられたメッセージの処理を再開します。ジョブコントローラは、処理するために「OK」というマークをチャンネルに付けるだけでなく、チャンネル用のジョブの処理も開始します。このコマンドは、ジョブコントローラが起動しているかどうかに関わらず有効です。

```
start チャンネル
```

チャンネルパラメータは、再起動するチャンネルを指定します。

stop

指定したチャンネル用にキューに入れられたメッセージの処理を停止します。このコマンドにより、ジョブコントローラを停止する必要がなくなり、設定を再コンパイルする必要がなくなります。チャンネルは、そのチャンネルに start コマンドが発行されるまで、メッセージを処理しません。ジョブコントローラ、Messaging Server、およびホストコンピュータ自体が再起動している間、この状態が持続します。このコマンドは、ジョブコントローラが起動しているかどうかに関わらず有効です。

```
stop チャンネル
```

チャンネルパラメータは、停止するチャンネルを指定します。

summarize

summarize サブコマンドは、メッセージファイルのサマリーリストを表示します。

```
summarize [-database | -directory_tree] [-heading | -noheading]
          [-held | -noheld] [-trailing | -notrailing]
```

このサブコマンドのオプションは、以下のとおりです。

オプション	説明
-database -directory_tree	提示される情報を、ジョブコントローラから入手するのか (-database)、またはチャネルキューを含む実際のディレクトリツリーを見て入手するのか (-directory_tree) を指定する。-database または -directory_tree のどちらも指定しなかった場合は、view サブコマンドで選択された「表示」が使用される。view サブコマンドが指定されていない場合は、-directory_tree が代わりに使用される
-heading -noheading	サマリーリストの最初に出力の各行を説明するヘッダー行を表示するかどうかを指定するデフォルトは -heading オプション
-held -noheld	出力に .HELD メッセージの数を含めるかどうかを指定する。デフォルトは -noheld オプション
-trailing -notrailing	サマリーの最後に合計を含む最終行を表示するかどうかを指定する。デフォルトは -trailing

top

top サブコマンドは、チャネルキューのメッセージファイルの中で、最も頻繁に発生しているエンベロープ From:、Subject:、または内容フィールドを表示します。top を clean サブコマンドとともに使用すると、不特定多数宛てのメールを見つけ、それを保持または削除することができます。

```
top [-content [= 範囲]] [-from [= 範囲]] [-subject [= 範囲]]
    [-to [= 範囲]] [-database | -directory_tree] [-domain_to [= 範囲]]
    [-ignore_zz] [-min_count = n] [-threads = n | -nothreads] [-top = n]
    [-verbose | -noverbose] [チャネル]
```

このサブコマンドのオプションは、以下のとおりです。

オプション	説明
-content [= 範囲] -from [= 範囲] -subject [= 範囲] -to [= 範囲] -domain_to [= 範囲]	<p>-content、-from、-subject、および -to オプションは、頻繁に発生するフィールドのどれを表示するかを指定するのに使用する。デフォルトでは、Subject: フィールドだけが表示される (-subject)。頻繁に発生するエンベロープ From: フィールドを表示するには -from、頻繁に発生するエンベロープ To: フィールドを表示するには -to、頻繁に発生するメッセージ内容を表示するには -content を使用する。頻繁に発生するエンベロープ To: アドレスを表示するには、-domain_to オプションを使用する。-to オプションと同じだが、-domain_to はエンベロープ To: アドレスの <i>host.domain</i> 部分だけを検索する</p> <p>-content、-from、-to、-domain_to、および -subject は、任意に組み合わせて指定することができる。ただし、それぞれのオプションを1つずつしか使用できない。-content、-from、-to、-domain_to、および -subject オプションは、オプションのパラメータ START=n および LENGTH=n を使用できる。これらのパラメータは、考慮されるフィールドの開始点とバイト数を示す。デフォルトは、-content=(START=1,LENGTH=256)、-from=(START=1,LENGTH=2147483647)、-to=(START=1,LENGTH=2147483647)、-subject=(START=1,LENGTH=2147483647)、および -domain_to=(START=1,LENGTH=214783647)。これらのパラメータは、たとえば Subject: 行の開始にランダムなテキストを使用するスパムメッセージを見つけるような場合に使うと便利である</p>
-database -directory_tree	<p>スキャンされるメッセージファイルが、キューキャッシュデータベースにエントリを持つものだけなのか (-database)、またはチャネルキューのディレクトリツリーに実際にあるすべてのメッセージファイルなのか (-directory_tree) を指定する。-database または -directory_tree のどちらも指定しなかった場合は、view サブコマンドで選択された「表示」が使用される。view サブコマンドが指定されていない場合は、-directory_tree が代わりに使用される</p>
-ignore_zz	<p>キューに入れられたメッセージファイルのうち、名前が「ZZ」で始まるファイルを無視する。このオプションを使用すると、キューに入っているメッセージのうち、配信試行に少なくとも1回失敗したメッセージファイルだけをスキャンできる</p>

オプション	説明
<code>-min_count=<i>n</i></code>	文字列を表示するための基準となる最低発生回数を変更する デフォルトは <code>-min_count=2</code>
<code>-threads=<i>n</i></code> <code>-nothreads</code>	同時に実行される複数のスレッドに作業を分割することにより、マルチプロセッサシステムにおける検索の速度を上げる。 <i>n</i> 個の検索スレッドを同時に実行するには、 <code>-threads=<i>n</i></code> を指定する。 <i>n</i> の値は、1 から 8 までの整数とする。デフォルトは <code>-nothreads</code>
<code>-top=<i>n</i></code>	表示されているフィールドで、最も頻繁に発生するフィールドの量を変更する。デフォルトは <code>-top=20</code>
<code>-verbose</code> <code>-noverbose</code>	操作情報を表示するように要求する (<code>-verbose</code>)。デフォルトは <code>-noverbose</code>
チャンネル	文字列の頻度をスキャンする MTA チャンネルエリアを指定する。チャンネルの指定には * または ? のワイルドカード文字を使用できる

view

後続のディレクトリコマンドに対し、キューに入っているメッセージ情報のソースを指定します。

これはインタラクティブモードでしか使用できません。

```
view -database | -directory_tree
```

デフォルトでは、`msg-instance/imta/queue/` ディレクトリツリーをスキャンして、キューに入っているメッセージのリストが生成されます。これは、`-directory_tree` オプションに対応しています。`-database` オプションを発行して、MTA キューキャッシュデータベースからリストを生成することもできます。

`view` サブコマンドでの設定は、別の `view` コマンドが指定されるか、またはユーティリティが存在しないかぎり、デフォルトとして残ります。このデフォルトは、ディレクトリコマンドの `-database` または `-directory_tree` オプションを使って変更することができます。

保持されているメッセージファイルのリストを作成する際には、常にディレクトリツリーが使用されます。

imsimta qm オプション

delete、history、hold、read、release、return サブコマンドでは、以下のオプションとパラメータを使用できます。

オプション	説明
-channel= 名前	指定されたチャンネルで動作する
-all	-all オプションを使うと、以前リストにされたすべてのメッセージを操作することができる。-channel オプションとともに使用すると、指定されたチャンネルに対して以前リストにされたメッセージだけが操作の対象となる。-all オプションは、 <i>id</i> パラメータとはいっしょに使用できないことがある。ただし、-all または少なくとも 1 つの <i>id</i> パラメータを指定しなければならない
-confirm、 -noconfirm	<i>id</i> パラメータを使って明示的にメッセージが選択されていないときに、操作を確認するよう指示するメッセージが表示される。これは、間違っただけが操作の対象となる。delete -all サブコマンドが実行されるのを防ぐためである。この指示メッセージが出ないようにするには、-noconfirm オプションを使用する。同様に、-confirm も確認メッセージを表示する
-log、-nolog	選択した各メッセージに関する操作が報告されるかどうかを指定する
<i>id</i>	directory または held サブコマンドで生成された最近のリストに示されたメッセージの ID 番号。メッセージの ID 番号は、リストの一番左の列に表示されている整数値。また、 <i>id</i> は、範囲やカンマ区切りのリストの場合もある

これらのオプションによって、コマンドを適用するメッセージが識別されるようになります。オプションが何も指定されていないときは、少なくとも 1 つの *id* パラメータを設定する必要があります。

たとえば、以下の表に示すように、最初のメッセージの ID 番号は 1 で、2 番めのメッセージの ID 番号は 2 です。

```

qm.maint> directory tcp_local

Channel:tcp_local                Size Queued since
-----
1 XS01IVX1T0QZ18984YIW.00      24 16-APR-1998 00:30:30.07
2 YH01IW2MZLN0RE984VUK.00      24 20-APR-1998 00:30:40.31

```

したがって、上の2つのメッセージは、「1,2」または「1-2」で選択することができます。

例

非インタラクティブモード

以下に、キューに入っているメッセージのリストを生成する場合の例を示します。

```
imsimta qm directory
```

```
Wed, 24 Feb 1999 14:20:29 -0800 (PST)
```

```
Data gathered from the queue directory tree
```

```
Channel:sims-ms
```

```
Size Queued since
```

```
1 ZZ0F7000I03CJHZD.00
```

```
1 24-Feb-1999 11:52:29
```

```
2 ZZ0F7000I03CILY6.00
```

```
1 24-Feb-1999 11:51:57
```

```
Total size:
```

```
2
```

```
Grand total size:
```

```
2
```

インタラクティブモード

以下のインタラクティブセッションでは、`directory` サブコマンドを使って、キューに入っているメッセージのリストを得ています。その後、`delete` サブコマンドを使って、最初に表示されたメッセージを削除しています。最後に、別の `directory` サブコマンドを指定して、削除したメッセージが本当になくなっていることを示しています。

```

imsimta qm

qm.maint> directory

Thu, 25 Feb 1999 11:37:00 -0800 (PST)
Data gathered from the queue directory tree

Channel:sims-ms                               Size Queued since
-----
1 ZZ0F7000I03CJHZD.00                         1 24-Feb-1999 11:52:29
2 ZZ0F7000I03CILY6.00                         1 24-Feb-1999 11:51:57
-----
Total size:                                     2

Grand total size:                             2

qm.maint> delete 1
%QM-I-DELETED, deleted the message file
msg-tango/imta/queue/sims-ms/013/ZZ0F7000I03CJHZD.00

qm.maint> directory
Thu, 25 Feb 1999 11:37:09 -0800 (PST)
Data gathered from the queue directory tree

Channel:sims-ms                               Size Queued since
-----
1 ZZ0F7000I03CILY6.00                         1 24-Feb-1999 11:51:57
-----
Total size:                                     1

Grand total size:                             1

```

imsimta qtop

imsimta qtop サブコマンドは、チャンネルキューのメッセージファイルの中で、最も頻繁に発生しているエンベロープ From:、To:、Subject:、または内容フィールドを表示します。

構文

```
imsimta qtop [-content [= 範囲]] [-from [= 範囲]] [-subject [= 範囲]]
[-to [= 範囲]] [-domain_to [= 範囲]] [-database | -directory_tree]
[-ignore_zz] [-min_count=n] [-threads=n | -nothreads] [-top=n]
[-verbose | -noverbose] [チャンネル]
```

オプション

このコマンドのオプションは、以下のとおりです。

オプション	説明
-content [= 範囲]	頻繁に発生するどのフィールドを表示するかを指定する。デフォルトでは、Subject: フィールドだけが表示される (-subject)。頻繁に発生するエンベロープ From: フィールドを表示するには -from、頻繁に発生するエンベロープ To: フィールドを表示するには -to、頻繁に発生するメッセージ内容を表示するには -content を指定する。頻繁に発生するエンベロープ To: フィールドを表示するには、-domain_to オプションを指定する。-to オプションと同じだが、-domain_to はエンベロープ To: アドレスの <i>host.domain</i> 部分だけを検索する
-from [= 範囲]	
-subject [= 範囲]	
-to [= 範囲]	
-domain_to [= 範囲]	
	これらのオプションは、任意に組み合わせて指定できる。ただし、それぞれのオプションを1つずつしか使用できない。これらのオプションには、START= <i>n</i> および LENGTH= <i>n</i> の引数を使用できる。これらの引数は、考慮されるフィールドの開始オフセットとバイト数を示す。デフォルトは、 -content= (START=1, LENGTH=256)、 -from= (START=1, LENGTH=2147483647)、 -subject= (START=1, LENGTH=2147483647)、および -domain_to= (START=1, LENGTH=2147483647)
-database	キューキャッシュデータベースが識別できるメッセージファイルだけを検索するように指定する
-directory_tree	実際にチャンネルキューのディレクトリツリーにあるメッセージファイルをすべて検索する

オプション	説明
<code>-ignore_zz</code>	キューに入れられたメッセージファイルのうち、名前が「ZZ」で始まるファイルを無視する。このオプションを使用すると、キューに入っているメッセージのうち、配信試行に少なくとも1回失敗したメッセージファイルだけをスキャンできる。たとえば、以下のコマンドは、MTAのどのドメインにメッセージ配信上の問題があるかを示す <code>imsimta qtop -ignore_zz -domain_to</code>
<code>-min_count=n</code>	文字列を表示するための基準となる最低発生回数を変更する デフォルトは <code>-min_count=2</code>
<code>-threads=n</code> <code>-nothreads</code>	同時に実行される複数のスレッドに作業を分割することにより、マルチプロセッサシステムにおける検索の速度を上げる。 <code>n</code> 個の検索スレッドを同時に実行するには、 <code>-threads=n</code> を指定する。 <code>n</code> の値は、1から8までの整数とする。デフォルトは <code>-nothreads</code>
<code>-top=n</code>	表示されているフィールドで、最も頻繁に発生するフィールドの量を変更する。デフォルトは <code>-top=20</code>
<code>-verbose</code> <code>-noverbose</code>	操作情報を表示するように要求する (<code>-verbose</code>)。デフォルトは <code>-noverbose</code>
チャンネル	文字列の頻度をスキャンするチャンネルエリアを指定する。チャンネルの指定には * および ? のワイルドカード文字を使用できる

imsimta recover-crash

`imsimta recover-crash` コーティリティは、明らかに破損しているデータベースを削除し、バックアップがある場合はバックアップからリストアを行います。バックアップがある場合は、増分 `dirsync` が実行されます。バックアップがない場合は、管理者が完全な `dirsync` を実行するようにします。

注 このコマンドはダイレクト LDAP モードでは実行しないでください。

構文

```
imsimta recover-crash [-i]
```

オプション

このコマンドのオプションは、以下のとおりです。

オプション	説明
-i	増分 <code>dirsync</code> をフォアグラウンドで実行する。デフォルトでは、バックアップのある場合、 <code>imsimta recover-crash</code> ユーティリティは増分 <code>dirsync</code> をバックグラウンドで実行する。バックアップがない場合は、完全な <code>dirsync</code> の実行が必要。このオプションでは、その時点で完全な <code>dirsync</code> の実行が必要かどうか尋ねられる。 <code>yes (y)</code> と答えると、完全な <code>dirsync</code> が実行される。デフォルトで、問題を修正するために、管理者に完全な <code>dirsync</code> の実行を促すメッセージが表示される

imsimta refresh

`imsimta refresh` ユーティリティは、以下の機能を実行します。

- MTA 設定ファイルの再コンパイル
- 実行中の MTA ジョブコントローラまたは MTA サービスディスパッチャジョブの停止
- ジョブコントローラおよび MTA サービスディスパッチャの再起動

基本的に、`imsimta refresh` は、`imsimta cnbuild` と `imsimta restart` の機能を組み合わせたものです。

注 `imsimta refresh` を実行するには、`root` としてログインしなければなりません。

構文

```
imsimta refresh [job_controller | dispatcher]
```

オプション

このコマンドのオプションは、以下のとおりです。

オプション	説明
job_controller	ジョブコントローラを再起動する
dispatcher	MTA サービスディスパッチャを再起動する

コンポーネント名を何も指定しなかった場合は、アクティブなコンポーネントがすべて再起動します。

imsimta renamedb

`imsimta renamedb` コマンドは、MTA データベースの名前を変更するためのものです。MTA はオプションで、いくつかの「ライブ」データベース（つまり、データベースの存在が MTA によるデータベースの使用をトリガする）を参照するため、MTA の名前を変更しているときにはデータベースを参照しないようにすること、そして、データベースにアクセスできない時間を最小限にすることが大切です。`imsimta crddb` コマンドは、データベースをロックすることによって、名前変更中のデータベースにアクセスできないようにします。

したがって、以下に示すように 2 段階に分けて MTA データベースを作成または更新することをお勧めします。

1. 一時データベースを作成または更新します。
2. `imsimta renamedb` コマンドを使って、一時データベースの名前を「ライブ」名に変更します。

`imsimta renamedb` コマンドは、古いデータベースファイルを削除し、新しいデータベースファイルの名前を変更するものです。このコマンドは、名前変更中にデータベースをロックすることにより、名前の変更過程でデータベースがアクセスされることを防ぎます。そのため、データベース名を変更しているときにデータベースへのアクセスは発生せず、しかも非アクセス状態である時間を最小限に抑えることができます。名前の変更は、通常、データベースの生成よりも短い時間で行われます。

構文

```
imsimta renamedb 旧 - データベース - 仕様 新規 - データベース - 仕様
```

パラメータ

このコマンドのパラメータは、以下のとおりです。

パラメータ	説明
旧 - データベース - 仕様	名前を変更する元のデータベース名
新 - データベース - 仕様	データベースの新しい名前。これは、実際のパス名か、または MTA テイラーファイル内にリストされている (実際のパス名をポイントしている) IMTA_ALIAS_DATABASE、IMTA_REVERSE_DATABASE、IMTA_GENERAL_DATABASE、IMTA_DOMAIN_DATABASE などの特殊な名前のいずれかになる

例

以下に、tmpdb が実際の MTA エイリアスデータベース (通常 msg-instance/imta/db/aliasesdb) となるように名前を変更するコマンド例を示します。

```
imsimta renamedb tmpdb IMTA_ALIAS_DATABASE
```

imsimta restart

imsimta restart コマンドは、ジョブコントローラとサービスディスパッチャを終了するためのものです。このコマンドで、MTA のマスターおよびスレーブのプログラムすべてが再起動されます。

分離された MTA プロセスは、MTA 設定が変更されるたびに再起動する必要があります。つまり、これらのプロセスは、設定から情報を一度だけ読み込み、再起動することにより、設定に対する変更を認識できるようになります。imta.cnf ファイルなどの一般的な MTA 設定ファイルの他に、コンポーネント (MTA サービスディスパッチャなど) の中には、コンポーネント特有の設定ファイル (たとえば dispatcher.cnf など) を備えているものもあります。これらのファイルが変更された場合は、コンポーネントを再起動する必要があります。

注 このユーティリティを使用するには、ルートとしてログインしなければなりません。

構文

```
imsimta restart [job_controller|dispatcher]
```

MTA サービスディスパッチャを再起動すると、それが取り扱うサービスコンポーネントがすべて効果的に再起動されます。コンポーネント名を指定しなかった場合は、アクティブなコンポーネントがすべて再起動します。

例

MTA ジョブコントローラとチャネルマスタープログラムを再起動するには、以下のコマンドを入力します。

```
imsimta restart job_controller
```

imsimta return

`imsimta return` コマンドは、メッセージの発信者にメッセージを送り返します。送り返されるメッセージは、2つの部分からなる1つのマルチパートメッセージです。最初の部分は、メッセージが送り返された理由を説明するもので、その理由を説明したテキストは `msg-instance/imta/config/locale/C/LC_MESSAGES` ディレクトリ内の `return_bounce.txt` ファイルに入っています。送り返されたメッセージの後の部分には、元のメッセージが含まれています。

構文

```
imsimta return メッセージ - ファイル
```

「メッセージ - ファイル」は、送り返されるメッセージファイルの名前です。名前には、ワイルドカードを含めることができますが、その場合は引用符で囲む必要があります。

例

以下に、指定されたメッセージを発信者に送り返すためのコマンド例を示します。

```
imsimta return /imta/queue/1/ZZ0FRW00A03G2EUS.00
```

imsimta run

imsimta run コマンドは、チャンネルパラメータによって指定されたチャンネル内のメッセージを処理します。処理中の出力は端末に表示されるため、ユーティリティが動作している間は端末を使用できなくなります。imsimta run とは異なり、端末を独占しない imsimta submit コマンドも参照してください。

このコマンドを使って実行するチャンネル配信プログラムは、imsimta submit コマンドとは異なり、保留中のバックオフ遅延期限が切れる前にメッセージを配信しようとします。

構文

```
imsimta run チャンネル
```

パラメータ

このコマンドのパラメータは、以下のとおりです。

パラメータ	説明
チャンネル	処理するチャンネルを指定する。このパラメータは必須

例

tcp_local チャンネルのメッセージを処理するには、以下のコマンドを入力します。

```
imsimta run tcp_local
```

imsimta start

`imsimta start` コマンドは、分離された MTA プロセスを起動するためのものです。コンポーネントパラメータを何も指定していない場合は、MTA ジョブコントローラと MTA サービスディスパッチャが起動します。サービスディスパッチャを起動すると、サービスディスパッチャが取り扱うように設定されているすべてのサービスが開始します。これには通常 SMTP サーバが含まれます。

MTA サービスディスパッチャによって取り扱われるサービスは、MTA サービスディスパッチャを起動することによって開始する必要があります。`imsimta start` コマンドを使うと、MTA サービスディスパッチャによって取り扱われないサービスだけを個々に開始できます。サービスディスパッチャは、マルチスレッド SMTP サーバなど、さまざまなサービスを取り扱うように設定できます。

注 このユーティリティを使用するには、ルートとしてログインしなければなりません。

構文

```
imsimta start [コンポーネント]
```

コンポーネントパラメータを指定すると、そのコンポーネントに関連する分離されたプロセスだけが起動します。標準のコンポーネント名は、以下のとおりです。

- `dispatcher` - マルチスレッドサービスディスパッチャ
- `job_controller` - 配信のスケジュール (メッセージをキューから取り出す)

例

以下に、MTA ジョブコントローラと MTA サービスディスパッチャを起動するためのコマンド例を示します。

```
imsimta start
```

imsimta stop

`imsimta stop` コマンドは、MTA ジョブコントローラと MTA ディスパッチャを終了するためのものです。MTA ディスパッチャを終了すると、ディスパッチャが取り扱うすべてのサービスが終了します (例: SMTP)。

注 このユーティリティを使用するには、ルートとしてログインしなければなりません。

構文

```
imsimta stop [dispatcher | job_controller]
```

例

以下に、MTA ジョブを終了するためのコマンド例を示します。

```
imsimta stop
```

imsimta submit

`imsimta submit` コマンドは、プロセスを進めるようジョブコントローラに指示します。これにより、チャンネルパラメータによって指定されたチャンネルのキューに入っているメッセージが実行されます。

構文

```
imsimta submit [チャンネル] [ポーリング]
```

パラメータ

このコマンドのパラメータは、以下のとおりです。

パラメータ	説明
チャンネル	処理するチャンネルを指定する。このパラメータを指定しなかった場合は、デフォルトでローカルチャンネル1が選択される
ポーリング	「ポーリング」を指定すると、処理するメッセージがチャンネルのキューになくてもチャンネルプログラムが実行される

例

以下のコマンドを使うと、tcp_local チャンネルのメッセージを処理できます。

```
imsimta submit tcp_local
```

imsimta test

imsimta test ユーティリティは、MTA のさまざまな機能領域についてテストを実行するためのものです。

imsimta test -mapping

imsimta test -mapping は、マッピングファイル内のマッピングテーブルの動作をテストします。入力文字列をマッピングした結果は、指定されたメタ文字に関する情報といっしょに出力文字列内に出力されます。

コマンドラインに入力文字列を指定した場合は、その入力文字列をマッピングした結果だけが出力されます。入力文字列を指定しないと、imsimta test -mapping はループに入ります。つまり、入力文字列を要求し、その文字列をマッピングした後、別の入力文字列を要求します。CTRL-D キーを押すと、imsimta test -mapping は終了します。

imsimta test -match

imsimta test -match は、ワイルドカードとグローバル照合をテストするために、マッピングパターンをテストします。

`imsimta test -match` は、パターンを要求した後、そのパターンと比較するためのターゲット文字列を要求します。これに対する出力は、ターゲット文字列が一致するかどうかを示すものです。一致した場合は、パターンの各ワイルドカードに一致したターゲット文字列内の文字が表示されます。`imsimta test -match` ユーティリティはループを形成します。つまり、CTRL-D キーを押してユーティリティを終了するまで、入力のプロンプトが表示されます。

imsimta test -rewrite

`imsimta test -rewrite` を実行すると、実際にメッセージを送信することなく、MTA のアドレス書き換えとチャネルマッピングプロセスをテストすることができます。さまざまなオプションを使って、`imsimta test -rewrite` が設定テキストファイルやコンパイルされた設定 (ある場合)、または作成された出力の量などを使用するかどうかを制御することができます。

コマンドラインでテストアドレスを指定すると、`imsimta test -rewrite` は、MTA アドレス書き換えをそのアドレスに適用し、結果を報告して終了します。テストアドレスを指定しないと、`imsimta test -rewrite` はループに入ります。つまり、アドレスを要求し、書き換えを実行した後、別のアドレスを要求します。CTRL-D キーを押すと、`imsimta test -rewrite` は終了します。

制限された配布リストに対する電子メールアドレスをテストすると、`imsimta test -rewrite` はローカル `postmaster` の返信用アドレスを掲示アドレスとして使用します。返信用アドレスは、MTA オプションファイルの `RETURN_ADDRESS` オプションで指定されないかぎり、「`postmaster@localhost`」です。

imsimta test -url

`imsimta test -url` は、LDAP クエリー URL をテストします。クエリーする LDAP サーバは、`local.conf` にある `LDAP_SERVER` オプションの設定により制御されています。

構文

```

imsimta test -rewrite [アドレス] [-alias_file=ファイル名]
[-channel | -nochannel]
[-check_expansions | -nocheck_expansions]
[-configuration_file=ファイル名] [-database=データベース_リスト]
[-debug | -nodebug] [-delivery_receipt | -nodelivery_receipt]
[-destination_channel=チャンネル] [-from=アドレス | -nofrom]
[-image_file=ファイル名 | -noimage_file] [-input=入力_ファイル]
[-local_alias=値 | -nolocal_alias]
[-mapping_file=ファイル | -nomapping_file]
[-option_file=ファイル名 | -nooption_file] [-output=出力_ファイル]
[-read_receipt | -noread_receipt] [-restricted=設定]
[-source_channel=チャンネル]

```

```

imsimta test -mapping [入力_文字列] [-debug | -nodebug]
[-flags=文字 | -noflags]
[-image_file=ファイル名 | -noimage_file] [-mapping_file=ファイル名]
[-option_file=ファイル名 | -nooption_file] [-table=テーブル名]

```

```

imsimta test -match

```

```

imsimta test -url [-debug | -nodebug] [ldap_url]

```

オプション

このコマンドのオプションは、以下のとおりです。

オプション	説明
アドレス	書き換えるテストアドレスを指定する。このオプションを設定しないと、コマンドはアドレスの入力を要求してくる。 -rewrite オプションとともに使用する
入力_文字列	マッピングテーブルの左側にある照合する文字列。 -mapping オプションとともに使用する

オプション	説明
<code>ldap_url</code>	<code>imsimta test -url</code> が解釈しようとする LDAP URL
<code>-alias_file=</code> ファイル名	<code>imsimta test -rewrite</code> が使用する別のエイリアスファイルを指定する。通常、 <code>imsimta test -rewrite</code> は、書き換え中に、MTA テイラーファイル (<code>msg-instance/imta/config/imta_tailor</code>) の <code>IMTA_ALIAS_FILE</code> オプションによって名前が付けられたデフォルトのエイリアスファイルを参照する。 <code>-noimage_file</code> を指定しなかった場合、またはコンパイルされた設定がある場合、このオプションは効果がない。コンパイルされた設定があると、どのエイリアスファイルも読み取られない
<code>-channel</code> <code>-nochannel</code>	アドレスが一致するチャンネルに関する詳細情報を、 <code>imsimta test -rewrite</code> が出力するかどうかを指定する (例、チャンネルフラグ)
<code>-check_expansions</code> <code>-nocheck_expansions</code>	エイリアスアドレスエクスパンションの確認を制御する。通常、MTA は、エクスパンド後のアドレスが規則に則したものであれば、そのエイリアスのエクスパンションは成功したとみなす。 <code>-check_expansions</code> オプションを使用すると、より厳しいポリシーが適用されるようになる。 <code>imsimta test -rewrite -check_expansions</code> を使用すると、エクスパンド後のアドレスが慎重に確認され、正しく書き換えることのできないアドレスのリストが作成される
<code>-configuration_file=</code> ファイル	<code>IMTA_CONFIG_FILE</code> によって名前が付けられたファイルの代わりに使用する代替ファイルを指定する。通常、 <code>imsimta test -rewrite</code> は、書き換え中に、MTA テイラーファイル (<code>msg-instance/imta/config/imta_tailor</code>) の <code>IMTA_CONFIG_FILE</code> オプションによって名前が付けられたデフォルトの設定ファイルを参照する。 <code>-noimage_file</code> を指定しなかった場合、またはコンパイルされた設定がある場合、このオプションは効果を発揮しない。コンパイルされた設定があると、どの設定ファイルも読み取られない
<code>-database=</code> データベース - リスト	さまざまなデータベースへの参照を無効にするか、またはデータベースパスを非標準の場所にリダイレクトする。通常、 <code>imsimta test -rewrite</code> は、その操作中に標準の MTA データベースを参照する。ここに入力できる項目は、 <code>alias</code> 、 <code>noalias</code> 、 <code>domain</code> 、 <code>nodomain</code> 、 <code>general</code> 、 <code>nogeneral</code> 、 <code>reverse</code> 、および <code>noreverse</code> 。「no」で始まる項目は、対応するデータベースの使用を無効にする。残りの項目には、関連する値 (データベースの名前) が必要
<code>-debug</code> <code>-nodebug</code>	書き換えプロセスに追加する詳細説明を作成することができる。このオプションは、デフォルトで無効になっている

オプション	説明
-delivery_receipt -nodelivery_receipt	対応する配達証明書リクエストフラグを設定する。これらのオプションは、転送先アドレスまたはメーリングリストを書き換える際、配達証明書リクエストの送受信の取り扱いをテストするのに有用である
-destination_channel= チャンネル	imsimta test -rewrite がアドレスを書き換える際の対象となる宛先すなわちターゲットチャンネルを制御する。アドレス書き換えの中には、宛先チャンネルに固有のものもある。通常、imsimta test -rewrite は、チャンネルの宛先がローカルチャンネル 1 であると仮定する
-from= アドレス -nofrom	-from オプションが指定された場合、アクセスコントロールプロープにどのエンベロープ From: アドレスを使うかを指定する。「アドレス」を指定しなかった場合は、postmaster の返信用アドレスが使われる。-nofrom オプションを指定した場合は、MTA はプロープのアクセスに空欄のエンベロープ From: アドレスを使用する
-flags= 文字 -noflags	-flags オプションが指定された場合にマッピングテストでセットされる特定のフラグを指定する。たとえば、REVERSE マッピングをテストする場合、「文字」には E (エンベロープ)、B (ヘッダー / 本体)、または I (メッセージ ID) を指定できる。このオプションは、-mapping オプションとともに使用される
-image_file=[ファイル名] -noimage_file	-noimage_file オプションは、以前コンパイルされた設定を無条件で無視するようコマンドに指示し、代わりにさまざまなテキストファイルから設定を読み取るように指示する。 -image_file オプションをファイル名なしで指定した場合、IMTA_CONFIG_DATA オプションによって名前が付けられたファイル (通常 msg-instance/imta/config/imta.cnf) から MTA テイラーファイル (msg-instance/imta/config/imta_tailor) にコンパイルされた設定が読み込まれる。ファイル名が指定されている場合は、指定されたファイルからコンパイルされた設定が読み込まれる
-input= 入力 - ファイル	imsimta test -rewrite に対する入力ソースを指定する。特に設定を変更しないかぎり、imsimta test -rewrite は、stdin からの入力を受け入れるようになっている
-local_alias= 値 -nolocal_alias	ローカルホストのエイリアス設定を制御する。MTA は、ローカルホストに対する複数の「ID」をサポートしている。ローカルホストはチャンネルごとに異なる ID を持つことができる。このオプションは、ローカルホストのエイリアスを特定の値に設定する場合に使用できる。書き換え後のアドレス内にあるローカルホストは、この値に置き換えられる

オプション	説明
-mapping_file= ファイル -nomapping_file	MTA テイラーファイル (msg-instance/imta/config/imta_tailor) の IMTA_MAPPING_FILE オプションによって名前が付けられたデフォルトのマッピングファイルではなく、指定されたマッピングファイル(通常、msg-instance/imta/config/mappings によって名前が付けられたファイル)を使うように指示する。 -noimage_file が指定されている場合、またはコンパイルされた設定がある場合、このオプションは効果を発揮しない。コンパイルされた設定があると、マッピングファイルは読み取られない。-nomapping_file オプションを使用すると、コンパイルされたファイルがない場合に、IMTA_MAPPING_FILE ファイルが読み取られるのを防ぐことができる
-option_file= ファイル名 -nooption_file	MTA テイラーファイル (msg-instance/imta/config/imta_tailor) の IMTA_OPTION_FILE オプションによって名前が付けられたデフォルトのオプションファイルではなく、指定されたオプションファイル(通常、msg-instance/imta/config/options.dat ファイル)を使うように指示する。-noimage_file を指定しなかった場合、またはコンパイルされた設定がある場合、このオプションは効果を発揮しない。コンパイルされた設定があると、どの設定ファイルも読み取られない。-nooption_file オプションを使用すると、コンパイルされた設定がない場合に、IMTA_OPTION_FILE が読み取られることを防ぐことができる
-output= 出力_ファイル	imsimta test -rewrite の出力先を指定する。特に設定を変更しないかぎり、imsimta test -rewrite は stout に出力を書き込む
-read_receipt -noread_receipt	対応する配達証明書リクエストフラグを設定する。これらのオプションは、転送先アドレスまたはメーリングリストを書き換える際、配達証明書リクエストの送受信の取り扱いをテストするのに有用である
-restricted= 設定	制限フラグの設定を制御する。特に設定を変更しないかぎり、このフラグは 0 に設定されている。1 に設定すると (-restricted=1)、制限フラグがセットされ、アドレスは RFC 1137 が推奨する制限メールボックスエンコーディングフォーマットを使って書き換えられる。このフラグは、RFC 1137 の仕様に基づいて強制的にアドレスメールボックス名を書きえるために使用される

オプション	説明
-source_channel= チャンネル	書き換えを実行するソースチャンネルを指定する。アドレス書き換え操作の中には、ソースチャンネルに固有なものもある。通常、 <code>imsimta test -rewrite</code> は、書き換えるチャンネルのソースがローカルチャンネル 1 であると仮定する
-table= テーブル名	テストするマッピングテーブルの名前を指定する。このオプションを指定しないと、 <code>imsimta test -mapping</code> によってテーブル名を入力するように指示するメッセージが表示される

例

以下に、`imsimta test -rewrite` によって生成された一般的な出力例を示します。`imsimta test -rewrite` によって生成された情報のうち最も重要なものは、出力の末尾に数行にわたって表示されています。ここでは、`imsimta test -rewrite` によって送信された指定テストアドレスを持つメッセージの送信先チャンネルと、テストアドレスがそのチャンネルに対して書き換えられた場合の結果が示されています。この出力は、設定に関する問題をデバッグする場合に役立ちます。

imsimta test -rewrite

```

Address: joe.blue
channel = 1
channel description =
channel description =
channel flags #1 = BIDIRECTIONAL MULTIPLE IMMNONURGENT
NOSERVICEALL
channel flags #2 = NOSMTP POSTHEADBODY HEADERINC NOEXPROUTE
channel flags #3 = LOGGING NOGREY NORESTRICTED
channel flags #4 = EIGHTNEGOTIATE NOHEADERTRIM NOHEADERREAD RULES
channel flags #5 =
channel flags #6 = LOCALUSER NOX_ENV_TO RECEIPTHEADER
channel flags #7 = ALLOWSWITCHCHANNEL NOREMOTEHOST DATEFOUR
DAYOFWEEK
channel flags #8 = NODEFRAGMENT EXQUOTA REVERSE
NOCONVERT_OCTET_STREAM
channel flags #9          = NOTHURMAN INTERPRETENCODING

text/plain charset def = (7) US-ASCII 5 (8) ISO-8859-1 51
channel envelope address type = SOURCEROUTE
channel header address type = SOURCEROUTE
channel official host = mailserver.eng.alpha.com

channel local alias      =

channel queue name      =

channel after param     =

channel daemon name     =

channel user name       =

notices                 =

channel group ids       =

header To: address      = joe.blue@mailserver.eng.alpha.com

header From: address    = joe.blue@mailserver.eng.alpha.com

```

```
envelope To: address = joe.blue@mailserver.eng.alpha.com
(route (mailserver.eng.alpha.com,mailserver.eng.alpha.com))

envelope From: address = joe.blue@mailserver.eng.alpha.com

name =

mbox = joe.blue

Extracted address action list: joe.blue@mailserver.eng.alpha.com

Extracted 733 address action list:
joe.blue@mailserver.eng.alpha.com

Expanded address:

joe.blue@mailserver.eng.alpha.com

Submitted address list:

ims-ms

joe.blue@ims-ms-daemon (sims-ms-daemon) *NOTIFY FAILURES*
*NOTIFY DELAYS*

Submitted notifications list:

Address:

#
```

以下に、サンプルの PAGER マッピングのテスト例を示します。-mapping_file オプションを使って、デフォルトのマッピングファイルの代わりに pager_table.sample マッピングファイルを選択しています。

```
imsimta test -mapping -noimage_file ¥
  -mapping_file=msg-instance/imta/config/pager_table.sample
```

以下の例では、いくつかのサンプルターゲット文字列に対して、サンプルのマッピングパターン `$(ax1)*@*.xyz.com` をテストしています。

```
imsimta test -match

Pattern: $(ax1)*@*.xyz.com
[ 1S] cglob [1ax]
[ 2] "@"
[ 3S] glob, req 46, reps 2
[ 4] "."
[ 5] "x"
[ 6] "y"
[ 7] "z"
[ 8] "."
[ 9] "c"
[ 10] "o"
[ 11] "m"

Target: xx11aa@sys1.xyz.com
Match.
0 - xx11aa
1 - sys1
Pattern: $(ax1)*@*.xyz.com
Target: 12a@node.xyz.com
No match.
Pattern: $(ax1)*@*.xyz.com
Target: 1xa@node.acme.com
Match.
0 - 1xa
1 - node
Pattern: ^D
%
```

imsimta version

imsimta version コマンドは、MTA バージョン番号を印刷したり、システム名、オペレーティングシステムのリリース番号とバージョン、ハードウェアの種類を表示したりするためのコマンドです。

構文

```
imsimta version
```

例

実行中の MTA バージョンを確認するには、以下のコマンドを実行します。

```
% imsimta version
```

imsimta view

imsimta view ユーティリティは、ログファイルを表示するためのものです。

構文

```
imsimta view ファイル - パターン [-f オフセット - 最初から]  
[-l オフセット - 最後から]
```

オプション

このコマンドのオプションは、以下のとおりです。

オプション	説明
-f= オフセット - 最初から	ログファイルの指定されたバージョンを表示する (0 から開始)。たとえば、ファイルの最も古いバージョンのファイルを検索するには、-f=0 と指定する。デフォルトで、imsimta view は最新バージョンのログファイルを検索する

オプション	説明
-1= オフセット - 最後から	指定されたファイルの最新バージョンを表示する。たとえば、ファイルの最新バージョンを表示するには、-1=0 を指定する。デフォルトで、imsimta view は最新バージョンのファイルを検索する
ファイル - パターン	表示するファイル名パターンを指定する

Delegated Administrator のコマンド ラインユーティリティ

iPlanet Delegated Administrator for Messaging and Collaboration のコマンドラインユーティリティは、iPlanet Messaging Server のドメイン管理者、ユーザ、およびグループを管理するために使用します。

表 3-1 に、各コマンドの一覧を示します。

表 3-1 Delegated Administrator のコマンドラインユーティリティ

コマンド	説明	コマンドの実行権限を有する管理者
imadmin admin add	ユーザにドメイン管理者権限を与える	トップレベル
imadmin admin remove	ユーザのドメイン管理者権限を取り消す	トップレベル
imadmin admin search	ドメイン管理者権限を有するユーザを検索し、表示する	不特定の管理者
imadmin domain create	ドメインを作成する	トップレベル
imadmin domain delete	ドメインを削除する	トップレベル
imadmin domain modify	ドメインを変更する	トップレベル
imadmin domain purge	ドメインをパージする	トップレベル
imadmin domain search	ドメインを検索する	トップレベル、ドメイン、ファミリー
imadmin family create	ファミリーグループを作成する	トップレベル、ドメイン
imadmin family delete	ファミリーグループを削除する	トップレベル、ドメイン
imadmin family modify	ファミリーグループを変更する	トップレベル、ドメイン
imadmin family purge	ファミリーグループをパージする	トップレベル

表 3-1 Delegated Administrator のコマンドラインユーティリティ (続き)

コマンド	説明	コマンドの実行権限を有する管理者
imadmin family search	ファミリーグループを検索する	不特定の管理者
imadmin family-admin add	ユーザにファミリー管理者権限を与える	トップレベル、ドメイン、ファミリー
imadmin family-admin remove	ユーザのファミリー管理者権限を取り消す	トップレベル、ドメイン、ファミリー
imadmin family-admin search	ファミリー管理者権限を有するユーザを検索し、表示する	不特定の管理者
imadmin family-member create	ファミリーグループにメンバーを追加する	トップレベル、ドメイン、ファミリー
imadmin family-member delete	ディレクトリから削除することを示すために、ファミリーグループメンバーにマークを付ける	トップレベル、ドメイン、ファミリー
imadmin family-member remove	指定ユーザのメンバーを削除する	トップレベル、ドメイン、ファミリー
imadmin family-member search	ファミリーグループメンバーを検索する	不特定の管理者
imadmin group create	グループを作成する	トップレベル、ドメイン、メーリングリスト所有者
imadmin group delete	グループを削除する	トップレベル、ドメイン、メーリングリスト所有者
imadmin group modify	グループを変更する	トップレベル、ドメイン、メーリングリスト所有者
imadmin group purge	グループをパージする	トップレベル
imadmin group search	グループを検索する	不特定の管理者
imadmin user create	ユーザを作成する	トップレベル、ドメイン
imadmin user delete	ユーザを削除する	トップレベル、ドメイン
imadmin user modify	ユーザを変更する	トップレベル、ドメイン
imadmin user purge	ユーザをパージする	トップレベル、ドメイン
imadmin user search	ユーザを検索する	不特定の管理者

実行モード

コマンドラインの実行には、以下の3つのモードがあります。

- インタラクティブ
imadmin オブジェクトタスク
残りのオプションや属性については、管理者に照会されます。
- ファイルに指定されたオプションを用いて実行する
imadmin オブジェクトタスク -i 入力ファイル
「入力ファイル」を解析し、実行します。
- 即時あるいはシェル実行
imadmin オブジェクトタスク [オプション]

コマンドファイルの形式

「-i」オプションを使用して、ファイル内にオプションを定義することができます。

ファイル内では、空白スペースを使ってオプション名とオプション値を区切ります。オプション値は、空白スペース以外の文字から始まり、EOL (行末) 文字まで続きます。オプションのセットは、空白行で区切ります。

一般的な構文：

```
< オプション名 >< 空白スペース >[ オプション値、該当時のみ ]
< オプション名 >< 空白スペース >[ オプション値、該当時のみ ]
...
< オプション名 >< 空白スペース >[ オプション値、該当時のみ ]
< [ 空白行 ] >
< オプション名 >< 空白スペース >[ オプション値、該当時のみ ]
< オプション名 >< 空白スペース >[ オプション値、該当時のみ ]
...
< オプション名 >< 空白スペース >[ オプション値、該当時のみ ]
```

コマンドラインの値は、それぞれのオプションセットのデフォルト値になります。これらのオプションは、各オプションセットごとに指定することができます。その値によって、コマンドラインに指定されたデフォルトが上書きされます。

以下に、`imadmin user add` コマンドの `-i` オプションによって指定されるファイルの形式と構文の例を示します。

```
l newuser1
F new
L user1
W secret

l newuser2
F new
L user2
W secret

l newuser3
F new
L user3
W secret

< などのように続く ... >
```

コマンドの説明

ここでは、Delegated Administrator のコマンドの説明、構文、および例について解説します。

注 `imadmin` コマンドが実行される時点で `-X`、`-p`、および `-n` オプションが指定されていない場合、これらの値は `cli-userprefs.properties` 設定ファイルからとられます。

imadmin admin add

`imadmin admin add` コマンドは、特定のドメインのユーザにドメイン管理者権限を与えるためのものです。

構文

```
imadmin admin add -D ログイン -l ログイン -n ドメイン -w パスワード
[-d ドメイン] [-h] [-i 入力ファイル] [-p ida ポート] [-X ida ホスト]
[-s] [-v]
```

オプション

以下のオプションは必須です。

オプション	説明
-D ログイン	トップレベル管理者のユーザ ID
-l ログイン	管理権限を与えるユーザのユーザ ID。そのユーザはディレクトリ内に存在していなければならない
-n ドメイン	トップレベル管理者のドメイン
-w パスワード	トップレベル管理者のパスワード

以下のオプションは必須ではありません。

オプション	説明
-d ドメイン	管理者権限を与えるドメイン。指定されない場合には、-n オプションで指定したドメインが使用される
-h	コマンドを使用するための構文を印刷する
-i 入力ファイル	コマンドラインではなく、ファイルからコマンド情報を読み取る
-p <i>ida</i> ポート	iDA サーバがリッスンしている別の TCP ポートを指定する場合に、このオプションを使用する。指定されない場合には、デフォルトの <i>ida</i> ポートが使用される。インストール時にデフォルトが設定されていない場合には、80 が使用される
-X <i>ida</i> ホスト	企業サーバが動作している別のホストを指定する。-X オプションを指定しても、そのサーバが応答しない場合には、このコマンドの実行は失敗に終わる。デフォルトのサーバへの接続は試行されない。指定されない場合には、デフォルトの <i>ida</i> ホストが使用される。インストール時にデフォルトが設定されていない場合には、ローカルホストが使用される
-s	iDA サーバに接続するために SSL (Secure Socket Layer) を使用する
-v	デバッグ出力を可能にする

例

以下に、ユーザ ID が `admin1` であるユーザにドメイン管理者権限を与える例を示します。

```
imadmin admin add -D chris -n siroe.com -w bolton -l admin1
```

以下に、`acme2.com` ドメインに対し、ユーザ ID が `admin2` であるユーザにドメイン管理者権限を与える例を示します。

```
imadmin add admin -D chris -w bolton -l admin2 -n acme2.com
```

imadmin admin remove

`imadmin admin remove` コマンドは、ユーザのドメイン管理者権限を削除するためのものです。一度に複数のユーザのドメイン管理者権限を削除する場合には、`-i` オプションを使用します。

構文

```
imadmin admin remove -D ログイン -l ユーザ id -n ドメイン -w パスワード
[-d ドメイン] [-h] [-i 入力ファイル] [-p ida ポート] [-X ida ホスト]
[-s] [-v]
```

オプション

以下のオプションは必須です。

オプション	説明
<code>-D ログイン</code>	トップレベル管理者のユーザ ID
<code>-l ユーザ <i>id</i></code>	管理者権限を取り消すユーザのユーザ ID
<code>-n ドメイン</code>	トップレベル管理者のドメイン
<code>-w パスワード</code>	トップレベル管理者のパスワード

以下のオプションは必須ではありません。

オプション	説明
-d ドメイン	管理者権限を取り消すドメイン。-d が指定されない場合には、-n で指定したドメインが使用される
-h	コマンドを使用するための構文を印刷する
-i 入力ファイル	コマンドラインではなく、ファイルからコマンド情報を読み取る
-p <i>ida</i> ポート	iDA サーバがリッスンしている別の TCP ポートを指定する場合に、このオプションを使用する。指定されない場合には、デフォルトの <i>ida</i> ポートが使用される。インストール時にデフォルトが設定されていない場合には、80 が使用される
-x <i>ida</i> ホスト	企業サーバが動作している別のホストを指定する。-x オプションを指定しても、そのサーバが応答しない場合には、このコマンドの実行は失敗に終わる。デフォルトのサーバへの接続は試行されない。指定されない場合には、デフォルトの <i>ida</i> ホストが使用される。インストール時にデフォルトが設定されていない場合には、ローカルホストが使用される
-s	iDA サーバに接続するために SSL (Secure Socket Layer) を使用する
-v	デバッグ出力を可能にする

例

以下に、ユーザ ID が admin5 である管理者のドメイン管理者権限を削除するコマンドの例を示します。

```
imadmin admin remove -D chris -n siroe.com -w bolton ¥
-l admin5 -d test.com
```

imadmin admin search

imadmin admin search コマンドは、ドメイン管理者権限を有するユーザを検索し、表示するためのものです。

構文

```
imadmin admin search -D ログイン -n ドメイン -w パスワード
[-d ドメイン] [-h] [-i 入力ファイル] [-p ida ポート] [-X ida ホスト]
[-s] [-v]
```

オプション

以下のオプションは必須です。

オプション	説明
-D ログイン	このコマンドの実行権限を有するユーザのユーザ ID
-n ドメイン	-D オプションで指定したユーザのドメイン
-w パスワード	-D オプションで指定したユーザのパスワード

以下のオプションは必須ではありません。

オプション	説明
-d ドメイン	指定のドメインでドメイン管理者権限を有するユーザを検索する。-d が指定されない場合には、-n で指定したドメインが使用される
-h	コマンドを使用するための構文を印刷する
-i 入力ファイル	コマンドラインではなく、ファイルからコマンド情報を読み取る
-p <i>ida</i> ポート	iDA サーバがリッスンしている別の TCP ポートを指定する場合に、このオプションを使用する。指定されない場合には、デフォルトの <i>ida</i> ポートが使用される。インストール時にデフォルトが設定されていない場合には、80 が使用される
-X <i>ida</i> ホスト	企業サーバが動作している別のホストを指定する。-X オプションを指定しても、そのサーバが応答しない場合には、このコマンドの実行は失敗に終わる。デフォルトのサーバへの接続は試行されない。指定されない場合には、デフォルトの <i>ida</i> ホストが使用される。インストール時にデフォルトが設定されていない場合には、ローカルホストが使用される
-s	iDA サーバに接続するために SSL (Secure Socket Layer) を使用する
-v	デバッグ出力を可能にする

例

ドメイン `test.com` のすべてのドメイン管理者を検索するには：

```
imadmin admin search -D chris -n siroe.com -w bolton ¥
-d test.com
```

imadmin domain create

`imadmin domain create` コマンドは、Messaging Server システム内にドメインを作成するためのものです。一度に複数のドメインを作成する場合には、`-i` オプションを使用します。

構文

```
imadmin domain create -D ログイン -d ドメイン -H メールホスト -n ドメ
イン -w パスワード [-A [+|-] 属性名 : 値] [-c] [-h] [-i 入力ファイル]
[-o 組織名] [-p ida ポート] [-t ドメインコンテナ] [-X ida ホスト]
[-s] [-v]
```

オプション

以下のオプションは必須です。

オプション	説明
<code>-D</code> ログイン	トップレベル管理者のユーザ ID
<code>-d</code> ドメイン	作成するドメインの名前
<code>-H</code> メールホスト	このドメインが応答するメールホスト (例： <code>mailhost.siroe.com</code>)
<code>-n</code> ドメイン	トップレベル管理者のドメイン
<code>-w</code> パスワード	トップレベル管理者のパスワード

以下のオプションは必須ではありません。

オプション	説明
-A [+ -] 属性名 : 値	<p>変更する属性。属性名は、LDAP スキーマに定義されており、ディレクトリ内に存在するその属性の現在値をすべて置き換える。複数の属性を一度に変更する場合、あるいは同一の属性に複数の値を指定する場合には、このオプションを繰り返すことができる</p> <p>属性名の前にある“+”は、現在の属性リストに値を追加することを表す。“-”は、値を削除することを表す。“-”を使用する場合で、コマンドラインでコマンドを指定する場合は、“-”の前に円記号(¥)を2つ入力する。入力ファイル内にオプションが提供されている場合は、“-”の前に円記号(¥)を1つ入力する</p>
-c	ドメインツリー内で作成しなければならないユーザとグループを指定する
-h	コマンドを使用するための構文を印刷する
-i 入力ファイル	コマンドラインではなく、ファイルからコマンド情報を読み取る
-o 組織名	組織名を指定する
-t ドメインコンテナ	ドメインのドメインコンテナ DN。ドメインのユーザおよびグループが保存されているツリーへのポインタ。このオプションが指定されない場合には、iDA servlet 属性で指定された osisuffix 内にドメインコンテナが作成される
-p <i>ida</i> ポート	iDA サーバがリッスンしている別の TCP ポートを指定する場合に、このオプションを使用する。指定されない場合には、デフォルトの <i>ida</i> ポートが使用される。インストール時にデフォルトが設定されていない場合には、80 が使用される
-X <i>ida</i> ホスト	企業サーバが動作している別のホストを指定する。-X オプションを指定しても、そのサーバが応答しない場合には、このコマンドの実行は失敗に終わる。デフォルトのサーバへの接続は試行されない。指定されない場合には、デフォルトの <i>ida</i> ホストが使用される。インストール時にデフォルトが設定されていない場合には、ローカルホストが使用される
-s	iDA サーバに接続するために SSL (Secure Socket Layer) を使用する
-v	デバッグ出力を可能にする

例

新規ドメインを作成するには：

```
imadmin domain create -D chris -d test.com ¥
-H mailhost.siroe.com -n siroe.com -w bolton
```

imadmin domain delete

`imadmin domain delete` コマンドは、Messaging Server システムからホストドメインを削除し、`inetdomainstatus` を「削除済み」に設定するためのものです。一度に複数のドメインを作成する場合には、`-i` オプションを使用します。

削除解除用のユーティリティはありません。ただし、ページまでの猶予期間が切れる前で、ページがエントリに対して実行されるように設定されている場合であれば、管理者が任意に `ldapmodify` コマンドを使って、ドメインエントリのステータス属性を「アクティブ」に変更することができます。

構文

```
imadmin domain delete -D ログイン -d ドメイン -n ドメイン -w パスワード
[-h] [-i 入力ファイル] [-p ida ポート] [-X ida ホスト] [-s] [-v]
```

オプション

以下のオプションは必須です。

オプション	説明
<code>-D ログイン</code>	トップレベル管理者のユーザ ID
<code>-d ドメイン</code>	削除するドメイン。-d が指定されない場合には、-n で指定したドメインが使用される
<code>-n ドメイン</code>	トップレベル管理者のドメイン
<code>-w パスワード</code>	トップレベル管理者のパスワード

以下のオプションは必須ではありません。

オプション	説明
-h	コマンドを使用するための構文を印刷する
-i 入力ファイル	コマンドラインではなく、ファイルからコマンド情報を読み取る
-p <i>ida</i> ポート	iDA サーバがリッスンしている別の TCP ポートを指定する場合に、このオプションを使用する。指定されない場合には、デフォルトの <i>ida</i> ポートが使用される。インストール時にデフォルトが設定されていない場合には、80 が使用される
-x <i>ida</i> ホスト	企業サーバが動作している別のホストを指定する。-x オプションを指定しても、そのサーバが応答しない場合には、このコマンドの実行は失敗に終わる。デフォルトのサーバへの接続は試行されない。指定されない場合には、デフォルトの <i>ida</i> ホストが使用される。インストール時にデフォルトが設定されていない場合には、ローカルホストが使用される
-s	iDA サーバに接続するために SSL (Secure Socket Layer) を使用する
-v	デバッグ出力を可能にする

例

既存のドメインを削除するには：

```
imadmin domain delete -D chris -d test.com -n siroe.com ¥
-w bolton
```

imadmin domain modify

imadmin domain modify コマンドは、ドメインのディレクトリエントリを変更するためのものです。一度に複数のドメインを変更する場合には、-i オプションを使用します。

構文

```
imadmin domain modify -D ログイン -d ドメイン -n ドメイン -w パスワード
[-A [+|-] 属性名: 値] [-h] [-i 入力ファイル] [-p ida ポート]
[-X ida ホスト] [-s] [-v]
```

オプション

以下のオプションは必須です。

オプション	説明
-D ログイン	トップレベル管理者のユーザ ID
-d ドメイン	変更するドメイン。-d が指定されない場合には、-n で指定したドメインが使用される
-n ドメイン	トップレベル管理者のドメイン
-w パスワード	トップレベル管理者のパスワード

以下のオプションは必須ではありません。

オプション	説明
-A [+ -] 属性名: 値	<p>変更する属性。属性名は、LDAP スキーマに定義されており、ディレクトリ内に存在するその属性の現在値をすべて置き換える。複数の属性を一度に変更する場合、あるいは同一の属性に複数の値を指定する場合には、このオプションを繰り返すことができる</p> <p>属性名の前にある“+”は、現在の属性リストに値を追加することを表す。“-”は、値を削除することを表す。“-”を使用する場合で、コマンドラインでコマンドを指定する場合は、“-”の前に円記号(¥)を2つ入力する。入力ファイル内にオプションが提供されている場合は、“-”の前に円記号(¥)を1つ入力する</p>
-h	コマンドを使用するための構文を印刷する
-i 入力ファイル	コマンドラインではなく、ファイルからコマンド情報を読み取る

オプション	説明
-p <i>ida</i> ポート	iDA サーバがリッスンしている別の TCP ポートを指定する場合に、このオプションを使用する。指定されない場合には、デフォルトの <i>ida</i> ポートが使用される。インストール時にデフォルトが設定されていない場合には、80 が使用される
-x <i>ida</i> ホスト	企業サーバが動作している別のホストを指定する。-x オプションを指定しても、そのサーバが応答しない場合には、このコマンドの実行は失敗に終わる。デフォルトのサーバへの接続は試行されない。指定されない場合には、デフォルトの <i>ida</i> ホストが使用される。インストール時にデフォルトが設定されていない場合には、ローカルホストが使用される
-s	iDA サーバに接続するために SSL (Secure Socket Layer) を使用する
-v	デバッグ出力を可能にする

例

既存のドメインを変更するには:

```
imadmin domain modify -D chris -w bolton -n siroe.com ¥
-d domain1.com -A mailhosts:test.sun.com
```

imadmin domain purge

`imadmin domain purge` コマンドは、削除済みのドメインをすべて Messaging Server システムから永久に削除します。

定期的なメンテナンス操作の一部として `imadmin domain purge` コマンドを使用し、指定の猶予期間を超えた削除済みドメインをすべて削除します。

必要に応じてこのコマンドを手作業で呼び出し、ページを実行することもできます。

このコマンドを呼び出すと、以下の順序で処理が行われます。

1. ディレクトリが検索され、Messaging Server のドメインリストが作成されます。そのエントリには、指定の猶予期間を過ぎている削除済みのドメインが含まれています (インストール時に、猶予期間のデフォルト値が 10 日間に設定されています)。
2. `inetdomainstatus` 属性値が削除されると、各ドメインのディレクトリエントリ全体が削除されます。`maildomainstatus` 属性が削除されると、各ドメインのメール関連の属性が削除されます。

3. 各ドメインのすべてのメールリスト、ファミリグループ、組織、およびユーザと、そのアドレス帳が削除されます。サブドメインはページされません。

削除解除用のユーティリティはありません。ただし、ページまでの猶予期間が切れる前で、ページがエントリに対して実行されるように設定されている場合であれば、管理者が任意に `ldapmodify` コマンドを使って、ドメインエントリのステータス属性を「アクティブ」に変更することができます。

複数のメッセージストア

`imadmin domain purge` ユーティリティを複数のメッセージストア全体で使用するためには、`resources.properties` ファイルを変更する必要があります。各メッセージストアとそれに関連する Administration Server ごとに、`resource.properties` という iPlanet Delegated Administrator ファイルに `MsgSvr$N-name`、`MsgSvr$N-adminurl`、および `MsgSvr$N-cgipath` を追加します。このファイルは `IDA_INSTALL_DIRECTORY/nda/classes/netcape/nda/servlet/` ディレクトリで検索します。

これらの設定パラメータの説明については、『iPlanet Delegated Administrator for Messaging and Collaboration インストールおよび管理者ガイド』を参照してください。

iPlanet Delegated Administrator ホストから Administration Server ホストへの接続を許可するためには、必要に応じて Administration Server の接続の制限をすべて変更します。これらの変更は、Administration Server Console の「構成」タブで行います。

構文

```
imadmin domain purge -D ログイン -n ドメイン -w パスワード [-d ドメイン]
[-g 猶予] [-h] [-i 入力ファイル] [-P] [-p ida ポート] [-r]
[-X ida ホスト] [-s] [-v]
```

オプション

以下のオプションは必須です。

オプション	説明
<code>-D</code> ログイン	トップレベル管理者のユーザ ID
<code>-n</code> ドメイン	トップレベル管理者のドメイン
<code>-w</code> パスワード	トップレベル管理者のパスワード

以下のオプションは必須ではありません。

オプション	説明
-d ドメイン	パーズするドメイン。-d が指定されていない場合は、「削除済み」としてマークされたすべてのドメインがパーズされる
-g 猶予	ドメインをパーズするまでの猶予期間 (日数)。「猶予」で指定した日数に満たないドメインは、削除のマークが付いていてもパーズされない。「0」は直ちにパーズすることを表す。デフォルト値は、サーバの設定ファイルから読み取られる。インストール時のデフォルト値は 10 日間に設定されている
-h	コマンドを使用するための構文を印刷する
-i 入力ファイル	コマンドラインではなく、ファイルからコマンド情報を読み取る
-r	ドメインエントリのノードにルートがあるサブツリー全体を削除する
-P	プレビューのみパーズは実行しない
-p <i>ida</i> ポート	iDA サーバがリッスンしている別の TCP ポートを指定する場合に、このオプションを使用する。指定されない場合には、デフォルトの <i>ida</i> ポートが使用される。インストール時にデフォルトが設定されていない場合には、80 が使用される
-x <i>ida</i> ホスト	企業サーバが動作している別のホストを指定する。-x オプションを指定しても、そのサーバが応答しない場合には、このコマンドの実行は失敗に終わる。デフォルトのサーバへの接続は試行されない。指定されない場合には、デフォルトの <i>ida</i> ホストが使用される。インストール時にデフォルトが設定されていない場合には、ローカルホストが使用される
-s	iDA サーバに接続するために SSL (Secure Socket Layer) を使用する
-v	デバッグ出力を可能にする

例

既存のドメインをパーズするには：

```
imadmin domain purge -D chris -d test.com -n siroe.com ¥
-w bolton
```

imadmin domain search

`imadmin domain search` コマンドは、ドメインに関連するディレクトリの全プロパティを取得するためのものです。複数のドメインに関連するディレクトリの全プロパティを取得する場合には、`-i` オプションを使用します。

構文

```
imadmin domain search -D ログイン -n ドメイン -w パスワード
[-d ドメイン] [-h] [-i 入力ファイル] [-p ida ポート] [-X ida ホスト]
[-s] [-v]
```

オプション

以下のオプションは必須です。

オプション	説明
<code>-D ログイン</code>	このコマンドの実行権限を有するユーザのユーザ ID
<code>-n ドメイン</code>	<code>-D</code> オプションで指定したユーザのドメイン
<code>-w パスワード</code>	<code>-D</code> オプションで指定したユーザのパスワード

以下のオプションは必須ではありません。

オプション	説明
<code>-d ドメイン</code>	このドメインを検索する <code>-d</code> が指定されていない場合は、すべてのドメインが表示される
<code>-h</code>	コマンドを使用するための構文を印刷する
<code>-i 入力ファイル</code>	コマンドラインではなく、ファイルからコマンド情報を読み取る
<code>-p <i>ida</i> ポート</code>	iDA サーバがリスンしている別の TCP ポートを指定する場合に、このオプションを使用する。指定されない場合には、デフォルトの <i>ida</i> ポートが使用される。インストール時にデフォルトが設定されていない場合には、80 が使用される

オプション	説明
-X <i>ida</i> ホスト	企業サーバが動作している別のホストを指定する。-X オプションを指定しても、そのサーバが応答しない場合には、このコマンドの実行は失敗に終わる。デフォルトのサーバへの接続は試行されない。指定されない場合には、デフォルトの <i>ida</i> ホストが使用される。インストール時にデフォルトが設定されていない場合には、ローカルホストが使用される
-s	iDA サーバに接続するために SSL (Secure Socket Layer) を使用する
-v	デバッグ出力を可能にする

imadmin family create

imadmin family create コマンドは、Messaging Server システムにファミリグループを作成するためのものです。一度に複数のファミリグループを追加する場合には、-i オプションを使用します。

構文

```
imadmin family create -D ログイン -m ファミリ名 -n ドメイン -u ユーザ id
-w パスワード [-A [+|-] 属性名 : 値] [-d ファミリドメイン] [-h]
[-i 入力ファイル] [-p ida ポート] [-X ida ホスト] [-s] [-v]
```

オプション

以下のオプションは必須です。

オプション	説明
-D ログイン	このコマンドの実行権限を有するユーザのユーザ ID
-m ファミリ名	ファミリグループの名前。ファミリ名は、空白文字を含まない 1 つの単語でなければならない
-n ドメイン	-D オプションで指定したユーザのドメイン
-u ユーザ <i>id</i>	請求情報の宛先となる人物のユーザ ID
-w パスワード	-D オプションで指定したユーザのパスワード

以下のオプションは必須ではありません。

オプション	説明
-A [+ -] 属性名 : 値	変更する属性。属性名は、LDAP スキーマに定義されており、ディレクトリ内に存在するその属性の現在値をすべて置き換える。複数の属性を一度に変更する場合、あるいは同一の属性に複数の値を指定する場合には、このオプションを繰り返すことができる 属性名の前にある“+”は、現在の属性リストに値を追加することを表す。“-”は、値を削除することを表す。“-”を使用する場合で、コマンドラインでコマンドを指定する場合は、“-”の前に円記号(¥)を2つ入力する。入力ファイル内にオプションが提供されている場合は、“-”の前に円記号(¥)を1つ入力する
-d ファミリドメイン	ファミリグループのドメイン。-d が指定されない場合には、-n で指定したドメインが使用される
-h	コマンドを使用するための構文を印刷する
-i 入力ファイル	コマンドラインではなく、ファイルからコマンド情報を読み取る
-p <i>ida</i> ポート	iDA サーバがリスンしている別の TCP ポートを指定する場合に、このオプションを使用する。指定されない場合には、デフォルトの <i>ida</i> ポートが使用される。インストール時にデフォルトが設定されていない場合には、80 が使用される
-X <i>ida</i> ホスト	企業サーバが動作している別のホストを指定する。-X オプションを指定しても、そのサーバが応答しない場合には、このコマンドの実行は失敗に終わる。デフォルトのサーバへの接続は試行されない。指定されない場合には、デフォルトの <i>ida</i> ホストが使用される。インストール時にデフォルトが設定されていない場合には、ローカルホストが使用される
-s	iDA サーバに接続するために SSL (Secure Socket Layer) を使用する
-v	デバッグ出力を可能にする

例

新規に smith というファミリグループを作成するには：

```
imadmin family create -D chris -n siroe.com -w secret ¥
-m smith -u john
```

imadmin family delete

imadmin family delete コマンドは、Messaging Server システムからファミリーグループを削除し、mnggrpstatus を「削除済み」に設定するためのものです。一度に複数のグループを削除する場合には、-i オプションを使用します。

ファミリーグループが削除されると、ファミリーグループのメンバーも削除されます。

削除解除用のユーティリティはありません。ただし、ページまでの猶予期間が切れる前で、ページがエントリに対して実行されるように設定されている場合であれば、管理者が任意に ldapmodify コマンドを使って、ファミリーグループエントリのステータス属性を「active」に変更することができます。

構文

```
imadmin family delete -D ログイン -m ファミリ名 -n ドメイン -w パスワード [-d ファミリドメイン] [-h] [-i 入力ファイル] [-p ida ポート] [-X ida ホスト] [-s] [-v]
```

オプション

以下のオプションは必須です。

オプション	説明
-D ログイン	このコマンドの実行権限を有するユーザのユーザ ID
-m ファミリ名	ファミリーグループの名前。ファミリー名は、空白文字を含まない 1 つの単語でなければならない
-n ドメイン	-D オプションで指定したユーザのドメイン
-w パスワード	-D オプションで指定したユーザのパスワード

以下のオプションは必須ではありません。

オプション	説明
-d ファミリドメイン	ファミリーグループのドメイン。-d が指定されない場合には、-n で指定したドメインが使用される
-h	コマンドを使用するための構文を印刷する

オプション	説明
-i 入力ファイル	コマンドラインではなく、ファイルからコマンド情報を読み取る
-p <i>ida</i> ポート	iDA サーバがリッスンしている別の TCP ポートを指定する場合に、このオプションを使用する。指定されない場合には、デフォルトの <i>ida</i> ポートが使用される。インストール時にデフォルトが設定されていない場合には、80 が使用される
-X <i>ida</i> ホスト	ディレクトリサーバが動作している別のホストを指定する。 -X オプションを指定しても、そのサーバが応答しない場合には、このコマンドの実行は失敗に終わる。デフォルトのサーバへの接続は試行されない。指定されない場合には、デフォルトの <i>ida</i> ホストが使用される。インストール時にデフォルトが設定されていない場合には、ローカルホストが使用される
-s	iDA サーバに接続するために SSL (Secure Socket Layer) を使用する
-v	デバッグ出力を可能にする

例

既存のファミリグループを削除するには：

```
imadmin family delete -D chris -n siroe.com -w bolton -w smith
```

imadmin family modify

`imadmin family modify` コマンドは、ファミリグループのディレクトリエントリの属性を変更するためのものです。一度に複数のファミリグループを変更する場合には、`-i` オプションを使用します。

構文

```
imadmin family modify -D ログイン -m ファミリ名 -n ドメイン  
-w パスワード [-A [+|-] 属性名 : 値] [-d ファミリドメイン] [-h]  
[-i 入力ファイル] [-p ida ポート] [-X ida ホスト] [-s] [-v]
```

オプション

以下のオプションは必須です。

オプション	説明
-D ログイン	このコマンドの実行権限を有するユーザのユーザ ID
-m ファミリ名	ファミリーグループの名前。ファミリー名は、空白文字を含まない1つの単語でなければならない
-n ドメイン	-D オプションで指定したユーザのドメイン
-w パスワード	-D オプションで指定したユーザのパスワード

以下のオプションは必須ではありません。

オプション	説明
-A [+ -] 属性名: 値	<p>変更する属性。属性名は、LDAP スキーマに定義されており、ディレクトリ内に存在するその属性の現在値をすべて置き換える。複数の属性を一度に変更する場合、あるいは同一の属性に複数の値を指定する場合には、このオプションを繰り返すことができる</p> <p>属性名の前にある“+”は、現在の属性リストに値を追加することを表す。“-”は、値を削除することを表す。“-”を使用する場合で、コマンドラインでコマンドを指定する場合は、“-”の前に円記号(¥)を2つ入力する。入力ファイル内にオプションが提供されている場合は、“-”の前に円記号(¥)を1つ入力する</p>
-d ファミリドメイン	ファミリーグループのドメイン。-d が指定されない場合には、-n で指定したドメインが使用される
-h	コマンドを使用するための構文を印刷する
-i 入力ファイル	コマンドラインではなく、ファイルからコマンド情報を読み取る
-p <i>ida</i> ポート	iDA サーバがリッスンしている別の TCP ポートを指定する場合に、このオプションを使用する。指定されない場合には、デフォルトの <i>ida</i> ポートが使用される。インストール時にデフォルトが設定されていない場合には、80 が使用される
-X <i>ida</i> ホスト	企業サーバが動作している別のホストを指定する。-X オプションを指定しても、そのサーバが応答しない場合には、このコマンドの実行は失敗に終わる。デフォルトのサーバへの接続は試行されない。指定されない場合には、デフォルトの <i>ida</i> ホストが使用される。インストール時にデフォルトが設定されていない場合には、ローカルホストが使用される

オプション	説明
-s	iDA サーバに接続するために SSL (Secure Socket Layer) を使用する
-v	デバッグ出力を可能にする

例

既存のファミリーグループを変更するには：

```
imadmin family modify -D chris -m smith -n siroe.com ¥
-w bolton -A description:"new family"
```

imadmin family purge

`imadmin family purge` コマンドは、削除済みのファミリーグループをすべて Messaging Server システムから永久に削除します。

定期的なメンテナンス操作の一部として `imadmin family purge` コマンドを使用し、指定の猶予期間を超えた削除済みのファミリーグループをすべて削除します。

必要に応じてこのコマンドを手作業で呼び出し、ページを実行することもできます。

このコマンドを呼び出すと、以下の順序で処理が行われます。

1. ディレクトリが検索され、Messaging Server のファミリーグループリストが作成されます。そのエントリには、削除のマークが付けられており、指定の猶予期間を過ぎているファミリーグループが含まれています (インストール時に、猶予期間のデフォルト値が 10 日間に設定されています)。
2. 各ファミリーグループのディレクトリエントリ全体が削除されます。
3. ファミリーグループがページされると、そのファミリーグループ内のすべてのユーザもページされます。

削除解除用のユーティリティはありません。ただし、ページまでの猶予期間が切れる前で、ページがエントリに対して実行されるように設定されている場合であれば、管理者が任意に `ldapmodify` コマンドを使って、ファミリーグループエントリのステータス属性を「active」に変更することができます。

複数のメッセージストア

imadmin family purge ユーティリティを複数のメッセージストアで使用するためには、resources.properties ファイルを変更する必要があります。各メッセージストアとそれに関連する Administration Server ごとに、resource.properties という iPlanet Delegated Administrator ファイルに MsgSvr\$N-name、MsgSvr\$N-adminurl、および MsgSvr\$N-cgipath を追加します。このファイルは `IDA_INSTALL_DIRECTORY/nda/classes/netscape/nda/servlet/` ディレクトリで検索します。

これらの設定パラメータの説明については、『iPlanet Delegated Administrator for Messaging and Collaboration インストールおよび管理者ガイド』を参照してください。

iPlanet Delegated Administrator ホストから Administration Server ホストへの接続を許可するためには、必要に応じて Administration Server の接続の制限をすべて変更します。これらの変更は、Administration Server Console の「構成」タブで行います。

構文

```
imadmin family purge -D ログイン -n ドメイン -w パスワード
[-d ファミリドメイン] [-g 猶予] [-h] [-i 入力ファイル] [-m ファミリ名]
[-P] [-p ida ポート] [-X ida ホスト] [-s] [-v]
```

オプション

以下のオプションは必須です。

オプション	説明
-D ログイン	このコマンドの実行権限を有するユーザのユーザ ID
-n ドメイン	-D オプションで指定したユーザのドメイン
-w パスワード	-D オプションで指定したユーザのパスワード

以下のオプションは必須ではありません。

オプション	説明
-d ファミリドメイン	ページするファミリグループのドメイン。-d が指定されない場合には、-n で指定したドメインが使用される

オプション	説明
-g 猶予	ファミリグループをパージするまでの猶予期間 (日数)。「猶予」で指定した日数に満たないファミリグループは、削除のマークが付いていてもパージされない。「0」は直ちにパージすることを表す。デフォルト値は、サーバの設定ファイルから読み取られる。インストール時のデフォルト値は 10 日間に設定されている
-h	コマンドを使用するための構文を印刷する
-i 入力ファイル	コマンドラインではなく、ファイルからコマンド情報を読み取る
-m ファミリ名	ファミリグループの名前。ファミリ名は、空白文字を含まない 1 つの単語でなければならない。-m が指定されていない場合は、-d で指定されたドメイン内で「削除済み」としてマークされたすべてのファミリグループがパージされる
-P	プレビューのみ。処理は行わない
-p <i>ida</i> ポート	iDA サーバがリッスンしている別の TCP ポートを指定する場合に、このオプションを使用する。指定されない場合には、デフォルトの <i>ida</i> ポートが使用される。インストール時にデフォルトが設定されていない場合には、80 が使用される
-x <i>ida</i> ホスト	企業サーバが動作している別のホストを指定する。-X オプションを指定しても、そのサーバが応答しない場合には、このコマンドの実行は失敗に終わる。デフォルトのサーバへの接続は試行されない。指定されない場合には、デフォルトの <i>ida</i> ホストが使用される。インストール時にデフォルトが設定されていない場合には、ローカルホストが使用される
-s	iDA サーバに接続するために SSL (Secure Socket Layer) を使用する
-v	デバッグ出力を可能にする

例

既存のファミリグループをパージするには：

```
imadmin family purge -D chris -n siroe.com -w bolton ¥
-d domain.com -m familyname
```

imadmin family search

imadmin family search コマンドは、ファミリグループに関連するディレクトリの全プロパティを取得するためのものです。複数のファミリグループに関連するディレクトリの全プロパティを取得する場合には、-i オプションを使用します。

構文

```
imadmin family search -D ログイン -n ドメイン -w パスワード
[-d ファミリドメイン] [-h] [-i 入力ファイル] [-m ファミリ名]
[-p ida ポート] [-X ida ホスト] [-s] [-v]
```

オプション

以下のオプションは必須です。

オプション	説明
-D ログイン	このコマンドの実行権限を有するユーザのユーザ ID
-n ドメイン	-D オプションで指定したユーザのドメイン
-w パスワード	-D オプションで指定したユーザのパスワード

以下のオプションは必須ではありません。

オプション	説明
-d ファミリドメイン	ファミリグループのドメイン。-d が指定されない場合には、-n で指定したドメインが使用される
-h	コマンドを使用するための構文を印刷する
-i 入力ファイル	コマンドラインではなく、ファイルからコマンド情報を読み取る
-m ファミリ名	ファミリグループの名前 -m が指定されていない場合は、-d で指定されたドメイン内のすべてのファミリグループが表示される
-p <i>ida</i> ポート	iDA サーバがリスンしている別の TCP ポートを指定する場合に、このオプションを使用する。指定されない場合には、デフォルトの <i>ida</i> ポートが使用される。インストール時にデフォルトが設定されていない場合には、80 が使用される

オプション	説明
-X <i>ida</i> ホスト	企業サーバが動作している別のホストを指定する。-X オプションを指定しても、そのサーバが応答しない場合には、このコマンドの実行は失敗に終わる。デフォルトのサーバへの接続は試行されない。指定されない場合には、デフォルトの <i>ida</i> ホストが使用される。インストール時にデフォルトが設定されていない場合には、ローカルホストが使用される
-s	iDA サーバに接続するために SSL (Secure Socket Layer) を使用する
-v	デバッグ出力を可能にする

例

ドメイン domain1.com 内のファミリーグループを検索するには:

```
imadmin family search -D chris -w bolton -d domain1.com ¥
-n siroe.com
```

imadmin family-admin add

imadmin family-admin add コマンドは、ユーザにファミリー管理者権限を与えるためのものです。

構文

```
imadmin family-admin add -D ログイン -l ログイン -m ファミリ名 -n ドメ
イン -w パスワード [-d ファミリドメイン] [-h] [-i 入力ファイル]
[-p ida ポート] [-X ida ホスト] [-s] [-v]
```

オプション

以下のオプションは必須です。

オプション	説明
-D ログイン	このコマンドの実行権限を有するユーザのユーザ ID

オプション	説明
-l ログイン	-m オプションで指定されたファミリグループ管理者のグループに追加するユーザのユーザ ID
-m ファミリ名	ファミリグループの名前
-n ドメイン	-D オプションで指定したユーザのドメイン
-w パスワード	-D オプションで指定したユーザのパスワード

以下のオプションは必須ではありません。

オプション	説明
-d ファミリドメイン	ファミリグループのドメイン。-d が指定されない場合には、-n で指定したドメインが使用される
-h	コマンドを使用するための構文を印刷する
-i 入力ファイル	コマンドラインではなく、ファイルからコマンド情報を読み取る
-p <i>ida</i> ポート	iDA サーバがリッスンしている別の TCP ポートを指定する場合に、このオプションを使用する。指定されない場合には、デフォルトの <i>ida</i> ポートが使用される。インストール時にデフォルトが設定されていない場合には、80 が使用される
-x <i>ida</i> ホスト	企業サーバが動作している別のホストを指定する。-x オプションを指定しても、そのサーバが応答しない場合には、このコマンドの実行は失敗に終わる。デフォルトのサーバへの接続は試行されない。指定されない場合には、デフォルトの <i>ida</i> ホストが使用される。インストール時にデフォルトが設定されていない場合には、ローカルホストが使用される
-s	iDA サーバに接続するために SSL (Secure Socket Layer) を使用する
-v	デバッグ出力を可能にする

例

ユーザ ID が `parent1` であるユーザにファミリグループ `Smith` のファミリ管理者権限を与えるには：

```
imadmin family-admin add -D chris -n siroe.com -w bolton ¥
-d test1.com -l parent1 -m Smith
```

imadmin family-admin remove

imadmin family-admin remove コマンドは、ユーザからファミリー管理者権限を取り消すためのものです。

構文

```
imadmin family-admin remove -D ログイン -l ログイン -m ファミリ名 -n
ドメイン -w パスワード [-d ファミリドメイン] [-h] [-i 入力ファイル]
[-p ida ポート] [-X ida ホスト] [-s] [-v]
```

オプション

以下のオプションは必須です。

オプション	説明
-D ログイン	このコマンドの実行権限を有するユーザのユーザ ID
-l ログイン	ファミリー管理者のユーザ ID
-m ファミリ名	ファミリーグループの名前
-n ドメイン	-D オプションで指定したユーザのドメイン
-w パスワード	-D オプションで指定したユーザのパスワード

以下のオプションは必須ではありません。

オプション	説明
-d ファミリドメイン	ファミリーグループのドメイン。-d が指定されない場合には、-n で指定したドメインが使用される
-h	コマンドを使用するための構文を印刷する
-i 入力ファイル	コマンドラインではなく、ファイルからコマンド情報を読み取る
-p <i>ida</i> ポート	iDA サーバがリスンしている別の TCP ポートを指定する場合に、このオプションを使用する。指定されない場合には、デフォルトの <i>ida</i> ポートが使用される。インストール時にデフォルトが設定されていない場合には、80 が使用される

オプション	説明
-X <i>ida</i> ホスト	企業サーバが動作している別のホストを指定する。-X オプションを指定しても、そのサーバが応答しない場合には、このコマンドの実行は失敗に終わる。デフォルトのサーバへの接続は試行されない。指定されない場合には、デフォルトの <i>ida</i> ホストが使用される。インストール時にデフォルトが設定されていない場合には、ローカルホストが使用される
-s	iDA サーバに接続するために SSL (Secure Socket Layer) を使用する
-v	デバッグ出力を可能にする

例

ユーザ ID が `parent1` であるユーザからファミリグループ `Smith` のファミリ管理者権限を削除するには：

```
imadmin family-admin remove -D chris -n siroe.com -w bolton ¥
-d test1.com -l parent1 -m Smith
```

imadmin family-admin search

`imadmin family-admin search` コマンドは、特定のファミリグループのファミリ管理者権限を有するユーザを検索し、表示するためのものです。

構文

```
imadmin family-admin search -D ログイン -m ファミリ名 -n ドメイン
-w パスワード [-d ファミリドメイン] [-h] [-i 入力ファイル]
[-p ida ポート] [-X ida ホスト] [-s] [-v]
```

オプション

以下のオプションは必須です。

オプション	説明
-D ログイン	このコマンドの実行権限を有するユーザのユーザ ID

オプション	説明
-m ファミリ名	ファミリグループの名前
-n ドメイン	-D オプションで指定したユーザのドメイン
-w パスワード	-D オプションで指定したユーザのパスワード

以下のオプションは必須ではありません。

オプション	説明
-d ファミリドメイン	ファミリグループのドメイン。-d が指定されない場合には、-n で指定したドメインが使用される
-h	コマンドを使用するための構文を印刷する
-i 入力ファイル	コマンドラインではなく、ファイルからコマンド情報を読み取る
-p <i>ida</i> ポート	iDA サーバがリッスンしている別の TCP ポートを指定する場合に、このオプションを使用する。指定されない場合には、デフォルトの <i>ida</i> ポートが使用される。インストール時にデフォルトが設定されていない場合には、80 が使用される
-x <i>ida</i> ホスト	企業サーバが動作している別のホストを指定する。-x オプションを指定しても、そのサーバが応答しない場合には、このコマンドの実行は失敗に終わる。デフォルトのサーバへの接続は試行されない。指定されない場合には、デフォルトの <i>ida</i> ホストが使用される。インストール時にデフォルトが設定されていない場合には、ローカルホストが使用される
-s	iDA サーバに接続するために SSL (Secure Socket Layer) を使用する
-v	デバッグ出力を可能にする

例

```
imadmin family-admin search -D chris -w bolton -n siroe.com ¥
-m MyFamily
```

imadmin family-member create

imadmin family-member create コマンドは、特定のファミリーグループにユーザを追加するためのものです。

構文

```
imadmin family-member create -D ログイン -F 名 -H メールホスト
-L 姓 -l ログイン -m ファミリ名 -n ドメイン -w パスワード -W パスワード
[-A [+|-] 属性名: 値] [-d ファミリドメイン] [-h] [-I イニシャル]
[-i 入力ファイル] [-p ida ポート] [-X ida ホスト] [-s] [-v]
```

オプション

以下のオプションは必須です。

オプション	説明
-D ログイン	このコマンドの実行権限を有するユーザのユーザ ID
-F 名	ファミリーメンバーの名 (ファーストネーム)
-H メールホスト	ファミリーメンバーのメールホスト
-L 姓	ファミリーメンバーの姓 (ラストネーム)
-l ログイン	ファミリーメンバーのユーザ ID
-m ファミリ名	ファミリーグループの名前
-n ドメイン	-D オプションで指定したユーザのドメイン
-w パスワード	-D オプションで指定したユーザのパスワード
-W パスワード	ユーザのパスワード

以下のオプションは必須ではありません。

オプション	説明
-A [+ -] 属性名 : 値	<p>変更する属性。属性名は、LDAP スキーマに定義されており、ディレクトリ内に存在するその属性の現在値をすべて置き換える。複数の属性を一度に変更する場合、あるいは同一の属性に複数の値を指定する場合には、このオプションを繰り返すことができる</p> <p>属性名の前にある“+”は、現在の属性リストに値を追加することを表す。“-”は、値を削除することを表す。“-”を使用する場合で、コマンドラインでコマンドを指定する場合は、“-”の前に円記号(¥)を2つ入力する。入力ファイル内にオプションが提供されている場合は、“-”の前に円記号(¥)を1つ入力する</p>
-d ファミリドメイン	ファミリグループのドメイン。-d が指定されない場合には、-n で指定したドメインが使用される
-h	コマンドを使用するための構文を印刷する
-I イニシャル	ファミリメンバーのミドルイニシャル
-i 入力ファイル	コマンドラインではなく、ファイルからコマンド情報を読み取る
-p <i>ida</i> ポート	iDA サーバがリスンしている別の TCP ポートを指定する場合に、このオプションを使用する。指定されない場合には、デフォルトの <i>ida</i> ポートが使用される。インストール時にデフォルトが設定されていない場合には、80 が使用される
-X <i>ida</i> ホスト	企業サーバが動作している別のホストを指定する。-x オプションを指定しても、そのサーバが応答しない場合には、このコマンドの実行は失敗に終わる。デフォルトのサーバへの接続は試行されない。指定されない場合には、デフォルトの <i>ida</i> ホストが使用される。インストール時にデフォルトが設定されていない場合には、ローカルホストが使用される
-s	iDA サーバに接続するために SSL (Secure Socket Layer) を使用する
-v	デバッグ出力を可能にする

例

ユーザ ID が peter であるファミリメンバーを、ファミリグループ Athens4 に作成するには:

```
imadmin family-member create -D chris -n siroe.com -w bolton ¥
-d test.com -H mailhost.siroe.com -l peter -m Athens4 -F Peter ¥
-L Beck -W secret
```

imadmin family-member delete

imadmin family-member delete コマンドは、ファミリグループメンバーに削除済みのマークを付けるためのものです。ディレクトリからエントリをページするには、imadmin user purge コマンドを使用します。

構文

```
imadmin family-member delete -D ログイン -l ログイン -m ファミリ名 -n
ドメイン -w パスワード [-d ファミリドメイン] [-h] [-i 入力ファイル]
[-p ida ポート] [-X ida ホスト] [-s] [-v]
```

オプション

以下のオプションは必須です。

オプション	説明
-D ログイン	このコマンドの実行権限を有するユーザのユーザ ID
-l ログイン	ファミリメンバーのユーザ ID
-m ファミリ名	ファミリグループの名前
-n ドメイン	-D オプションで指定したユーザのドメイン
-w パスワード	-D オプションで指定したユーザのパスワード

以下のオプションは必須ではありません。

オプション	説明
-d ファミリドメイン	ファミリグループのドメイン。-d が指定されない場合には、-n で指定したドメインが使用される
-h	コマンドを使用するための構文を印刷する
-i 入力ファイル	コマンドラインではなく、ファイルからコマンド情報を読み取る
-p <i>ida</i> ポート	iDA サーバがリッスンしている別の TCP ポートを指定する場合に、このオプションを使用する。指定されない場合には、デフォルトの <i>ida</i> ポートが使用される。インストール時にデフォルトが設定されていない場合には、80 が使用される
-x <i>ida</i> ホスト	企業サーバが動作している別のホストを指定する。-x オプションを指定しても、そのサーバが応答しない場合には、このコマンドの実行は失敗に終わる。デフォルトのサーバへの接続は試行されない。指定されない場合には、デフォルトの <i>ida</i> ホストが使用される。インストール時にデフォルトが設定されていない場合には、ローカルホストが使用される
-s	iDA サーバに接続するために SSL (Secure Socket Layer) を使用する
-v	デバッグ出力を可能にする

例

ファミリグループ Athens4 で、ユーザ ID が bill であるファミリメンバーに削除済みのマークを付けるには：

```
imadmin family-member delete -D chris -n siroe.com -w bolton ¥
-l bill -m Athens4
```

imadmin family-member remove

imadmin family-member remove コマンドは、指定ユーザのメンバーシップを削除するためのものです。

構文

```
imadmin family-admin remove -D ログイン -l ログイン -m ファミリ名 -n
ドメイン -w パスワード [-d ファミリドメイン] [-h] [-i 入力ファイル]
[-p ida ポート] [-X ida ホスト] [-s] [-v]
```

オプション

以下のオプションは必須です。

オプション	説明
-D ログイン	このコマンドの実行権限を有するユーザのユーザ ID
-m ファミリ名	ファミリグループの名前
-l ログイン	ファミリメンバーのユーザ ID
-n ドメイン	-D オプションで指定したユーザのドメイン
-w パスワード	-D オプションで指定したユーザのパスワード

以下のオプションは必須ではありません。

オプション	説明
-d ファミリドメイン	ファミリグループのドメイン。-d が指定されない場合には、-n で指定したドメインが使用される
-h	コマンドを使用するための構文を印刷する
-i 入力ファイル	コマンドラインではなく、ファイルからコマンド情報を読み取る
-p <i>ida</i> ポート	iDA サーバがリスンしている別の TCP ポートを指定する場合に、このオプションを使用する。指定されない場合には、デフォルトの <i>ida</i> ポートが使用される。インストール時にデフォルトが設定されていない場合には、80 が使用される
-X <i>ida</i> ホスト	企業サーバが動作している別のホストを指定する。-X オプションを指定しても、そのサーバが応答しない場合には、このコマンドの実行は失敗に終わる。デフォルトのサーバへの接続は試行されない。指定されない場合には、デフォルトの <i>ida</i> ホストが使用される。インストール時にデフォルトが設定されていない場合には、ローカルホストが使用される

オプション	説明
-s	iDA サーバに接続するために SSL (Secure Socket Layer) を使用する
-v	デバッグ出力を可能にする

例

ファミリーメンバーを削除するには:

```
imadmin family-member remove -D chris -n siroe.com -w bolton ¥
-d test.com -l john -m Family1
```

imadmin family-member search

imadmin family-member search コマンドは、ファミリーグループのメンバーを検索するためのものです。

構文

```
imadmin family-member search -D ログイン -m ファミリ名 -n ドメイン
-w パスワード [-d ファミリドメイン] [-h] [-i 入力ファイル]
[-l ファミリメンバー] [-p ida ポート] [-X ida ホスト] [-s] [-v]
```

オプション

以下のオプションは必須です。

オプション	説明
-D ログイン	このコマンドの実行権限を有するユーザのユーザ ID
-m ファミリ名	ファミリーグループの名前
-n ドメイン	-D オプションで指定したユーザのドメイン
-w パスワード	-D オプションで指定したユーザのパスワード

以下のオプションは必須ではありません。

オプション	説明
-d ファミリドメイン	ファミリグループのドメイン。-d が指定されない場合には、-n で指定したドメインが使用される
-h	コマンドを使用するための構文を印刷する
-i 入力ファイル	コマンドラインではなく、ファイルからコマンド情報を読み取る
-l ファミリメンバー	検索するファミリメンバーのユーザ ID を指定する。-l が指定されていない場合は、-m オプションで指定されたファミリグループのすべてのメンバーが表示される
-p <i>ida</i> ポート	iDA サーバがリッスンしている別の TCP ポートを指定する場合に、このオプションを使用する。指定されない場合には、デフォルトの <i>ida</i> ポートが使用される。インストール時にデフォルトが設定されていない場合には、80 が使用される
-X <i>ida</i> ホスト	企業サーバが動作している別のホストを指定する。-X オプションを指定しても、そのサーバが応答しない場合には、このコマンドの実行は失敗に終わる。デフォルトのサーバへの接続は試行されない。指定されない場合には、デフォルトの <i>ida</i> ホストが使用される。インストール時にデフォルトが設定されていない場合には、ローカルホストが使用される
-s	iDA サーバに接続するために SSL (Secure Socket Layer) を使用する
-v	デバッグ出力を可能にする

例

sesta.com ドメイン内の straycats1 ファミリの arabella ファミリメンバーを検索するには：

```
imadmin family-member search -D serviceadmin -w serviceadmin ¥
-n siroe.com -m straycats1 -d sesta.com -l arabella
```

imadmin group create

imadmin group create コマンドは、Messaging Server システムにグループを追加するためのものです。一度に複数のグループを作成する場合には、-i オプションを使用します。

電子メール配布リストは、グループの一種です。メッセージがグループアドレスに送信されると、Messaging Server によってそのグループ内のメンバー全員にメッセージが送信されます。

構文

```
imadmin group create -e グループ電子メール -D ログイン -G グループ名 -n
ドメイン -w パスワード [-A [+|-] 属性名:値] [-d グループドメイン] [-h]
[-H メールホスト] [-i 入力ファイル] [-M ユーザ] [-m ユーザ]
[-o 所有者] [-p ida ポート] [-r モデレータ] [-X ida ホスト] [-s] [-v]
```

オプション

以下のオプションは必須です。

オプション	説明
-e グループ電子メール	グループの電子メールアドレス
-D ログイン	このコマンドの実行権限を有するユーザのユーザ ID
-n ドメイン	-D オプションで指定したユーザのドメイン
-G グループ名	グループの名前 (例: mktg-list)
-w パスワード	-D オプションで指定したユーザのパスワード

以下のオプションは必須ではありません。

オプション	説明
-A [+ -] 属性名:値	<p>変更する属性。属性名は、LDAP スキーマに定義されており、ディレクトリ内に存在するその属性の現在値をすべて置き換える。複数の属性を一度に変更する場合、あるいは同一の属性に複数の値を指定する場合には、このオプションを繰り返すことができる</p> <p>属性名の前にある“+”は、現在の属性リストに値を追加することを表す。“-”は、値を削除することを表す。“-”を使用する場合で、コマンドラインでコマンドを指定する場合は、“-”の前に円記号(¥)を2つ入力する。入力ファイル内にオプションが提供されている場合は、“-”の前に円記号(¥)を1つ入力する</p>

オプション	説明
-d グループドメイン	完全なドメイン名 (例:bravo.com) デフォルトは、ローカルのドメイン。-d が指定されない場合には、-n で指定したドメインが使用される
-h	コマンドを使用するための構文を印刷する
-H メールホスト	このグループが応答するメールホスト (例:mailhost.bavo.com)。デフォルトは、ローカルのメールホスト
-i 入力ファイル	コマンドラインではなく、ファイルからコマンド情報を読み取る
-m ユーザ	このグループに追加された外部メンバーのユーザ ID。複数のメンバーが存在する場合には、複数の -M オプションを使用する
-m ユーザ	このグループに追加された内部メンバーのユーザ ID。複数のメンバーが存在する場合には、複数の -m オプションを使用する
-o 所有者	グループ所有者の電子メールアドレス。所有者は、配布リストの責任者。所有者は、配布リストメンバーを追加したり削除することができる
-r モデレータ	モデレータの電子メールアドレス
-p <i>ida</i> ポート	iDA サーバがリッスンしている別の TCP ポートを指定する場合に、このオプションを使用する。指定されない場合には、デフォルトの <i>ida</i> ポートが使用される。インストール時にデフォルトが設定されていない場合には、80 が使用される
-X <i>ida</i> ホスト	企業サーバが動作している別のホストを指定する。-X オプションを指定しても、そのサーバが応答しない場合には、このコマンドの実行は失敗に終わる。デフォルトのサーバへの接続は試行されない。指定されない場合には、デフォルトの <i>ida</i> ホストが使用される。インストール時にデフォルトが設定されていない場合には、ローカルホストが使用される
-s	iDA サーバに接続するために SSL (Secure Socket Layer) を使用する
-v	デバッグ出力を可能にする

例

ドメイン domain1.com に testgroup というグループを作成するには:

```
imadmin group create -D chris -e testgroup@siroe.com ¥
-n siroe.com -w bolton -G testgroup -d domain1.com ¥
-m lorca@siroe.com -M achiko@sesta.com
```

imadmin group delete

imadmin group delete コマンドは、Messaging Server システムからグループを削除するためのものです。一度に複数のグループを削除する場合には、`-i` オプションを使用します。

imadmin group delete コマンドを呼び出すと、グループの `inetmailgroupstatus` 属性が「削除済み」に設定されます。

削除解除用のユーティリティはありません。ただし、ページまでの猶予期間が切れる前で、ページがエントリに対して実行されるように設定されている場合であれば、管理者が任意に `ldapmodify` コマンドを使って、グループエントリのステータス属性を「active」に変更することができます。

構文

```
imadmin group delete -D ログイン -G グループ名 -n ドメイン -w パスワード
[-d グループドメイン] [-h] [-i 入力ファイル] [-p ida ポート]
[-X ida ホスト] [-s] [-v]
```

オプション

以下のオプションは必須です。

オプション	説明
<code>-D ログイン</code>	このコマンドの実行権限を有するユーザのユーザ ID
<code>-G グループ名</code>	削除するグループの名前。例: <code>mktg-list</code>
<code>-n ドメイン</code>	<code>-D</code> オプションで指定したユーザのドメイン
<code>-w パスワード</code>	<code>-D</code> オプションで指定したユーザのパスワード

以下のオプションは必須ではありません。

オプション	説明
-d グループドメイン	グループのドメイン。-d が指定されない場合には、-n オプションで指定したドメインが使用される
-h	コマンドを使用するための構文を印刷する
-i 入力ファイル	コマンドラインではなく、ファイルからコマンド情報を読み取る
-p <i>ida</i> ポート	iDA サーバがリスンしている別の TCP ポートを指定する場合に、このオプションを使用する。指定されない場合には、デフォルトの <i>ida</i> ポートが使用される。インストール時にデフォルトが設定されていない場合には、80 が使用される
-x <i>ida</i> ホスト	企業サーバが動作している別のホストを指定する。-x オプションを指定しても、そのサーバが応答しない場合には、このコマンドの実行は失敗に終わる。デフォルトのサーバへの接続は試行されない。指定されない場合には、デフォルトの <i>ida</i> ホストが使用される。インストール時にデフォルトが設定されていない場合には、ローカルホストが使用される
-s	iDA サーバに接続するために SSL (Secure Socket Layer) を使用する
-v	デバッグ出力を可能にする

例

グループ `testgroup@domain1.com` を削除するには：

```
imadmin group delete -D chris -G testgroup@domain1.com ¥
-n siroe.com -w bolton
```

imadmin group modify

`imadmin group modify` コマンドは、Messaging Server システム内に既に存在するグループの属性を変更するためのものです。一度に複数のグループを変更する場合には、-i オプションを使用します。

メーリングリストは、グループの一種です。メッセージがグループアドレスに送信されると、Messaging Server によってそのグループ内のメンバー全員にメッセージが送信されます。

構文

```
imadmin group modify -D ログイン -G グループ名 -n ドメイン -w パスワード
[-A [+|-] 属性名 : 値] [-d グループドメイン] [-h] [-i 入力ファイル]
[-p ida ポート] [-X ida ホスト] [-s] [-v]
```

オプション

以下のオプションは必須です。

オプション	説明
-D ログイン	このコマンドの実行権限を有するユーザのユーザ ID
-G グループ名	変更するグループの名前。例: mktg-list。グループの名前を変更することはできない
-n ドメイン	-D オプションで指定したユーザのドメイン
-w パスワード	-D オプションで指定したユーザのパスワード

以下のオプションは必須ではありません。

オプション	説明
-A [+ -] 属性名 : 値	<p>変更する属性。属性名は、LDAP スキーマに定義されており、ディレクトリ内に存在するその属性の現在値をすべて置き換える。複数の属性を一度に変更する場合、あるいは同一の属性に複数の値を指定する場合には、このオプションを繰り返すことができる</p> <p>属性名の前にある“+”は、現在の属性リストに値を追加することを表す。“-”は、値を削除することを表す。“-”を使用する場合で、コマンドラインでコマンドを指定する場合は、“-”の前に円記号(¥)を2つ入力する。入力ファイル内にオプションが提供されている場合は、“-”の前に円記号(¥)を1つ入力する</p>
-d グループドメイン	グループのドメイン。-d が指定されない場合には、-n オプションで指定したドメインが使用される
-h	コマンドを使用するための構文を印刷する
-i 入力ファイル	コマンドラインではなく、ファイルからコマンド情報を読み取る

オプション	説明
-p <i>ida</i> ポート	iDA サーバがリスンしている別の TCP ポートを指定する場合に、このオプションを使用する。指定されない場合には、デフォルトの <i>ida</i> ポートが使用される。インストール時にデフォルトが設定されていない場合には、80 が使用される
-X <i>ida</i> ホスト	企業サーバが動作している別のホストを指定する。-X オプションを指定しても、そのサーバが応答しない場合には、このコマンドの実行は失敗に終わる。デフォルトのサーバへの接続は試行されない。指定されない場合には、デフォルトの <i>ida</i> ホストが使用される。インストール時にデフォルトが設定されていない場合には、ローカルホストが使用される
-s	iDA サーバに接続するために SSL (Secure Socket Layer) を使用する
-v	デバッグ出力を可能にする

例

グループ `testgroup@domain1.com` を変更するには：

```
imadmin group modify -D chris -d siroe.com -G testgroup ¥
-n siroe.com -w bolton
```

imadmin group purge

`imadmin group purge` コマンドは、削除済みのグループをすべて Messaging Server システムから永久に削除するためのものです。

定期的なメンテナンス操作の一部として `imadmin group purge` コマンドを使用し、指定の猶予期間を超えた削除済みのグループをすべて永久に削除します。

必要に応じてこのコマンドを手作業で呼び出し、ページを実行することもできます。

このコマンドを呼び出すと、以下の順序で処理が行われます。

1. ディレクトリが検索され、Messaging Server のグループリストが作成されます。そのエントリには、削除のマークが付けられており、指定の猶予期間を過ぎているグループが含まれています (インストール時に、猶予期間のデフォルト値が 10 日間に設定されています)。
2. -s オプションが指定されると、各グループのディレクトリエントリ全体が削除されるか、またはメール関連のすべての属性が削除されます。

削除解除用のユーティリティはありません。ただし、ページまでの猶予期間が切れる前で、ページがエントリに対して実行されるように設定されている場合であれば、管理者が任意に `ldapmodify` コマンドを使って、グループエントリのステータス属性を「アクティブ」に変更することができます。

構文

```
imadmin group search -D ログイン -n ドメイン -w パスワード
[-d グループドメイン] [-G グループ名] [-g 猶予] [-h] [-i 入力ファイル]
[-P] [-p ida ポート] [-S] [-s] [-v] [-X ida ホスト]
```

オプション

以下のオプションは必須です。

オプション	説明
-D ログイン	このコマンドの実行権限を有するユーザのユーザ ID
-n ドメイン	-D オプションで指定したユーザのドメイン
-w パスワード	-D オプションで指定したユーザのパスワード

以下のオプションは必須ではありません。

オプション	説明
-d グループドメイン	ページするグループのドメイン。-d が指定されない場合には、-n のドメインが使用される
-G グループ名	ページするグループの名前。例:mktg-list。グループの名前を変更することはできない
-g 猶予	グループをページするまでの猶予期間(日数)。「猶予」で指定した日数に満たないグループは、削除のマークが付いていてもページされない。「0」は直ちにページすることを表す。デフォルト値は、サーバの設定ファイルから読み取られる。インストール時のデフォルト値は 10 日間に設定されている
-h	コマンドを使用するための構文を印刷する
-i 入力ファイル	コマンドラインではなく、ファイルからコマンド情報を読み取る

オプション	説明
-P	プレビューのみ
-p <i>ida</i> ポート	iDA サーバがリッスンしている別の TCP ポートを指定する場合に、このオプションを使用する。指定されない場合には、デフォルトの <i>ida</i> ポートが使用される。インストール時にデフォルトが設定されていない場合には、80 が使用される
-X <i>ida</i> ホスト	企業サーバが動作している別のホストを指定する。-X オプションを指定しても、そのサーバが応答しない場合には、このコマンドの実行は失敗に終わる。デフォルトのサーバへの接続は試行されない。指定されない場合には、デフォルトの <i>ida</i> ホストが使用される。インストール時にデフォルトが設定されていない場合には、ローカルホストが使用される
-S	メール属性の削除のみ
-s	iDA サーバに接続するために SSL (Secure Socket Layer) を使用する
-v	デバッグ出力を可能にする

例

既存のグループをパージするには：

```
imadmin group purge -D chris -n siroe.com -w bolton ¥
-G groupname
```

imadmin group search

`imadmin group search` コマンドは、グループに関連するディレクトリの全プロパティを取得するためのものです。複数のグループに関連するディレクトリの全プロパティを取得するには、`-i` オプションを使用します。

構文

```
imadmin group search -D ログイン -n ドメイン -w パスワード
[-d グループドメイン] [-G グループドメイン] [-h] [-i 入力ファイル]
[-p ida ポート] [-X ida ホスト] [-s] [-v]
```

オプション

以下のオプションは必須です。

オプション	説明
-D ログイン	このコマンドの実行権限を有するユーザのユーザ ID
-n ドメイン	-D オプションで指定したユーザのドメイン
-w パスワード	-D オプションで指定したユーザのパスワード

以下のオプションは必須ではありません。

オプション	説明
-d グループドメイン	検索するグループのドメイン。-d が指定されない場合には、-n のドメインが使用される
-G グループ名	検索するグループの名前。例: mktg-list。-G が指定されていない場合は、-d で指定されたドメイン内のすべてのグループが表示されます。
-h	コマンドを使用するための構文を印刷する
-i 入力ファイル	コマンドラインではなく、ファイルからコマンド情報を読み取る
-p <i>ida</i> ポート	iDA サーバがリッスンしている別の TCP ポートを指定する場合に、このオプションを使用する。指定されない場合には、デフォルトの <i>ida</i> ポートが使用される。インストール時にデフォルトが設定されていない場合には、80 が使用される
-X <i>ida</i> ホスト	企業サーバが動作している別のホストを指定する。-X オプションを指定しても、そのサーバが応答しない場合には、このコマンドの実行は失敗に終わる。デフォルトのサーバへの接続は試行されない。指定されない場合には、デフォルトの <i>ida</i> ホストが使用される。インストール時にデフォルトが設定されていない場合には、ローカルホストが使用される
-s	iDA サーバに接続するために SSL (Secure Socket Layer) を使用する
-v	デバッグ出力を可能にする

例

新しいグループを検索するには:

```
imadmin group search -D chris -n siroe.com -w password ¥
-G=newgroup
```

imadmin user create

imadmin user create コマンドは、Messaging Server システムにユーザを作成するためのものです。一度に複数のユーザを作成する場合には、-i オプションを使用します。

構文

```
imadmin user create -D ログイン -F 名 -L 姓 -l ユーザ id
-n ドメイン -w パスワード -w パスワード [-A [+|-] 属性名 : 値]
[-d ユーザドメイン] [-H ホスト名] [-h] [-I イニシャル]
[-i 入力ファイル] [-p ida ポート] [-X ida ホスト] [-s] [-v]
```

オプション

以下のオプションは必須です。

オプション	説明
-D ログイン	このコマンドの実行権限を有するユーザのユーザ ID
-F 名	ユーザの名 (ファーストネーム)
-L 姓	ユーザの姓 (ラストネーム)
-l ユーザ <i>id</i>	ユーザのログイン名
-n ドメイン	-D オプションで指定したユーザのドメイン
-w パスワード	ユーザのパスワード
-w パスワード	-D オプションで指定したユーザのパスワード

以下のオプションは必須ではありません。

オプション	説明
-A [+ -] 属性名 : 値	変更する属性。属性名は、LDAP スキーマに定義されており、ディレクトリ内に存在するその属性の現在値をすべて置き換える。複数の属性を一度に変更する場合、あるいは同一の属性に複数の値を指定する場合には、このオプションを繰り返すことができる 属性名の前にある“+”は、現在の属性リストに値を追加することを表す。“-”は、値を削除することを表す。“-”を使用する場合で、コマンドラインでコマンドを指定する場合は、“-”の前に円記号(¥)を2つ入力する。入力ファイル内にオプションが提供されている場合は、“-”の前に円記号(¥)を1つ入力する
-d ユーザドメイン	ユーザのドメイン。-d が指定されない場合には、-n の値が使用される
-H メールホスト	このユーザが応答するメールホスト (例 : mailhost.bavo.com)。デフォルトは、ローカルのメールホスト
-h	コマンドを使用するための構文を印刷する
-I イニシャル	ユーザのミドルイニシャル
-i 入力ファイル	コマンドラインではなく、ファイルからコマンド情報を読み取る
-p <i>ida</i> ポート	iDA サーバがリスンしている別の TCP ポートを指定する場合に、このオプションを使用する。指定されない場合には、デフォルトの <i>ida</i> ポートが使用される。インストール時にデフォルトが設定されていない場合には、80 が使用される
-x <i>ida</i> ホスト	企業サーバが動作している別のホストを指定する。-x オプションを指定しても、そのサーバが応答しない場合には、このコマンドの実行は失敗に終わる。デフォルトのサーバへの接続は試行されない。指定されない場合には、デフォルトの <i>ida</i> ホストが使用される。インストール時にデフォルトが設定されていない場合には、ローカルホストが使用される
-s	iDA サーバに接続するために SSL (Secure Socket Layer) を使用する
-v	デバッグ出力を可能にする

例

ユーザを作成するには：

```
imadmin user create -D chris -n siroe.com -w bolton -F Rachel ¥
-L Smith -l rsmith -W secret
```

imadmin user delete

imadmin user delete コマンドは、Messaging Server システムからユーザを削除し、inetuserstatus を「削除済み」に設定するためのものです。一度に複数のユーザを変更する場合には、-i オプションを使用します。

削除解除用のユーティリティはありません。ただし、ページまでの猶予期間が切れる前で、ページがエントリに対して実行されるように設定されている場合であれば、管理者が任意に ldapmodify コマンドを使って、ユーザエントリのステータス属性を「active」に変更することができます。

構文

```
imadmin user delete -D ログイン -l ユーザ名 -n ドメイン -w パスワード
[-d ユーザドメイン] [-h] [-i 入力ファイル] [-p ida ポート]
[-X ida ホスト] [-s] [-v]
```

オプション

以下のオプションは必須です。

オプション	説明
-D ログイン	このコマンドの実行権限を有するユーザのユーザ ID
-l ユーザ名	ユーザのユーザ ID
-n ドメイン	-D オプションで指定したユーザのドメイン
-w パスワード	-D オプションで指定したユーザのパスワード

以下のオプションは必須ではありません。

オプション	説明
-d ユーザドメイン	ユーザのドメイン。-d が指定されない場合には、-n のドメインが使用される
-h	コマンドを使用するための構文を印刷する
-i 入力ファイル	コマンドラインではなく、ファイルからコマンド情報を読み取る
-p <i>ida</i> ポート	iDA サーバがリスンしている別の TCP ポートを指定する場合に、このオプションを使用する。指定されない場合には、デフォルトの <i>ida</i> ポートが使用される。インストール時にデフォルトが設定されていない場合には、80 が使用される
-x <i>ida</i> ホスト	企業サーバが動作している別のホストを指定する。-x オプションを指定しても、そのサーバが応答しない場合には、このコマンドの実行は失敗に終わる。デフォルトのサーバへの接続は試行されない。指定されない場合には、デフォルトの <i>ida</i> ホストが使用される。インストール時にデフォルトが設定されていない場合には、ローカルホストが使用される
-s	iDA サーバに接続するために SSL (Secure Socket Layer) を使用する
-v	デバッグ出力を可能にする

例

ユーザを削除するには：

```
imadmin user delete -D chris -l user1 -n siroe.com -w bolton
```

imadmin user modify

imadmin user modify コマンドは、Messaging Server システム内に既存するユーザの属性を変更するためのものです。一度に複数のユーザを変更する場合には、-i オプションを使用します。

構文

```
imadmin user modify -D ログイン -l ユーザ id -n ドメイン -w パスワード
[-A [+|-] 属性名: 値] [-d ユーザドメイン] [-h] [-i 入力ファイル]
[-p ida ポート] [-X ida ホスト] [-s] [-v]
```

オプション

以下のオプションは必須です。

オプション	説明
-D ログイン	このコマンドの実行権限を有するユーザのユーザ ID
-l ユーザ <i>id</i>	ページするユーザのユーザ ID
-n ドメイン	-D オプションで指定したユーザのドメイン
-w パスワード	-D オプションで指定したユーザのパスワード

以下のオプションは必須ではありません。

オプション	説明
-A [+ -] 属性名: 値	<p>変更する属性。属性名は、LDAP スキーマに定義されており、ディレクトリ内に存在するその属性の現在値をすべて置き換える。複数の属性を一度に変更する場合、あるいは同一の属性に複数の値を指定する場合には、このオプションを繰り返すことができる</p> <p>属性名の前にある“+”は、現在の属性リストに値を追加することを表す。“-”は、値を削除することを表す。“-”を使用する場合で、コマンドラインでコマンドを指定する場合は、“-”の前に円記号(¥)を2つ入力する。入力ファイル内にオプションが提供されている場合は、“-”の前に円記号(¥)を1つ入力する</p>
-d ユーザドメイン	ユーザのドメイン。-d が指定されない場合には、-n オプションで指定したドメインが使用される
-h	コマンドを使用するための構文を印刷する
-i 入力ファイル	コマンドラインではなく、ファイルからコマンド情報を読み取る

オプション	説明
-p <i>ida</i> ポート	iDA サーバがリスンしている別の TCP ポートを指定する場合に、このオプションを使用する。指定されない場合には、デフォルトの <i>ida</i> ポートが使用される。インストール時にデフォルトが設定されていない場合には、80 が使用される
-x <i>ida</i> ホスト	企業サーバが動作している別のホストを指定する。-x オプションを指定しても、そのサーバが応答しない場合には、このコマンドの実行は失敗に終わる。デフォルトのサーバへの接続は試行されない。指定されない場合には、デフォルトの <i>ida</i> ホストが使用される。インストール時にデフォルトが設定されていない場合には、ローカルホストが使用される
-s	iDA サーバに接続するために SSL (Secure Socket Layer) を使用する
-v	デバッグ出力を可能にする

例

ユーザ `user1@domain1.com` を変更するには：

```
imadmin user modify -D chris -l sydney -d siroe.com ¥
-n siroe.com -w bolton
```

imadmin user purge

`imadmin user purge` コマンドは、ユーザを **Messaging Server** システムから永久に削除するためのものです。一度に複数のユーザを永久に削除する場合には、`-i` オプションを使用します。

定期的なメンテナンス操作の一部として `imadmin user purge` コマンドを使用し、指定の猶予期間を超えた削除済みのユーザをすべて永久に削除します。

必要に応じてこのコマンドを手作業で呼び出し、ページを実行することもできます。

このコマンドを呼び出すと、以下の順序で処理が行われます。

1. ディレクトリが検索され、**Messaging Server** のユーザリストが作成されます。そのエントリには、削除のマークが付けられており、指定の猶予期間を過ぎているユーザが含まれています (インストール時に、猶予期間のデフォルト値が 10 日間に設定されています)。
2. 各ユーザの個人用アドレス帳はディレクトリから削除されます。

3. 各ユーザのメールボックスはメッセージストアから削除されます。
4. `inetuserstatus` 属性値が削除されると、各ユーザのディレクトリエントリ全体が削除されます。`mailuserstatus` 属性が削除されると、各ユーザのメール関連の属性が削除されます。

削除解除用のユーティリティはありません。ただし、ページまでの猶予期間が切れる前で、ページがエントリに対して実行されるように設定されている場合であれば、管理者が任意に `ldapmodify` コマンドを使って、ユーザエントリのステータス属性を「アクティブ」に変更することができます。

パススルー認証

設定とユーザグループ用に別々のディレクトリが存在する場合、`imadmin user purge` を実行するためには、構成ディレクトリのパススルー認証がユーザグループディレクトリをポイントするように設定する必要があります。

これは、ユーザグループディレクトリで **Common Gateway Interface (CGI)** を実行してユーザメールボックスを削除する前に、**Administration Server** で実行されるサービス管理者の認証を渡します。

構成ディレクトリの `slapd.conf` ファイルに次の行を (一行で) 追加します。

```
plugin preoperation on "Pass Through Authentication"  
"SERVER_ROOT/lib/passthru-plugin.so"  
passthruauth_init"ldap://ugldap.varrius.com/SEARCH_BASE"
```

`SEARCH_BASE` は `o=varrius.com` または `o=internet` にすることができます。これはユーザグループディレクトリ内の **OSI** 接尾辞です。この検索ベースが構成ディレクトリにも存在するのであれば、範囲が狭いほうの検索ベースは、構成ディレクトリに存在しないという条件にする必要があります。たとえば、`dc=varrius`、`dc=com`、`o=internet` です。構成ディレクトリに接尾辞 (または検索ベース) も存在すると、その接尾辞は機能しません。

パススルー認証プラグインの使用方法については、以下のサイトを参照してください。
<http://docs.iplanet.com/docs/manuals/directory/41/technote/passthru.htm>。
`iPlanet Directory Server 5.x` を使用している場合は、
<http://docs.iplanet.com/docs/manuals/directory/51/html/ag/passthru.htm> を参照してください。

複数のメッセージストア

imadmin user purge ユーティリティを複数のメッセージストア全体で使用するためには、resources.properties ファイルを変更する必要があります。各メッセージストアとそれに関連する Administration Server ごとに、resource.properties という iPlanet Delegated Administrator ファイルに MsgSvr\$N-name、MsgSvr\$N-adminurl、および MsgSvr\$N-cgipath を追加します。このファイルは `IDA_INSTALL_DIRECTORY/nda/classes/netscape/nda/servlet/` ディレクトリで検索します。

これらの設定パラメータの説明については、『iPlanet Delegated Administrator for Messaging and Collaboration インストールおよび管理ガイド』にある UNIX インストール手順の「インストール画面 4 - purge コマンドの有効化」を参照してください。

iPlanet Delegated Administrator ホストから Administration Server ホストへの接続を許可するためには、必要に応じて Administration Server の接続の制限をすべて変更します。これらの変更は、Administration Server Console の「構成」タブで行います。

構文

```
imadmin user search -D ログイン -n ドメイン -w パスワード
[-d ユーザドメイン] [-g 猶予] [-h] [-i 入力ファイル] [-l ユーザ id]
[-P] [-p ida ポート] [-X ida ホスト] [-s] [-v]
```

オプション

以下のオプションは必須です。

オプション	説明
-D ログイン	このコマンドの実行権限を有するユーザのユーザ ID
-n ドメイン	-D オプションで指定したユーザのドメイン
-w パスワード	-D オプションで指定したユーザのパスワード

以下のオプションは必須ではありません。

オプション	説明
-d ユーザドメイン	ページするユーザのドメイン。-d が指定されない場合には、-n のドメインが使用される

オプション	説明
-g 猶予	ユーザをパージするまでの猶予期間 (日数)。「猶予」で指定した日数に満たないユーザは、削除のマークが付いていてもパージされない。「0」は直ちにパージすることを表す。デフォルト値は、サーバの設定ファイルから読み取られる。インストール時のデフォルト値は 10 日間に設定されている
-h	コマンドを使用するための構文を印刷する
-i 入力ファイル	コマンドラインではなく、ファイルからコマンド情報を読み取る
-l ユーザ <i>id</i>	パージするユーザのユーザ <i>id</i> 。-l が指定されていない場合は、-d で指定されたドメイン内で「削除済み」としてマークされたすべてのユーザがパージされる
-p <i>ida</i> ポート	iDA サーバがリスンしている別の TCP ポートを指定する場合に、このオプションを使用する。指定されない場合には、デフォルトの <i>ida</i> ポートが使用される。インストール時にデフォルトが設定されていない場合には、80 が使用される
-x <i>ida</i> ホスト	企業サーバが動作している別のホストを指定する。-x オプションを指定しても、そのサーバが応答しない場合には、このコマンドの実行は失敗に終わる。デフォルトのサーバへの接続は試行されない。指定されない場合には、デフォルトの <i>ida</i> ホストが使用される。インストール時にデフォルトが設定されていない場合には、ローカルホストが使用される
-s	iDA サーバに接続するために SSL (Secure Socket Layer) を使用する
-v	デバッグ出力を可能にする

例

既存のユーザをパージするには：

```
imadmin user purge -D chris -w bolton -n siroe.com -l scott
```

imadmin user search

`imadmin user search` コマンドは、ユーザに関連するディレクトリの全プロパティを取得するためのものです。複数のユーザに関連するディレクトリの全プロパティを取得するには、`-i` オプションを使用します。

構文

```
imadmin user search -D ログイン -n ドメイン -w パスワード
[-d ユーザドメイン] [-F 名] [-h] [-i 入力ファイル] [-L 姓]
[-l ユーザ id] [-p ida ポート] [-X ida ホスト] [-s] [-v]
```

オプション

以下のオプションは必須です。

オプション	説明
<code>-D ログイン</code>	このコマンドの実行権限を有するユーザのユーザ ID
<code>-n ドメイン</code>	<code>-D</code> オプションで指定したユーザのドメイン
<code>-w パスワード</code>	<code>-D</code> オプションで指定したユーザのパスワード

以下のオプションは必須ではありません。

オプション	説明
<code>-F 名</code>	ユーザの名 (ファーストネーム)
<code>-L 姓</code>	ユーザの姓 (ラストネーム)
<code>-l ユーザ id</code>	ユーザのユーザ <i>id</i> 。 <code>-l</code> オプションが指定されていない場合は、 <code>-n</code> で指定されたドメインのすべてのユーザが返される
<code>-h</code>	コマンドを使用するための構文を印刷する
<code>-i 入力ファイル</code>	コマンドラインではなく、ファイルからコマンド情報を読み取る
<code>-p ida ポート</code>	<code>iDA</code> サーバがリッスンしている別の TCP ポートを指定する場合に、このオプションを使用する。指定されない場合には、デフォルトの <i>ida</i> ポートが使用される。インストール時にデフォルトが設定されていない場合には、80 が使用される

オプション	説明
-X <i>ida</i> ホスト	企業サーバが動作している別のホストを指定する。-X オプションを指定しても、そのサーバが応答しない場合には、このコマンドの実行は失敗に終わる。デフォルトのサーバへの接続は試行されない。指定されない場合には、デフォルトの <i>ida</i> ホストが使用される。インストール時にデフォルトが設定されていない場合には、ローカルホストが使用される
-s	iDA サーバに接続するために SSL (Secure Socket Layer) を使用する
-v	デバッグ出力を可能にする

例

ログインが *testuser* であるユーザを検索するには：

```
imadmin user search -D chris -n siroe.com -w bolton ¥
-l testuser
```

Messaging Server の設定

この章では、Messaging Server の設定パラメータを紹介します。これらのパラメータは、`configutil` コマンドを使って設定できます。`configutil` コマンドの詳しい説明と構文については、18 ページの「`configutil`」を参照してください。

MTA の設定の詳細については、第 5 章「MTA の設定」を参照してください。

configutil の各パラメータ

表 4-1 `configutil` の各パラメータ

パラメータ	説明
<code>alarm.msgalarmnoticehost</code>	警告メッセージの送信先マシン。設定されていない場合は、ローカルホストを使用する デフォルト：ローカルホスト
<code>alarm.msgalarmnoticeport</code>	アラームメッセージを送信する際に接続する SMTP ポート デフォルト：25
<code>alarm.msgalarmnoticercpt</code>	アラーム通知の受取人 デフォルト：Postmaster@ ローカルホスト
<code>alarm.msgalarmnoticesender</code>	アラーム差出人のアドレス デフォルト：Postmaster@ ローカルホスト

表 4-1 configutil の各パラメータ (続き)

パラメータ	説明
alarm.msgalarmnoticetemplate	メッセージテンプレート。テンプレートの %s は、次の内容に順に置き換えられる。差出人、受取人、アラームの記述、アラームのインスタンス、アラームの現在値、アラームのサマリーテキスト
alarm.diskavail.msgalarmstatinterval	ディスク利用度チェックをする間隔 (秒) 。ディスク使用状況を確認しない場合は、0 に設定する デフォルト : 3600
alarm.diskavail.msgalarmthreshold	それより低くなるとアラームが送信されるディスクスペース利用度 デフォルト : 10
alarm.diskavail.msgalarmthresholddirection	ディスクスペース利用度がしきい値 (-1) より低いかしきい値 (1) より高いときにアラームを発行するかどうかを指定する デフォルト : -1
alarm.diskavail.msgalarmwarninginterval	ディスク利用度のアラームが繰り返される間隔 (時) 。 デフォルト : 24
alarm.diskavail.msgalarmdescription	使用可能なメールパーティション用ディスクスペースをパーセントで表したもの
alarm.serverresponse.msgalarmdescription	サーバの応答時間 (秒)
alarm.serverresponse.msgalarmstatinterval	確認の間隔 (秒) 。サーバの応答を確認しない場合は、0 に設定する デフォルト : 600
alarm.serverresponse.msgalarmthreshold	サーバ応答時間 (秒) がこの値を超えると、アラームが発行される デフォルト : 10
alarm.serverresponse.msgalarmthresholddirection	サーバ応答時間がしきい値 (1) より大きいか (-1) より小さいときに、アラームを発行するかどうかを指定する デフォルト : 1

表 4-1 configutil の各パラメータ (続き)

パラメータ	説明
alarm.serverresponse.msgalarmwarninginterval	サーバ応答のアラームが繰り返される 間隔 (時) デフォルト : 24
encryption.nscertfile	証明書ファイルの場所
encryption.nskeyfile	キーファイルの場所
encryption.nsssl2	デフォルト : no
encryption.nsssl2ciphers	カンマで区切られた符号化方式のリス ト
encryption.nsssl3	デフォルト : yes
encryption.nsssl3ciphers	デフォルト : rsa_rc4_40_md5, rsa_rc2_40_md5, rsa_des_sha,rsa_rc4_128_md5, rsa_3des_sha
encryption.nsssl3sessiontimeout	デフォルト : 0
encryption.nssslclientauth	デフォルト : 0
encryption.nssslsessiontimeout	デフォルト : 0
encryption.fortezza.nssslactivation	デフォルト : off
encryption.rsa.nssslactivation	デフォルト : on
encryption.rsa.nssslpersonalityssl	デフォルト : Server-Cert
encryption.rsa.nsssltoken	デフォルト : internal
gen.accounturl	エンドユーザ用サーバアドミニスト レーションリソースの場所 デフォルト : http://%U@[ホスト名]: [管理ポート] /bin/user/admin/bin/enduser
gen.configversion	設定バージョンデフォルト : 4.0
gen.filterurl	受信メール (サーバ側) フィルタ用の URL
gen.folderurl	個人フォルダ管理用の URL
gen.installedlanguages	デフォルト : en
gen.listurl	メーリングリスト管理用の URL
gen.newuserforms	新規ユーザへのようこそメッセージ

表 4-1 configutil の各パラメータ (続き)

パラメータ	説明
gen.sitelanguage	デフォルトの言語タグ。デフォルト:
local.cgiexeclist	実行するコマンドとの照合に使うパターン文字列のリスト
local.dbstat.captureinterval	db 統計をカウンタに取り込む間隔 (秒) 。デフォルト: 3600
local.defdomain	デフォルトのドメイン (インストール時に設定)
local.enduseradmincred	エンドユーザ管理者のパスワード
local.enduseradminidn	エンドユーザ管理者のユーザ ID
local.hostname	ローカルホスト名の DN
local.imta.imta_tailor	この MTA インスタンスの imta_tailor ファイルの場所
local.imta.ldsearchtimeout	ユーザおよびグループを検索する場合の LDAP 検索のタイムアウトを指定する。デフォルト: -1 (タイムアウトなし)
local.imta.lookupandsync	ダイレクト LDAP 検索モジュールを使う場合に同期させるエントリのタイプを定義する。ユーザには 1 (デフォルト) 、グループには 2 、ユーザとグループには 3 を指定する
local.imta.lookupfallbackaddress	ダイレクト LDAP 検索モジュールを使用する場合、このパラメータにより最後のエイリアスの検索を省略できる。その代わりに、受取人のアドレスが固定アドレスに書き換えられる。このパラメータは、エラーコードを返すため、SEND_ACCESS マッピング規則とともに使用される
local.imta.lookupmaxnbfailed	ダイレクト LDAP 検索モジュールを使用する場合、このパラメータにより進行中の結果の返されない LDAP 検索のルーチンプロセスを停止する時期を定義できる。デフォルト: 制限なし

表 4-1 configutil の各パラメータ (続き)

パラメータ	説明
<code>local.imta.hostnamealiases</code>	LDAP エントリの <code>mailhost</code> または <code>mailRoutingHosts</code> 属性をチェックしてローカルかどうかを確認するとき、 <code>dirsync</code> は比較を行うために <code>local.hostname</code> パラメータを使用する。さらに、 <code>local.imta.hostnamealiases</code> パラメータを使用して、カンマで区切ったホスト名エイリアスを指定できる。その後、 <code>dirsync</code> プロセスは、これらの2つのパラメータが指定されているホスト名すべてを使用して、エントリがローカルかどうかをチェックする
<code>local.imta.mailaliases</code>	デフォルト属性を上書きする、カンマで区切られた LDAP 属性のリスト。これらの属性は、配信可能な電子メールアドレスにする必要がある たとえば、以下のように記述する <code>local.imta.mailaliases=mail,mailAlternateAddress,rfc822mailbox,rfc822mail alias</code> の場合、メッセージの転送時に MTA によりこれらの属性が考慮される デフォルト : <code>mailAlternateAddress</code>
<code>local.imta.schematag</code>	MTA でサポートされている LDAP エントリのタイプを定義する。デフォルト : <code>ims50</code>

表 4-1 configutil の各パラメータ (続き)

パラメータ	説明
local.imta.ugfilter	<p>ユーザとグループを検索するときに <code>dirsync</code> が使用する LDAP 検索フィルタを設定する</p> <p>たとえば、LDAP エントリのみを <code>inetLocalMailRecipient</code> オブジェクトクラスと <code>myispSubscriber</code> オブジェクトクラスで考慮したい場合、このパラメータを次のように設定する</p> <pre>local.imta.ugfilter=(amp(objectClass=inetLocalMailRecipient)(objectClass=myispSubscriber))</pre> <p>デフォルトのフィルタ： <code>objectClass=inetLocalMailRecipient</code></p> <p>注：増分 <code>dirsync</code> の場合には、この <code>ugfilter</code> にタイムスタンプフィルタが追加される。このため、カスタムフィルタは括弧で囲む必要がある</p> <p>このパラメータは、MTA がダイレクト LDAP モードで設定されている場合は使用されない</p>
local.imta.statssamplesize	<p>設定されている場合、このパラメータが <code>dirsync</code> に、開始後に処理されたユーザおよびメーリングリストエントリの数の集計と秒当たりのエントリの平均速度を、標準出力で印刷するよう指示する。ユーザおよびメーリングリストは、同期に成功してもしなくてもカウントされる</p> <p>デフォルト：yes</p>
local.imta.reversenabled	<p>リバースデータベースの生成をトリガする。実際にリバースデータベースを使用する方法は、<code>USE_REVERSE_DATABASE</code> オプションによって制御される</p> <p>デフォルト：yes</p>

表 4-1 configutil の各パラメータ (続き)

パラメータ	説明
<code>local.imta.vanityenabled</code>	<p>バニティドメインを有効にするかどうかを設定する。yes に設定するとバニティドメインが有効になる。変数がない場合、MTA はバニティドメインを有効にするものとみなす。デフォルト: yes</p> <p>このパラメータは <code>dirsync</code> モードの場合のみ使用される。『iPlanet Messaging Server 管理者ガイド』の付録 B 「MTA ダイレクト LDAP 操作」を参照</p>
<code>local.imta.catchalenabled</code>	<p>(メール、または @domain 形式の <code>mailAlternateAddress</code>) 「すべてのアドレスを取得する」が有効であるかどうかを制御する。デフォルト: yes</p>
<code>local.imta.scope</code>	<p>どのエントリを同期するかを <code>dirsync</code> に通知する</p> <p><code>mailhost</code> 属性がローカルホストであるユーザおよびメーリングリストのエントリのみをキャッシュに書き込む: 値 = " ローカル "</p> <p><code>mailhost</code> 属性とは無関係に、ユーザおよびメーリングリストのエントリをキャッシュに書き込む: 値 = " ドメイン "</p> <p>パラメータが指定されていない場合は、これがデフォルト値</p> <p>ドメイン、ユーザ、あるいはメーリングリストをキャッシュに書き込まない: 値 = " 指定なし "</p>
<code>local.imta.ssrenabled</code>	<p>サーバ側規則データベースの生成をトリガする。実際に SSR データベースを使用する方法は、<code>ssr</code> チャネルキーワードによって制御される</p> <p>デフォルト: yes</p>
<code>local.installdir</code>	ソフトウェアインストールディレクトリの完全なパス名
<code>local.instancedir</code>	サーバインスタンスディレクトリの完全なパス名
<code>local.lastconfigfetch</code>	タイムスタンプが付いた最後の設定

表 4-1 configutil の各パラメータ (続き)

パラメータ	説明
local.ldapbasedn	ベース DN
local.ldapcachefile	キャッシュされた設定の場所
local.ldaphost	SIE の LDAP サーバ
local.ldapisiedn	インストール済みソフトウェアの DN
local.ldappoolrefreshinterval	LDAP 接続が自動的に切断され、LDAP サーバに再び接続されるまでの時間。また、フェイルオーバーディレクトリサーバからプライマリディレクトリサーバへ返るまでの経過時間 デフォルト: -1 (更新なし)
local.ldapport	LDAP ポート。デフォルト: 389
local.ldapsiecred	サーバ証明書
local.ldapsiedn	サーバインスタンスエントリの DN
local.ldapusessl	LDAP 認証が SSL を使うかどうかを設定する。デフォルト: no
local.queuedir	スプールディレクトリの完全なパス名
local.report.reporterctx	レポートを生成するために実行するコマンド。デフォルト: server-root/bin/msg/admin/bin/reporter.pl
local.report.runinterval	ジョブ生成プロセスがジョブを確認する間に休止状態になる間隔 (秒)。デフォルト: 3600
local.report.counterlogfile.expirytime	ログファイルが保持される最長時間 (秒)。デフォルト: 604800
local.report.counterlogfile.interval	カウンタを読み取る頻度 (秒)。デフォルト: 600
local.report.counterlogfile.logdir	ログファイルのディレクトリパス。
local.report.counterlogfile.loglevel	デフォルト: Notice
local.report.counterlogfile.maxlogfiles	ファイルの最大数。デフォルト: 10
local.report.counterlogfile.maxlogfilesize	各ログファイルの最大サイズ (バイト)。デフォルト: 2097152

表 4-1 configutil の各パラメータ (続き)

パラメータ	説明
<code>local.report.counterlogfile.maxlogsize</code>	全ログファイルの最大サイズ。デフォルト: 20971520
<code>local.report.counterlogfile.minfreediskspace</code>	ログに必要な最低の空きディスク容量 (バイト)。デフォルト: 5242880
<code>local.report.counterlogfile.rollovertime</code>	ログファイルをローテーションする頻度 (秒)。デフォルト: 86400
<code>local.report.counterlogfile.separator</code>	カウンタログファイルのフィールド区切り。デフォルト: '¥t'
<code>local.report.job.desc.sample</code>	レポートジョブサンプルの記述
<code>local.report.job.range.sample</code>	入力データの時間範囲
<code>local.report.job.schedule.sample</code>	レポート処理を開始する時間
<code>local.report.job.target.sample</code>	レポートを送信する場所
<code>local.report.job.type.sample</code>	このジョブに対するレポートのタイプ デフォルト: <code>listmbox</code>
<code>local.report.type.cmd.listmbox</code>	<code>listmbox</code> レポートタイプを実行するコマンド
<code>local.report.type.desc.listmbox</code>	<code>listmbox</code> レポートタイプの記述
<code>local.rfc822header.fixcharset</code>	Messenger Express により、適切にエンコードされていない 8 ビットのメッセージヘッダーの解釈に使用される文字セット
<code>local.rfc822header.fixlang</code>	Messenger Express により、適切にエンコードされていない 8 ビットのメッセージヘッダーの解釈に使用される 2 文字の言語 ID を指定。このパラメータは、 <code>fixcharset</code> パラメータとともに使用する
<code>local.servergid</code>	UNIX におけるサーバグループ ID デフォルト: 指定なし
<code>local.servername</code>	サーバ名
<code>local.serverroot</code>	サーバルート
<code>local.servertype</code>	サーバタイプ。デフォルト: <code>msg</code>
<code>local.serveruid</code>	UNIX におけるサーバのユーザ ID。デフォルト: <code>msgsrv</code>

表 4-1 configutil の各パラメータ (続き)

パラメータ	説明
<code>local.service.http.maxcollectmsglen</code>	サーバがリモートの POP メールボックスから収集するメッセージの最大サイズ。このメールボックスのメッセージがこのサイズを超えると、その時点で収集が中止される
<code>local.service.http.proxy</code>	Messaging Server プロキシマシン上で Messenger Express Multiplexor を有効にする (1 に設定した場合)。この特別なサーバは、複数のメールサーバを管理するときに、Messenger Express への単一の接続ポイント (HTTP アクセスサービス) として機能する デフォルト : 0
<code>local.service.http.rfc2231compliant</code>	Web メール RFC-2231 エンコーダを有効にし、添付ファイルの名前が RFC-2231 に定義された方法でエンコードされるようにする
<code>local.service.http.smtpauthpassword</code>	エンドユーザ AUTH SMTP ユーザのパスワード
<code>local.service.http.smtpauthuser</code>	エンドユーザ AUTH SMTP ユーザのユーザ ID このパラメータにより、Messenger Express のユーザは通常の Netscape Communicator の場合と同様に、認証された SMTP メッセージを受信できるようになる。これを機能させるには、mshttpd に与えられたユーザ ID とパスワードが、ストア管理者であること、つまり store.admins リストに含まれている (たとえば、admin と admin) 必要がある。このパラメータを設定すると、ローカルユーザから受信したメールは、「メッセージの表示」ウィンドウの「From:」ヘッダーの横に「内部」と表示されるようになる
<code>local.service.pab.alwaysusedefaulthost</code>	使用する PAB サーバ 1 つを有効する デフォルト : False

表 4-1 configutil の各パラメータ (続き)

パラメータ	説明
<code>local.service.pab.attributelist</code>	個人用アドレス帳のエントリに新規属性を追加する。このパラメータを使用すると、新しい属性を作成できる デフォルト: <code>pabattrs</code>
<code>local.service.pab.enabled</code>	PAB 機能を有効または無効にする デフォルト: 1
<code>local.service.pab.ldapbasedn</code>	PAB 検索のベース DN デフォルト: <code>o=pab</code>
<code>local.service.pab.ldapbinddn</code>	PAB 検索のバインド DN
<code>local.service.pab.ldaphost</code>	PAB の Directory Server があるホストの名前
<code>local.service.pab.ldappasswd</code>	<code>local.service.pab.ldapbinddn</code> で指定されたユーザのパスワード
<code>local.service.pab.ldapport</code>	PAB Directory Server のポート番号
<code>local.service.pab.maxnumberofentries</code>	1 つの PAB が保存できるエントリの最大数 デフォルト: 500
<code>local.service.pab.migrate415</code>	"on" に設定した場合、PAB 移行を有効にする。デフォルト: "off"
<code>local.store.expire.cleanonly</code>	yes に設定されていると、stored ユーティリティは <code>cleanup</code> だけを実行する。stored は、デフォルトでは <code>cleanup</code> と <code>expire</code> の両方を実行する。 <code>stored -d</code> プロセスだけに影響し、 <code>stored -l</code> オプションには影響しない

表 4-1 configutil の各パラメータ (続き)

パラメータ	説明
<code>local.store.expire.workday</code>	<code>expire</code> と <code>cleanup</code> を実行する曜日を定義する。このパラメータは、曜日を指定する 0 から 6 の整数をとる。0 は日曜、1 は月曜、2 は火曜などのように指定する。このパラメータが設定されている場合、 <code>expire</code> と <code>cleanup</code> は指定した曜日のみ実行される。このパラメータを -1 または 6 より大きい値に設定すると、 <code>expire</code> と <code>cleanup</code> は無効になる。このパラメータが設定されていない場合、デフォルト値は毎日実行
<code>local.store.snapshotdirs</code>	ディスク上に保存する個別のスナップショットの数。最小は 2。現在のものが修復できないことがわかるまでは、データベースを良好な状態に戻すのに十分な値が推奨される デフォルト: 3
<code>local.store.snapshotinterval</code>	スナップショットを実行する間隔。時間の単位は分。この手順は、最低でも 1 日 1 回実行することが推奨される デフォルト: 0
<code>local.store.snapshotpath</code>	<code>mboxlist</code> ディレクトリのコピー先のパスを指定する。メッセージストアの所有者の権限が設定される。スナップショットはサブディレクトリ内に入れられる
<code>local.store.deadlock.autodetect</code>	デッドロックの解消にすべてまたは 1 つのスレッドを使うかどうかを設定する。デフォルト: no
<code>local.store.deadlock.checkinterval</code>	<code>lock_detect</code> が再度設定されるまでの休止時間 (マイクロ秒) を指定する。デフォルト: 1000
<code>local.supportedlanguages</code>	サーバコードでサポートされている言語
<code>local.tmpdir</code>	<code>service.http.spooldir</code> のデフォルト値
<code>local.ugldapbasedn</code>	Directory Server におけるユーザ / グループ設定ツリーのルート

表 4-1 configutil の各パラメータ (続き)

パラメータ	説明
local.ugldapbindcred	ユーザ/グループ管理者のパスワード
local.ugldapbinddn	ユーザ/グループ管理者の DN
local.ugldaphasplaintextpasswords	ユーザパスワードを平文 (サーバによる読み取りが可能) で保存するようにユーザ/グループ LDAP サーバを設定するかどうかを指定する。デフォルト: no
local.ugldaphost	ユーザ検索用の LDAP サーバ
local.ugldapport	LDAP ポート。デフォルト: 389
local.ugldapuselocal	デフォルト: yes
local.ugldapusessl	SSL を使って LDAP サーバに接続するかどうかを設定する。デフォルト: no
local.webmail.sso.cookieDomain	クライアントに送り返される SSO cookie のドメインフィールドに含める値を指定する
local.webmail.sso.enable	ログインページが取り込まれるときに、クライアントによって提示される SSO cookie の受け取りと確認を含む、すべての SSO 機能を実行する。ログインを成功させるために、クライアントに SSO cookie を返し、独自の cookie を確認するために他の SSO パートナーからのリクエストに応答する。0 に設定すると、サーバはどの SSO 機能も実行しない。デフォルトは 0。このパラメータには、整数値が必要
local.webmail.sso.id	Web メールサーバによって設定された SSO cookie をフォーマットする場合のアプリケーション ID 値を指定する。デフォルトは NULL。このパラメータには、文字列値が必要

表 4-1 configutil の各パラメータ (続き)

パラメータ	説明
local.webmail.sso.prefix	Web メールサーバによって設定された SSO cookie をフォーマットする場合のプレフィックス値を指定する。サーバは、このプレフィックス値を持つ SSO cookie だけを認識し、その他の SSO cookie は無視する。デフォルトは NULL。このパラメータには、文字列値が必要
local.webmail.sso.singlesignoff	クライアントがログアウトする際に、local.webmail.sso.prefix で設定されている値に一致するプレフィックス値を持つ、クライアント内のすべての SSO cookie をクリアする。0 に設定すると、Web メールサーバは独自の cookie だけをクリアする。デフォルトは 0
logfile.*.buffersize	ログバッファのサイズ (バイト)。デフォルト : 0。* は、次のコンポーネントのいずれかとなる admin、default、http、imap、imta、pop
logfile.*.expirytime	ログファイルが保持される期間 (秒)。デフォルト : 604800。* は、次のコンポーネントのいずれかとなる。admin、default、http、imap、imta、pop
logfile.*.flushinterval	ログファイルにバッファをフラッシュする間隔 (秒)。デフォルト : 60。* は、次のコンポーネントのいずれかとなる。admin、default、http、imap、imta、pop
logfile.*.logdir	ログファイルのディレクトリパス。* は、次のコンポーネントのいずれかとなる。admin、default、http、imap、imta、pop
logfile.*.loglevel	* は、次のコンポーネントのいずれかとなる。admin、default、http、imap、imta、pop
logfile.*.logtype	* は、次のコンポーネントのいずれかとなる。admin、default、http、imap、imta、pop

表 4-1 configutil の各パラメータ (続き)

パラメータ	説明
logfile.*.maxlogfiles	ファイルの最大数。デフォルト:10 * は、次のコンポーネントのいずれかとなる。admin、default、http、imap、imta、pop
logfile.*.maxlogfilesize	各ログファイルの最大サイズ(バイト)。デフォルト:2097152 * は、次のコンポーネントのいずれかとなる。admin、default、http、imap、imta、pop
logfile.*.maxlogsize	全ログファイルの最大サイズ。デフォルト:20971520 * は、次のコンポーネントのいずれかとなる。admin、default、http、imap、imta、pop
logfile.*.minfreediskspace	ログに必要な最低の空きディスク容量(バイト)。デフォルト:5242880 * は、次のコンポーネントのいずれかとなる。admin、default、http、imap、imta、pop
logfile.*.rollovertime	ログファイルをローテーションする頻度(秒)。デフォルト:86400 * は、次のコンポーネントのいずれかとなる。admin、default、http、imap、imta、pop
logfile.*.syslogfacility	<p>ログを syslog に入れるかどうか指定する。* は、次のコンポーネントのいずれかとなる。admin、default、http、imap、imta、pop</p> <p>この値は、user、mail、daemon、local0 から local7、または none にすることができる。値が設定されると、設定値に対応する syslog 機構のログにメッセージが記録され、その他のすべてのログファイルサービスオプションが無視される</p> <p>デフォルト: none (ログは Message Server のログファイルを使用)</p>
logfiles.admin.alias	デフォルト: logfile admin
logfiles.default.alias	デフォルト: logfile default
logfiles.http.alias	デフォルト: logfile http

表 4-1 configutil の各パラメータ (続き)

パラメータ	説明
logfiles.imap.alias	デフォルト: logfile imap
logfiles.imta.alias	デフォルト: logfile imta
logfiles.pop.alias	デフォルト: logfile pop
service.authcachesize	各エントリは 60 バイトを使用する。 デフォルト: 10000
service.authcachettl	キャッシュエントリ TTL (秒)。デフォルト: 900
service.dccroot	Directory Server における DC ツリーのルート。デフォルト: o=Internet
service.defaultdomain	ドメインなしで、電子メールアドレスを完了するために使用される
service.dnsresolveclient	名前検索クライアントホストをリバースするかどうかを設定する。デフォルト: no
service.http.allowadminproxy	管理者にプロキシ認証の権限を与えるかどうかを設定します。デフォルト: no
service.http.allowanonymouslogin	Anonymous ログインを許可するかどうかを設定する。デフォルト: no
service.http.connlimits	IP アドレス当たりの最大接続数
service.http.domainallowed	HTTP サービス用のアクセスフィルタ
service.http.domainnotallowed	HTTP サービス用の Deny フィルタ
service.http.enable	サーバを自動的に起動するかどうかを設定する。デフォルト: yes
service.http.enablesslport	サービスを SSL ポートで開始するかどうかを設定する。デフォルト: no
service.http.extraldapattrs	カスタマイズ用の予備の LDAP 属性
service.http.fullfromheader	完全な「from」ヘッダーを送信するかどうかを設定する。デフォルト: no
service.http.idletimeout	アイドルタイムアウト (分)。デフォルト: 3

表 4-1 configutil の各パラメータ (続き)

パラメータ	説明
service.http.ipsecurity	ログイン IP アドレスへのセッションアクセスを制限するかどうかを設定する。 デフォルト: yes
service.http.ldappoolsizesize	LDAP 接続の数。デフォルト: 1
service.http.maxmessagesize	クライアントが送信できる最大のメッセージサイズ。デフォルト: 5242880
service.http.maxpostsize	http 掲示コンテンツの最高長。デフォルト: 5242880
service.http.maxsessions	サーバプロセス当たりの最大セッション数。デフォルト: 6000
service.http.maxthreads	サーバプロセス当たりの最大スレッド数。デフォルト: 250
service.http.numprocesses	プロセス数。デフォルト: 1
service.http.plaintextmincipher	平文によるログインを許可するかどうかを設定する。0 にすると、常に平文でのログインを許可する。-1 にすると、平文でのログインを許可しない。40 または 128 にすると、40 または 128 ビットキーによる暗号化を使ったログインを必要とする。デフォルト: 0
service.http.port	サーバポート番号。デフォルト: 80
service.http.proxydomainallowed	HTTP サービスに対するプロキシ認証用のアクセスフィルタ
service.http.resourcetimeout	Web メールリソースの減少タイムアウト (秒) 。デフォルト: 900
service.http.sessiontimeout	Web メールクライアントのセッションタイムアウト。デフォルト: 7200
service.http.smtphost	SMTP リレーホスト
service.http.smtpport	SMTP リレーポート。デフォルト: 25
service.http.sourceurl	Web メールサーバ URL
service.http.spooldir	送信クライアントメールのスパールディレクトリ
service.http.sslcachesize	キャッシュされる SSL セッションの数。デフォルト: 0

表 4-1 configutil の各パラメータ (続き)

パラメータ	説明
service.http.sslport	SSL サーバポート番号。デフォルト: 443
service.http.ssllsourceurl	Web メールサーバ URL
service.http.sslusessl	SSL を有効にするかどうかを設定する。デフォルト: yes
service.imap.allowanonymouslogin	Anonymous ログインを許可する。デフォルト: no
service.imap.banner	IMAP プロトコルの「ようこそ」見出し
service.imap.connlimits	IP アドレス当たりの最大接続数
service.imap.domainallowed	IMAP サービス用のアクセスフィルタ
service.imap.domainnotallowed	IMAP サービス用の Deny フィルタ
service.imap.enable	サーバを自動的に起動するかどうかを設定する。デフォルト: yes
service.imap.enablesslport	サービスを SSL ポートで開始するかどうかを設定する。デフォルト: no
service.imap.idletimeout	アイドルタイムアウト (分) 。デフォルト: 30
service.imap.ldappoolsize	LDAP 接続の数。デフォルト: 1
service.imap.maxsessions	サーバプロセス当たりの最大セッション数。デフォルト: 4000
service.imap.maxthreads	サーバプロセス当たりの最大スレッド数。デフォルト: 250
service.imap.numprocesses	プロセス数。デフォルト: 1
service.imap.plaintextmincipher	平文によるログインを許可するかどうかを設定する。0 にすると、常に平文でのログインを許可する。-1 にすると、平文でのログインを許可しない。40 または 128 にすると、40 または 128 ビットキーによる暗号化を使ったログインを必要とする。デフォルト: 0
service.imap.port	サーバポート番号。デフォルト: 143
service.imap.sslcachesize	キャッシュされる SSL セッションの数。デフォルト: 0

表 4-1 configutil の各パラメータ (続き)

パラメータ	説明
service.imap.sslport	SSL サーバポート番号。デフォルト: 993
service.imap.sslusessl	SSL を有効にするかどうかを設定する。デフォルト: yes
service.ldapmemcache	LDAP SDK memcache 機能を有効または無効にするかどうかを設定する。デフォルト: no
service.ldapmemcachesize	キャッシュサイズ (バイト)。デフォルト: 131072
service.ldapmemcachettl	キャッシュエントリが存続する時間 (秒)。デフォルト: 30
service.ldappoolsize	LDAP 接続の数。デフォルト: 1
service.listenaddr	リッスンする IP アドレス
service.loginseparator	ログイン区切りに使用される文字。デフォルト: @
service.plaintextloginpause	ログインした後のポーズ間隔。デフォルト: 0
service.pop.allowanonymouslogin	Anonymous ログインを許可するかどうかを設定する。デフォルト: no
service.pop.banner	POP プロトコル「ようこそ」見出し
service.pop.connlimits	IP アドレス当たりの最大接続数
service.pop.domainallowed	POP サービス用のアクセスフィルタ
service.pop.domainnotallowed	POP サービス用の Deny フィルタ
service.pop.enable	サーバを自動的に起動するかどうかを設定する。デフォルト: yes
service.pop.idletimeout	アイドルタイムアウト (分)。デフォルト: 10
service.pop.ldappoolsize	LDAP 接続の数。デフォルト: 1
service.pop.maxsessions	サーバプロセス当たりの最大セッション数。デフォルト: 600
service.pop.maxthreads	サーバプロセス当たりの最大スレッド数。デフォルト: 250
service.pop.numprocesses	プロセス数

表 4-1 configutil の各パラメータ (続き)

パラメータ	説明
service.pop.plaintextmincipher	平文によるログインを許可するかどうかを設定する。0 にすると、常に平文でのログインを許可する。-1 にすると、平文でのログインを許可しない。40 または 128 にすると、40 または 128 ビットキーによる暗号化を使ったログインを必要とする。デフォルト: 0
service.pop.popminpoll	クライアントの最小ポーリング間隔 (秒)。デフォルト: 0
service.pop.port	POP サーバポート番号。デフォルト: 110
service.pop.sslusessl	SSL を有効にするかどうかを設定する。デフォルト: yes
service.readtimeout	サーバの応答時間をチェックする際に、「hello」文字列を受信するまでの許容時間。デフォルト: 10
service.sslpasswdfile	各キーファイルのパスワード
store.admins	メッセージストア管理者の権限を持つユーザ ID のリスト (スペース区切り)
store.cleanupage	消去とクリーンアップの間の最小時間 (時間)。デフォルト: 1
store.dbcachesize	メールボックスリストデータベースのキャッシュサイズ。デフォルト: 8388608
store.dbtmpdir	メールボックスリストデータベースの一時ディレクトリ
store.defaultacl	デフォルトの ACL
store.defaultmailboxquota	ユーザアカウントで指定されていない場合のデフォルトのメールボックス制限容量。デフォルト: -1 (無限)
store.defaultmessagequota	ユーザアカウントで指定されていない場合のデフォルトのメッセージ制限容量。デフォルト: -1 (無限)
store.defaultpartition	デフォルトのパーティション
store.diskflushinterval	デフォルト: 15

表 4-1 configutil の各パラメータ (続き)

パラメータ	説明
<code>store.expirerule.*.exclusive</code>	このパラメータが「yes」に設定されている場合、その他の規則が与えられた条件に一致する場合でも、これが適用される唯一の規則となる デフォルト : no
<code>store.expirerule.*.folderpattern</code>	規則を適用するフォルダ
<code>store.expirerule.*.foldersizebytes</code>	フォルダ内の最大バイト数
<code>store.expirerule.*.messagecount</code>	指定したフォルダに保存できるメッセージの最大数
<code>store.expirerule.*.messagedays</code>	指定したフォルダにメッセージを保存しておくことができる最大時間
<code>store.expirerule.*.messagesize</code>	メッセージの最大サイズ (バイト)
<code>store.expirerule.*.messagesizedays</code>	<code>messagesize</code> メッセージが存続できる時間
<code>store.expirestart</code>	<code>stored</code> が毎日のクリーンアップを開始する時刻 デフォルト : 23
<code>store.partition.*.path</code>	ストアパーティションのディレクトリパス
<code>store.partition.primary.path</code>	プライマリパーティションの完全なパス名 デフォルト : <code>server-root/msg-instance/store/partition/primary</code>
<code>store.quotaenforcement</code>	<code>quotaenforcement</code> のオン / オフを切り替える。デフォルト : on

表 4-1 configutil の各パラメータ (続き)

パラメータ	説明
store.quotaexceededmsg	<p>制限容量が store.quotawarn を超えるときにユーザに送信されるメッセージ。このパラメータを有効にするため、次の設定変数を設定することができる</p> <pre>configutil -o store.quotaexceededmsg -v 'Subject:WARNING: User quota exceeded¥\$¥\$User quota threshold exceeded - reduce space used.'</pre> <pre>configutil -o store.quotanotification -v on</pre> <p>デフォルト: null</p>
store.quotaexceededmsginterval	<p>次の quotaexceededmsg を送信するまでの間隔 (日)。デフォルト: 7</p>
store.quotagraceperiod	<p>時刻 (時間) メッセージは、サーバがメッセージの返送を始めるまで、メッセージキューに保管される。メッセージは次のいずれかの状態になるまでキューに残される</p> <ul style="list-style-type: none"> • メールボックスの容量制限に達した場合 • ユーザが指定された猶予期間を過ぎても容量制限を超えたままになっている場合 • メッセージがメッセージキューの最大時間を過ぎてもキューに残っている場合 <p>デフォルト: 120</p>
store.quotanotification	<p>メッセージストアの制限容量通知を有効にする</p>
store.quotawarn	<p>クライアントが警告を受けるときの超過制限容量をパーセントで示したもの。デフォルト: 90</p>
store.serviceadmingroupdn	<p>サービス管理者グループの DN</p>
store.umask	<p>umask のデフォルト: 077</p>

MTA の設定

この章には、以下の項目があります。

- MTA 設定ファイル
- ドメイン書き換え規則
- チャネル定義
- チャネル設定キーワード
- エイリアスファイル
- /var/mail チャネルオプションファイル
- SMTP チャネルオプションファイル
- 変換
- マッピングファイル
- オプションファイル
- テイラーファイル
- Dirsync オプションファイル
- 自動返信オプションファイル
- ジョブコントローラの設定
- デイスパッチャ

MTA 設定ファイル

このセクションでは、MTA 設定ファイルの構造とレイアウトについて説明します。設定の変更の中には、第 2 章「Message Transfer Agent のコマンドラインユーティリティ」で説明しているように、コマンドラインのインタフェースを使って行うものもあります。コマンドラインで変更できないものは、設定ファイルを編集して変更します。設定ファイルの編集は経験のある管理者以外の方にはお勧めしません。

設定ファイルはすべて ASCII テキストファイルで、どのようなテキストエディタでも生成、変更が可能です。設定ファイルの権限は、誰でも読み取り可能に設定しなければなりません。設定ファイルを誰でも読み取り可能にしないと、予期しない MTA 障害の原因になることもあります。ほとんどのファイルの物理行は 252 バイトに制限されており、円記号 (¥) の継続文字を使って論理行を複数の物理行に分けることができます。

表 5-1 に、MTA 設定ファイルとその簡単な説明を一覧します。

表 5-1 MTA 設定ファイル

ファイル	説明
自動返信オプションファイル	autoreply プログラムが使用するオプションを指定する。 <i>server-root/msg-instance/imta/config/autoreply_option</i>
エイリアスファイル (必須)	ディレクトリに存在しないエイリアスを実装する。 <i>server-root/msg-instance/imta/config/aliases</i>
SMTP チャンネルオプションファイル	チャンネル固有のオプションを設定する。 <i>server-root/msg-instance/imta/config/チャンネル_option</i>
変換ファイル	メッセージ本体部分の変換を制御するために変換チャンネルによって使われる。 <i>server-root/msg-instance/imta/config/conversions</i>
Dirsync オプションファイル (dirsync モードで実行中の場合のみ必須)	dirsync プログラムが使用するオプションを指定する。 <i>server-root/msg-instance/imta/config/dirsync.opt</i>
ディスパッチャ設定ファイル (必須)	サービスディスパッチャの設定ファイルオプションを指定する。 <i>server-root/msg-instance/imta/config/dispatcher.cnf</i>
ジョブコントローラ設定ファイル (必須)	ジョブコントローラのオプションを定義する。 <i>server-root/msg-instance/imta/config/job_controller.cnf</i>
MTA 設定ファイル (必須)	チャンネル定義のほかに、アドレスの書き換えとルーティングを定義する。 <i>server-root/msg-instance/imta/config/imta.cnf</i>
マッピングファイル (必須)	マッピングテーブルのリポジトリ。 <i>server-root/msg-instance/imta/config/mappings</i>
オプションファイル	グローバル MTA オプションを定義する。 <i>server-root/msg-instance/imta/config/option.dat</i>

表 5-1 MTA 設定ファイル (続き)

ファイル	説明
テイラーファイル (必須)	場所を指定する。 <i>server-root/msg-instance/imta/config/imta_tailor</i>

表 5-2 に、MTA データベースファイルとその簡単な説明を一覧します。

表 5-2 MTA データベースファイル

ファイル	説明
アドレスリバースデータベース	送信メールのアドレスを変更する。このデータベースは <i>imsimta dirsinc</i> コマンドを使用して生成され、直接編集することはできない。ダイレクト LDAP モードでは使用しない。編集しないこと。 <i>server-root/msg-instance/imta/db/reversedb.db</i>
エイリアスデータベース	エイリアス、メールの転送、メーリングリストを実行する。 <i>imsimta dirsinc</i> を使ってディレクトリを変更する。ダイレクト LDAP モードでは使用しない。編集しないこと。 <i>server-root/msg-instance/imta/db/aliasesdb.db</i>
ドメインデータベース	その他の書き換え規則を格納する。ダイレクト LDAP モードでは使用しない。編集しないこと。 <i>server-root/msg-instance/imta/db/domaindb.db</i>
一般データベース	サイト固有の目的のために、ドメイン書き換え規則といっしょに、あるいはマッピング規則の中で使用される。 <i>server-root/msg-instance/imta/db/generaldb.db</i>
プロファイルデータベース (必須)	プログラムの配送、ファイルの配送、その他の特別な配送機能の情報を格納するデータベース。このデータベースには、 <i>imsimta dirsinc</i> の実行中に作成される情報が含まれていることもある。編集しないこと。 <i>server-root/msg-instance/imta/db/profiledb.db</i>

MTA 設定ファイル

MTA 設定ファイル (`imta.cnf`) には、ルーティングとアドレス書き換えの設定情報が含まれています。このファイルは、すべてのチャンネルとそれらの特性、それらのチャンネルにメールを転送するための規則、そして MTA によってアドレスが書き換えられる方法を定義したものです。

imta.cnf ファイルの構造

設定ファイルは次の 2 つの部分から構成されます。ドメイン書き換えとチャンネル定義です。ドメイン書き換え規則がファイルの最初に現れ、チャンネル定義とは 1 つの空白行で区切られています。チャンネル定義は集合的にチャンネルテーブルと呼ばれます。個々のチャンネル定義がチャンネルブロックを構成します。

ファイル内のコメント

コメントは設定ファイルのどの位置に書いてもかまいません。コメント行は、1 桁目に感嘆符 (!) を書きます。コメントを豊富に書いて、ファイルの動作を説明することをお勧めします。次の `imta.cnf` ファイルの一部は、コメント行の使い方を表示したものです。

```
! パート I: 書き換え規則
!
ims-ms.my_server.siroe.com $E$U@ims-ms-daemon
!
! パート II: チャンネル定義
```

空白行とコメント行を区別することが重要です。空白行は、設定ファイルのセクションを区切る重要な役割を果たしています。コメント行は設定ファイルを読み込むルーチンに無視されます。つまり、コメント行はないものとみなされ、空白行として数えられることはありません。

他のファイルを含める

他のファイルの内容を設定ファイルに含めることもできます。行の1桁目に「小なり」(<)の記号があると、その行の残りはファイル名として扱われます。ファイル名は絶対名でフルパスでなければなりません。指定されたファイルが開かれ、設定ファイルのその場所に他のファイルの内容が入れられます。ファイルの包含は、3階層までネストすることができます。次の `imta.cnf` ファイルの一部には、
`/usr/iplanet/server5/msg-tango/table/internet.rules` ファイルが含まれています。

```
</usr/iplanet/server5/msg-tango/table/internet.rules
```

注 設定ファイルに含めるファイルは、設定ファイルと同じように誰でも読み取り可能でなければなりません。

ドメイン書き換え規則

ドメイン書き換え規則には、以下の2つの重要な役割があります。

- アドレスを正しい形式に書き換える
- メッセージがキューに入れられるチャンネルを決定する。メッセージをキューに入れるチャンネルは、エンベロープ `To:` アドレスを書き換えることで決定する

各書き換え規則は、`imta.cnf` ファイルの上半分には1行で表示されます。

書き換え規則の設定に関するその他の情報については、『iPlanet Messaging Server 管理者ガイド』の「書き換え規則を設定する」の章を参照してください。

書き換え規則の構造

書き換え規則は、MTA 設定ファイルである `imta.cnf` の上半分に表示されます。設定ファイルに、各規則が1行ごとに記述されています。空白行ではないコメントを、規則と規則の間に入力できます。書き換え規則は空白行で終わり、その後ろにチャンネル定義が続きます。図 5-1 に、設定ファイル内の書き換え規則を示します。

図 5-1 単純な設定ファイル - 書き換え規則

```

! test.cnf - 設定ファイルの例。
!
! これは、単に設定ファイルの例です。実際の
! システムで使用するためのものではありません。
!
a      $U@a-host
b      $U@b-host
c      $U%c@b-daemon
d      $U%d@a-daemon

! 以下、チャンネルの定義が続きます。

```

書き換え規則は次の 2 つの部分から構成されます。パターンと、それに続く同等の文字列またはテンプレートです。これらの 2 つの部分は空白文字を挿入して区切る必要があります。ただし、パターンやテンプレート自体に空白文字を使用することはできません。書き換え規則の構造は以下のとおりです。

```

パターン テンプレート

```

パターン

ドメイン名の中の検索する文字列を指定します。図 5-1 では、パターンは a、b、c、および d となっています。

パターンがアドレスのドメインの部分と一致する場合、書き換え規則はアドレスに適用されます。パターンはスペースでテンプレートと区切る必要があります。パターンの構文については、219 ページの「書き換え規則のパターンとタグ」を参照してください。

テンプレート

以下のいずれかです。テンプレートの構文については、221 ページの「書き換え規則テンプレート」を参照してください。

```
UserTemplate%DomainTemplate@ChannelTag [ コントロール ]
```

```
UserTemplate@ChannelTag [ コントロール ]
```

```
UserTemplate%DomainTemplate [ コントロール ]
```

UserTemplate@DomainTemplate@ChannelTag [コントロール]

UserTemplate@DomainTemplate@SourceRoute@ChannelTag [コントロール]

<i>UserTemplate</i>	アドレスのユーザ部を書き換える方法を指定します。置換シーケンスを使用して、オリジナルのアドレスの一部、またはデータベース検索の結果を表すことができます。置換シーケンスは、書き換えられたアドレスの作成を表すものと置き換えられます。図 5-1 では、\$U という置換シーケンスが使用されています。詳細は、221 ページの「テンプレートの置換と書き換え規則のコントロールシーケンス」を参照してください。
<i>DomainTemplate</i>	アドレスのドメイン部分を書き換える方法を指定します。 <i>UserTemplate</i> と同様、 <i>DomainTemplate</i> には置換シーケンスを入力できます。
<i>ChannelTag</i>	このメッセージの送信先チャンネルです (すべてのチャンネル定義にチャンネルタグとチャンネル名を入力する必要があります。一般に、チャンネルタグは書き換え規則とそのチャンネル定義に記述されます。
コントロール	規則の適用は、コントロールを使って制限することができます。コントロールシーケンスの中には、規則の先頭に指定するものと、規則の最後に指定するものがあります。ほとんど、どの場所にも指定できるものもあります。コントロールについては、221 ページの「テンプレートの置換と書き換え規則のコントロールシーケンス」を参照してください。

書き換え規則のパターンとタグ

書き換え規則のほとんどのパターンは、該当のホストだけと一致する特定のホスト名か、サブドメイン全体の任意のホスト/ドメインと一致するサブドメインパターンのいずれかで構成されます。

たとえば、以下の書き換え規則のパターンは、指定したホストだけと一致する特定のホスト名で構成されます。

```
host.siroe.com
```

次の書き換え規則のパターンは、サブドメイン全体の任意のホストまたはドメインと一致するサブドメインのパターンで構成されます。

```
.siroe.com
```

ただし、このパターンは、ホスト名 `siroe.com` 自体とは一致しません。ホスト名 `siroe.com` 自体と一致させるには、別の `siroe.com` パターンが必要になります。

MTA は、特定のホスト名で始まるホスト/ドメイン名を書き換えてから、固有性を少なくするように、増分で名前を生成しようとします。つまり、より固有な書き換え規則パターンは、より一般的な書き換え規則パターンに優先して使用されます。たとえば、設定ファイルに以下の書き換え規則パターンが指定されているとします。

```
hosta.subnet.siroe.com
.subnet.siroe.com
.siroe.com
```

書き換え規則パターンに基づいて、jdoe@hosta.subnet.siroe.com のアドレスは書き換え規則パターン hosta.subnet.siroe.com と一致し、jdoe@hostb.subnet.siroe.com のアドレスは書き換え規則パターン .subnet.siroe.com と一致し、jdoe@hostc.siroe.com のアドレスは書き換え規則パターン .siroe.com と一致します。

特に、インターネットのサイトではサブドメイン書き換え規則パターンを含む書き換え規則の使用が一般的です。通常、このようなサイトにはそれ自体の内部ホストおよびサブネットの多数の書き換え規則があり、internet.rules ファイルからその設定に、トップレベルインターネットドメインの書き換え規則が組み込まれます (server-instance/imta/config/internet.rules)。

このファイルには、以下のものを指定する必要があります。

- トップレベルインターネットドメインと一致するパターンを含む書き換え規則
- 送信する TCP/IP チャンネルへのパターンなどと一致するアドレスを書き換えるテンプレート

既に説明したより一般的な種類のホストまたはサブドメインの書き換え規則パターンのほか、書き換え規則ではいくつかの特殊なパターンも使われます。これについては、表 5-3 で要約し、以降の項で説明します。

表 5-3 書き換え規則の特殊パターンの要約

パターン	説明 / 使用目的
\$*	任意のアドレスと一致する。この規則が指定されている場合、それがファイル内のどの位置にあっても、最初に適用される
\$%	パーセントハック規則。A%B という形式のホスト/ドメイン仕様と一致する
\$!	Bang スタイル規則。B!A という形式のホスト/ドメイン仕様と一致する
[]	IP リテラル完全一致規則。任意の IP ドメインリテラルと一致する
.	任意のホスト/ドメイン仕様と一致する。たとえば、joe@[129.165.12.11]

Messaging Server には、このような特殊なパターンのほか、書き換え規則パターンに現れることのあるタグという概念があります。これらのタグは、アドレスが複数回にわたって書き換えられる場合に使用されます。この区別は、直前に行われた書き換えに基づき、どの書き換え規則がアドレスに一致するかを制御することによって行います。詳細については、『iPlanet Messaging Server 管理者ガイド』を参照してください。

書き換え規則テンプレート

以下の節では、書き換え規則のテンプレートの形式について説明します。表 5-4 にテンプレートの形式を示します。

表 5-4 書き換え規則のテンプレートの形式の要約

テンプレート	使用目的
A%B	A は新しいユーザ/メールボックスの名前になり、B は新しいホスト/ドメイン仕様になる。繰り返し書き換える
A@B	A%B@B として扱われる
A%B@C	A は新しいユーザ/メールボックスの名前になり、B は新しいホスト/ドメイン仕様になり、ホスト C と関連するチャンネルにルーティングされる
A@B@C	A@B@C@C として扱われる
A@B@C@D	A は新しいユーザ/メールボックスの名前になり、B は新しいホスト/ドメイン仕様になり、C をソースルートとして挿入し、ホスト D と関連するチャンネルにルーティングされる

テンプレートの置換と書き換え規則のコントロールシーケンス

置換を使用して、書き換えられたアドレスに文字列を挿入することによって、ユーザ名またはアドレスを書き換えます。この値は、使用される特定の置換シーケンスによって決まります。

コントロールシーケンスは、指定した書き換え規則の適用に対して追加の条件を課します。書き換え規則のパターン部がチェックされるホストまたはドメイン仕様と一致する必要があるだけでなく、書き換えられているアドレスの他の側面も、コントロールシーケンスまたはシーケンスによる条件設定と一致する必要があります。

ドメインまたはホスト仕様が書き換え規則のパターン部分と一致する必要があっても、その規則のテンプレートの中のコントロールシーケンスによって生じる基準のすべてとは一致しない場合、書き換え規則は失敗し、書き換えは適用可能な他の規則の検索を続けます。

表 5-5 では、テンプレートの置換とコントロールシーケンスを要約しています。

表 5-5 テンプレートの置換とコントロールシーケンスの要約

置換シーケンス	置き換える内容
\$D	一致するドメイン仕様の部分
\$H	ホスト/ドメイン仕様の一致しない部分。残りはパターン内のドット
\$L	ドメインリテラルの一致しない部分。残りはパターンリテラルのドット
\$U	オリジナルのアドレスのユーザ名
\$OU	オリジナルのアドレスのローカル部分 (ユーザ名) からサブアドレスを除いたもの
\$IU	存在する場合は、オリジナルのアドレスのローカル部分 (ユーザ名)
\$\$	リテラルのドル記号 (\$) を挿入する
\$\$	リテラルのパーセント記号 (%) を挿入する
\$@	リテラルの @ 記号 (@) を挿入する
\$¥	該当部分を小文字にする
\$\$	該当部分を大文字にする
\$_	元の大文字と小文字を使用する
\$W	ランダムで一意的な文字列に置換する
\$]...[LDAP は URL を検索する
\$(テキスト)	一般データベースの代替。検索に失敗すると、規則は失敗する
\${...}	指定したマッピングを、与えられた文字列に適用する
\$[...]	カスタマ提供のルーチンを起動し、結果の代替を行う
\$&n	左から右にゼロから数えられる、一致しない (またはワイルドカードの) <i>n</i> 番目の部分
\$!n	右から左にゼロから数えられる、一致しない (またはワイルドカードの) ホストの <i>n</i> 番目の部分

表 5-5 テンプレートの置換とコントロールシーケンスの要約 (続き)

置換シーケンス	置き換える内容
\$* <i>n</i>	左から右にゼロから数えられる、一致するパターンの <i>n</i> 番目の部分
\$(#) <i>n</i>	右から左にゼロから数えられる、一致するパターンの <i>n</i> 番目の部分
\$ <i>n</i> D	一致するドメイン仕様の部分で、左側の 0 から <i>n</i> 番目までの部分が残される
\$ <i>n</i> H	一致しないホスト / ドメイン仕様の部分で、左側の 0 から <i>n</i> 番目までの部分が残される
コントロールシーケンス	書き換え規則の効果
\$!M	チャンネルが内部再処理チャンネルの場合のみ適用される
\$!N	チャンネルが内部再処理チャンネルではない場合のみ適用される
\$!~	保留中チャンネルの一致をチェックするチェックに失敗すると、現在の書き換え規則テンプレートの処理が正常に終了する
\$A	ホストが @ 記号の右にある場合に適用される
\$B	ヘッダー / 本文のアドレスのみに適用される
\$C チャンネル	チャンネルに送信中の場合は失敗する
\$E	エンベロープアドレスのみに適用される
\$F	前方を探すアドレス (例、To:) にのみ適用される
\$M チャンネル	チャンネルがアドレスを書き換えている場合のみ適用される
\$N チャンネル	チャンネルがアドレスを書き換えている場合は失敗する
\$P	ホストがパーセント記号の右にある場合に適用される
\$Q チャンネル	チャンネルに送信中の場合に適用される
\$R	後方を探すアドレス (例、From:) にのみ適用される
\$S	ホストがソースルートからの場合に適用される
\$T 新規タグ	書き換え規則タグを新規タグに設定する
\$V ホスト	ホスト名が LDAP ディレクトリ (DC ツリー内または仮想ドメインとしてのいずれか) に定義されていない場合、失敗する。LDAP 検索がタイムアウトになると、書き換えパターンのホスト名の後の直後の文字の残りの部分は、MTA オプションの文字列 DOMAIN_FAILURE と置き換えられる
\$X	ホストが感嘆符の左にある場合に適用される

表 5-5 テンプレートの置換とコントロールシーケンスの要約 (続き)

置換シーケンス	置き換える内容
\$Z ホスト	ホスト名が LDAP ディレクトリ (DC ツリー内または仮想ドメインとしてのいずれか) に定義されている場合、失敗する。LDAP 検索がタイムアウトになると、書き換えパターンのホスト名の後の直後の文字の残りの部分は、MTA オプションの文字列 DOMAIN_FAILURE と置き換えられる
\$?errmsg	書き換えに失敗すると、デフォルトのエラーメッセージの代わりに <i>errmsg</i> が返される。エラーメッセージは US ASCII 文字でなければならない
\$ 番号 ?errmsg	書き換えに失敗すると、デフォルトのエラーメッセージの代わりに <i>errmsg</i> が返され、SMTP 拡張エラーコードが <i>a.b.c</i> に設定される <ul style="list-style-type: none"> • <i>a</i> は、番号 / 1000000 (最初の桁) • <i>b</i> は (番号 / 1000)、余り 1000 (桁 2 から 4 の値) • <i>c</i> は 番号、余り 1000 (最後の 3 桁の値) 以下の例では、エラーコードを 3.45.89 に設定している <code>\$3045089?the snark is a boojum</code>

置換については、『iPlanet Messaging Server 管理者ガイド』を参照してください。

チャンネル定義

MTA 設定ファイルの 2 つめの部分には、チャンネルそのものの定義が含まれています。これらの定義は集合的に「チャンネルホストテーブル」と呼ばれ、MTA が使用できるチャンネルと、各チャンネルに関連付けられた名前を定義します。各チャンネルの定義は「チャンネルブロック」を形成します。それぞれのチャンネルブロックの間は 1 行の空白行によって区切られています。そのため、1 つのチャンネル定義の中にコメント行を含めることはできますが、空白行を含めることはできません。1 つのチャンネルブロックには、そのチャンネルの構成を定義するキーワードのリストがあります。これらのキーワードは「チャンネルキーワード」と呼ばれます。詳細については、表 5-6 を参照してください。

次の `imta.cnf` ファイルの一部はサンプルのチャンネルブロックを表しています。

```
[ 空白行 ]
! チャンネル定義の例
チャンネル名 キーワード 1 キーワード 2
ルーティング - システム
[ 空白行 ]
```

ルーティング - システム は、このチャンネルと関連するホスト名です。アドレスの書き換え処理中、書き換え規則内でパターンが一致する前に、アドレスのホスト部分がチャンネルと関連するホスト名でチェックされます。例外は `$*` だけで、完全なパターン一致の書き換え規則が最初にチェックされます。

チャンネル定義とチャンネルテーブルキーワードの詳細については、「チャンネル設定キーワード」および表 5-6 を参照してください。

チャンネル設定キーワード

各チャンネルブロックの最初の行にはチャンネル名があり、次に特定のチャンネルの設定を定義するキーワードが続きます。次の表では、キーワードと、キーワードがチャンネル動作（チャンネルがサポートするアドレスのタイプなど）を制御する方法について説明します。転送レイヤ（メッセージエンベロープ）に使われるアドレスとメッセージヘッダーに使われるアドレスとは区別されます。

チャンネル名の次にあるキーワードは、チャンネルにさまざまな属性を割り当てるために使用されます。キーワードは大文字と小文字を区別し、32 バイトまで有効で、それ以上の文字は無視されます。サポートされているキーワードを表 5-6 および表 5-7 に示します。**太字**のキーワードはデフォルトです。表 5-6 はチャンネルキーワードのアルファベット順のリストで、表 5-7 はチャンネルキーワードの機能別のリストです。

このリストにないキーワードを指定しても (正しくないかもしれませんが) エラーにはなりません。UNIX システムの場合、未定義のキーワードは、チャンネルのキューにメールを入れるためにプロセスが必要とするグループ ID として解釈されます。
 imsimta test -rewrite ユーティリティでは、設定ファイル内に、いずれのキーワードとも一致せず、グループ ID として解釈されるキーワードがあるかどうかを示します。

表 5-6 チャンネルキーワードのアルファベット順リスト

キーワード	使用目的
733	<p>エンベロープで % ルーティングを使用する。percents と同義</p> <p>パーセント記号のエンベロープアドレス。ソースルートを除く、完全な RFC 822 形式のエンベロープアドレスがサポートされる。ソースルートは、パーセント記号の規則を使用して、書き換える必要がある。percents キーワードは、733 と同義で使用できる</p> <p>SMTP チャンネルで 733 アドレス規則を使用すると、SMTP エンベロープの転送レイヤのアドレスでもこれらの規則が使われるようになる。これは、RFC 821 に違反する可能性があるため、必要時以外は 733 を使用しないようする</p> <p>構文: 733</p>
822	<p>エンベロープでソースルートを使用する。sourceroute と同義</p> <p>ソースルートのエンベロープアドレス。このチャンネルでは、ソースルートを含む、完全な RFC 822 形式のエンベロープアドレス規則がサポートされる。sourceroute キーワードは、822 と同義で使用できる。ほかのエンベロープアドレスタイプのキーワードが指定されていない場合、これがデフォルトになる</p> <p>構文: 822</p>
addreturnpath	<p>このチャンネルにキューを入れる際に、Return-path: ヘッダーが追加される。通常、Return-path: ヘッダー行を追加するのは、最終的な配信を行うチャンネルの責任である。ただし、ims-ms チャンネルなど一部のチャンネルでは、MTA で Return-path: ヘッダー行を追加する方が、チャンネルで追加するよりも効率的である</p> <p>構文: addreturnpath ヘッダー</p> <p>ヘッダーは、追加するヘッダー行</p>

表 5-6 チャンネルキーワードのアルファベット順リスト (続き)

キーワード	使用目的
addrspersfile	<p>メッセージファイルあたりのアドレスの数</p> <p>addrspersfile キーワードは、チャンネルのキューにある 1 つのメッセージファイルに関連付けられる受取人の最大数に制限を付けるために使用されます。これによって、1 つの操作で処理される受取人の数が制限される。 multiple を参照</p> <p>構文: addrspersfile 整数</p> <p>整数は、1 つのメッセージファイルで許される受取人アドレスの最大数を指定する。この数に達すると MTA は自動的にそれら进行处理するために追加のメッセージファイルを作成する</p>
addrspersjob	<p>1 つのジョブによって処理されるアドレスの数</p> <p>addrspersjob キーワードは、すべてのエントリ内の To: アドレスの合計数を与えられた値で割り、開始する同時進行のジョブ数を計算します。</p> <p>構文: addrspersjob 整数</p> <p>整数は、アドレスを処理するために複数のマスタープロセスが作成される前に、関連するチャンネルに送信する必要のあるアドレスの数を指定する。パラメータに 0 またはそれ以下の値を指定した場合は、1 つのサービスジョブだけがキューに入れられる</p>
aliaslocal	<p>エイリアスファイルとエイリアスデータベースを照会する。aliaslocal キーワードをチャンネルに使用すると、そのチャンネルに書き換えられるアドレスも、エイリアスファイルとエイリアスデータベースで検索するようにできる。通常、ローカルチャンネル (UNIX の 1 チャンネル) に書き換えられるアドレスのみが、エイリアスファイルとエイリアスデータベースで検索される。実行される検索プロンプの形式は、ALIAS_DOMAINS オプションで制御される</p> <p>構文: aliaslocal</p>

表 5-6 チャンネルキーワードのアルファベット順リスト (続き)

キーワード	使用目的
aliaspostmaster	<p>postmaster のメッセージをローカルチャンネルの postmaster にリダイレクトする</p> <p>aliaspostmaster キーワードがチャンネルに指定されている場合、正式なチャンネル名におけるユーザ名 postmaster (大文字か小文字、またはその混合)宛てのすべてのメッセージは、postmaster@ローカルホストにリダイレクトされる。このローカルホストには、ローカルホストの正式(ローカルチャンネルに指定された)名前が入る</p> <p>インターネット標準規格では、メールを受け付ける DNS のドメインに、メールを受信する有効な postmaster のアカウントを持たせることを要求している。このため、各ドメインに対して個別の postmaster アカウントを設定するのではなく、postmaster の責務を中央化したい場合に aliaspostmaster キーワードが有用である</p> <p>構文: aliaspostmaster</p>
allowetrn	<p>すべての ETRN コマンドを処理する</p> <p>このキーワード(および関連する SMTP ETRN コマンドキーワード)は、メッセージ送信時に MTA 応答を制御する。SMTP クライアントは SMTP ETRN コマンドを発行して、MTA に MTA キュー内のメッセージの配信をリクエストする</p> <p>構文: allowetern</p>
allowswitchchannel	<p>ソースチャンネルをこのチャンネルに切り替えることができる</p> <p>構文: allowswitchchannel チャンネル</p>
authrewrite	<p>ヘッダー内に SMTP AUTH 情報を使用する。MTA が認証された差出人の情報をヘッダーに含めるようにするために、authrewrite チャンネルキーワードをソースチャンネルに使用することもできる。FROM_ACCESS マッピングによって無視されることもあるが、通常は SMTP AUTH 情報が使用される</p> <p>構文: authrewrite 整数</p> <p>整数は、次のいずれかとなる</p> <p>1 - AUTH 差出人を含む Resent-from: や Resent-sender: がすでに存在していれば、Sender: ヘッダーまたは Resent-sender: ヘッダーを追加する</p> <p>2 - AUTH 差出人を含む Sender: ヘッダーを追加する</p>

表 5-6 チャンネルキーワードのアルファベット順リスト (続き)

キーワード	使用目的
backoff	<p>配信に失敗したメッセージの再配信回数を指定する。backoff は、nonurgentbackoff、normalbackoff、あるいはurgentbackoff によって無効にしないかぎり、優先度にかかわらずすべてのメッセージを再配信する間隔を指定する</p> <p>構文：</p> <p>backoff " 間隔 1" [" 間隔 2"] [" 間隔 3"] [" 間隔 4"] [" 間隔 5"] [" 間隔 6"] [" 間隔 7"] [" 間隔 8"]</p> <p>間隔は ISO 8601P 構文を使用し、以下のようになる</p> <p>P [年 Y] [月 M] [週 W] [日 D] [T [時 H] [分 M] [秒 S]]</p> <p>年、月、週、日、時、分、および秒の変数は整数値で、配信試行の間の間隔を指定する (最初の変数は、最初の配信の失敗と最初の配信試行の間の間隔を指定する)。アルファベットの変数ラベル (P、Y、M、W、D、H、M、S、および T) は、大文字と小文字が区別されない。最初の P は必須。他の変数は省略可能だが、時刻の値を指定する場合、T は必須</p> <p>backoff、nonurgentbackoff、normalbackoff、urgentbackoff キーワードのどれにでも、最大で 8 つの間隔を指定できる。最後に指定する間隔は、追加の再試行の間隔として、必要に応じて使用される。配信は、notices キーワードで指定した時間の間に試行される。配信が失敗すると、配信失敗の通知が生成され、差出人にメッセージが返される</p> <p>配信の再試行のデフォルトの間隔は分単位で、以下のとおり</p> <p>緊急 : 30, 60, 60, 120, 120, 120, 240 標準 : 60, 120, 120, 240, 240, 240, 480 緊急ではない : 120, 240, 240, 480, 480, 480, 960</p> <p>使用方法と例については、『iPlanet Messaging Server 管理者ガイド』を参照</p>
bangoverpercent	<p>A!B%C を A! (B%C) としてグループ化する。つまり、bangoverpercent キーワードを使うと、「bang」アドレス (A!B%C) は A はルーティングホスト、c は最終的な宛先ホストとして解釈される</p> <p>このキーワードは、A!B@c 形式のアドレス処理に影響を与えない。これらのアドレスは、常に (A!B)@C として扱われる。このような処理は RFC 822 と RFC 976 の両方で義務付けられている。</p> <p>構文：</p> <p>bangoverpercent</p>

表 5-6 チャンネルキーワードのアルファベット順リスト (続き)

キーワード	使用目的
bangstyle	<p>エンベロープで UUCP! (bang スタイル) ルーティングを使用する。uucp と同義</p> <p>このチャンネルでは、エンベロープの RFC 976 の bang スタイルアドレス規則に準拠するアドレスが使用される (たとえば、UUCP チャンネル)。 bangstyle キーワードは、uucp と同義で使用できる</p> <p>構文: bangstyle</p>
bidirectional	<p>チャンネルは、マスターとスレーブの両方のプログラムによって処理される。bidirectional、master、および slave キーワードによって、チャンネルのキューにメッセージが入れられたときに MTA が配信活動を開始するかどうかが決まる。これらのキーワードを使用すると、対応するチャンネルプログラムの特徴が反映されるようになる。これらのキーワードをいつ、どこで使用すべきかについては、MTA がサポートする各種チャンネルの説明を参照</p> <p>構文: bidirectional</p>
blocketrn	<p>ETRN コマンドを処理しない。allowetrn を参照</p> <p>構文: blocketrn</p>
blocklimit	<p>メッセージあたりの許可されている MTA ブロックの最大数。MTA は、これよりも多いブロックを含むメッセージがチャンネルのキューに入れられるのを拒否する。1 つの MTA ブロックは通常 1024 バイトで、これは MTA オプションファイルにある BLOCK_SIZE オプションを使用して変更することができる</p> <p>構文: blocklimit 整数</p>
cacheeverything	<p>すべての接続情報をキャッシュし、すべての形式のキャッシュを有効にする</p> <p>通常 SMTP チャンネルキャッシュには、成功した接続試行と失敗した接続試行の両方に関する情報が記録される。ただし、このキャッシングの方法がすべての状況に適しているというわけではない。cacheeverything、cachefailures、cachesuccesses、および nocache キーワードを使用して、MTA キャッシュを調整する</p> <p>構文: cacheeverything</p>
cachefailures	<p>接続失敗に関する情報だけをキャッシュする。cacheeverything を参照</p> <p>構文: cachefailures</p>

表 5-6 チャンネルキーワードのアルファベット順リスト (続き)

キーワード	使用目的
cache successes	<p>接続成功に関する情報だけをキャッシュする。このキーワードは、チャンネルの <code>nocache</code> キーワードと同等のものである。 <code>cacheeverything</code> を参照</p> <p>構文: cache successes</p>
channel filter	<p>チャンネルフィルタファイルの場所を指定する。 <code>destinationfilter</code> と同義。 <code>channel filter</code> キーワードは、一般的な MTA チャンネルで、送信メッセージに適用するチャンネルレベルのフィルタの指定に使用する</p> <p>構文: channel filter フィルタ</p> <p>フィルタ引数は、チャンネルフィルタの位置を示す必須の URL</p>
charset7	<p>7 ビットのテキストメッセージに関連付けるデフォルトの文字セット。</p> <p>MIME 仕様は、プレーンテキストのメッセージで使用される文字セットにラベルを付ける仕組みを提供する。特に、 <code>Content-type:</code> ヘッダー行の一部として <code>charset=</code> パラメータを指定することができる。MIME には、 <code>US-ASCII</code> (デフォルト)、 <code>ISO-8859-1</code>、 <code>ISO-8859-2</code> などのようにさまざまな文字セット名が定義されている。既存のシステムやユーザエージェントの中には、これらの文字セットラベルを生成する仕組みを提供しないものもあり、その結果、プレーンテキストメッセージの中には適切にラベル付けされていないものもある。 <code>charset7</code>、 <code>charset8</code>、および <code>charsets</code> チャンネルキーワードは、メッセージヘッダーに文字セット名を挿入するメカニズムをチャンネルごとに提供するキーワード。適切なキーワードが指定されていない場合は、 <code>Content-type:</code> ヘッダー行に文字セット名が挿入されない</p> <p>構文: charset7 文字セット名</p> <p>文字セット名引数は、文字セット名を指定する</p>
charset8	<p>8 ビットのテキストメッセージに関連付けるデフォルトの文字セット。</p> <p><code>charset8</code> キーワードでは、メッセージヘッダーの 8 ビット文字の MIME エンコーディングも制御される (メッセージヘッダーでは、8 ビットのデータは常に不正)。MTA では通常、メッセージヘッダーにあるすべての不正な 8 ビットデータが MIME でエンコードされ、 <code>charset8</code> の値が指定されていない場合は「UNKNOWN」文字セットとしてラベルされる。 <code>charset7</code> および <code>charsets</code> を参照</p> <p>構文: charset8 文字セット名</p> <p>文字セット名引数は、文字セット名を指定する</p>

表 5-6 チャンネルキーワードのアルファベット順リスト (続き)

キーワード	使用目的
charsetesc	<p>エスケープ文字を含む7ビットのテキストメッセージに関連付けるデフォルトの文字セット。charset7 および charset8 を参照</p> <p>構文: charsetesc 文字セット名</p> <p>文字セット名引数は、文字セット名を指定する</p>
checkehlo	<p>リモート SMTP サーバから返された SMTP 応答見出しに「ESMTP」文字列があるかどうかをチェックする。この文字列がある場合は EHLO が使用される。この文字列がない場合は HELO が使用される。デフォルトでは、見出し行に「fire away」という文字列が含まれている場合を除き、EHLO をすべての1回目の接続試行に使用する。「fire away」が含まれている場合には、HELO が使用される。このデフォルトの動作に対応するキーワードはない。このデフォルトの動作は、ehlo キーワードと checkehlo キーワードによる中間的な結果である</p> <p>構文: checkehlo</p>
commentinc	<p>メッセージのヘッダー行内のコメントをそのままにする</p> <p>MTA は必要ときだけヘッダー行の内容を解釈する。ただし、省略形のアドレスを書き換えてなくすために (それ以外の場合は、有効なアドレスに変換するために)、アドレスを含むすべての登録されたヘッダー行をパースしなければならない。この処理の途中では、コメント (括弧で囲まれた文字列) が抽出され、ヘッダー行が再構成されるときに変更されるか、あるいは除外されることがある。この動作は、commentinc、commentmap、commentomit、commentstrip、および commenttotal キーワードを使用して制御できる</p> <p>構文: commentinc</p>
commentmap	<p>COMMENT_STRINGS マッピングテーブルを通じて、メッセージヘッダー行でコメント文字列を実行する。commentinc を参照</p> <p>構文: commentmap</p>
commentomit	<p>メッセージのヘッダー行内のコメントを取り除く。commentinc を参照</p> <p>構文: commentomit</p>
commentstrip	<p>メッセージのヘッダー行内にある問題を起こす文字を取り除く。commentinc を参照</p> <p>構文: commentstrip</p>

表 5-6 チャンネルキーワードのアルファベット順リスト (続き)

キーワード	使用目的
commenttotal	<p>Received: ヘッダー行以外のすべてのヘッダー行から、()内に入っているコメントを削除する。このキーワードは通常使い道はなく、勧められない。commentinc を参照</p> <p>構文: commenttotal</p>
connectalias	<p>メッセージがキューから取り出されるときにアドレスの書き換えを行わず、受取人のアドレスに書かれているホストに配信する</p> <p>構文: connectalias</p>
connectcanonical	<p>メッセージがキューから取り出されるときに書き換えを行い、MTA が接続するシステムのホストエイリアスに接続する</p> <p>構文: connectcanonical</p>
copysendpost	<p>差出人のアドレスが空白の場合以外は、失敗のコピーを postmaster に送信する。その後 postmaster は、バウンスや通知以外のすべての配信不能メッセージのコピーを受け取る</p> <p>sendpost、copysendpost、errsendpost、および nosendpost キーワードは、配信不能のメッセージを postmaster に送ることを制御するために使用される。これらのキーワードのいずれも指定されていない場合、Errors-to: ヘッダー行やエンベロープ From: アドレスが空白でエラーの返送が表示されないようになっている場合を除き、配信不能メッセージのコピーはデフォルトでポストマスターに送信される。このデフォルトの動作は、どのキーワードの設定にも対応していない</p> <p>構文: copysendpost</p>
copywarnpost	<p>差出人のアドレスが空白の場合以外は、警告のコピーを postmaster に送信する。この場合、postmaster は、バウンスや通知以外のすべての配信不能メッセージの警告を受け取ることになる</p> <p>warnpost、copywarnpost、errwarnpost、nowarnpost キーワードは、警告メッセージを postmaster に送ることを制御するために使用される。これらのキーワードのいずれも指定されていない場合、Warnings-to: ヘッダー行やエンベロープ From: アドレスが空白で警告が表示されないようになっている場合を除き、警告のコピーはデフォルトでポストマスターに送信される。このデフォルトの動作は、どのキーワードの設定にも対応していない</p> <p>構文: copywarnpost</p>

表 5-6 チャンネルキーワードのアルファベット順リスト (続き)

キーワード	使用目的
daemon	<p>メールを転送するゲートウェイの名前を指定する。daemon キーワードは、SMTP チャンネル上でターゲットホストの選択を制御するために使用する。通常、ホストへの接続に使用されているチャンネルは、メッセージのエンベロップアドレスに表示される。daemon キーワードは、エンベロップアドレスにどのチャンネルが表示されているかにかかわらず、チャンネルがファイヤウォールやメールハブシステムなど特定のリモートシステムに接続するように設定する。</p> <p>構文: daemon ルーティング_ホスト名</p> <p>実際のリモートシステム名は、daemon キーワードの直後に表示される。daemon キーワードの後ろの引数が完全なドメイン名ではない場合、引数は無視され、チャンネルは正規ホストに接続する</p>
datefour	<p>メッセージヘッダーの日付フィールドを4桁の年数に変換する。値が50以下の2桁の日付表示には2000が加えられ、50より大きいものには1900が付け加えられる</p> <p>構文: datefour</p>
datetwo	<p>メッセージヘッダーの日付フィールドを2桁の年数に変換する。MTAは4桁の日付表示から先頭の2桁を取り去る。これは、2桁の日付表示を要求する、標準に準拠していないメールシステムとの互換性を提供する目的で行われる。その他の目的のために使用してはならない</p> <p>構文: datetwo</p>
dayofweek	<p>メッセージヘッダーの日付フィールドの日付の仕様に曜日を含め、曜日情報がない場合にはその情報を日付/時刻ヘッダーに追加する</p> <p>構文: dayofweek</p>
defaulthost	<p>アドレスを完成させるために使用する、特定のホスト名を指定する。このホスト名は、受信側のユーザIDに追加される</p> <p>構文: defaulthost <i>host1</i> [<i>host2</i>]</p> <p>defaulthost キーワードの後には、チャンネルで受信するアドレス(エンベロップ From: アドレスとヘッダーにある)を完成させるためのドメイン名(<i>host1</i>)を追加する必要がある。オプションの2番目のドメイン名(<i>host2</i>)を、エンベロップ To: アドレスを完成させるために指定することもできる。<i>host2</i>の名前には、少なくとも1つのピリオドを含める必要がある</p>

表 5-6 チャンネルキーワードのアルファベット順リスト (続き)

キーワード	使用目的
<code>defaultnameservers</code>	TCP/IP スタックが選択したネームサーバを使用する 構文: <code>defaultnameservers</code>
<code>defaultmx</code>	チャンネルが、ネットワークから MX 検索を実行するかどうかを決定する。 <code>defaultmx</code> キーワードは、ネットワークが MX レコードをサポートする場合に <code>mx</code> を使用するように指定する。MX 検索をサポートするチャンネルではすべて <code>defaultmx</code> キーワードがデフォルトとして設定されている 構文: <code>defaultmx</code>
<code>deferred</code>	指定配信日 (Deferred-delivery: ヘッダー行) の認識と処理を行う。未来の <code>deferred</code> 指定配信日が付いているメッセージは、有効期限が切れて返されるか、あるいは指定配信日があるまでチャンネルのキューに保管される。Deferred-delivery: ヘッダー行の形式と操作の詳細については、RFC 1327 を参照 構文: <code>deferred</code>
<code>defragment</code>	このチャンネルのキューに入れられた MIME 準拠のメッセージ全体、あるいは部分を再組立する。チャンネルが <code>defragment</code> でマークされていれば、このチャンネルのキューに入れられるメッセージまたは部分メッセージはすべて、代わりに再組立チャンネルのキューに入れられる。すべての部分が到着したら、メッセージは再構築されて本来の宛先に送られる 構文: <code>defragment</code>
<code>dequeue_removeoute</code>	キューから取り出す際にエンベロープの To: アドレスからソースルートを削除する。 <code>dequeue_removeoute</code> チャンネルキーワードは、送信 TCP/IP チャンネルで使用して、エンベロープの受取人アドレスからソースルートを削除することができる。特に、このキーワードは、メールホスト属性を使用して NMS システムまたはソースルートをサポートしない他のシステムに直接メッセージを送るサイトで役立つことがある 構文: <code>dequeue_removeoute</code>
<code>destinationfilter</code>	送信するメッセージに提供されるチャンネルフィルタの場所を指定する。 <code>destinationfilter</code> は <code>channelfilter</code> と同義 構文: <code>destinationfilter</code> フィルタ フィルタ引数は、チャンネルフィルタの位置を示す必須の URL

表 5-6 チャンネルキーワードのアルファベット順リスト (続き)

キーワード	使用目的
disableetrn	ETRN SMTP コマンドのサポートを無効にする。SMTP サーバで、ETRN はサポートされているコマンドとしてアドバタイズされない。allowetrn を参照 構文: disableetrn
domainetrn	MTA に、ドメインを指定する ETRN コマンドだけを処理するように指示する。また、domainetrn キーワードにより、ドメインが一致し、MTA によって実行されるチャンネル名はエコーされない。allowetrn を参照 構文: domainetrn
domainvrfy	引数として完全なアドレス (たとえば、user@host) を使って、SMTP VRFY コマンドを発行する。domainvrfy、localvrfy、および novrfy キーワードは、MTA の SMTP クライアントでの VRFY コマンドの使用を制御する 構文: domainvrfy
dropblank	ソースチャンネルに指定されている場合、空白の To:、Resent-To、Cc:、あるいは Resent-Cc: ヘッダーを受信メッセージから削除する 構文: dropblank
ehlo	すべての初期 SMTP 接続に EHLO を使用する。checkehlo を参照 構文: ehlo
eightbit	チャンネルが 8 ビットの文字をサポートする。eightbit キーワードは、127 (10 進) 以上の序数値を持つ文字の使用を制限しないチャンネルで使用する必要がある 構文: eightbit

表 5-6 チャンネルキーワードのアルファベット順リスト (続き)

キーワード	使用目的
<code>eightnegotiate</code>	<p>チャンネルが 8 ビット転送の使用をネゴシエートする (可能な場合)</p> <p>拡張 SMTP など、転送形式によっては、8 ビットの文字を転送できるかどうかを判断するためのネゴシエーションの形式をサポートするものもある。ネゴシエーションが失敗したときにメッセージをエンコードするようにチャンネルに指示するためには、<code>eightnegotiate</code> キーワードを使用する。デフォルト設定ではすべてのチャンネルに対してこのキーワードが有効になっているため、ネゴシエーションをサポートしないチャンネルは 8 ビットデータの転送が可能であるという仮定のもとに動作する</p> <p>構文: <code>eightnegotiate</code></p>
<code>eightstrict</code>	<p>チャンネルがネゴシエーションが行われていない 8 ビットデータを含むメッセージを拒否するように指定する</p> <p>構文: <code>eightstrict</code></p>
<code>errsendpost</code>	<p>差出人のアドレスが無効な (返信ができない) 場合、障害のコピーを <code>postmaster</code> に送る。<code>copysendpost</code> を参照</p> <p>構文: <code>errsendpost</code></p>
<code>errwarnpost</code>	<p>差出人のアドレスが無効な (返信ができない) 場合、警告のコピーを <code>postmaster</code> に送る。<code>copywarnpost</code> を参照</p> <p>構文: <code>errwarnpost</code></p>
<code>expandchannel</code>	<p><code>expandlimit</code> の適用による遅延拡張を実行するチャンネルを指定する。<code>expandchannel</code> が指定されていない場合、デフォルトで再処理用のチャンネルが使用されますが、一般的に Messaging Server の設定には処理チャンネルを使用する必要があります。<code>expandchannel</code> によって据え置き処理用のチャンネルが指定されている場合、このチャンネルは再処理または処理チャンネルであることが必要である。ただし、一般的に Messaging Server は処理チャンネルであるため、その他のチャンネルを使用すると予期しない結果になることがある</p> <p>構文: <code>expandchannel</code></p>

表 5-6 チャンネルキーワードのアルファベット順リスト (続き)

キーワード	使用目的
expandlimit	<p>アドレスの数がこの制限を超えた場合、受信メッセージを「オフライン」で処理する。</p> <p>構文: expandlimit 整数</p> <p>expandlimit キーワードには、オフライン処理を開始するまでにチャンネルから受け入れることのできるメッセージのアドレス数の上限を示す整数の引数をとる。expandlimit キーワードが設定されていない場合のデフォルトは無制限。引数の値を 0 にすると、そのチャンネルで受信したすべてのメッセージがオフラインで処理される</p>
exproute	<p>このチャンネルのアドレスに対して明示的なルーティングを実行しない。</p> <p>exproute キーワード (explicit routing の略) は、アドレスがリモートのシステムに渡されるときに、関連するチャンネルが明示的なルーティングを要するということを MTA に指示するものである。このキーワードがチャンネルに指定されている場合、MTA により、ローカルシステムの名前 (またはローカルシステムの現在のエイリアス) を含むルーティング情報が、チャンネルに一致するすべてのヘッダドレスとすべてのエンベロープの From: アドレスに追加される</p> <p>構文: exproute</p>
fileinto	<p>メールボックスフィルタ fileinto の操作が適用されたときの、アドレスに対する効果を指定する。fileinto キーワードは、現在は ims-ms チャンネルに対してのみサポートされている</p> <p>ims-ms チャンネルの場合、通常の使用方法は以下のとおり fileinto \$U+\$S@\$D</p> <p>上の例では、最初のサブアドレスの代わりに、フォルダ名をサブアドレスとして元のアドレスに挿入するように指定している</p>

表 5-6 チャンネルキーワードのアルファベット順リスト (続き)

キーワード	使用目的
filesperjob	<p>1つのジョブで処理できるキューエントリの数。filesperjob キーワードは、実際のキューエントリ (ファイル) 数を与えられた値で割って作成するジョブ数を算出する。各メッセージのキューエントリ数は、single や single_sys キーワード、メーリングリストのヘッダー修正アクション、そのほかさまざまな要素によって決定される</p> <p>filesperjob と addrspersperjob キーワードは、追加のマスタープロセスを作成するために使用することができる</p> <p>構文: filesperjob 整数</p> <p>filesperjob の引数は1つの正の整数で、関連するチャンネルに送る必要のあるアドレスまたはキューエントリ (ファイル) の数を指定するもので、その後それらのアドレスまたはファイルを処理するために複数のマスタープロセスが作成される。パラメータに0またはそれ以下の値を指定した場合は、1つのサービスジョブだけがキューに入れられる。キーワードを指定しないと、デフォルトで値は0に指定される</p>
filter	<p>ユーザフィルタファイルの場所を指定する。filter キーワードは、ネイティブと ims-ms チャンネルで使用する。</p> <p>構文: filter url</p> <p>フィルタの引数は、フィルタファイルの場所を示す必須の URL</p>
forwardcheckdelete	<p>ソース IP アドレスの確認を実行する。forwardcheckdelete キーワードは、リバース検索の後に正引き検索を行い、リバース検索で返された名前の正引き検索がオリジナルの接続の IP アドレスに一致しない場合は、リバース検索で返された名前を無視 (削除) するように、MTA に指示する。代わりにオリジナルの IP アドレスを使う</p> <p>forwardchecknone、forwardchecktag、および forwardcheckdelete キーワードは、リバース検索の実行や、DNS リバース検索を使用して見つかった IP 名の正引き検索を MTA にさせるかどうかの制御による影響を、変更することができる。このような正引き検索が要求された場合、これらのキーワードは、IP 名の正引き検索がオリジナルの接続の IP 番号に一致しない場合の MTA の対処も決定する</p> <p>構文: forwardcheckdelete</p>
forwardchecknone	<p>転送検索は実行されない。forwardcheckdelete を参照</p> <p>構文: forwardchecknone</p>

表 5-6 チャンネルキーワードのアルファベット順リスト (続き)

キーワード	使用目的
forwardchecktag	リバース検索が行われるたびに正引き検索を実行し、検出された番号が最初の接続の番号と一致しない場合は IP 名にアスタリスク (*) を付けるように指定する。forwardcheckdelete を参照 構文: forwardchecktag
header_733	メッセージヘッダーで % ルーティングを使用する。このチャンネルでは、ソースルートを除く、完全な RFC 822 形式のヘッダーアドレスがサポートされる。ソースルートは、パーセント記号の規則を使用して、書き換える必要がある メッセージヘッダーで 733 アドレス規則を使用すると、RFC 822 と RFC 976 に違反する可能性がある。このキーワードは、チャンネルがソースルートアドレスを処理できないシステムに接続することが確実な場合以外は使用しないようにする 構文: header_733
header_822	メッセージヘッダーでソースルートを使用する。このチャンネルでは、ソースルートを含む、完全な RFC 822 形式のヘッダーアドレス規則がサポートされる。ほかのヘッダーアドレスタイプのキーワードが指定されていない場合、これがデフォルトになる 構文: header_822
header_uucp	ヘッダーで ! (bang スタイル) または UUCP ルーティングを使用する。このキーワードの使用は勧めない使用すると RFC 976 に違反することになる 構文: header_uucp
headerlabelalign	このチャンネルのキューに入れられたメッセージヘッダーのヘッダー行を調整する。このキーワードは整数値の引数をとる。配置ポイントとは、ヘッダーの内容を揃えるためのマージンである 構文: headerlabelalign 配置_ポイント headerlabelalign キーワードは整数値の引数をとる。配置ポイントとは、ヘッダーの内容を揃えるためのマージンである デフォルトの値は 0 で、ヘッダーは揃えられない

表 5-6 チャンネルキーワードのアルファベット順リスト (続き)

キーワード	使用目的
headerlinelength	<p>このチャンネルのキューに入れられたメッセージヘッダー行の長さを制御する。このキーワードで指定する長さよりも長い行は、RFC 822 の折り返し規則に基づいて折り返される</p> <p>構文: headerlinelength 長さ</p> <p>長さの値は整数。このキーワードが明示的に設定されていない場合のデフォルトは 80。これよりも長い行は、RFC 822 の折り返し規則に基づいて折り返される。</p>
headerread	<p>オリジナルのメッセージヘッダーが処理される前に、メッセージがキューに入れられたときに、オプションファイルからそのメッセージのヘッダーにトリミングの規則を適用する (注意して使用すること)</p> <p>構文: headerread チャンネル_read_headers.opt</p> <p>チャンネルは、ヘッダーオプションファイルが関連付けられているチャンネルの名前</p>
headertrim	<p>オリジナルのメッセージヘッダーが処理された後で、オプションファイルからそのメッセージのヘッダーにトリミングの規則を適用する (注意して使用すること)。headertrim キーワードは、該当のチャンネル宛のメッセージだけに影響する。ソースチャンネルには影響しない</p> <p>構文: headertrim チャンネル_headers.opt</p> <p>チャンネルは、ヘッダーオプションファイルが関連付けられているチャンネルの名前</p>
holdlimit	<p>アドレスの数がこの制限を超えた場合、受信メッセージを「HELD」としてマークし、再処理チャンネル (または expandchannel キーワードで指定するチャンネル) のキューに入れる。HELD メッセージと同様、ファイルは MTA キューエリアに未処理のままどまり、MTA postmaster による手作業の処理を待機する</p> <p>構文: holdlimit</p>
holdexquota	<p>制限容量を超過したユーザに対するメッセージを保留する。これらのメッセージは、配信可能になるまで、またはタイムアウトになってメッセージ返送ジョブによって返送されるまで、MTA キュー内に保持される。</p> <p>holdexquota キーワードと noexquota キーワードは、ディスク制限容量を超過している Berkeley メールボックスユーザ (UNIX) 宛てのメッセージの処理を制御する</p> <p>構文: holdexquota</p>

表 5-6 チャンネルキーワードのアルファベット順リスト (続き)

キーワード	使用目的
<code>identnone</code>	IDENT 検索を無効にする。IP からホスト名への変換を実施する。メッセージの Received: ヘッダー行には IP 番号とホスト名の両方が含まれる 構文: <code>identnone</code>
<code>identnonelimited</code>	IDENT 検索、リバース DNS 検索、そして Received: ヘッダーに表示された情報については、 <code>identnone</code> と同じ効果がある。ただし、異なる点として、 <code>identnonelimited</code> の場合は、 <code>switchchannel</code> キーワードの影響で、DNS リバース検索によってホスト名が検出されたかどうかにかかわらず常に IP リテラルアドレスがチャンネルスイッチのベースとして使用される 構文: <code>identnonelimited</code>
<code>identnonenumeric</code>	IDENT 検索を無効にし、DNS リバース検索の IP 番号からホスト名への変換を禁止する。Received: ヘッダーにユーザフレンドリーでないホスト名を使用するため、パフォーマンスの向上につながる可能性もある 構文: <code>identnonenumeric</code>
<code>identnonesymbolic</code>	この IDENT 検索を無効にするが、IP からホスト名への変換を実施する。メッセージの Received: ヘッダーにはホスト名だけが含まれる 構文: <code>identnonesymbolic</code>
<code>identtcp</code>	受信 SMTP 接続での IDENT 検索と IP からホスト名への変換を実行する。IDENT 検索は IDENT プロトコル (RFC 1413) を使用する。IDENT プロトコルから入手した情報 (通常、SMTP 接続を行っているユーザの ID) は、次のメッセージの Received: ヘッダー行に挿入される。また、DNS リバース検索でレポートされた受信 IP 番号に対応するホスト名と、IP 番号自体もヘッダー行に挿入される 構文: <code>identtcp</code>
<code>identtcplimited</code>	IDENT 検索、リバース DNS 検索、そして Received: ヘッダーに表示された情報については、 <code>identtcp</code> と同じ効果がある。ただし、異なる点として、 <code>identtcp</code> の場合は、 <code>switchchannel</code> キーワードの影響で、DNS リバース検索によってホスト名が検出されたかどうかにかかわらず常に IP リテラルアドレスがチャンネルスイッチのベースとして使用される 構文: <code>identtcplimited</code>

表 5-6 チャンネルキーワードのアルファベット順リスト (続き)

キーワード	使用目的
<code>identtcpnumeric</code>	受信 SMTP 接続で IDENT 検索を実行し、IP からホスト名への変換を無効にする 構文: <code>identtcpnumeric</code>
<code>identtcpsymbolic</code>	IDENT プロトコルを有効にする (RFC 1413)。IDENT プロトコルから入手した情報 (通常、SMTP 接続を行っているユーザの ID) は、次のメッセージの Received: ヘッダー行に、DNS リバース検索でレポートされた実際の受信 IP 番号とともに挿入される。IP 番号自体は Received: ヘッダーに含まれない 構文: <code>identtcpsymbolic</code>
<code>ignoreencoding</code>	受信メッセージの Encoding: ヘッダーを無視する 構文: <code>ignoreencoding</code>
<code>improute</code>	このチャンネルのアドレスに対して黙示的なルーティングを実行しない。 <code>improute</code> キーワードは、MTA に、他のチャンネルに合致するすべてのアドレスが <code>improute</code> マークの付いたチャンネルに送られたメールの中で使用されるときにルーティングを必要とすることを指定する 構文: <code>improute</code>
<code>includefinal</code>	配信通知の中に最終的な形式のアドレス (受取人アドレス) を含める。 <code>includefinal</code> と <code>suppressfinal</code> チャンネルキーワードは、MTA が最終的な形式のアドレスを含めるかどうかを制御するためのものである 構文: <code>includefinal</code>
<code>inner</code>	メッセージをパースし、内部のメッセージヘッダーを書き換える。このキーワードはどのチャンネルにも適用できる 構文: <code>inner</code>
<code>innertrim</code>	たとえば、埋め込まれた MESSAGE/RFC822 ヘッダーのような内部のメッセージヘッダーに、オプションファイルからのヘッダートリミング規則を適用する (注意して使用すること) 構文: <code>innertrim</code> チャンネル_headers.opt チャンネルは、ヘッダーオプションファイルが関連付けられているチャンネルの名前

表 5-6 チャンネルキーワードのアルファベット順リスト (続き)

キーワード	使用目的
interfaceaddress	<p>指定された TCP/IP インタフェースアドレスに、送信時のソースアドレスとしてバインドする。このキーワードは、複数のインタフェースアドレスが存在するシステム上で、MTA が SMTP メッセージを送信する際にどのアドレスをソース IP アドレスとして使用するかを制御する。このキーワードは、INTERFACE_ADDRESS ディスパッチャオプション (接続およびメッセージを受け入れるために TCP/IP チャンネルがリスンするインタフェースアドレスを制御するオプション) を補足するものである</p> <p>構文: interfaceaddress アドレス</p>
interpretencoding	<p>受信メッセージの Encoding: ヘッダーを解釈する</p> <p>構文: interpretencoding</p>
language	<p>ヘッダーのエンコードされた単語のデフォルトの言語を指定する</p> <p>構文: language デフォルト_言語</p>
lastresort	<p>他のホストへの接続試行がすべて失敗した場合に、最終的な接続先となるホストを指定する。このキーワードは、事実上の最終手段的 MX レコードとして動作する。このキーワードは、SMTP チャンネルに対してのみ効果がある</p> <p>構文: lastresort ホスト</p> <p>このキーワードでは、「最終手段的システム」の名前を指定する単一のパラメータが必要</p>
linelength	<p>この長さの制限を超えるメッセージの行を折り返す (MIME によるエンコード)。linelength キーワードは、チャンネルごとに許される最大のメッセージ行の長さを制限する仕組みを提供する。特定のチャンネルのキューに入れられたメッセージの中で、そのチャンネルに指定された行長を超えるメッセージは自動的にエンコードされる</p> <p>linelength キーワードでは、データのエンコードに、転送用にソフト改行を実行する</p> <p>構文: linelength 長さ</p>
linelimit	<p>1つのメッセージに対して許可される最大の行数を指定する。MTA は、この数以上の行を含むメッセージがチャンネルのキューに入れられるのを拒否する。blocklimit キーワードと linelimit キーワードは、必要に応じて同時に指定することができる</p> <p>構文: linelimit 整数</p>

表 5-6 チャンネルキーワードのアルファベット順リスト (続き)

キーワード	使用目的
localvrfy	<p>アドレスのローカル部分を使って SMTP VRFY コマンドを発行する。たとえば、アドレス user1@siroe.com の場合、user1 が VRFY コマンドで使用される。domainvrfy を参照</p> <p>構文: localvrfy</p>
logging	<p>キューに対するメッセージの出入りをログに記録し、特定のチャンネルのログ機能を有効にする。ログは、チャンネルごとに制御される。ログエントリはすべて、ログディレクトリ (<i>server-root/msg-instance/log/imta/mail.log_current</i>) にある mail.log_current ファイルに記録される</p> <p>構文: logging</p>
loopcheck	<p>SMTP サーバがサーバ自体と通信しているかどうかを確認するために、SMTP の見出しに文字列を配置する。loopcheck が設定されている場合、SMTP サーバでは XLOOP 拡張がアドバタイズされる。XLOOP をサポートする SMTP サーバと通信する場合、MTA の SMTP クライアントにより、アドバタイズされた文字列と MTA の値が比較され、クライアントが SMTP サーバと通信している場合は、メッセージがただちに返送される</p> <p>構文: loopcheck 文字列</p>
mailfromdnsverify	<p>受信 TCP/IP チャンネルを設定すると、SMTP の MAIL FROM: コマンドに使用されているドメインが DNS 内のエントリに存在するかどうかを確認する。そのエントリが存在しない場合、MTA はメッセージを拒否する</p> <p>構文: mailfromdnsverify</p>
master	<p>チャンネルがマスタープログラムによってのみ使用されるように指定する。bidirectional を参照</p> <p>構文: master</p>

表 5-6 チャンネルキーワードのアルファベット順リスト (続き)

キーワード	使用目的
master_debug	<p>チャンネルのマスタープログラム出力内にデバッグ出力を生成する</p> <p>チャンネルプログラムによっては、デバッグ目的のためにより詳細な診断出力を生成するオプションコードがあるものもある。master_debug および slave_debug チャンネルキーワードは、このチャンネルごとのデバッグとの出力の生成機能を有効にするために指定する</p> <p>UNIX では、master_debug と slave_debug が 1 チャンネルに対して有効になっている場合、ユーザが MTA デバッグ情報を含む imta_sendmail.log- 固有の ID ファイルを、現在のディレクトリに受信できる (ディレクトリに書き込み権がある場合。書き込み権がない場合はデバッグにより stdout に出力)</p> <p>構文: master_debug</p>
maxblocks	<p>メッセージあたりの MTA ブロックの最大数を指定する。長いメッセージは複数のメッセージに分割される。1 つの MTA ブロックは通常 1024 バイトで、これは MTA オプションファイルにある BLOCK_SIZE オプションを使用して変更することができる</p> <p>maxblocks と maxlines キーワードは、自動断片化の対象となるサイズ制限枠を課すために使用される</p> <p>構文: maxblocks 整数</p>
maxheaderaddr	<p>メッセージヘッダー行あたりのアドレスの最大数を指定する。長いヘッダー行は複数のヘッダー行に分割される</p> <p>構文: maxheaderaddr 整数</p> <p>このキーワードには、限度を指定する 1 つの整数のパラメータが必要である。デフォルトでは、ヘッダー行の長さもアドレスの数も制限されていない</p>
maxheaderchars	<p>メッセージヘッダー行あたりの最大文字 (バイト) 数を指定する。長いヘッダー行は複数のヘッダーに分割される</p> <p>構文: maxheaderchars 整数</p> <p>このキーワードには、限度を指定する 1 つの整数のパラメータが必要である。デフォルトでは、ヘッダー行の長さもアドレスの数も制限されていない</p>
maxjobs	<p>一度に実行できる並行ジョブの最大数を指定する。通常 maxjobs は、チャンネルが使用するジョブコントローラのプールで同時に実行できるジョブの合計数以下の値に設定される</p> <p>構文: maxjobs 整数</p>

表 5-6 チャンネルキーワードのアルファベット順リスト (続き)

キーワード	使用目的
maxlines	<p>メッセージあたりのメッセージ行の最大数を指定する。長いメッセージは複数のメッセージに分割される。この制限は、必要に応じて同時に課することができる。maxblocks を参照</p> <p>構文: maxlines 整数</p>
maxprocchars	<p>処理して書き換えるヘッダーの最大の長さを指定する。指定した長さよりも長いヘッダーを持つメッセージも受け入れられて配信されるが、異なる点は、長いヘッダー行は書き換えられないということである</p> <p>構文: maxprocchars 整数</p> <p>デフォルトでは、どのような長さのヘッダーも処理される</p>
maysaslserver	<p>クライアントが SASL 認証を使用することを SMTP サーバが許可するように指定する</p> <p>maysaslserver、mustsaslserver、nosasl、nosaslserver、nosaslswitchchannel、および saslswitchchannel キーワードは、SMTP プロトコルが使用される際に、TCP/IP チャンネルなどの SMTP チャンネルによって SASL (SMTP AUTH) が使用されるように設定するためのものである</p> <p>構文: maysaslserver</p>
maytls	<p>SMTP クライアント/サーバが、TLS を使用して接続を受け入れ、送信接続にも TLS の使用を試みられるようにする</p> <p>maytls、maytlsclient、maytlserver、musttls、musttlsclient、musttlserver、notls、notlsclient、notlserver、および tlsswitchchannel チャンネルキーワードは、TCP/IP チャンネルなどの SMTP ベースのチャンネルが SMTP プロトコルを使用するときに TLS をどのように処理するかを設定するためのキーワード</p> <p>構文: maytls</p>
maytlsclient	<p>SMTP クライアントは、TLS をサポートする SMTP サーバにメッセージを送信する際に、TLS を使用しようとする。maytls を参照</p> <p>構文: maytlsclient</p>
maytlserver	<p>SMTP サーバは、メッセージを受信するときに TLS の使用を許可し、STARTTLS 拡張をサポートすることをアドバタイズする。maytls を参照</p> <p>構文: maytlserver</p>

表 5-6 チャンネルキーワードのアルファベット順リスト (続き)

キーワード	使用目的
missingrecipientpolicy	<p>受取人のヘッダー行がないメッセージの処理を制御する</p> <p>構文: missingrecipientpolicy 整数</p> <p>missingrecipientpolicy キーワードは、そのようなメッセージを扱うときに使用するべきアプローチを指定する整数値をとる。このキーワードが明示的に表現されていない場合は、デフォルト値の 0 が使用され、エンベロープ To: アドレスが To: ヘッダーに置かれる</p> <p>missingrecipientpolicy の値は以下のとおり</p> <ul style="list-style-type: none"> • 0 - To: ヘッダー行にエンベロープ To: 受取人を使用する • 1 - 変更せずに無効なメッセージを通過させる • 2 - To: ヘッダー行にエンベロープ To: 受取人を使用する • 3 - 単一の Bcc: ヘッダー行にすべてのエンベロープ To: 受取人を使用する • 4 - グループのコンストラクタ (たとえば ;) を To: ヘッダー行に作成し、To: 受取人は指定しない • 5 - 空白の Bcc: ヘッダー行を作成する • 6 - メッセージを拒否する
msexchange	<p>Microsoft Exchange ゲートウェイおよびクライアントのチャンネルを提供する。msexchange チャンネルキーワードでも、破損した TLS コマンドをアドバタイズ (および認識) するようになる</p> <p>構文: msexchange</p>
multiple	<p>チャンネル全体の 1 つのメッセージのコピーに複数の宛先ホストを受け入れる。どちらのキーワードを使用しても、メッセージがキューに入れられる各チャンネルごとに最低 1 つずつメッセージのコピーが作成されることに注意する。一般的に、multiple キーワードはメッセージファイル内の受取人数に制限を課さないことを意味する。ただし SMTP チャンネルのデフォルトは 99</p> <p>キーワード multiple、addrsperfile、single、single_sys は、複数のアドレスを処理する方法を制御するために使用できる</p> <p>構文: multiple</p>
mustsaslsrver	<p>クライアントが SASL 認証を使うことを SMTP サーバが要求するように指定する。SMTP サーバは、リモートクライアントが認証を成功させないかぎり、メッセージを受け付けない。maysaslsrver を参照</p> <p>構文: mustsaslsrver</p>

表 5-6 チャンネルキーワードのアルファベット順リスト (続き)

キーワード	使用目的
musttls	SMTP クライアントとサーバが送受信接続の両方で TLS の使用を要求し、TLS をサポートしないリモート側にはメッセージを転送しない。TLS 使用のネゴシエーションに失敗したりリモートシステムとの電子メールの交換は、許可されない。maytls を参照 構文： musttls
musttlsclient	SMTP クライアントはメッセージを送信するときに TLS の使用を要求し、TLS の使用をサポートしないリモートの SMTP サーバにメッセージを送信しない。maytls を参照 構文： musttlsclient
musttlserver	SMTP サーバが TLS の使用を要求し、TLS の使用をサポートしないリモートの SMTP クライアントからメッセージを受け付けない。maytls を参照 構文： musttlserver
mx	TCP/IP ネットワークおよびソフトウェアが MX レコード検索をサポートする。現在のところ、mx キーワードは、nonrandommx と同等のものである。randommx を参照 構文： mx
nameservers	ネームサーバの検索を実行している場合、UNIX の nsswitch.conf ファイル、または Windows NT の TCP/IP 設定でネームサーバの使用を選択していない場合を除き、TCP/IP スタックによって選択されたものではなく、指定したネームサーバを参照する 構文： nameservers IP_ アドレス 1 IP_ アドレス 2 ... nameservers では、ネームサーバの IP アドレスの一覧をスペースで区切る必要がある
noaddreturnpath	このチャンネルにキューを入れる際に、Return-path: ヘッダーを追加しない
nobangoverpercent	A!B%C を (A!B)%C としてグループ化する (デフォルト)。つまり、nobangoverpercent キーワードを使うと、「bang」アドレス (A!B%C) は C はルーティングホスト、A は最終的な宛先ホストとして解釈される このキーワードは、A!B@C 形式のアドレス処理に影響を与えない。これらのアドレスは、常に (A!B)@C として扱われる。このような処理は RFC 822 と RFC 976 の両方で義務付けられている。 構文： nobangoverpercent

表 5-6 チャンネルキーワードのアルファベット順リスト (続き)

キーワード	使用目的
noblocklimit	メッセージあたりに許可される MTA ブロックの数に制限はない。 blocklimit を参照 構文: noblocklimit
nocache	接続情報をキャッシュしない。cacheeverything を参照 構文: nocache
nochannelfilter	送信メッセージに対して、チャンネルフィルタリングを実行しない。 nodestinationfilter と同義。channelfilter を参照 構文: nochannelfilter
nodayofweek	日付 / 時刻の仕様から曜日を取り除く。これは、この情報を適切に処理することができない、標準に準拠していないメールシステムとの互換性を提供する目的で行われる。その他の目的のために使用してはならない。 dayofweek を参照 構文: nodayofweek
nodefaulthost	アドレスを完成させるために使用する、ドメイン名を指定しない。 defaulthost を参照 構文: nodefaulthost
nodeferred	据え置き of 配信日 を処理しない。deferred を参照 構文: nodeferred
nodefragment	メッセージ、あるいはメッセージの部分に対する特別処理を実行しない。 defragment を参照 構文: nodefragment
nodestinationfilter	送信メッセージに対するチャンネルフィルタリングを実行しない。 destinationfilter を参照 構文: nodestinationfilter

表 5-6 チャンネルキーワードのアルファベット順リスト (続き)

キーワード	使用目的
nodropblank	空白の To:、Resent-To:、Cc:、または Resent-Cc: ヘッダーを削除しない。 dropblank を参照 構文: nodropblank
noehlo	SMTP EHLO コマンドを決して使用しない。ehlo を参照 構文: noehlo
noexproute	このチャンネルのアドレスに対して明示的なルーティングを実行しない。 exproute を参照 構文: noexproute
noexquota	制限容量を超過したユーザに対し、すべてのメッセージを差出人に送り返す。 holdexquota を参照 構文: noexquota
nofileinto	メールボックスフィルタ fileinto のオペレータが効果を発揮しない。 fileinto を参照 構文: nofileinto
nofilter	ユーザメールボックスのフィルタリングを実行しない。filter を参照 構文: nofilter
noheaderread	メッセージがキューに入ったときに、オプションファイルからのヘッダトリミング規則を適用しない。headerread を参照 構文: noheaderread
noheadertrim	オプションファイルからのヘッダトリミング規則を適用しない。 headertrim を参照 構文: noheadertrim
noimproute	このチャンネルのアドレスに対して暗示的なルーティングを実行しない。 improute を参照 構文: noimproute

表 5-6 チャンネルキーワードのアルファベット順リスト (続き)

キーワード	使用目的
noinner	内部のメッセージヘッダーを書き換えない。inner を参照 構文： noinner
noinnertrim	内部のメッセージヘッダーにヘッダートリミング規則を適用しない。 innertrim を参照 構文： noinnertrim
nolinelimit	メッセージあたりに許可される行数に制限はない。linelimit を参照 構文： nolinelimit
nologging	キューに対するメッセージの出入りをログに記録しない。logging を参照 構文： nologging
noloopcheck	SMTP サーバにサーバ自体と通信しているかどうかを確認させるため、 SMTP 見出しに文字列を配置しない。loopcheck を参照 構文： noloopcheck
nomailfromdnsverify	使用しているドメインに対するエントリが DNS に存在するかどうかを MTA は確認しない。mailfromdnsverify を参照 構文： nomailfromdnsverify
nomaster_debug	チャンネルのマスタープログラム出力内にデバッグ出力を生成しない。 master_debug を参照 構文： nomaster_debug
nomsexchange	チャンネルは MS Exchange ゲートウェイを提供しない。msexchange を参照 構文： nomsexchange
nomx	TCP/IP ネットワークが MX 検索をサポートしない。mx を参照 構文： nomx

表 5-6 チャンネルキーワードのアルファベット順リスト (続き)

キーワード	使用目的
nonrandommx	<p>MX 検索を実行するが、返されたエントリーを同等の優先度でランダム化しない。エントリーは、受信した順番と同じ順番で処理される。mx と同等。randommx も参照</p> <p>構文: nonrandommx</p>
nonurgentbackoff	<p>優先度「低」のメッセージの配信試行の頻度を指定する。backoff を参照</p> <p>構文: nonurgentbackoff " 間隔 1" [" 間隔 2"] [" 間隔 3"] [" 間隔 4"] [" 間隔 5"] [" 間隔 6"] [" 間隔 7"] [" 間隔 8"]</p> <p>間隔は ISO 8601P 構文を使用し、以下のようになる</p> <p>P [年 Y] [月 M] [週 W] [日 D] [T [時 H] [分 M] [秒 S]]</p> <p>年、月、週、日、時、分、および秒の変数は整数値で、配信試行の間の間隔を指定する (最初の変数は、最初の配信の失敗と最初の配信試行の間の間隔を指定する)。アルファベットの変数ラベル (P、Y、M、W、D、H、M、S、および T) は、大文字と小文字が区別されない。最初の P は必須。他の変数は省略可能だが、時刻の値を指定する場合、T は必須</p> <p>backoff を参照</p>
nonurgentblocklimit	<p>定期的に行われるジョブのために、指定したサイズより大きいメッセージを無条件に待機させます。nonurgentblocklimit キーワードは、指定したサイズよりも大きいメッセージを nonurgent 優先度 (第 2 のクラス優先度) よりも下げるように MTA に指示します。</p> <p>構文: nonurgentblocklimit 整数</p>
nonurgentnotices	<p>優先度が低いメッセージを配信できない場合に通知を送り、そのメッセージを返送するまでの時間を指定する</p> <p>メッセージの優先度に基づいて異なる返送方法を適用するには、nonurgentnotices、normalnotices、または urgentnotices キーワードを使用する。その他の場合には、すべてのメッセージに notices キーワードの値が使用される。notices を参照</p> <p>構文: nonurgentnotices age1 [age2] [age3] [age4] [age5]</p> <p>キーワードの後には、同じ間隔で増加する最高 5 つの整数値を指定できる。これらの値はメッセージが受信されてから警告メッセージが発行されるまでの時間を示す。RETURN_UNITS オプションが 0 またはオプションファイルで指定されていない場合、時間の単位は日数に、RETURN_UNITS オプションが 1 の場合は時間数になる。指定された最終時間に達してもメッセージを配信できない場合、そのメッセージは差出人に返送される</p>

表 5-6 チャンネルキーワードのアルファベット順リスト (続き)

キーワード	使用目的
noreceivedfor	Received: ヘッダー行のアドレスに、エンベロープを含めない。 noreceivedfor キーワードは、エンベロープアドレスの情報なしに、Received: ヘッダー行を作成するよう MTA に指示する。receivedfor を参照 構文： noreceivedfor
noreceivedfrom	オリジナルのエンベロープの From: アドレスを含めずに、Received: ヘッダー行を作成する。noreceivedfrom キーワードは、オリジナルのエンベロープの From: アドレスを使わずに Received: ヘッダー行を作成するよう MTA に指示する。receivedfrom を参照 構文： noreceivedfrom
noremotehost	アドレスを完成させるために、ローカルホストのドメイン名をデフォルトのドメイン名として使う。remotehost を参照 構文： noremotehost
norestricted	RFC 1137 で制限されているエンコーディングをアドレスに適用しない。unrestricted キーワードと同等。restricted を参照 構文： norestricted
noreturnaddress	RETURN_ADDRESS オプション値を使用する。returnaddress を参照 構文： noreturnaddress
noreturnpersonal	RETURN_PERSONAL オプション値を使用する。returnpersonal を参照 構文： noreturnpersonal
noreverse	アドレスにリバースデータベースを適用しない。noreverse は、チャンネルのキューに入れられたメッセージのアドレスを、アドレスリバース処理から外す。reverse を参照 構文： noreverse

表 5-6 チャンネルキーワードのアルファベット順リスト (続き)

キーワード	使用目的
normalbackoff	<p>優先度「標準」のメッセージの配信試行の頻度を指定する。backoff を参照</p> <p>構文: normalbackoff " 間隔 1" [" 間隔 2"] [" 間隔 3"] [" 間隔 4"] [" 間隔 5"] [" 間隔 6"] [" 間隔 7"] [" 間隔 8"]</p> <p>間隔は ISO 8601P 構文を使用し、以下のようになる</p> <p>P[年 Y][月 M][週 W][日 D][T[時 H][分 M][秒 S]]</p> <p>年、月、週、日、時、分、および秒の変数は整数値で、配信試行の間の間隔を指定する (最初の変数は、最初の配信の失敗と最初の配信試行の間の間隔を指定する)。アルファベットの変数ラベル (P、Y、M、W、D、H、M、S、および T) は、大文字と小文字が区別されない。最初の P は必須。他の変数は省略可能だが、時刻の値を指定する場合、T は必須</p> <p>backoff を参照</p>
normalblocklimit	<p>指定したサイズより大きいメッセージの優先度を「低」に格下げする</p> <p>構文: normalblocklimit 整数</p>
normalnotices	<p>優先度が普通のメッセージを配信できない場合に通知を送り、そのメッセージを返送するまでの時間を指定する。notices を参照</p> <p>構文: normalnotices age1 [age2] [age3] [age4] [age5]</p> <p>キーワードの後には、同じ間隔で増加する最高 5 つの整数値を指定できる。これらの値はメッセージが受信されてから警告メッセージが発行されるまでの時間を示す。RETURN_UNITS オプションが 0 またはオプションファイルで指定されていない場合、時間の単位は日数に、RETURN_UNITS オプションが 1 の場合は時間数になる。指定された最終時間に達してもメッセージを配信できない場合、そのメッセージは差出人に返送される</p>
norules	<p>チャンネル固有の書き換え規則の確認を実行しない。このキーワードは、通常デバッグに使用され、実際のアプリケーションで使用されることはほとんどない。rules を参照</p> <p>構文: norules</p>
nosasl	<p>SASL 認証は許可されず、試行もされない。SASL 認証に成功した場合、このチャンネルへの切り替えは許可されない。maysaslserver を参照</p> <p>構文: nosasl</p>

表 5-6 チャンネルキーワードのアルファベット順リスト (続き)

キーワード	使用目的
nosaslserver	SASL 認証は許可されない。maysaslserver を参照 構文: nosaslserver
nosendetrn	ETRN コマンドを送らない。sendetrn を参照 構文: nosendetrn
nosendpost	障害のコピーを postmaster に送らない。sendpost を参照 構文: nosendpost
noservice	このチャンネルで受信するメッセージのサービス変換は、CHARSET_CONVERSIONS を使用して有効にしなければならない。service を参照 構文: noservice
noslave_debug	スレーブのデバッグ出力を生成しない。slave_debug を参照 構文: noslave_debug
nosmtp	チャンネルは SMTP を使用しない。smtp を参照 構文: nosmtp
nosourcefilter	受信メッセージに対してチャンネルフィルタリングを実行しない。sourcefilter を参照 構文: nosourcefilter
noswitchchannel	送信元のホストに関連するチャンネルに切り替えない。切り替えることを許可しない。switchchannel を参照 構文: noswitchchannel

表 5-6 チャンネルキーワードのアルファベット順リスト (続き)

キーワード	使用目的
notices	<p>通知を送り、メッセージを返すまでの時間を指定する</p> <p>構文: notices age1 [age2] [age3] [age4] [age5]</p> <p>キーワードの後には、同じ間隔で増加する最高 5 つの整数値を指定できる。これらの値はメッセージが受信されてから警告メッセージが発行されるまでの時間を示す。RETURN_UNITS オプションが 0 またはオプションファイルで指定されていない場合、時間の単位は日数に、RETURN_UNITS オプションが 1 の場合は時間数になる。指定された最終時間に達してもメッセージを配信できない場合、そのメッセージは差出人に返送される。</p> <p>それまでは、キーワードで指定した時間になる度に警告メッセージが送られる。キーワードが与えられていなければ、ローカルチャンネル用の notices 設定が使用される (デフォルト)。ローカルチャンネル用の notices 設定もない場合は、メッセージを受信してから 3 日後 (または 3 時間後)、6 日後 (または 6 時間後)、9 日後 (または 9 時間後)、12 日目 (または 12 時間後) に警告メッセージが送られ、その後もメッセージキューに残っているメッセージが差出人に返送される</p>
notls	<p>SMTP クライアントとサーバは TLS の使用を許可しない。また、試行もしない。maytls を参照</p> <p>構文: notls</p>
notlsclient	<p>SMTP クライアントは、メッセージを送信するときに TLS を使用しない。maytlsclient を参照</p> <p>構文: notlsclient</p>
notlsserver	<p>SMTP サーバはメッセージを受信するときに TLS の使用を提供しない。また、許可もしない。maytlsserver を参照</p> <p>構文: notlsserver</p>
novrfy	<p>SMTP VRFY コマンドを出さない。vrfyallow を参照</p> <p>構文: novrfy</p>
nowarnpost	<p>警告のコピーを postmaster に送らない。warnpost を参照</p> <p>構文: nowarnpost</p>

表 5-6 チャンネルキーワードのアルファベット順リスト (続き)

キーワード	使用目的
<code>nox_env_to</code>	キューに入れるときに X-Envelope-to ヘッダー行を追加しない。 <code>x_env_to</code> を参照 構文: <code>nox_env_to</code>
<code>percentonly</code>	A!B%C という形式のアドレスの bang パスを無視する。このキーワードが設定されている場合、パーセントはルーティング用に解釈される 構文: <code>percentonly</code>
<code>percents</code>	エンベロープで % ルーティングを使用する。733 と同義 構文: <code>percents</code>
<code>personalinc</code>	アドレスを書き換える際に、メッセージのヘッダー行にある個人名のフィールドをそのままにする 書き換えプロセスの際には、省略形のアドレスを書き換えてなくすために (それ以外の場合は、有効なアドレスに変換するために)、アドレスを含むすべてのヘッダー行をパースしなければならない。このプロセスの際に、個人名 (角括弧で区切られたアドレスの前にある文字列) が抽出されるが、これはヘッダー行を再構築するときに変更したり除外することもできる。この動作は、 <code>personalinc</code> 、 <code>personalomit</code> 、 <code>personalstrip</code> キーワードの使用によって制御される 構文: <code>personalinc</code>
<code>personalmap</code>	PERSONAL_NAMES マッピングテーブルを通じて、個人名を実行する。 <code>personalinc</code> を参照 構文: <code>personalmap</code>
<code>personalomit</code>	メッセージのヘッダー行にある個人名のフィールドを削除する。 <code>personalinc</code> を参照 構文: <code>personalomit</code>
<code>personalstrip</code>	メッセージのヘッダー行にある個人名のフィールドから問題になる文字を削除する。 <code>personalinc</code> を参照 構文: <code>personalstrip</code>

表 5-6 チャンネルキーワードのアルファベット順リスト (続き)

キーワード	使用目的
pool	<p>プログラムが実行される処理プールマスターチャンネルを指定する</p> <p>MTA は、メッセージを配信するためにサービスジョブ (チャンネルマスタープログラム) を作成する。これらのジョブを起動するジョブコントローラによって、これらのジョブがプールと関連付けられる。プールタイプは <code>job_controller.cnf</code> ファイルで定義される。各チャンネルのマスタープログラムに関連付けるプールは、<code>pool</code> キーワードを使用して、チャンネルごとに選択できる</p> <p>構文: <code>pool</code> プール_名</p> <p><code>pool</code> キーワードの後には、現在のチャンネルの配信ジョブのプール先となるプール名を指定する必要がある。プール名の長さの上限は 12 バイト。<code>pool</code> キーワードが省略されている場合、使用されるプールは、ジョブコントローラの設定ファイルで最初に指定されているデフォルトのキューとなる</p>
port	<p>指定された TCP/IP ポートに接続する。通常、SMTP 実装 TCP/IP チャンネルは、ポート 25 に接続してメッセージを送信する。SMTP 実装 TCP/IP チャンネルがその他のポートを使用するように指定するには、<code>port</code> キーワードを使用する</p> <p>構文: <code>port</code> ポート_番号</p>
postheadbody	<p>配信障害が発生した場合に、メッセージのヘッダーと本文の両方が <code>postmaster</code> に送られる</p> <p>構文: <code>postheadbody</code></p>
postheadonly	<p>配信障害が発生した場合に、メッセージのヘッダーだけが <code>postmaster</code> に送られる</p> <p>構文: <code>postheadonly</code></p>
randommx	<p>MX 検索を実行する。同等の優先順位を持つ MX レコード値を、順不同に処理する。TCP/IP ネットワークには、MX (メールの転送) レコードの使用をサポートするものとしめないものがある。MTA システムの接続先であるネットワークから提供される MX レコードだけを使用するように設定できる TCP/IP チャンネルプログラムもある</p> <p>構文: <code>randommx</code></p>

表 5-6 チャンネルキーワードのアルファベット順リスト (続き)

キーワード	使用目的
receivedfor	<p>メッセージの宛先になっているエンベロープ受取人アドレスが1つだけの場合は、エンベロープの To: アドレスを Received: ヘッダーに含める</p> <p>構文: receivedfor</p>
receivedfrom	<p>メーリングリストの拡大などのために MTA がエンベロープ From: アドレスを変更した場合、Received: ヘッダー行を作成する際に、オリジナルのエンベロープの From: アドレスを含める</p> <p>構文: receivedfrom</p>
remotehost	<p>アドレスを完成させるために、リモートホストの名前をデフォルトのドメイン名として使用する。不適切に構成された SMTP クライアントを扱う場合には、リモートホストのドメイン名を使用することが適切である</p> <p>構文: remotehost ホスト</p> <p>remotehost キーワードの後には、チャンネルで受信するアドレスを完成させるために使用するドメイン名を追加する必要がある</p>
restricted	<p>RFC 1137 によって制限されたエンコーディングをアドレスに適用する。restricted チャンネルキーワードでは、MTA に、このチャンネルがこのエンコーディングを必要とするメールシステムに接続することを示す。すると MTA は、メッセージがチャンネルに書かれるときに、ヘッダーとエンベロープアドレスの両方において引用されたローカルパートをエンコードする。そのチャンネルの受信メールのアドレスは自動的にデコードされる</p> <p>restricted キーワードは、引用されたローカルパートを受け入れることができないシステムに接続するチャンネルに対して適用する。引用されたローカルパートを実際に生成するチャンネルには適用しない</p> <p>構文: restricted</p>
returnaddress	<p>ローカル postmaster の返信アドレスを設定する。デフォルトでは、MTA が返送メッセージや通知メッセージを作成する際に使用される Postmaster の返信アドレスは、postmaster@ ローカルホスト。このローカルホストの部分は、ローカルホストの正式な名前 (ローカルチャンネルの名前)</p> <p>構文: returnaddress postmaster_ アドレス</p> <p>returnaddress は、Postmaster アドレスを指定する必須の引数を取る</p>

表 5-6 チャンネルキーワードのアルファベット順リスト (続き)

キーワード	使用目的
<code>returnenvelope</code>	<p>空白のエンベロープ返信アドレスの使用を制御する</p> <p>構文: <code>returnenvelope</code> ビット_フラグ</p> <p><code>returnenvelope</code> キーワードは1つの整数値をとり、これはビットフラグのセットして解釈される</p> <p>ビット0 (値=1) は、MTA によって生成された返送通知のエンベロープアドレスを空白にするか、あるいはローカルの <code>postmaster</code> のアドレスを入れるかを指定するものである。このビットを設定した場合は、ローカルの <code>postmaster</code> のアドレスを使用することになり、ビットをクリアすると空白アドレスを使用することになる</p> <p>ビット1 (値=2) は、MTA がすべての空白エンベロープアドレスをローカルの <code>postmaster</code> のアドレスに置き換えるかどうかを指定するものである。これは、RFC 821、RFC 822、あるいは RFC 1123 に準拠しないシステムを扱うために使用される</p>
<code>returnpersonal</code>	<p>ローカルの Postmaster に対する個人名を設定する。デフォルトでは、MTA が返送または通知メッセージを作成する際に使用される Postmaster の個人名は、「MTA e-Mail Interconnect」</p> <p>構文: <code>returnpersonal</code> <i>postmaster_名</i></p> <p><code>returnpersonal</code> は、Postmaster 個人名を指定する必須の引数を取る</p>
<code>reverse</code>	<p>チャンネルのキューに入れられたメッセージ内のアドレスに、リバースデータベースまたは REVERSE マッピングを適用する</p> <p>構文: <code>reverse</code></p>
<code>routelocal</code>	<p>アドレスをチャンネルに書き換える際に、アドレスのすべての明示的ルーティングを短絡化しようとする。明示的にルーティングされたアドレス (!、%、または @ の文字を使用) は簡略化されている。このキーワードを内部 TCP/IP チャンネルなどの内部チャンネルに使用すると、SMTP リレーブロッキングの設定を簡単にすることができる</p> <p>ただし、明示的 % やその他のルーティングを必要とする可能性があるチャンネルには、このキーワードを使用してはならない</p> <p>構文: <code>routelocal</code></p>
<code>rules</code>	<p>チャンネル固有の書き換え規則の確認を実行する。通常はデバッグに使用される</p> <p>構文: <code>rules</code></p>

表 5-6 チャンネルキーワードのアルファベット順リスト (続き)

キーワード	使用目的
saslswitchchannel	<p>クライアントが SASL の使用に成功した場合、受信接続が指定のチャンネルに切り替えられる</p> <p>構文: saslswitchchannel チャンネル</p> <p>チャンネル引数は、切り替え先のチャンネルを指定する</p>
sendpost	<p>配信不能のメッセージのコピーを postmaster に送信する。copysendpost を参照</p> <p>構文: sendpost</p>
sendetrn	<p>リモートの SMTP サーバが ETRN をサポートする場合に、ETRN コマンドを送る。sendetrn および nosendetrn キーワードは、MTA が SMTP 接続開始時に ETRN コマンドを送るか、あるいは ETRN コマンドをまったく送らないかどうかを制御する</p> <p>構文: sendetrn ホスト</p> <p>sendetrn キーワードの後には、メッセージの配信先となるシステムの名前を記述する必要がある</p>
sensitivitycompanyconfidential	<p>どの機密レベルのメッセージも許可する。機密度のキーワードは、チャンネルが受け入れられる機密度の上限を設定するものである。Sensitivity: ヘッダーのないメッセージは、通常のメッセージ、つまり、機密度のもっとも低いメッセージとみなされる。このようなキーワードで指定された機密度よりも高い機密度が指定されたメッセージは、チャンネルのキューに入れられたときに、次のようなエラーメッセージが出され、拒否される</p> <p>MTA では、受取人ごとではなく、メッセージごとに機密度のチェックが行われる。1 人の受取人の宛先チャンネルが機密度チェックに失敗した場合、そのチャンネルに関連付けられた受取人だけでなく、すべての受取人のメッセージが返送される</p> <p>構文: sensitivitycompanyconfidential</p>
sensitivitynormal	<p>機密度が「標準」よりも高いメッセージを拒否する。 sensitivitycompanyconfidential を参照</p> <p>構文: sensitivitynormal</p>
sensitivitypersonal	<p>機密度が「個人」よりも高いメッセージを拒否する。 sensitivitycompanyconfidential を参照</p> <p>構文: sensitivitypersonal</p>

表 5-6 チャンネルキーワードのアルファベット順リスト (続き)

キーワード	使用目的
sensitivityprivate	機密度が「プライベート」よりも高いメッセージを拒否する。 sensitivitycompanyconfidential を参照 構文: sensitivityprivate.
service	チャンネルで受信するメッセージのサービス変換を実行する。service キーワードは、CHARSET-CONVERSION エントリにかかわらず、無条件でサービスを有効にする 構文: service
sevenbit	チャンネルは 8 ビット文字をサポートしない。8 ビット文字はエンコードされなければならない。MTA は、そのようなメッセージを自動的にエンコードし、8 ビットデータがメッセージに直接表示されないようにする機能を備えている。特定のチャンネルのキューに入れられるすべてのメッセージにエンコードを適用するには、sevenbit キーワードを指定する 構文: sevenbit
silentetrn	ドメインが一致した、MTA が実行しようとするチャンネルの名前をエコーしないで、ETRN コマンドを処理する。allowetrn を参照 構文: silentetrn
single	チャンネル上のメッセージコピーまたは宛先アドレスごとに、1 つのエンベロープ To: アドレス。multiple を参照 構文: multiple
single_sys	各メッセージコピーは、それぞれ 1 つの宛先システムに対するものでなければならない。multiple を参照 構文: single_sys
slave	このチャンネルはスレーブプログラムによってのみ処理される。 bidirectional を参照 構文: slave
slave_debug	スレーブプログラムでデバッグ出力を生成する。master_debug を参照 構文: slave_debug

表 5-6 チャンネルキーワードのアルファベット順リスト (続き)

キーワード	使用目的
smtp	<p>チャンネルが SMTP を使用する。smtp オプションは、チャンネルが SMTP プロトコルをサポートするかどうか、また、MTA がそのプロトコルの一部としてどのタイプの SMTP 改行記号を期待するのかを指定する。すべての SMTP チャンネルで、smtp キーワード、またはその他の smtp_* キーワードのいずれかが必須</p> <p>smtp_cr、smtp_crlf、smtp_crorlf、および smtp_lf の各キーワードは、SMTP チャンネル上で、SMTP プロトコルの使用を選択するだけでなく、改行記号として使用する文字シーケンスを指定するためにも使用できる。通常は SMTP 改行記号として CRLF が使用され、したがって、MTA は常に CRLF を生成する。これらのキーワードは、受信メールの処理のみに影響する</p> <p>構文: smtp</p>
smtp_cr	<p>CR を SMTP の行末記号として受け入れる。smtp を参照</p> <p>構文: smtp_cr</p>
smtp_crlf	<p>SMTP の行末記号に CRLF を必要とする。これらを使用すると、キャリッジリターン (CR) + ラインフィード (LF) のシーケンスのみが改行記号として認識される。smtp を参照</p> <p>構文: smtp_crlf</p>
smtp_crorlf	<p>CR (キャリッジリターン)、LF (ラインフィード)、または完全な CRLF のすべてを SMTP の行末記号として使用できる。smtp を参照</p> <p>構文: smtp_crorlf</p>
smtp_lf	<p>CR (キャリッジリターン) なしの LF (ラインフィード) を SMTP の行末記号として受け入れる。smtp を参照</p> <p>構文: smtp_lf</p>
sourceblocklimit	<p>メッセージあたりの許可されている MTA ブロックの最大数。MTA は、これよりも多いブロックを含むメッセージがチャンネルのキューに入れられるのを拒否する。blocklimit を参照</p> <p>構文: sourceblocklimit 整数</p>

表 5-6 チャンネルキーワードのアルファベット順リスト (続き)

キーワード	使用目的
<code>sourcecommentinc</code>	<p>受信メッセージのヘッダー行にコメントを残す</p> <p>MTA は必要なときだけヘッダー行の内容を解釈する。ただし、省略形のアドレスを書き換えてなくすために (それ以外の場合は、有効なアドレスに変換するために)、アドレスを含むすべての登録されたヘッダー行をパースしなければならない。この処理の途中では、コメント (括弧で囲まれた文字列) が抽出され、ヘッダー行が再構成されるときに変更されるか、あるいは除外されることがある。ソースチャンネルでは、この動作は <code>sourcecommentinc</code>、<code>sourcecommentmap</code>、<code>sourcecommentomit</code>、<code>sourcecommentstrip</code>、および <code>sourcecommenttotal</code> の各キーワードを使用して制御される</p> <p>構文: <code>sourcecommentinc</code></p>
<code>sourcecommentmap</code>	<p>ソースチャンネルを通じて、メッセージのヘッダー行のコメント文字列を実行する。<code>sourcecommentinc</code> を参照</p> <p>構文: <code>sourcecommentmap</code></p>
<code>sourcecommentomit</code>	<p>受信メッセージの To:、From:、Cc: などのヘッダー行からコメントを削除する。<code>sourcecommentinc</code> を参照</p> <p>構文: <code>sourcecommentomit</code></p>
<code>sourcecommentstrip</code>	<p>メッセージのヘッダー行内にある問題を起こす文字を取り除く。<code>sourcecommentinc</code> を参照</p> <p>構文: <code>sourcecommentstrip</code></p>
<code>sourcecommenttotal</code>	<p>受信メッセージの全体から、コメント (括弧内の部分) を削除する。<code>sourcecommenttotal</code> キーワードは、MTA に、<code>Received:</code> ヘッダーを除くすべてのヘッダーからコメントを削除するように指示する。このキーワードは通常使い道はなく、勧められない。<code>sourcecommentinc</code> を参照</p> <p>構文: <code>sourcecommenttotal</code></p>
<code>sourcefilter</code>	<p>受信メッセージ用のチャンネルフィルタの場所を指定する</p> <p>構文: <code>sourcefilter</code> フィルタ</p> <p>フィルタ引数は、チャンネルフィルタの位置を示す必須の URL</p>

表 5-6 チャンネルキーワードのアルファベット順リスト (続き)

キーワード	使用目的
sourcepersonalinc	<p>メッセージのヘッダー行にある個人名のフィールドをそのままにする</p> <p>書き換えプロセスの際には、省略形のアドレスを書き換えてなくすために (それ以外の場合は、有効なアドレスに変換するために)、アドレスを含むすべてのヘッダー行をパースしなければならない。このプロセスの際に、個人名 (角括弧で区切られたアドレスの前にある文字列) が抽出されるが、これはヘッダー行を再構築するときに変更したり除外することもできる。ソースチャンネルでは、この動作は <code>sourcepersonalinc</code>、<code>sourcepersonalmap</code>、<code>sourcepersonalomit</code>、および <code>sourcepersonalstrip</code> キーワードを使用して制御される</p> <p>構文: <code>sourcepersonalinc</code></p>
<code>sourcepersonalmap</code>	<p>ソースチャンネルを通じて個人名を実行する。 <code>sourcepersonalinc</code> を参照</p> <p>構文: <code>sourcepersonalmap</code></p>
<code>sourcepersonalomit</code>	<p>メッセージのヘッダー行にある個人名のフィールドを削除する。 <code>sourcepersonalinc</code> を参照</p> <p>構文: <code>sourcepersonalomit</code></p>
<code>sourcepersonalstrip</code>	<p>受信メッセージのヘッダー行にある個人名のフィールドから、問題になる文字を削除する。 <code>sourcepersonalinc</code> を参照</p> <p>構文: <code>sourcepersonalstrip</code></p>
sourceroute	<p>メッセージのエンベロープにソースルートを使用する。822 と同じ</p> <p>構文: <code>sourceroute</code></p>
<code>streaming</code>	<p>チャンネルが使用するプロトコルストリーミングの程度を指定</p> <p>構文: <code>streaming 0 1 2 3</code></p> <p>このキーワードには整数値のパラメータが必要である。パラメータの解釈は、プロトコルによって異なる。</p> <p>ストリーミング値の範囲は0から3までである。値が0の場合はストリーミングが指定されず、値が1の場合は <code>RCPT TO</code> コマンドグループがストリーミングされ、2の場合は <code>MAIL FROM/RCPT TO</code> が、3の場合は <code>HELO/MAIL FROM/RCPT TO</code> または <code>RSET/MAIL FROM/RCPT TO</code> がストリーミングされる。デフォルトは0</p>

表 5-6 チャンネルキーワードのアルファベット順リスト (続き)

キーワード	使用目的
subaddressexact	<p>サブアドレスの完全一致を含め、エイリアスが完全に一致する必要がある。subaddressexact キーワードは、MTA にエントリの一致の確認中に、特別なサブアドレスの処理を行わないように指示する。エイリアスが一致するとみなされるためには、サブアドレスを含むメールボックス全体が一致しなければならない。その他の比較 (特に、ワイルドカードによる比較や、サブアドレスを削除した比較) は行われない</p> <p>構文: subaddressexact</p>
subaddressrelaxed	<p>サブアドレスのないエイリアスは一致可能。subaddressrelaxed キーワードは MTA に、完全一致と「名前+*」の形式の一致を検索した後、名前の部分のみの一致を検索するように指示する。デフォルトのキーワードは subaddressrelaxed</p> <p>構文: subaddressrelaxed</p>
subaddresswild	<p>サブアドレスのワイルドカードを持つエイリアスは一致可能。subaddresswild キーワードは、MTA に、サブアドレスを含む完全な一致を検索した後、「名前+*」の形式のエントリを検索するように指示する</p> <p>構文: subaddresswild</p>
subdirs	<p>複数のサブディレクトリを使用する</p> <p>構文: subdirs 整数</p> <p>チャンネルのメッセージを拡散するサブディレクトリの数を指定する整数を、このキーワードの後に付ける</p>
submit	<p>チャンネルを送信専用のチャンネルに指定する。これは通常、特別なポートで実行され、メッセージを送信する目的だけに使用される SMTP サーバなどの TCP/IP チャンネルに有用である。RFC 2476 ではメッセージ送信に対してポート 587 を確立する</p> <p>構文: submit</p>
suppressfinal	<p>オリジナルの形式のアドレスが存在する場合に、通知メッセージに最終アドレス形式を表示しないようする。includefinal を参照</p> <p>構文: suppressfinal</p>

表 5-6 チャンネルキーワードのアルファベット順リスト (続き)

キーワード	使用目的
switchchannel	<p>サーバチャンネルから送信元のホストに関連付けられたチャンネルに切り替える。サーバが最初に使用するチャンネルに <code>switchchannel</code> を指定すると、送信元ホストの IP アドレスがチャンネルテーブルに照合され、一致した場合はソースチャンネルがそれに合わせて切り替えられる。一致するものがない場合、または最初のデフォルト受信チャンネルに一致するものが検出された場合は、MTA がリバース DNS 検索によって検出したホスト名に一致するエントリーを見つけようと試みる場合もある</p> <p>構文: switchchannel</p>
threaddepth	<p>スレッド当たりのメッセージの数。threaddepth キーワードは、マルチスレッドの SMTP クライアントが 1 つのスレッドに割り当てられるメッセージの数を制限し、それ以上のメッセージがある場合には別のスレッドに割り当てよう指定する。通常、同じ宛先へのメッセージはすべて 1 つのスレッドによって処理されるが、このキーワードを指定すると、それらのメッセージが複数のスレッドによって処理されるようになる</p> <p>構文: threaddepth</p>
tlsswitchchannel	<p>TLS のネゴシエートが成功した場合に、指定したチャンネルに切り替える。<code>maytls</code> を参照</p> <p>構文: tlsswitchchannel チャンネル</p> <p>チャンネルパラメータは、切り替え先のチャンネルを指定する</p>
unrestricted	<p>RFC 1137 で制限されているエンコーディングをアドレスに適用しない。<code>restricted</code> を参照</p> <p>構文: unrestricted</p>
urgentbackoff	<p>緊急メッセージの配信試行の頻度を指定する。<code>backoff</code> を参照</p> <p>構文: urgentbackoff " 間隔 1" [" 間隔 2"] [" 間隔 3"] [" 間隔 4"] [" 間隔 5"] [" 間隔 6"] [" 間隔 7"] [" 間隔 8"]</p> <p>間隔は ISO 8601P 構文を使用し、以下のようになる</p> <p>P [年 Y] [月 M] [週 W] [日 D] [T [時 H] [分 M] [秒 S]]</p> <p>年、月、週、日、時、分、および秒の変数は整数値で、配信試行の間の間隔を指定する (最初の変数は、最初の配信の失敗と最初の配信試行の間の間隔を指定する)。アルファベットの変数ラベル (P、Y、M、W、D、H、M、S、および T) は、大文字と小文字が区別されない。最初の P は必須。他の変数は省略可能だが、時刻の値を指定する場合、T は必須</p>

表 5-6 チャンネルキーワードのアルファベット順リスト (続き)

キーワード	使用目的
<code>urgentblocklimit</code>	指定したサイズより大きいメッセージの優先度を「標準」に設定する 構文: <code>urgentblocklimit</code>
<code>urgentnotices</code>	優先度が高いメッセージを配信できない場合に通知を送り、そのメッセージを返送するまでの時間を指定する。notices を参照 構文: <code>urgentnotices age1 [age2] [age3] [age4] [age5]</code> キーワードの後には、同じ間隔で増加する最高 5 つの整数値を指定できる。これらの値はメッセージが受信されてから警告メッセージが発行されるまでの時間を示す。RETURN_UNITS オプションが 0 またはオプションファイルで指定されていない場合、時間の単位は日数に、RETURN_UNITS オプションが 1 の場合は時間数になる。指定された最終時間に達してもメッセージを配信できない場合、そのメッセージは差出人に返送される
<code>useintermediate</code>	通知メッセージに対して、MTA に最初に提示されたアドレスを表示する 構文: <code>useintermediate</code>
<code>user</code>	緊急メッセージのマスターチャンネルプログラム処理に対するキューを指定する。user キーワードは、パイプチャンネルでどのユーザ名で実行するかを示すのに使用される 構文: <code>user ユーザ名</code> user の引数は、通常小文字に変換されるが、引数に引用符が付けられている場合は、元の大文字と小文字が維持される
<code>uucp</code>	エンベロープで UUCP! (bang スタイル) ルーティングを使用する。 bangstyle と同義 構文: <code>uucp</code>
<code>viaaliasoptional</code>	チャンネルに一致する最終的な受取人アドレスをエイリアスで作成する必要がないことを指定する。 構文: <code>viaaliasoptional</code>

表 5-6 チャンネルキーワードのアルファベット順リスト (続き)

キーワード	使用目的
viaaliasrequired	<p>チャンネルに一致する最終的な受取人アドレスをエイリアスで作成する必要があることを指定する。最終受取人アドレスとは、関連するエイリアス拡張を行った後で一致するアドレス。アドレスを受取人アドレスとして MTA に直接渡すことはできない。チャンネルに書き換えただけでは十分ではないからである。チャンネルに書き換えた後で、本当にチャンネルと一致したとみなされるよう、アドレスもエイリアスから展開する必要がある。</p> <p>viaaliasrequired キーワードは、たとえば、ローカルチャンネルで、任意のアカウント (UNIX システム上の任意のネイティブ Berkeley メールボックスなど) への配信を防ぐために使用できる</p> <p>構文: viaaliasrequired</p>
vrfyallow	<p>SMTP VRFY コマンドに対して、詳細な情報を提供する応答を出す。</p> <p>vrfyallow、vrfydefault、および vrfyhide キーワードは、送信側の SMTP クライアントが SMTP の VRFY コマンドを出したときの MTA SMTP サーバの応答を制御する。これらのキーワードを使用すると、VRFY コマンドに対する応答をチャンネルごとに制御できる。一方、HIDE_VERIFY オプションは、1つの SMTP サーバを介して処理されるすべての受信 TCP/IP チャンネルに適用される</p> <p>構文: vrfyallow</p>
vrfydefault	<p>チャンネルオプションで HIDE_VERIFY=1 が設定されている場合を除き、SMTP VRFY コマンドに対して詳細な情報を提供する応答を提供する。 vrfyallow を参照</p> <p>構文: vrfydefault</p>
vrfyhide	<p>SMTP VRFY コマンドに対して、不確実であいまいな応答のみを出す。 vrfyallow を参照</p> <p>構文: vrfyhide</p>
warnpost	<p>警告のコピーを postmaster に送信する。copywarnpost を参照</p> <p>構文: warnpost</p>

表 5-6 チャンネルキーワードのアルファベット順リスト (続き)

キーワード	使用目的
x_env_to	<p>キューに入れるときに X-Envelope-to ヘッダー行を付け加える。x_env_to と nox_env_to キーワードは、特定のチャンネルのキューに入れられたメッセージのコピーに X-Envelope-to ヘッダー行を生成するかしないかを制御する。single キーワードでマークされているチャンネルでは、x_env_to キーワードはこれらのヘッダーの生成を有効にする</p> <p>構文： x_env_to single</p> <p>x_env_to キーワードには、有効にするための single キーワードが必要</p>

表 5-7 は、チャンネルキーワードの機能別リストです。

チャンネルキーワードの機能別グループの詳細については、『iPlanet Messaging Server 管理者ガイド』の「チャンネル定義を設定する」の章を参照してください。

表 5-7 機能別チャンネルキーワード

機能	関連キーワード
アドレスタイプ	733, 822, uucp, header_733, header_822, header_uucp
アドレスの解釈	bangoverpercent, nobangoverpercent, percentonly
アドレス内のルーティング情報	exproute, improute, noexproute, noimproute
ルーティングアドレスの書き換えを短絡化する	routelocal
メッセージがキューから削除されたときのアドレスの書き換え	connectalias, connectcanonical
チャンネル固有の書き換え規則	norules, rules
チャンネルの方向性	bidirectional, master, slave
優先度に影響するメッセージサイズ	nonurgentblocklimit, normalblocklimit, urgentblocklimit
チャンネル接続情報のキャッシング	cacheeverything, cachefailures, cachesuccesses, nocache
アドレスおよびメッセージファイルの処理量	addrspersjob, filespersjob, maxjobs
複数のアドレス	addrspersfile, multiple, single, single_sys
複数アドレスの拡張	expandchannel, expandlimit, holdlimit
複数のサブディレクトリ	subdirs

表 5-7 機能別チャンネルキーワード (続き)

機能	関連キーワード
サービスジョブのキューのスケジュール	pool, maxjobs
指定配信日	deferred, nodeferred
配信不能メッセージに対する通知発行のタイミング	nonurgentnotices, normalnotices, notices, urgentnotices
返送メッセージ	copysendpost, errsendpost, nosendpost, sendpost
警告メッセージ	copywarnpost, errwarnpost, nowarnpost, warnpost
Postmaster 返送メッセージの内容	postheadbody, postheadonly
通知メッセージ内の変更されたアドレスを含める	includefinal, suppressfinal, useintermediate
プロトコルストリーミング	streaming
マルチスレッドチャンネルで新しいスレッドをトリガする	threaddepth
チャンネルプロトコルの選択	nosmtp, smtp, smtp_cr, smtp_crlf, smtp_crorlf, smtp_lf
SMTP EHLO コマンド	checkehlo, ehlo, noehlo
SMTP ETRN コマンドを受信する	allowetrn, blocketrn, disableetrn, domainetrn, silentetrn
SMTP ETRN コマンドを送信する	nosendetrn, sendetrn
SMTP VRFY コマンド	domainvrfy, localvrfy, novrfy
SMTP VRFY コマンドに回答する	vrfyallow, vrfydefault, vrfyhide
TCP/IP ポート番号	interfaceaddress, port
TCP/IP MX レコードのサポート	defaultmx, defaultnameservers, mx, nameservers, nomx, nonrandommx, randommx
最後のホスト仕様	lastresort
受信 SMTP 接続における DNS リバース検索と IDENT 検索	forwardcheckdelete, forwardchecknone, forwardchecktag, identnone, identnonelimited, identnonnumeric, identnonesymbolic, identtcp, identtcpplimited, identtcpnumeric, identtcpsymbolic

表 5-7 機能別チャンネルキーワード (続き)

機能	関連キーワード
受信メール用の代替チャンネル	allowswitchchannel, noswitchchannel, switchchannel
不完全なアドレスのホスト名	defaulthost, nodefaultshost, noremotehost, remotehost
不正な空白の受取人ヘッダー	dropblank, nodropblank
受取人のヘッダーなしのメッセージ	missingrecipientpolicy
8ビット処理能力	eightbit, eightnegotiate, eightstrict, sevenbit
文字セットのラベル	charset7, charset8, charsetesc
メッセージ行の長さの制限	linelength
チャンネル固有のリバースデータベースの使用	noreverse, reverse
内部ヘッダーの書き換え	inner, noinner
制限されたメールボックスのエンコーディング	norestricted, restricted, unrestricted
メッセージヘッダー行のトリミング	headerread, headertrim, innertrim, noheaderread, noheadertrim, noinnertrim
Encoding: ヘッダー行	ignoreencoding, interpretencoding
X-Envelope-to: ヘッダー行の作成	nox_env_to, x_env_to
Return-path: ヘッダー行の作成	addreturnpath, noaddreturnpath
Received: ヘッダー行内のエンベロープ To: および From: アドレス	noreceivedfor, noreceivedfrom, receivedfor, receivedfrom
Postmaster アドレス	aliaspostmaster, noreturnaddress, noreturnpersonal, returnaddress, returnpersonal
空白のエンベロープ return アドレス	returnenvelope
アドレスヘッダー行内のコメント	commentinc, commentmap, commentomit, commentstrip, commenttotal, sourcecommentinc, sourcecommentmap, sourcecommentomit, sourcecommentstrip, sourcecommenttotal
アドレスヘッダー行内の個人名	personalinc, personalmap, personalomit, personalstrip, sourcepersonalinc, sourcepersonalmap, sourcepersonalomit, sourcepersonalstrip

表 5-7 機能別チャンネルキーワード (続き)

機能	関連キーワード
エイリアスファイルとエイリアスデータベースプロープ	aliaslocal
サブアドレス	subaddressexact, subaddressrelaxed, subaddresswild
エイリアスで作成するアドレス	viaaliasoptional, viaaliasrequired
2 桁または 4 桁の日付の変換	datefour, datetwo
日付表示内の曜日仕様	dayofweek, nodayofweek
長いヘッダー行の自動分割	maxheaderaddrs, maxheaderchars
ヘッダーの配置と折り返し	headerlabelalign, headerlinelength
メッセージおよび部分メッセージの自動再組立	defragment, nodefragment
大きなメッセージの自動断片化	maxblocks, maxlines
絶対的なメッセージのサイズ制限	blocklimit, linelimit, noblocklimit, nolinelimit, sourceblocklimit
ヘッダーの最大長	maxprocchars
制限容量超過ユーザへのメール配信	holdexquota, noexquota
ゲートウェイデーモン	daemon
アカウント、またはメッセージのルーターメールボックスの処理	user
メッセージのログ	logging, nologging
チャンネルのマスター/スレーブプログラムのデバッグ	master_debug, nomaster_debug, noslave_debug, slave_debug
機密度チェック	sensitivitycompanyconfidential, sensitivitynormal, sensitivitypersonal, sensitivityprivate
SASL 設定	maysaslserver, mustsaslserver, nosasl, nosaslserver, nosasl, saslswitchchannel
メール From: のドメインが DNS に存在するかどうかを確認する	mailfromdnsverify, nomailfromdnsverify
チャンネル動作のタイプ	submit
フィルタファイルの場所	channelfilter, destinationfilter, fileinto, filter, nochannelfilter, nodestinationfilter, nofileinto, nofilter, nosourcefilter, sourcefilter

表 5-7 機能別チャンネルキーワード (続き)

機能	関連キーワード
ヘッダー内の SMTP AUTH からの認証済みアドレス	authrewrite
TLS (Transport Layer Security)	maytls, maytlsclient, maytlsserver, musttls, musttlsclient, musttlsserver, notls, notlsclient, notlsserver, tlsswitchchannel
MS Exchange ゲートウェイチャンネル	msexchange, nomsexchange
ソースルートの削除	dequeue_removeoute
デフォルトの言語	language
Loopcheck	loopcheck, noloopcheck
サービス	noservice, service
指定配信	backoff, nonurgentbackoff, normalbackoff, urgentbackoff

エイリアスファイル

エイリアスファイルは、ディレクトリで設定されていないエイリアスを設定するのに使用します。よい例として、**Postmaster** エイリアスが挙げられます。変更を有効にするには、MTA を再起動する必要があります。感嘆符 (!) で始まる行は、コメント行として解釈されるため、無視されます。また、空白行も無視されます。

このファイルでは、一行に入力できる文字数が 1024 バイトに制限されています。円記号 (¥) を継続文字として使用すれば、1 つの論理行を複数の行に分割することができます。

ファイルフォーマットは以下のとおりです。

```
user@domain : <アドレス >
user@domain : <address> <address> ...
```

以下に、エイリアスファイルの例を示します。

```
! A /var/mail user
mailsrv@siroe.com:mailsrv@native-daemon

!A message store user
ms_testuser@siroe.com:mstestuser@ims-ms-daemon
```

エイリアスファイルに他のファイルを含める

プライマリエイリアスファイルには、他のファイルを含めることができます。次の行は、MTA に file-spec ファイルを読み込むように指示するためのものです。

```
<file-spec
```

ファイル仕様は、完全なパスを指定したものでなければなりません。また、そのファイルには、プライマリエイリアスファイルと同じ保護が設定されている必要があります(たとえば、誰でも読み取り可能でなければなりません)。

含めたファイルの内容は、エイリアスファイル内のリファレンスポイントに挿入されます。含めたファイルへのリファレンスをそのファイルの実際の内容に置き換えることによっても、同様の効果が得られます。含めたファイルのフォーマットは、プライマリエイリアスファイルとまったく同じになります。さらに、含めたファイルに他のファイルを含めることも可能です。ファイルを3段階まで含めたネスティングが許可されています。

/var/mail チャネルオプションファイル

オプションファイルは、ローカルチャネルのさまざまな特徴を制御するために使用されます。このローカルチャネルのオプションファイルは MTA の設定ディレクトリに保存し、`native_option` という名前を付けなければなりません (例、`server-root/msg-instance/imta/config/native_option`)。

オプションファイルは複数の行から構成されており、各行にはそれぞれ 1 つのオプション設定が含まれています。オプション設定は、次の形式で記述されています。

```
オプション = 値
```

値は、オプションの要件に基づき、文字列または整数のいずれかとなります。

表 5-8 ローカルチャネルのオプション

オプション	説明
<code>FORCE_CONTENT_LENGTH</code> (0 または 1。UNIX のみ)	<code>FORCE_CONTENT_LENGTH=1</code> の場合、MTA によりローカルチャネルに配信されるメッセージに <code>Content-length</code> : ヘッダー行が追加され、「From」が行の最初にある場合、チャネルで「>From」構文が使用されなくなる。これによって、ローカルの UNIX メールが Sun のより新しいメールツールとの互換性を持つようになるが、他の UNIX メールツールとの互換性がなくなることもある
<code>FORWARD_FORMAT</code> (文字列)	ユーザの <code>.forward</code> ファイルの場所を指定する。この文字列では、 <code>%u</code> は各ユーザの ID で置換され、 <code>%h</code> は各ユーザのホームディレクトリで置換される。このオプションが明示的に指定されていない場合、デフォルトの動作は次と同様になる <code>FORWARD_FORMAT=%h/.forward</code>
<code>REPEAT_COUNT</code> (整数) <code>SLEEP_TIME</code> (整数)	MTA が新しいメールを配信しようとするときに、ユーザの新しいメールファイルが他のプロセスによってロックされている場合、これらのオプションによって、ローカルプログラムが試行すべき再試行の回数と頻度を制御することができます。指定された回数の再試行が行われてもファイルを開くことができなかった場合、メッセージはローカルのキューに残され、次にローカルのチャネルが新しいメッセージを配信するときに再試行される The <code>REPEAT_COUNT</code> オプションは、メールファイルを開こうとする試行が何回行われるかを制御する。 <code>REPEAT_COUNT</code> のデフォルトは 30 (30 回の試行) <code>SLEEP_TIME</code> オプションは、チャネルプログラムが何秒間隔で試行を繰り返すかを制御する。 <code>SLEEP_TIME</code> は 2 (2 秒の間隔で再試行) にデフォルト設定されている

表 5-8 ローカルチャネルのオプション (続き)

オプション	説明
SHELL_TIMEOUT (整数)	.forward を完成するために、チャネルがユーザのシェルコマンドを待機する時間 (秒数) を制御する。この時間が経過すると、「ユーザ B のコマンドを完了するシェルコマンドのタイムアウト」という旨のメッセージとともに、元の差出人にエラーメッセージが返送される。デフォルトは 600 (10 分)
SHELL_TMPDIR (ディレクトリ固有)	シェルコマンドに配信を行う際に、ローカルチャネルが一時ファイルを作成する場所を制御する。デフォルトでは、一時ファイルはユーザのホームディレクトリに作成される。このオプションを使用すると、管理者は一時ファイルを別の (単一の) ディレクトリに作成するように選択できる。たとえば、以下のように記述する SHELL_TMPDIR=/tmp

SMTP チャンネルオプションファイル

オプションファイルは、TCP/IP チャンネルのさまざまな特徴を制御するために使用されます。このようなオプションファイルは、MTA 設定ディレクトリ (`server-root/msg-instance/imta/config`) に保存し、`x_option` という名前を付けなければなりません。この「x」はチャネルの名前です。

ファイルの形式

オプションファイルは複数の行から構成されており、各行にはそれぞれ 1 つのオプション設定が含まれています。オプション設定は、次の形式で記述されています。

```
オプション = 値
```

値は、オプションの要件に基づき、文字列または整数のいずれかとなります。オプションが整数値を受け入れる場合、基数は `b%v` という記法を用いて指定することができます。この場合、`b` は底 10 および `vb` で表される基数です。

使用可能な SMTP チャンネルオプション

表 5-9 に、使用可能なオプションを示します。

表 5-9 SMTP チャンネルオプション

オプション	説明
ALLOW_ETRNS_PER_SESSION (整数)	1つのセッションで受け入れられる ETRN コマンドの数を制限する。デフォルトは 1
ALLOW_RECIPIENTS_PER_TRANSACTION (整数)	1つのメッセージについて許される受取人の数を制限する。デフォルトでは、制限はない
ALLOW_REJECTIONS_BEFORE_DEFERRAL (整数)	単一のセッションで許容される不正な RCPT TO: アドレス数を制限する。つまり、指定された数の To: アドレスが拒否されると、その後のすべての受取人は、適正、不正にかかわらず、4xx エラーで拒否される
ALLOW_TRANSACTIONS_PER_SESSION (整数)	1つの接続について許されるメッセージの数を制限する。デフォルトでは、制限はない
ATTEMPT_TRANSACTIONS_PER_SESSION (整数)	1つの接続セッションの間に MTA が転送を試みるメッセージの数を制限する
BANNER_ADDITION (U.S. ASCII 文字列)	指定した文字列を SMTP 見出しの行に追加する。文字列には垂直の棒 () は使用できない
BANNER_HOST (U.S. ASCII 文字列)	SMTP 見出しに表示されるホスト名を設定する。SMTP 見出しは、SMTP サーバで表示される最初のグリーティングと、SMTP クライアントが発行する HELO/EHLO コマンド
CHECK_SOURCE (0 または 1)	DNS 検索で見つかった名前 (DNA 検索がオフの場合は IP ドメインリテラル) が HELO または EHLO 行のリモート SMTP クライアントと一致しない場合、名前を表示した後に Received: ヘッダーにコメントとして含めるかどうかを制御する。通常 SMTP サーバは、接続を受信したホストの名前を、ident* チャンネルキーワードで指定された方法で決定するように試みる。値が 1 の (デフォルト) 場合は、決定された名前が表示された名前と異なる場合、決定した名前を含ませることができる。値が 0 の場合は、このようなコメントが含まれないため、メッセージの確認に便利な手段が 1 つ削除されることになる

表 5-9 SMTP チャンネルオプション (続き)

オプション	説明
COMMAND_RECEIVE_TIME (整数)	一般の SMTP コマンド (他のオプションを使ってタイムアウトの値が明示的に指定されているコマンド以外のコマンド) をどれくらいの時間待つかを分数で指定する
COMMAND_TRANSMIT_TIME (整数)	一般の SMTP コマンド (他のオプションを使ってタイムアウトの値が明示的に指定されているコマンド以外のコマンド) をどれくらいの時間転送し続けるかを分数で指定する
CUSTOM_VERSION_STRING (U.S. ASCII 文字列)	製品名とバージョン番号を指定する、デフォルト見出しの文字列の部分を上書きする このオプションの使用は勧められない
DATA_RECEIVE_TIME (整数)	SMTP ダイアログの間に、データを受け取るまでにどれくらい待つかを分数で指定する。デフォルトは 5
DATA_TRANSMIT_TIME (整数)	SMTP ダイアログの間に、データをどれくらいの時間転送するか分数で指定する。デフォルトは 10
DISABLE_ADDRESS (0 または 1)	MTA SMTP サーバはプライベートコマンド XADR を実行する。このコマンドは、一般のチャンネル情報に加えて、MTA が内部的にアドレスをどのようにルートするかについての情報を返す。サイトによっては、このような情報を公表することはセキュリティ違反とみなされることもある。 DISABLE_ADDRESS オプションを 1 に設定すると、XADR コマンドが無効になる。デフォルトは 0 で、XADR コマンドは無効
DISABLE_CIRCUIT (0 または 1)	SMTP サーバによって実装されたプライベート XCIR コマンドを有効 / 無効にする。XCIR コマンドでは、MTA 回路の確認情報が返される。サイトによっては、このような情報を公表することはセキュリティ違反とみなされることもある。 DISABLE_CIRCUIT を 1 に設定すると、XCIR コマンドが無効になる。DISABLE_CIRCUIT を 0 に設定すると、XCIR コマンドが有効になる。 DISABLE_CIRCUIT が明示的に設定されていない場合、XCIR コマンドの使用は DISABLE_GENERAL オプション設定で制御される

表 5-9 SMTP チャンネルオプション (続き)

オプション	説明
DISABLE_EXPAND (0 または 1)	SMTP の EXPN コマンドは、メーリングリストをエクスパンドするのに使用される。サイトによっては、メーリングリストの内容を外部の者が見られるようにするとセキュリティ違反とみなされることもある。DISABLE_EXPAND オプションを 1 に設定すると、EXPN コマンドが完全に無効になる。デフォルトの値は 0 で、EXPN コマンドは通常通りに機能する リストのディレクトリエントリ内でエクスパンド可能な属性を False に設定することにより、メーリングリストのエクスパンドをリストごとにブロックすることもできる
DISABLE_GENERAL (0 または 1)	SMTP サーバによって実装されたプライベート XGEN コマンドを有効 / 無効にする。XGEN コマンドは、コンパイルされた設定や文字セットが使用されているかどうかに関する、ステータス情報を返す。サイトによっては、このような情報を公表することはセキュリティ違反とみなされることもある。DISABLE_GENERAL を 1 に設定すると、XGEN コマンドが無効になる。デフォルトは 0 で、XSTA コマンドが有効になる
DISABLE_SEND	SMTP の SEND FROM:、SAML FROM:、および SOML FROM: コマンドを無効にする
DISABLE_STATUS (0 または 1)	MTA SMTP サーバはプライベートなコマンド XSTA を実行する。このコマンドは、処理されたメッセージと現在 MTA チャンネルキューの中にあるメッセージの数に関するステータス情報を返す。サイトによっては、そのような情報を公表することはセキュリティ違反とみなされる場合もあります。DISABLE_STATUS オプションを 1 に設定すると XSTA コマンドが無効になる。デフォルトは 0 で、XSTA コマンドが有効になる
DOT_TRANSMIT_TIME (整数)	SMTP ダイアログを終了するドット (.) をどれくらいの間転送するかを分数で指定する。デフォルトは 10
EHLO_ADDITION	EHLO 応答の一部としてアドバタイズする SMTP 拡張機能を指定する。複数の拡張機能を指定するには、各機能を垂直の棒 () で区切る

表 5-9 SMTP チャンネルオプション (続き)

オプション	説明
HIDE_VERIFY (0 または 1)	SMTP VRFY コマンドは、アドレスを使う前にその有効性を確立するために使用する。このコマンドは、自動クエリーエンジンで乱用されているケースもある。HIDE_VERIFY オプションを 1 に設定すると、VRFY コマンドの結果内にある役立つ情報を返さないよう MTA に指示が出される。デフォルトの値は 0 で、VRFY は通常通りに動作する。vrfy* チャンネルキーワードを使用すると、MTA の動作をチャンネルごとに制御できる
INITIAL_COMMAND	SMTP クライアントが送信する初期 SMTP コマンド文字列を指定する
LOG_BANNER (0 または 1)	LOG_BANNER オプションは、チャンネルに対して logging チャンネルキーワードが有効になっている場合に、SMTP サーバのパナー行を mail.log* ファイルのエントリに含むかどうかを制御する。値 1 (デフォルト) は、リモート SMTP サーバのパナー行のログを有効にし、値 0 はそれを無効にする。LOG_BANNER は、リモート SMTP 見出し行が使用可能な場合、チャンネルが生成する返送メッセージにこの見出し行を含めるかどうかについても影響を与える

表 5-9 SMTP チャンネルオプション (続き)

オプション	説明
LOG_CONNECTION (整数)	<p>LOG_CONNECTION オプションは、メッセージを送っている SMTP クライアントのドメイン名などの接続情報を mail.log ファイルに保存するかどうかを制御する。また、そのチャンネルに対して logging チャンネルキーワードが有効になっている場合には、接続記録の書き出しを制御する。この値は、ビットエンコードされた整数を表す 10 進法の整数。以下に、その解釈を示す</p> <p>Bit0 値 -1: これが設定されると、接続の情報が E ログレコードと D ログレコードに含まれる</p> <p>Bit-1 値 -2: これが設定されると、SMTP や X.400 クライアント / サーバなどのメッセージエンキュー / デキューエージェントによって、接続の開閉と失敗の記録がログされる</p> <p>Bit-2 値 -4: これが設定されると、I レコードがログされ、ETRN イベントが記録される</p> <p>ビット 0 が最下位のビット</p> <p>このチャンネルオプションは、MTA オプションファイルに設定されている、グローバル MTA オプション LOG_CONNECTION の設定にデフォルト設定されているこのチャンネルオプションは、グローバルオプションで要求される動作をチャンネルベースで無視するために、明示的に設定できる</p>
LOG_TRANSPORTINFO (0 または 1)	<p>LOG_TRANSPORTINFO は、チャンネルに対して logging チャンネルキーワードが有効になっているときに、送信側と受信側の IP アドレスや TCP ポートなどの転送情報を mail.log ファイルに含めるかどうかを制御する。値 1 を指定すると、転送情報のログが記録される。値 0 を指定すると、ログ機能が無効になる。このチャンネルオプションは、MTA オプションファイルに設定されている、グローバル MTA オプション LOG_CONNECTION の設定にデフォルト設定されている</p>
MAIL_TRANSMIT_TIME (整数)	<p>送信完了までの待機時間を、分数で指定する。デフォルトは 10</p>

表 5-9 SMTP チャンネルオプション (続き)

オプション	説明
MAX_CLIENT_THREADS	クライアントのチャンネルプログラムによって許可される、同時送信接続の最大数を示す整数値。チャンネル処理のキューをどのように設定しているかによって、複数のプロセスを送信接続に使用できることに注意する。このオプションはプロセスごとのスレッド数を制御するものである。このオプションが指定されていない場合のデフォルトは 10
MAX_A_RECORDS	メッセージの配信を試みる際に、MTA で使用する A レコードの最大数を指定する。デフォルトでは、制限はない
MAX_J_ENTRIES	単一の SMTP 接続セッションで書き込む J mail.log* エントリの最大数を指定する。デフォルトは 10
MAX_HELO_DOMAIN_LENGTH	HELO、EHLO、および LHLO 行で許容する引数の長さの制限を指定する。クライアントからこの制限より長いホスト名引数が送信された場合、そのコマンドは拒否される。デフォルトでは、制限はない
MAX_MX_RECORDS (整数 <=32)	メッセージの配信を試みる際に、MTA で使用する MX レコードの最大数を指定する。最大値は 32 で、これがデフォルトである。
PROXY_PASSWORD	プロキシがクライアントから SMTP コマンドを折り返す先の SMTP サーバに、SMTP プロキシを認証するパスワードを指定する。この値は、MMP の SmtproxyPassword パラメータと一致する必要がある
RCPT_TRANSMIT_TIME (整数)	送信完了までの待機時間を、分数で指定する。デフォルトは 10
STATUS_DATA_RECEIVE_TIME (整数)	送られたデータに対する SMTP 応答を待つ時間、つまり、dot-terminating-sent 型のデータに対する 550 (あるいは別の) 応答を受け取るまでの待ち時間を分数で指定する。デフォルト値は 10。次のオプションも参照する： STATUS_DATA_RECV_PER_ADDR_TIME、 STATUS_DATA_RECV_PER_BLOCK_TIME、および STATUS_DATA_RECV_PER_ADDR_PER_BLOCK_TIME

表 5-9 SMTP チャンネルオプション (続き)

オプション	説明
STATUS_DATA_RECV_PER_ADDR_TIME (浮動小数点値)	MAIL TO コマンド内のアドレスの数に基づいて、送られたデータに対する SMTP 応答を受け取るまでの待ち時間を決めるための調整率を指定する。この値にアドレスの数が掛けられ、(STATUS_DATA_RECV_TIME オプションで指定された) 基本の待ち時間に足される。デフォルトは 0.083333
STATUS_DATA_RECV_PER_BLOCK_TIME (浮動小数点値)	送られたブロックの数に基づいて、送られたデータに対する SMTP 応答を受け取るまでの待ち時間を決めるための調整率を指定する。この値にブロックの数が掛けられ、(STATUS_DATA_RECV_TIME オプションで指定された) 基本の待ち時間に足される。デフォルトは 0.001666
STATUS_DATA_RECV_PER_ADDR_PER_BLOCK_TIME (浮動小数点値)	送られたブロック数ごとの (MAIL TO コマンド内にある) アドレスの数に基づいて、送られたデータに対する SMTP 応答を受け取るまでの待ち時間を決めるための調整率を指定する。この値にブロックごとのアドレスの数が掛けられ、(STATUS_DATA_RECV_TIME オプションで指定された) ベースの待ち時間に足される。デフォルトは 0.003333
STATUS_MAIL_RECEIVE_TIME (整数)	送られた MAIL FROM コマンドに対する SMTP 応答を受け取るまでの待ち時間を分数で指定する。(また、初期見出し行を待機する時間、および HELO、EHLO、または RSET コマンドへの応答を待機する時間にも対応する)。デフォルトは 10
STATUS_RCPT_RECEIVE_TIME (整数)	送られた RCPT TO コマンドに対する SMTP 応答を受け取るまでの待ち時間を分数で指定する。デフォルトは 10
STATUS_RECEIVE_TIME (整数)	一般の SMTP コマンド (他のオプションを使ってタイムアウトの値が明示的に指定されているコマンド以外のコマンド) への応答をどれくらいの時間待つかを分数で指定する。デフォルトは 10
STATUS_TRANSMIT_TIME (整数)	SMTP 応答の SMTP コマンドへの転送に、どのくらいの時間をかけるかを分数で指定する

表 5-9 SMTP チャンネルオプション (続き)

オプション	説明
TRACE_LEVEL (0、1、または 2)	このオプションは、TCP/IP レベルのトレースをデバッグログファイルに含めるかどうかを制御する。デフォルト値は 0 で、TCP/IP パケットトレースは含まれない。値 1 を指定すると、TCP/IP パケットトレースをすべてのデバッグログファイルに含めるよう MTA に指示が出される。値 2 を指定すると、TCP/IP パケットトレースだけでなく、DNS 検索情報も含めるよう MTA に指示が出される
TRANSACTION_LIMIT_RCPT_TO	ALLOW_TRANSACTION_PER_SESSION が超過すると、MTA の動作に影響を与える。デフォルトは 0 で、ALLOW_TRANSACTION_PER_SESSION を超過すると、同じセッション中、後続のトランザクションは MTA により MAIL FROM: コマンドで拒否される。1 に設定されている場合は、後続のトランザクションは RCPT TO: コマンドで拒否される

変換

MTA が行う変換には大きく分けて 2 つのカテゴリがあり、各カテゴリはそれぞれ対応するマッピングテーブルおよび MTA の変換ファイルによって制御されます。

最初のカテゴリは MTA が内部で実行する文字セット、フォーマット、およびラベルの変換です。この種の変換は CHARSET-CONVERSION マッピングテーブルによって制御されます。

もう 1 つのカテゴリは、ドキュメントコンバータやウィルススキャナなどの外部サードパーティプログラムのサイトのプロシージャに基づいて行うメッセージ添付ファイルの変換です。この種の変換は CONVERSIONS マッピングテーブルによって制御されます。変換を必要とするメッセージは MTA の変換チャンネルに送られ、その変換チャンネルによってサイト指定の外部変換プロシージャが実行されます。

MTA の変換ファイルは、CONVERSION テーブルによってトリガされる外部変換の詳細、および CHARSET-CONVERSION テーブルによってトリガされる内部変換の詳細を指定するために使用されます。

文字セット変換とメッセージフォーマット変換のマッピング

MTA の基本的なマッピングテーブルの 1 つに、文字セット変換テーブルがあります。CHARSET-CONVERSION という名のこのテーブルは、チャンネル間における文字セット変換やメッセージフォーマット変換の種類を指定するために使用されます。

MTA は 2 通りの方法によって CHARSET-CONVERSION マッピングテーブルをプローブします。1 回目のプローブは、MTA がメッセージフォーマットを変換すべきか、また変換する場合はどのフォーマットオプションを使用すべきかを決定するために実行されます。(フォーマット変換が指定されていない場合、特定の文字セットへの変換に関するチェックは行われません)。このプローブには、以下のような形式の入力文字列が使用されます。

```
IN-CHAN= チャンネル (入力);OUT-CHAN= チャンネル (出力);CONVERT
```

チャンネル(入力)はソースチャンネル(メッセージの送信元)、チャンネル(出力)は宛先チャンネル(メッセージの送信先)を示します。一致するソースチャンネルおよび宛先チャンネルがある場合は、その結果がカンマで区切られたキーワードリストの文字列として表示されます。表 5-10 に、それらのキーワードを一覧します。

表 5-10 CHARSET-CONVERSION マッピングテーブルのキーワード

キーワード	説明
Always	メッセージがチャンネル(出力)の前に変換チャンネルを通過する場合でも、変換を行う
Appledouble	Appledouble フォーマット以外の MacMIME フォーマットを Appledouble フォーマットに変換する
Applesingle	Applesingle フォーマット以外の MacMIME フォーマットを Applesingle フォーマットに変換する
BASE64	MIME エンコードを BASE64 に切り替える
Binhex	Binhex フォーマット以外の MacMIME フォーマット、または Macintosh タイプおよび Mac クリエータ情報を含む部分を Binhex フォーマットに変換する
Block	MacMIME フォーマット部分からデータフォークのみを抽出する
Bottom	message/rfc822 本文部分(転送メッセージ)をメッセージ内容部分とヘッダー部分に「フラット化」する

表 5-10 CHARSET-CONVERSION マッピングテーブルのキーワード

キーワード	説明
Delete	message/rfc822 本文部分 (転送メッセージ) をメッセージ内容部分に「フラット化」し、転送ヘッダーを削除する
Level	重複するマルチパートレベルをメッセージから削除する
Macbinary	Macbinary フォーマット以外の MacMIME フォーマット、または Macintosh のタイプや Mac クリエータ情報を含む部分を Macbinary フォーマットに変換する
No	変換を無効にする
QUOTED-PRINTABLE	MIME エンコードを QUOTED-PRINTABLE に切り替える
Record,Text	テキスト部分を 80 バイトのところで折り返す
Record,Text= n	テキスト部分を n バイトのところで折り返す
RFC1154	メッセージを RFC 1154 フォーマットに変換する
Top	message/rfc822 本文部分 (転送メッセージ) をヘッダー部分とメッセージ内容部分に「フラット化」する
UUENCODE	MIME エンコードを X-UUENCODE に切り替える
Yes	変換を有効にする

文字セット変換およびメッセージフォーマット変換のマッピングについては、『iPlanet Messaging Server 管理者ガイド』を参照してください。

変換ファイル

MTA 設定ファイル (imta.cnf) 内の変換チャンネルの設定は、デフォルトで実行されるようになっています。デフォルト設定の書き換え規則に基づき、user@conversion.ローカルホスト名または user@conversion の形式のアドレスは、CONVERSIONS マッピング状態に関係なく、変換チャンネルにルーティングされます。

変換チャンネルが実行する変換は、MTA の変換ファイル内で定義されている規則によって制御されます。このファイルは、MTA テイラーファイル内の IMTA_CONVERSION_FILE オプションによって指定されているものであり、デフォルト設定では *server-root/msg-instance/imta/conversions* です。

MTA の変換ファイルは MIME Content-Type パラメータに準拠する形式のエントリを含むテキストファイルです。各エントリは 1 つまたは複数のグループ化された行から構成され、各行には 1 つまたは複数の `name= 値 ;` パラメータ句が含まれています。引用規則は Content-Type ヘッダー行のパラメータに関する MIME の様式に準拠します。最終行以外のすべての行は、セミコロン (;) で終了する必要があります。このファイルでは、一行に入力できる文字数が 1024 バイトに制限されています。円記号 (¥) を継続文字として使用すれば、1 つの論理行を複数の行に分割することができます。エントリは、セミコロンで終了していない行や空白行が 1 行以上挿入されているところで終了します。

現在提供されている規則パラメータを表 5-11 に示します。表内にないパラメータは無視されます。

表 5-11 変換パラメータ

パラメータ	説明
COMMAND	変換を実行するためのコマンドで、このパラメータは必須。コマンドが指定されていない場合、このエントリは無視される
DELETE	0 または 1 に設定する。このフラグが設定されている場合は、メッセージ部分が削除される (メッセージにこの部分しかない場合は、1 つの空白のテキスト部分に置き換えられる)
DPARAMETER-COPY- <i>n</i>	本文入力部分の Content-Disposition: パラメータリストから本文出力部分の Content-Disposition: パラメータリストにコピーする Content-Disposition: パラメータのリスト。 <i>n</i> = 0, 1, 2, IN-PARAMETER-NAME- <i>n</i> 句で一致した MIME パラメータ名をコピーする引数とする。引数にはワイルドカードを使用することができる。特に、* という引数は、元の Content-Disposition: パラメータをすべてコピーすることを示す
DPARAMETER-SYMBOL- <i>n</i>	環境変数に変換する Content-disposition パラメータ。 <i>n</i> = 0, 1, 2, IN-DPARAMETER-NAME- <i>m</i> 句で一致した MIME パラメータ名を変換する引数とする。それぞれの DPARAMETER-SYMBOL- <i>n</i> は、Content-Disposition: パラメータリストから抽出され、サイト提供のプログラムを実行する前に環境変数に入れられる
IN-A1-FORMAT	封入された message/rfc822 部分から A1- フォーマットを入力する
IN-A1-TYPE	封入された message/rfc822 部分から A1- タイプを入力する

表 5-11 変換パラメータ (続き)

パラメータ	説明
IN-CHAN	変換用に照合するチャンネルを入力する (ワイルドカード使用可)。このエンタリで指定した変換は、メッセージが指定したチャンネルから送信される場合にのみ実行される
IN-CHANNEL	IN-CHAN と同義
IN-DESCRIPTION	変換用に照合する MIME Content-Description を入力する
IN-DISPOSITION	変換用に照合する MIME Content-Disposition を入力する
IN-DPARAMETER-DEFAULT- <i>n</i>	パラメータがない場合に、MIME Content-Disposition パラメータのデフォルト値を入力する。本文部分に IN-DPARAMETER-VALUE- <i>n</i> が指定されていない場合に、IN-DPARAMETER-VALUE- <i>n</i> テストのデフォルト値として使用される
IN-DPARAMETER-NAME- <i>n</i>	値をチェックする MIME Content-Disposition パラメータ名を入力する。 <i>n</i> = 0, 1, 2...
IN-DPARAMETER-VALUE- <i>n</i>	対応する IN-DPARAMETER-NAME (ワイルドカード使用可) と一致しなければならない MIME Content-Disposition パラメータの値を入力する。このエンタリで指定した変換は、このフィールドが本文部分の Content-Disposition: パラメータリストの対応するパラメータに一致した場合にのみ実行される
IN-PARAMETER-DEFAULT- <i>n</i>	パラメータがない場合に、MIME Content-Type パラメータのデフォルト値を入力する。本文部分に IN-PARAMETER-VALUE- <i>n</i> が指定されていない場合に、IN-PARAMETER-VALUE- <i>n</i> テストのデフォルト値として使用される
IN-PARAMETER-NAME- <i>n</i>	値をチェックする MIME Content-Type パラメータ名を入力する。 <i>n</i> = 0, 1, 2...
IN-PARAMETER-VALUE- <i>n</i>	対応する IN-PARAMETER-NAME (ワイルドカード使用可) と一致しなければならない MIME Content-Type パラメータの値を入力する。このエンタリで指定した変換は、このフィールドが本文部分の Content-Type パラメータリストの対応するパラメータに一致した場合にのみ実行される
IN-SUBJECT	封入された MESSAGE/RFC822 部分から件名を入力する
IN-SUBTYPE	変換用に照合する MIME サブタイプを入力する (ワイルドカード使用可)。このエンタリで指定した変換は、このフィールドが本文部分の MIME サブタイプに一致した場合にのみ実行される

表 5-11 変換パラメータ (続き)

パラメータ	説明
IN-TYPE	変換用に照合する MIME タイプを入力する (ワイルドカード使用可)。このエントリで指定した変換は、このフィールドが本文部分の MIME タイプに一致した場合にのみ実行される
MESSAGE-HEADER-FILE	MESSAGE_HEADERS で指定したファイルに対してメッセージの元のヘッダーを書き込む (書き込みは、すべてまたは一部、または書き込みなし)。1 に設定した場合、直接メッセージの部分を含む元のヘッダーが MESSAGE_HEADER で指定したファイルに書き込まれる。2 に設定した場合は、メッセージの元のヘッダー全体 (最初と最後のメッセージヘッダー) がファイルに書き込まれる
ORIGINAL-HEADER-FILE	0 または 1 に設定する。1 に設定した場合は、元のヘッダーまたは封入された MESSAGE/RFC822 部分が、OUTPUT_HEADERS 記号で表されるファイルに書き込まれる
OUT-CHAN	変換用に照合するチャンネルを出力する (ワイルドカード使用可)。このエントリで指定した変換は、メッセージが指定したチャンネルに送信される場合にのみ実行される
OUT-CHANNEL	OUT-CHAN と同義
OUT-DESCRIPTION	出力 MIME Content-Description が入力 MIME Content-Description と異なる場合に、MIME Content-Description を出力する
OUT-DISPOSITION	出力 MIME Content-Description が入力 MIME Content-Disposition と異なる場合に、MIME Content-Disposition を出力する
OUT-DPARAMETER-NAME- <i>n</i>	MIME Content-Disposition パラメータ名を出力する。 <i>n</i> =0, 1, 2...
OUT-DPARAMETER-VALUE- <i>n</i>	OUT-DPARAMETER-NAME- <i>n</i> に対応する MIME Content-Disposition パラメータの値を出力する
OUT-MODE	変換ファイルを読み取って保存するモード。BLOCK (バイナリ形式および実行型形式) と TEXT がある
OUT-ENCODING	メッセージが再組立されるときに、変換ファイルに適用するエンコード
OUT-PARAMETER-NAME- <i>n</i>	MIME Content-Type パラメータ名を出力する。 <i>n</i> = 0, 1, 2...

表 5-11 変換パラメータ (続き)

パラメータ	説明
OUT-PARAMETER-VALUE- <i>n</i>	OUT-PARAMETER-NAME- <i>n</i> に対応する MIME Content-Type パラメータの値を出力する
OUT-SUBTYPE	出力 MIME タイプが入力 MIME タイプと異なる場合に、MIME タイプを出力する
OUT-TYPE	出力 MIME タイプが入力 MIME タイプと異なる場合に、MIME タイプを出力する
OVERRIDE-HEADER-FILE	0 または 1 に設定する。設定した場合は、封入された MESSAGE/RFC822 部分の元のヘッダーを無視し、OUTPUT_HEADERS 記号からヘッダーを読み取る
OVERRIDE-OPTION-FILE	設定した場合は、変換チャンネルが OUTPUT_OPTIONS 環境変数からオプションを読み取る
PARAMETER-COPY- <i>n</i>	本文入力部分の Content-Type: パラメータリストから本文出力部分の Content-Type: パラメータリストにコピーする Content-Type: パラメータのリスト。 <i>n</i> = 0, 1, 2 IN-PARAMETER-NAME- <i>n</i> 句で一致した MIME パラメータ名をコピーする引数とする
PARAMETER-SYMBOL- <i>n</i>	環境変数に変換する Content-Type パラメータ。 <i>n</i> = 0, 1, 2...。 IN-PARAMETER-NAME- <i>n</i> 句で一致した MIME パラメータ名を変換する引数とする。それぞれの PARAMETER-SYMBOL- <i>n</i> は、Content-Type: パラメータリストから抽出され、サイト提供のプログラムを実行する前に同じ名前の環境変数に入れられる。 IN-PARAMETER-NAME- <i>n</i> 句で一致した、MIME パラメータ名に変換する変数名を引数とする
PART-NUMBER	ドット文字を伴った整数で <i>a. b. c...</i> のように表示される。MIME 本文部分の番号を示す
RELABEL	0 または 1 に設定する。このフラグでは、変換チャンネルの処理中にエントリが無視される。ただし、フラグが 1 の場合は、文字セット変換中に MIME ヘッダーが有効になる
SERVICE-COMMAND	サービス変換を実行するコマンドで、このパラメータは必須。コマンドが指定されていない場合、このエントリは無視される。このフラグが付いていると、変換チャンネルの処理中にエントリが無視される。その代わりに、SERVICE-COMMAND エントリは文字セット変換の処理中に実行される
TAG	メーリングリスト CONVERSION_TAG パラメータで設定されているタグを入力する

定義済みの環境変数

表 5-12 に、変換コマンドで使用できる基本的な環境変数を示します。

表 5-12 変換チャンネルで使用される環境変数

環境変数	説明
INPUT_ENCODING	元の本文部分に存在するエンコーディング
INPUT_FILE	元の本文部分を含むファイルの名前。サイト提供のプログラムはこのファイルを読み取る
INPUT_HEADERS	封入する部分の元のヘッダーを含むファイルの名前。サイト提供のプログラムはこのファイルを読み取る
INPUT_TYPE	入力メッセージ部分の MIME コンテンツタイプ
INPUT_SUBTYPE	入力メッセージ部分の MIME コンテンツサブタイプ
INPUT_DESCRIPTION	入力メッセージ部分の MIME コンテンツの説明
INPUT_DISPOSITION	入力メッセージ部分の MIME コンテンツ配列
MESSAGE_HEADERS	封入するメッセージ (本文部分だけではなく) の元のヘッダー、または MESSAGE/RFC822 部分に最後に封入する部分のヘッダーを含むファイル名。サイト提供のプログラムはこのファイルを読み取る
OUTPUT_FILE	サイト提供のプログラムがその出力を保存するファイル名。サイト提供のプログラムはこのファイルを作成して書き込む
OUTPUT_HEADERS	サイト提供のプログラムが封入する部分の MIME ヘッダー行を保存するファイル名。サイト提供のプログラムはこのファイルを作成して書き込む。ファイルには、option=value 行ではなく実際のヘッダー行が含まれ、最後の行は空白行となる
OUTPUT_OPTIONS	サイト提供のプログラムで変換チャンネルオプションを読み取るファイル名。ファイルには、ヘッダー行に続き、最後の行として空白の行を含ませる必要がある

Content-type: パラメータ情報または Content-disposition: パラメータ情報を含む追加の環境変数は、それぞれ PARAMETER-SYMBOL-*n* または DPARAMETER-SYMBOL-*n* パラメータを使用して、必要に応じて作成できます。

表 5-13 に、変換チャンネルで使用できる他のオプションを示します。コンバータプロセスは、これらのオプションを使って、変換チャンネルに情報を渡すことができます。これらのオプションを設定するには、任意の変換エントリに `OVERRIDE-OPTION-FILE=1` を設定し、コンバータプロセスによって `OUTPUT_OPTIONS` ファイル内の目的のオプションが設定されるようにします。

表 5-13 情報を変換チャンネルに返すためのオプション

オプション	説明
<code>OUTPUT_TYPE</code>	出力メッセージ部分の MIME コンテンツタイプ
<code>OUTPUT_SUBTYPE</code>	出力メッセージ部分の MIME コンテンツサブタイプ
<code>OUTPUT_DESCRIPTION</code>	出力メッセージ部分の MIME コンテンツの説明
<code>OUTPUT_DIAGNOSTIC</code>	変換チャンネルによって強制的にメッセージが戻された場合に差出人に返されるエラーテキスト
<code>OUTPUT_DISPOSITION</code>	出力メッセージ部分の MIME コンテンツ配列
<code>OUTPUT_ENCODING</code>	出力メッセージ部分に使用される MIME コンテンツの送信エンコード
<code>OUTPUT_MODE</code>	変換チャンネルが出力メッセージ部分を書き出す際に使用するモードで、受取人が出力メッセージ部分を読み取る際に使用する MIME モード
<code>STATUS</code>	コンバータの終了ステータス。通常は、変換チャンネルの何らかの動作を開始する特殊な指示。すべての指示のリストは <code>server-root/bin/msg/imtasdk/include/pmdf_err.h</code> を参照

マッピングファイル

MTA コンポーネントの多くは、テーブル検索に基づいた情報を使用します。一般に、このタイプのテーブルは、入力文字列を出力文字列に変える (マップする) のに使用されます。このようなテーブルは、マッピングテーブルと呼ばれ、通常 2 つのカラムで構成されます。1 つめ (左側) のカラムには入力文字列が、2 つめ (右側) のカラムにはその入力文字列に関連付けられた出力文字列が並んでいます。MTA データベースのほとんどは、このタイプのマッピングテーブルのインスタンスです。ただし、MTA データベースファイルには、ワイルドカード検索機能がありません。データベース全体でワイルドカードに一致するものを検索するのは非効率的だからです。

マッピングファイルによって、MTA が複数のマッピングテーブルをサポートできるようになります。さらに、完全なワイルドカード機能もあり、複数の手順や反復マッピング方法にも対応しています。このアプローチは、データベースを使用する場合に比べ、さらに多くの処理を必要とします。特に、エントリ数が多い場合などはなおさらです。ただし、それに付随して柔軟性が増すため、同等のデータベースにおけるエントリのほとんどを必要としなくなり、全体的にオーバーヘッドが少なくなります。

REVERSE および FORWARD アドレスマッピングについては、『iPlanet Messaging Server 管理者ガイド』を参照してください。

マッピングファイルを検索する / 読み込む

マッピングはすべて MTA マッピングファイルに保存されています (MTA テイラーファイルの `IMTA_MAPPING_FILE` オプションで指定されているファイルで、デフォルトは `server-root/msg-instance/imta/config/mappings` です)。マッピングファイルの内容は、コンパイルされた設定に取り込まれます。

マッピングファイルは、誰でも読み取り可能でなければなりません。誰でも読み取り可能でアクセスできない場合は、誤作動をまねくことになります。

マッピングファイルのファイルフォーマット

マッピングファイルは、一連のテーブルで構成されています。各テーブルはその名前で始まり、名前は常に 1 つめのカラムにあり、アルファベット文字を含んでいます。テーブル名の次には必ず空白行が続き、その後にテーブルのエントリが続きます。エントリは、ゼロまたはそれ以上のインデント行で構成されます。各エントリの先頭に、少なくとも 1 つのスペースが必要です。各エントリ行は、1 つ以上のスペースまたはタブで区切られた 2 つのカラムから成ります。エントリ内のスペースはすべて、\$ 文字で囲む必要があります。各テーブル名の後およびテーブル間には空白行が必要ですが、1 つのテーブル内のエントリ間に空白行があってはなりません。コメントは、1 つめのカラムに記述され、感嘆符 (!) から始まります。

つまり、ファイルフォーマットは以下のようになります。

TABLE-1-NAME	
pattern1-1	template1-1
pattern1-2	template1-2
pattern1-3	template1-3
.	.
.	.
.	.
pattern1-n	template1-n
TABLE-2-NAME	
pattern2-1	template2-1
pattern2-2	template2-2
pattern2-3	template2-3
.	.
.	.
.	.
pattern2-n	template2-n
.	.
.	.
TABLE-m-NAME	
.	.
.	.
.	.

TABLE-2-NAME マッピングテーブルを使用するアプリケーションは、pattern2-2 文字列を template2-2 で指定された文字列にマップします。各パターン、またはプレートには、最高 252 文字までを含めることができます。マッピングテーブルに含まれるエントリの数に制限はありません(ただし、エントリが必要以上に多い場合は、大きな CPU 容量およびメモリ容量を要することになります)。252 バイト以上の長い行は、円記号 (¥) を行の末尾に置くことで次の行に続けることができます。2つのカラム間および 1 つめのカラムの前にある空白スペースを削除してはなりません。

マッピングファイルでマッピングテーブル名が重複することは許されていません。

マッピングファイルに他のファイルを含める

マッピングファイルに他のファイルを含めることができます。次の形式の行を使用します。

```
<file-spec
```

これによって、マッピングファイル内の `file-spec` の行が、その実際のファイルに置き換えられます。ファイル指定には、完全なファイルパス (ディレクトリ等) が必要です。この方法で含めるファイルは、誰でも読み取り可能でなければなりません。マッピングファイルに含めるファイルにはコメントを入れることもできます。含めるファイルは3段階までネスティングすることができます。含められたファイルは、マッピングファイルとほぼ同時に読み込まれます。オンデマンドで読み込まれるのではないため、ファイルを含めることによってパフォーマンスまたはメモリを節約することはできません。

マッピングの動作

マッピングファイル内のマッピングはすべて一定の方法で適用されます。マッピングごとに異なるのは、入力文字列のソースとマッピング出力の使用目的のみです。

マッピングの動作は、常に入力文字列とマッピングテーブルから始まります。マッピングテーブルのエントリは、テーブルに表示される順に上から下へ1つずつスキャンされます。各エントリの左側の部分がパターンとして使用され、入力文字列は大文字/小文字の区別なくそのパターンと比較されます。

マッピングエントリのパターン

パターンには、ワイルドカード文字を含めることができます。たとえば、次のような一般的なワイルドカード文字を使用できます。アスタリスク (*) はゼロまたはそれ以上の文字と一致し、パーセント記号 (%) は1つの文字に一致します。ドル記号 (\$) をアスタリスク、パーセント記号、スペース、およびタブの前に置くことによって、それらの記号を文字として使用できるようになります。アスタリスクまたはパーセント記号を文字として使用した場合は、それらの特殊な定義が無効になります。パターンや

テンプレートを正しく認識させるために、その中のスペースやタブは文字として認識させる必要があります。ドル記号を文字として使用するには、2重のドル記号(\$\$)を使用します。この場合、1つめのドル記号によって、2つめのドル記号を文字として認識されるようになります。

表 5-14 マッピングパターンのワイルドカード

ワイルドカード	説明
%	1つの文字に一致する
*	左から右への最大限の一致を使用して、ゼロ以上の文字を一致する
後照合	説明
\$n*	n番めのワイルドカードまたはグロブに一致する
修飾子	説明
\$_	左から右への最低限の一致を使用する
\$@	後続のワイルドカード、またはグロブの「保存」をオフにする
\$^	後続のワイルドカードまたはグロブの「保存」をオンにする。デフォルト設定である
グロブワイルドカード	説明
\$A%	A～Zまたはa～zのアルファベット文字1つに一致する
\$A*	ゼロまたはそれ以上のA～Zまたはa～zのアルファベット文字に一致する
\$B%	1つのバイナリ数字(0または1)に一致する
\$B*	ゼロまたはそれ以上のバイナリ数字(0または1)に一致する
\$D%	10進法の数字(0～9)に一致する
\$D*	ゼロまたはそれ以上の十進法の数字(0～9)に一致する
\$H%	1つの16進法の数字(0～9またはA～F)に一致する
\$H*	ゼロまたはそれ以上の16進法の数字(0～9またはA～F)を照合する
\$O%	1つの8進法の数字(0～7)に一致する
\$O*	ゼロまたはそれ以上の8進法の数字(0～7)を照合する
\$S%	1つの記号セット文字、すなわち0～9、A～Z、a～z、_、\$に一致する
\$S*	ゼロまたはそれ以上の記号セット文字、すなわち0～9、A～Z、a～z、_、\$に一致する
\$T%	1つのタブ、垂直タブ、またはスペース文字に一致する

表 5-14 マッピングパターンのワイルドカード (続き)

\$T*	ゼロまたはそれ以上のタブ、垂直タブ、またはスペース文字に一致する
\$X%	\$H% と同義
\$X*	\$H* と同義
\$(c)%	文字 c に一致する
\$(c)*	文字 c の不定発生に一致する
\$(c ₁ c ₂ ...c _n)%	文字 c ₁ 、c ₂ 、または c _n の発生 of 1 つに一致する
\$(c ₁ c ₂ ...c _n)*	文字 c ₁ 、c ₂ 、または c _n の不定発生に一致する
\$(c ₁ -c _n)%	c ₁ から c _n までの文字のいずれか 1 つに一致する
\$(c ₁ -c _n)*	c ₁ から c _n までの文字の不定発生に一致する
\$<IPv4>	ビットを無視して、IPv4 アドレスに一致する
\$(IPv4)	プレフィックスビットを維持した状態で、IPv4 アドレスに一致する
\${IPv6}	IPv4 アドレスに一致する

マッピングパターンのワイルドカードについては、『iPlanet Messaging Server 管理者ガイド』の「MTA サービスと設定について」の章の「マッピングファイル」を参照してください。

マッピングエントリのテンプレート

表 5-15 は、特殊代替および標準処理のメタ文字の一覧です。その他のメタ文字はマッピング特有の用途に制限されています。

マッピングエントリのテンプレートについては、『iPlanet Messaging Server 管理者ガイド』を参照してください。

表 5-15 マッピングテンプレートの代替とメタ文字

代替シーケンス	置き換える内容
\$n	左から右にゼロから数えられるワイルドカードの n 番目のフィールド
##...#	シーケンス番号の代替
\$(...)	LDAP により URL 検索が行われる。結果として、代替が行われる
\$(... ...)	指定されたマッピングテーブルを、与えられた文字列に適用する

表 5-15 マッピングテンプレートの代替とメタ文字 (続き)

代替シーケンス	置き換える内容
<code>\${...}</code>	一般データベースの代替
<code>\$(...)</code>	サイト提供のルーチンを起動し、結果の代替を行う
メタ文字	説明
<code>\$C</code>	次のテーブルエントリからマッピング処理を続行し、このエントリの出力文字列をマッピング処理の新しい入力文字列として使用する
<code>\$E</code>	マッピング処理をただちに終了し、このエントリの出力文字列をマッピング処理の最終結果とする
<code>\$L</code>	次のテーブルエントリからマッピング処理を続行し、このエントリの出力文字列を新しい入力文字列として使用する。テーブル内のすべてのエントリを照合したら、もう一度最初のテーブルエントリから照合する。後続の照合エントリにメタ文字 <code>\$C</code> 、 <code>\$E</code> または <code>\$R</code> がある場合には、それらのエントリが優先される
<code>\$R</code>	マッピングテーブルの最初のエントリからマッピング処理を続行し、このエントリの出力文字列をマッピング処理の新しい入力文字列として使用する
<code> \$?x?</code>	マッピングエントリが <code>x</code> パーセントの割合で成功する
<code>\$¥</code>	後続のテキストを小文字にする
<code>\$^</code>	後続のテキストを大文字にする
<code>\$_</code>	後続のテキストを元々の状態で残す
<code>\$.x</code>	指定したフラグが設定されている場合にのみ、一致する
<code>\$_x</code>	指定したフラグがクリアの場合にのみ、一致する

代替シーケンスとメタ文字については、『iPlanet Messaging Server 管理者ガイド』の「MTA サービスと設定について」の章を参照してください。

オプションファイル

チャンネルオプションとは異なり、グローバルな MTA オプションは MTA オプションファイルに指定されています。

MTA では、オプションファイルを使って、MTA 全体に適用されるさまざまなパラメータのデフォルト値を無効にすることができます。特に、オプションファイルは、設定ファイルやエイリアスファイルが読み込まれるさまざまなテーブルのサイズを確立するのに使用されます。

MTA オプションファイルを探して読み込む

オプションファイルとは、IMTA テイラーファイル (`server-root/msg-instance/imta/config/imta_tailor`) の `IMTA_OPTION_FILE` オプションで指定されているファイルのことです。デフォルトは `server-root/msg-instance/imta//config/option.dat` です。

オプションファイルのフォーマットおよび使用可能なオプション

オプションファイルは複数の行から構成されており、各行にはそれぞれ 1 つのオプション設定が含まれています。オプション設定は、次の形式で記述されています。

オプション = 値

値には、オプションの必要要件に応じて、文字列、整数、または浮動小数点を使用できます。オプションが整数値を受け入れる場合は、`b%v` の文字列表記規則を使って基数を指定することができます。この場合、`b` は底 10 で表す基数であり、`v` は底 `b` で表す実際の値です。

この場合、コメントが使用できます。感嘆符 (!) で始まる行は、コメント行として解釈されるため、無視されます。また、オプションファイルでは、空白行も無視されません。

表 5-16 に、使用可能なオプションを示します。

表 5-16 オプションファイルのオプション

オプション	説明
ACCESS_ERRORS (整数 0 または 1)	ACCESS_ERRORS が 0 (デフォルト) に設定されている場合、アクセスに使用できないアドレスがあると MTA によって「不正なホストまたはドメインです。」という旨のエラーメッセージが表示される。これはアドレスそのものが不正である場合と同じエラーである。紛らわしいようにも思えるが、制限されたチャンネルに関する情報が公開されるのを防ぐ場合は、この機能を使用することがセキュリティ上の重要な要素となる。ACCESS_ERRORS を 1 に設定すると、デフォルトが無視され、より詳細なエラーが表示される
ACCESS_ORCPT (Integer 0 or 1)	さまざまなマッピングで ORCPT アドレスを使用するかどうかを指定する
ALIAS_DOMAINS (整数)	エイリアスファイルとエイリアスデータベースの検索のフォーマットを制御する。このオプションは、引数としてビットエンコード整数をとる。デフォルトは 1 で、エイリアスファイルとエイリアスデータベース検索がアドレスのローカル部分 (メールボックス部分) だけでプローブされる。プローブがビット 0 (値 1) に設定されていない場合でも、アドレスがローカルチャンネルに一致しないというわけではない。ビット 1 (値 2) に設定すると、アドレス全体 (ドメイン名を含む) を使用したプローブが実行される。ビット 2 (値 4) を設定すると、ワイルドカード (*) のプローブが実行される。すべてのビット、つまり ALIAS_DOMAIN=7 に設定すると、プローブの順番は、最初にアドレス全体 (最も特定化されたチェック) でのプローブ、次にローカル部分にドメイン名を付け加え、ワイルドカード (*) でのプローブ、最後にローカル部分だけでのプローブになる
ALIAS_URL0 ALIAS_URL1 ALIAS_URL2 ALIAS_URL3 (URL)	エイリアス検索に対して検索する URL を指定する。URL の指定には、LDAP サーバとポートを省略する必要がある場合を除き、標準の LDAP URL 構文を使用する。LDAP サーバとポートは、LDAP_HOST オプションと LDAP_PORT オプションで指定する 特定の代替シーケンスについては、『iPlanet Messaging Server 管理者ガイド』の付録 B 「MTA ダイレクト LDAP 操作」を参照
ALIAS_HASH_SIZE (整数 <= 32.767)	エイリアスハッシュテーブルのサイズを設定する。これは、エイリアスファイルに定義できるエイリアスの数の上限である。デフォルト値は 256 で、最大値は 32.767
ALIAS_MEMBER_SIZE (整数 <= 20.000)	エイリアスの変換値ポインタのリストを含むインデックステーブルのサイズを制御する。エイリアスファイル内のすべてのエイリアス定義の右側にあるアドレスの総数は、この値を超えることができない。デフォルト値は 320 で、最大値は 20.000

表 5-16 オプションファイルのオプション (続き)

オプション	説明
BLOCK_LIMIT (整数 > 0)	MTA で送受信されるメッセージのサイズの絶対限界値 (ブロック単位) を指定する。このサイズを超えるメッセージは、すべて拒否される。デフォルトではサイズ制限がない。ただし、blocklimit チャンネルキーワードを使うと、チャンネルごとに制限を設定することができる。ブロックのサイズ (バイト単位) は、BLOCK_SIZE オプションで指定されている
BLOCK_SIZE (整数 > 0)	MTA では、いくつかの方法で「ブロック」の概念が使用されている。たとえば MTA ログファイル (チャンネルに logging キーワードを配置した場合) には、メッセージサイズがブロック数で記録される。また、メッセージのサイズが maxblocks キーワードを使って指定されている場合もブロック数で記録される。通常、MTA ブロックは 1024 バイト。このオプションは、ブロックの定義を変更するときに使用できる
BOUNCE_BLOCK_LIMIT (Integer)	メッセージの指定サイズを超えた場合に、メッセージの内容全体ではなく、メッセージヘッダーのみを強制的に返送する場合に使用される
CHANNEL_TABLE_SIZE (整数 <= 32,767)	チャンネルテーブルのサイズを制御する。設定ファイル内の合計チャンネル数は、この値を超えることができない。デフォルト値は 256 で、最大値は 32,767
COMMENT_CHARS (整数リスト)	MTA 設定ファイルの comment 文字を設定する。このオプションの値は、10 進形式の ASCII 値のリストの形式をとる。デフォルトは {33, 59} のリストで、コメントの最初の文字として感嘆符とセミコロンを指定する
CONTENT_RETURN_BLOCK_LIMIT (0 または 1)	通知メッセージ内で返される、送信元のメッセージの最大サイズを指定する。元のメッセージ内容が指定したサイズより大きい場合、メッセージは通知メッセージ内に返されない。単位はブロック (BLOCK_SIZE を参照)
CONVERSION_SIZE (整数 <= 2000)	変換エントリテーブルのサイズを制御する。そのため、変換ファイルのエントリ数はこの数を超えることができない。デフォルトは 32
DEQUEUE_DEBUG (0 または 1)	MTA のメッセージ取り出し機能 (QU) からデバッグ出力を生成するかどうかを指定する。1 の値を使って有効になっている場合は、QU ルーチンを使用するすべてのチャンネルでこの出力が生成される。デフォルトは 0 で、この出力は無効になっている
DEQUEUE_MAP (0 または 1)	キューから取り出す際に、メッセージをマップするかどうかを決定する。デフォルトは 1

表 5-16 オプションファイルのオプション (続き)

オプション	説明
DOMAIN_HASH_SIZE (整数 <= 32,767)	ドメイン書き換え規則のハッシュテーブルのサイズを制御する。設定ファイルの各書き換え規則は、このハッシュテーブルで1つのスロットを使用する。そのため、書き換え規則の数はこのオプションの値を超えることができない。デフォルト値は512で、書き換え規則の最大数は32,767
EXPANDABLE_DEFAULT (整数0または1)	デフォルトで、一覧を拡張表示できるかどうかを指定する
EXPROUTE_FORWARD (整数0または1)	メッセージヘッダーにおける送信用アドレス (To、Cc、および Bcc の行) の <code>exproute</code> チャネルキーワードに関する使用を制御する。デフォルト値は1で、これは <code>exproute</code> が前方を探すアドレスに影響するように指定するものである。値が0の場合は、前方を探すアドレスにおける <code>exproute</code> キーワードによるアクションが無効となる
FILE_MEMBER_SIZE	設定に貢献したファイルの一覧を追跡するテーブルの、最大サイズを指定する
HEADER_LIMIT	最大のヘッダーサイズを指定する。メッセージのヘッダーがこの制限を超えた場合、このメッセージは拒否される
HISTORY_TO_RETURN (1-200)	返送されたメッセージに挿入される配信試行回数の履歴を制御する。配信履歴には、配信が試行された回数と、場合によっては配信が失敗した理由が表示される。このオプションのデフォルト値は20
HELD_SNDOPR (整数0または1)	Received: ヘッダー行の数が多すぎるためにメッセージが強制的に保留にされたとき、オペレータによるメッセージの作成を制御する。デフォルトは0で、 Received: ヘッダー行の数が多すぎるためにメッセージが .HELD 状態になったときに syslog メッセージが生成されないことを指定する。値1は、 syslog メッセージが作成されることを指定する
HOST_HASH_SIZE (整数 <= 32,767)	チャネルホストハッシュテーブルのサイズを制御する。MTA 設定ファイルのチャネル定義に指定された各チャネルホスト (正規のホストとエイリアス) は、このハッシュテーブルで1つのスロットを使用するため、チャネルホストの総数は指定された値を超えることができない。デフォルト値は512で、許容最大値は32,767
ID_DOMAIN (U.S. ASCII 文字列)	メッセージ ID を作成するときに使用するドメイン名を指定する。デフォルトでは、ローカルチャネルの正規ホスト名が使用される

表 5-16 オプションファイルのオプション (続き)

オプション	説明
IMPROUTE_FORWARD (整数0または1)	メッセージヘッダーにおける前方を探すアドレス (To、Cc、および Bcc の行) の <code>improute</code> チャンネルキーワードに関する使用を制御する。デフォルト値は1で、これは <code>improute</code> が前方を探すヘッダーアドレスに影響するように指定するものである。値が0の場合は、前方を探すアドレスの <code>improute</code> キーワードによるアクションが無効になる
LDAP_DEFAULT_ATTR	単一の結果を返すことになっている URL に対する LDAP クエリーに属性が指定されていない場合、デフォルトの属性を指定する
LDAP_HASH_SIZE	LDAP 属性名の内部テーブルのサイズを指定する
LDAP_HOST (ホスト名)	LDAP クエリーを実行する際に接続する、デフォルトのホストを指定する
LDAP_PORT (整数)	LDAP クエリーを実行する際に接続する、ポートを指定する。デフォルトは、標準の LDAP ポート番号 389
LDAP_TIMEOUT (整数)	LDAP クエリーがタイムアウトになるまでの待機時間を、100 分の 1 秒単位で制御する。デフォルトは 200
LINE_LIMIT (整数)	MTA で送受信されるメッセージにおける全行数の絶対限界値を指定する。このサイズを超えるメッセージは、すべて拒否される。デフォルトでは、行数の限界値が設定されていない。 <code>linelimit</code> チャンネルキーワードを使うと、チャンネルごとに限界値を設定することができる
LINES_TO_RETURN (整数)	MTA が送信する通知メッセージを生成する際に、メッセージの内容を何行まで挿入するかを制御する。デフォルトは 20

表 5-16 オプションファイルのオプション (続き)

オプション	説明
LOG_CONNECTION (整数)	<p>LOG_CONNECTION オプションは、メッセージを送っている SMTP クライアントのドメイン名などの接続情報を mail.log ファイルに保存するかどうかを制御する。また、そのチャンネルに対して logging チャンネルキーワードが有効になっている場合には、接続記録の書き出しを制御する。この値は、ビットエンコードされた整数を表す十進法の整数。以下に、その解釈を示す</p> <p>Bit0 値 -1: これが設定されると、接続の情報が E ログレコードと D ログレコードに含まれる</p> <p>Bit-1 値 -2: これが設定されると、SMTP や X.400 クライアント / サーバなどのメッセージエンキュー / デキューエージェントによって、接続の開閉と失敗の記録がログされる</p> <p>Bit-2 値 -4: これが設定されると、I レコードがログされ、ETRN イベントが記録される</p> <p>ビット 0 が最下位のビット</p> <p>このチャンネルオプションは、MTA オプションファイルに設定されている、グローバル MTA オプション LOG_CONNECTION の設定にデフォルト設定されているこのチャンネルオプションは、グローバルオプションで要求される動作をチャンネルベースで無視するために、明示的に設定できる</p>
LOG_CONNECTIONS_SYSLOG (0 または 1)	<p>MTA 接続ログファイルのエントリを syslog (UNIX) またはイベントログ (Windows NT) に送る。0 はデフォルトで、syslog (イベントログ) が実行されないことを示す。1 は syslog が実行されることを示す</p>
LOG_DELAY_BINS	<p>配信遅延範囲カウンタ用のビンを指定する。このオプションのパラメータは、カンマで区切った最高 5 つの整数を指定する。デフォルトの値は、60、600、6000、60000、600000</p>
LOG_FILENAME (0 または 1)	<p>メッセージが保存されたファイルの名前を mail.log ファイルに保存するかどうかを制御する。値が 1 の場合、ファイル名のログが有効になる。値が 0 の場合 (デフォルト) はログされない</p>
LOG_FORMAT (1、2、または 3)	<p>mail.log ファイルのフォーマットのオプションを制御する。値が 1 (デフォルト) の場合は、標準のフォーマットとなる。値が 2 の場合は、非 null フォーマット ("<" という文字列に変換される空のアドレスフィールド) が要求される。値 3 の場合は、カウント済みのフォーマットが要求される。すべての可変長フィールドの先頭には N が付けられる。この N は、フィールド内の文字数を示す</p>

表 5-16 オプションファイルのオプション (続き)

オプション	説明
LOG_FRUSTRATION_LIMIT	「フラストレーション度数」の限界を指定する。プロセスでカウンタへの書き込みの試みに繰り返し失敗した場合、「フラストレーション度数」が増加していく。カウンタが限界値に達すると、そのプロセスはカウンタへの書き込みの試みを停止する
LOG_HEADER (0 または 1)	MTA により mail.log ファイルにヘッダーを書き込むかどうかを制御する。値が 1 の場合、メッセージヘッダーのログが有効になる。ログファイルに書き込まれる特定のヘッダーは、サイト提供の log_header.opt ファイルで制御される。このファイルのフォーマットは、MTA ヘッダーオプションファイルと同様である。たとえば、次の内容を含む log_header.opt ファイルの場合は、メッセージごとに最初の To ヘッダーと最初の From がログファイルに書き込まれる。値が 0 の場合 (デフォルト) は、メッセージヘッダーがログされない To:MAXIMUM=1 From:MAXIMUM=1 デフォルト :MAXIMUM=-1
LOG_LOCAL (0 または 1)	ドメイン名を含んでいないログ済みのアドレスにローカルホストのドメイン名を追加するかどうかを指定する。値が 1 の場合はこの機能が有効になる。この機能は、MTA を実行する多数のシステムによるログを連結および処理するときに役立つ。また、値が 0 の場合 (デフォルト) は、この機能が無効になる
LOG_MESSAGE_ID (0 または 1)	メッセージ ID を mail.log ファイルに保存するかどうかを制御する。値が 1 の場合、ID のログが有効になる。値が 0 の場合 (デフォルト) はログされない
LOG_MESSAGES_SYSLOG (0 or 1)	MTA メッセージログファイルのエントリを syslog (UNIX) またはイベントログ (Windows NT) に送る。0 はデフォルトで、syslog (イベントログ) が実行されないことを示す。1 は syslog が実行されることを示す
LOG_PROCESS (0 or 1)	MTA のログエントリにキュー処理 ID を含める
LOG_SNDOPR (0 or 1)	MTA のメッセージログ機能による syslog メッセージの生成を制御する
LOG_SIZE_BINS	メッセージサイズ範囲カウンタのビンサイズを指定する。値は、カンマで区切った最高 5 つの整数のリスト。デフォルトの値は、2、10、50、100、500
LOG_USERNAME (0 または 1)	メールをキューに入れるプロセスに関連付けられたユーザ名を mail.log ファイルに保存するかどうかを制御する。値が 1 の場合、ユーザ名のログが有効となり、値が 0 の場合 (デフォルト) はログされない

表 5-16 オプションファイルのオプション (続き)

オプション	説明
MAP_NAMES_SIZE (整数 > 0)	マッピングテーブルとネームテーブルのサイズを指定する。そのため、マッピングテーブルの総数は指定した数を超えることができない。デフォルトは 32
MAX_ALIAS_LEVELS (整数)	エイリアスの階層レベルを制御する。つまり、エイリアスをどの階層までネスティングさせるか、または 1 つのエイリアスが別のエイリアスを参照するレベルを制御する。デフォルトは 10
MAX_HEADER_BLOCK_USE (0 と 1 の間の実数)	メッセージブロックでどれだけの部分をメッセージヘッダーに使用するかを制御する
MAX_HEADER_LINE_USE (0 と 1 の間の実数)	メッセージ行でどれだけの部分をメッセージヘッダーに使用するかを制御する
MAX_INTERNAL_BLOCKS (整数)	MTA がメモリに保存するメッセージの最大サイズ (MTA ブロック単位) を指定する。このサイズよりも大きいメッセージは一時ファイルに書き込まれる。デフォルトは 10 に設定されている。容量の大きいシステムの場合は、この値を大きくすることにより、パフォーマンスが向上する
MAX_LOCAL_RECEIVED_LINES (整数)	MTA がメッセージを処理する際、正規のローカルホスト名を参照するメッセージに付属する Received: ヘッダー行がスキャンされる。(MTA が挿入する Received 行にはすべてこの名前が含まれる。) この名前を含む Received 行の数が MAX_LOCAL_RECEIVED_LINES の値を超える場合、メッセージは保留状態として MTA キューに追加される。オプションファイルに値が指定されていない場合は、デフォルト値である 10 が使用される。その場合、ある種のメッセージ転送ループがブロックされる。処理を続行するには、メッセージを保留の状態から手作業で移動する必要がある。
MAX_MIME_LEVELS (整数)	MTA が MIME メッセージを処理する最大の深度を指定する。デフォルトは 100 に設定されている。つまり、MTA はメッセージのネスティングを最高 100 レベルまで処理する
MAX_MIME_PARTS (整数)	MTA が MIME メッセージ内で処理する MIME 部分の最大数を指定する
MAX_RECEIVED_LINES (整数)	MTA がメッセージを処理する際、メッセージのヘッダーにある Received: ヘッダー行の数が数えられる。 Received 行の数が MAX_RECEIVED_LINES の値を超える場合、メッセージは保留の状態 MTA キューに追加される。オプションファイルに値が指定されていない場合は、デフォルト値である 50 が使用される。その場合、ある種のメッセージ転送ループがブロックされる。処理を続行するには、メッセージを保留の状態から手作業で移動する必要がある

表 5-16 オプションファイルのオプション (続き)

オプション	説明
MISSING_RECIPIENT_POLICY (整数)	受信者ヘッダーがないメッセージを有効にする
NORMAL_BLOCK_LIMIT (整数)	サイズに基づいたメッセージの優先度を下げないように MTA に指示を出す。指定したサイズよりも大きいメッセージは、優先度が緊急ではないレベルになる。これにより、メッセージの処理の優先度も影響を受ける。つまり、ジョブコントローラがメッセージを処理するスピードである。
NON_URGENT_BLOCK_LIMIT (整数)	サイズに基づいたメッセージの優先度を下げないように MTA に指示を出す。指定したサイズよりも大きいメッセージは、優先度が緊急ではないレベルよりも低くなる。この値は、BLOCK_SIZE オプションで指定した MTA ブロックの条件に基づいて解釈される。また、nonurgentblocklimit チャンネルキーワードを使って、チャンネルごとに低下のしきい値を指定することもできる
OR_CLAUSES (0 または 1)	メーリングリストのアクセス制御で、AND ではなく、デフォルトで OR が使用されるように指定する
RECEIVED_DOMAIN (文字列)	Received ヘッダーを作成するとき使用するドメイン名を設定する。デフォルトでは、ローカルチャンネルの正規ホスト名が使用される
RECEIVED_VERSION (文字列)	<p>Received: ヘッダー行を作成するとき使用する iPlanet Messaging Server のバージョン文字列を設定する。デフォルトでは、文字列 "(iPlanet Messaging Server version-info)" が使用される。デフォルトの使用が強く推奨される。このオプションは、推奨されていない CUSTOM_VERSION_STRING TCP/IP SMTP チャンネルオプションを補足するものである</p> <p>上記の説明で、Received: ヘッダー行の作成に注意すること。つまり、このオプションは、既存の Received: ヘッダー行を変更するわけではなく、新しい Received: ヘッダー行を作成するときに使われるものに影響を与える。このオプションは省略可能。CUSTOM_VERSION_STRING オプションは使用すべきではない</p> <p>ASCII 文字列以外の文字列も指定できるが、その場合 MTA は、非 ASCII 文字を MIME エンコードする必要がある。MIME エンコードされたヘッダー行のユーザエージェントによる処理は常に有効とは限らないため、非 ASCII 値の指定は勧められない。この値を ASCII 文字列にすることが厳密に制限されているわけではないが、ASCII 以外の文字列の使用は勧められない</p>

表 5-16 オプションファイルのオプション (続き)

オプション	説明
RETURN_ADDRESS (文字列)	ローカル <code>postmaster</code> の返信アドレスを設定する。ローカル <code>postmaster</code> のアドレスはデフォルトで「 <code>postmaster@ローカルホスト</code> 」に設定されているが、希望のアドレスと置き換えることができる。この場合、アドレスの選択には注意する。不正なアドレスを選択すると、高速のメッセージループが発生し、膨大な数のエラーメッセージが返されることになる
RETURN_DEBUG (0 または 1)	毎終日実行するメッセージバウンサーバッチジョブのデバッグ出力を有効または無効に設定する。値が 0 の場合はこの出力 (デフォルト) が無効になり、1 の場合は有効になる。デバッグ出力が有効になっている場合、その出力は出力ログファイルに記録される。出力ログファイルの有無は、返送ジョブの <code>crontab</code> エントリによって制御される
RETURN_DELIVERY_HISTORY (0 または 1)	配信試行の履歴を返送メッセージに挿入するかどうかを指定する。配信履歴には、配信が試行された回数と、場合によっては配信に失敗した理由が表示される。値が 1 の場合 (デフォルト) はこの情報が履歴に含まれ、値が 0 の場合は含まれない。 <code>HISTORY_TO_RETURN</code> オプションは、どれだけの履歴情報が実際に返されるかを制御する
RETURN_ENVELOPE (整数)	1 つの整数値を受け入れ、それを一連のビットフラグとして解釈する。ビット 0 (値 = 1) は、MTA が生成した返送通知を空白のエンベロープアドレスまたはローカル <code>postmaster</code> のアドレスのどちらで書き込むかを指定する。ビットを設定することにより、ローカル <code>postmaster</code> のアドレスが強制的に使用され、ビットをクリアすると空白のアドレスが強制的に使用される。RFC 1123 の規制により、空白アドレスの使用が義務付けられているが、システムによっては <code>blank-envelope-from-address</code> を正しく処理できないため、このオプションを使用する。ビット 1 (value = 2) は、MTA ですべての空白エンベロープアドレスをローカル <code>postmaster</code> のアドレスと置き換えるかどうかを指定する。このオプションも、RFC 821、RFC 822、または RFC 1123 に準拠しないシステムに使用する。 <code>returnenvelope</code> チャネルキーワードを使うと、チャネルごとにこの種の制御機能を使用できる
RETURN_PERSONAL (文字列)	MTA が <code>postmaster</code> メッセージ (例 : 返送メッセージ) を生成するとき使用する個人名を指定する。MTA は、デフォルトで <code>Internet Mail Delivery</code> という文字列を使用する

表 5-16 オプションファイルのオプション (続き)

オプション	説明
RETURN_UNITS (0 または 1)	メッセージ返送システムが使用する時間単位を制御する。値 0 は、日数を選択する。値 1 は、時間数を選択する。デフォルトでは、日数が使用される。UNIX システムでは、メッセージ返送ジョブの実行のスケジュールは、 <code>crontab</code> エントリの変更とそれを実行する時間を制御することで実行される。Windows NT システムでは、メッセージ返送ジョブの実行のスケジュールは、スケジューラで実行される
REVERSE_ENVELOPE (0 または 1)	MTA がエンベロープの From アドレスとヘッダードレスにアドレスリバースを適用するかどうかを指定する。 USE_REVERSE_DATABASE オプションが 0 に設定されている場合、またはリバースデータベースとリバースマッピングが存在しない場合、このオプションは適用されない。デフォルトは 1 に設定されており、MTA がデータベースをエンベロープの From アドレスに適用しようとする。一方、値が 0 の場合はアドレスリバースデータベースが使用されない
SEPARATE_CONNECTION_LOG (0 または 1)	LOG_CONNECTION=1 の設定によって生成された接続ログ情報を通常の MTA メッセージログファイルである <code>mail.log*</code> に保存するか、または <code>connection.log*</code> ファイルに別途保存するかを指定する。値がデフォルトの 0 に設定されている場合、接続ログ情報は通常のメッセージログファイルに保存される。値が 1 の場合、接続ログ情報は別途保存される
SNDOPR_PRIORITY (整数)	syslog メッセージの syslog レベルまたは Windows NT イベントログ エントリの機密度を設定する syslog の場合、このオプションは syslog 呼び出しの優先度引数に相当する。この機能と機密度は、両方とも、希望の値に論理 OR 演算子を適用することで設定できる。Solaris で有効な値の定義については、 <code>/usr/include/sys/syslog.h</code> を参照する。 SNDOPR_PRIORITY オプションと syslog メッセージの処理方法の設定は、 <code>syslog.conf</code> ファイルで制御して必ず調整する デフォルトは、UNIX では 5、Windows NT では 1
STRICT_REQUIRE (0 または 1)	必須の節の場所に対し、厳密な Sieve 準拠を強制する。デフォルトは 0
STRING_POOL_SIZE (整数 <= 10,000,000)	書き換え規則テンプレートとエイリアスリストメンバーを保持するためのストリングプールに割当てられる文字スロットの数を制御する。これらの設定部分とエイリアスファイルによって使われる文字の総数が限界値を超えると、致命的なエラーが発生する。デフォルト値は 60,000 で、許容最大値は 10,000,000

表 5-16 オプションファイルのオプション (続き)

オプション	説明
URGENT_BLOCK_LIMIT (整数)	サイズに基づいたメッセージの優先度を下げないように MTA に指示を出す。指定したサイズよりも大きいメッセージは、優先度が通常のレベルまで下げられる。この優先度は、ジョブコントローラがメッセージを処理する優先度に影響を与える。この値は、BLOCK_SIZE オプションで指定している MTA ブロックの条件に基づいて解釈される。また、urgentblocklimit チャンネルキーワードを使って、チャンネルごとに低下のしきい値を指定することもできる
USE_ALIAS_DATABASE (0 または 1)	MTA がエイリアスデータベースをローカルアドレス用のシステムエイリアスソースとして使用するかどうかを指定する。値が 1 (デフォルト) の場合は、MTA がエイリアスデータベースをチェックする (データベースが存在する場合)。値が 0 の場合、エイリアスデータベースは使用されない
USE_DOMAIN_DATABASE (0 or 1)	ドメインデータベースの使用を制御する。値が 1 (デフォルト) の場合は、MTA がドメインデータベースをチェックする (データベースが存在する場合)
USE_ERRORS_TO (0 または 1)	メッセージの返送時に、MTA が Errors-to ヘッダー行に含まれる情報を使用するかどうかを指定する。このオプションを 1 に設定すると、このヘッダー行を使用する。値が 0 (デフォルト) の場合、ヘッダー行は使用されない
USE_FORWARD_DATABASE (Integer)	転送データベースの使用を制御する
USE_ORIG_RETURN	ビットエンコードフィールドを制御する
USE_REVERSE_DATABASE (0-31)	MTA がアドレスリバースデータベースと REVERSE マッピングを代替アドレスのソースとして使用するかどうかを指定する。この値は、ビットエンコード整数を表す 10 進整数。表 5-17 に、この値の解釈を示す
USE_WARNINGS_TO (0 または 1)	メッセージの返送時に、MTA が Warnings-to ヘッダー行に含まれている情報を使用するかどうかを指定する。このオプションを 1 に設定すると、これらのヘッダー行が使用される。値が 0 (デフォルト) の場合、ヘッダー行は使用されない
WILD_POOL_SIZE (整数)	マッピングテーブルに含まれるパターンの総数を指定する。デフォルトは 8000 で、最大値は 200,000

表 5-17 USE_REVERSE_DATABASE のビット値

ビット	値	使用目的
0	1	MTA アドレス書き換え処理を通じて書き換えが実行された後、アドレスにアドレスリバースが適用される
1	2	アドレスにアドレスリバースが適用された後、それらのアドレスに MTA アドレス書き換えが適用される
2	4	返信用アドレスだけでなく、すべてのアドレスにアドレスリバースが適用される
3	8	REVERSE マッピングがチャンネルレベルで行われる。REVERSE マッピングテーブル (パターン) のエントリは、次の形式で記述されていなければならない (垂直の棒 [] に注目) source-channel destination-channel address
4	16	アドレスリバースデータベースのエントリがチャンネルレベルになる。リバースデータベースのエントリは、次の形式で記述されていなければならない (垂直の棒 [] に注目) source-channel destination-channel address

ビット 0 は重要性が最も低いビットです。

USE_REVERSE_DATABASE のデフォルト値は 5 です。これは MTA がエンベロープの From アドレスとフォワードおよび後方を探すアドレスをリバースしてから、通常のアドレス書き換え処理に渡すことを意味しています。REVERSE マッピングとリバースデータベースには、簡単なアドレス文字列があります。値が 0 の場合、アドレスリバースはまったく使用されません。

ヘッダーオプションファイル

キュー内のメッセージからヘッダーを切り取る方法について記述しているチャンネルには、いくつかの特殊なオプションファイルが関連付けられている場合があります。この機能は一般的なもので、どのチャンネルにも適用できます。この機能は、headertrim、noheadertrim、headerread、noheaderread チャンネルのキーワードで制御されます。

MTA チャンネルは、それぞれ専用のチャンネルレベルのオプションファイルを持ちます。ヘッダーオプションファイルは、ほかの MTA オプションファイルとは異なるフォーマットを使用するため、常に独立したファイルとなります。

ヘッダーオプションファイルの場所

通常のヘッダー処理の後にメッセージをキューに入れるときに適用されるヘッダートリミング機能に基づく宛先チャンネルの場合は、config ディレクトリ

(`server-root/msg-instance/imta/config`) でチャンネル `_headers.opt` という形式の名前を持つヘッダーオプションファイルが探し出されます。この「チャンネル」は、ヘッダーオプションファイルが関連付けられているチャンネルの名前です。このようなヘッダーオプションファイルを使用できるようにするには、チャンネルで `headertrim` キーワードを指定しておく必要があります。

通常のヘッダー処理の前にメッセージをキューに入れるときに適用されるヘッダートリミング機能に基づくソースチャンネルの場合は、config ディレクトリ

(`server-root/msg-instance/imta/config`) でチャンネル `_read_headers.opt` という形式の名前を持つヘッダーオプションファイルが探し出されます。この「チャンネル」は、ヘッダーオプションファイルが関連付けられているチャンネルの名前です。このようなヘッダーオプションファイルを使用できるようにするには、チャンネルで `headerread` キーワードを指定しておく必要があります。

ヘッダーオプションファイルは誰でも読み取り可能でなければなりません。

ヘッダーオプションファイルのフォーマット

簡単に言うと、ヘッダーオプションファイルは、一連のメッセージヘッダー行から構成されています。ただし、ヘッダー行の本文は RFC 822 に準拠していません。

ヘッダーオプションファイルの一般的な行構造は次のとおりです。

ヘッダー名 : オプション = 値、オプション = 値、オプション = 値、...

「ヘッダー名」は、MTA が認識できるヘッダー行の名前です (このマニュアルで説明されているヘッダー行のほか、RFC 822、RFC 987、RFC 1049、RFC 1421、RFC 1422、RFC 1423、RFC 1424、RFC 1327、および RFC 1521 (MIME) の規格に適合するヘッダー行を指定できます)。

MTA が認識できないヘッダー行は、特殊ヘッダー行名である **Other:** によって制御されます。ヘッダーオプションファイルで名前の付いていないすべてのヘッダー行に適用される一連のオプションは、特殊な **Defaults:** 行にも適用できます。**Defaults:** を使用することによって、今後のリリースで MTA のヘッダー行テーブルが必然的に拡大することを防ぐことができます。

さまざまなオプションを指定して、ヘッダー行の保持を制御することができます。表 5-18 に、使用可能なオプションを示します。

表 5-18 ヘッダーオプション

オプション	説明
ADD (引用符で囲まれた文字列)	指定されたタイプのヘッダー行を新規に作成する。新規のヘッダー行には指定された文字列が含まれる。ADD で作成したヘッダー行は、同じタイプのヘッダー行がある場合、そのヘッダー行の後に表示される。ADD オプションは、Defaults ヘッダー行タイプとともに使用することはできない。 Other: オプションの一覧の一部として指定されると、このオプションは無視される
FILL (引用符で囲まれた文字列)	指定したタイプの新規ヘッダー行を、同じタイプのヘッダー行がない場合にのみ作成する。新規のヘッダー行には指定された文字列が含まれる。FILL オプションは、ヘッダー行タイプとともに使用することはできない。 Other オプションの一覧の一部として指定されると、このオプションは無視される
GROUP (整数 0 または 1)	特定の優先順位で同じタイプのヘッダー行グループを制御する。GROUP のデフォルト値 (0) は、特定タイプのヘッダー行がすべていっしょに表示されることを意味する。また、値が 1 の場合は、対応するタイプのヘッダー行が 1 つだけ出力され、関連付けられたレベルの全ヘッダー行のスキャンが再開される。その場合、同じタイプのヘッダー行は処理されない。スキャンが完了すると、ほかにもヘッダー行が残っているかどうかを確認するため、再度スキャンが行われる。このヘッダーオプションは主に Privacy Enhanced Mail (PEM) ヘッダーを処理するためのものである
LINELENGTH (整数)	ヘッダーを折り返す長さを制御する。headerlinelength チャンネルキーワードを参照
MAXCHARS (整数)	指定したタイプの 1 つのヘッダー行に表示される最高文字数を制御する。指定した最高文字数の長さを超える場合は MAXCHARS の長さに合うように、その一部が切り取られる。このオプションでは、ヘッダー行の構文が無視されるため、アドレスやその他の情報を含むヘッダー行には適用しない。編成されたヘッダー行の長さは、maxheaderchars および maxheaderaddr チャンネルキーワードを使って指定する
MAXIMUM (整数)	このタイプのヘッダー行の最大行数を指定する。この値は、改行してできる行数とは関係がない。つまり、各ヘッダー行が使用できる行数には制限がない。-1 という値は、このタイプのヘッダー行を完全になくす要求として解釈される
MAXLINES (整数)	指定したタイプの全ヘッダー行が使用できる最大行数を指定する。このオプションは、MAXIMUM と相対するもので、そのタイプのヘッダー行が使用する全行数を制御するものである。ヘッダー行自体の数には関係ない。ヘッダーは、MAXIMUM と同様に、指定した条件を満たすように下の方から切り取られる

表 5-18 ヘッダーオプション (続き)

オプション	説明
PRECEDENCE (整数)	ヘッダー行が出力される順序を制御する。すべてのヘッダー行には、デフォルトの優先順位 (0) が設定されている。値が低くなるほど優先順位は高くなる。PRECEDENCE の値が正の場合はヘッダー行が下方に移動し、負の場合は上方に移動する。優先順位が等しい場合は、ヘッダー行出力の順序に関する MTA の内部規則により優先順位が決定される
RELABEL (ヘッダー名)	ヘッダー行を別のヘッダー行に変更する。つまり、ヘッダーの名前は変更されるが、値はそのまま保持される。以下に例を示す <pre>X-MSMail-Priority:RELABEL="Priority" X-Priority:RELABEL="Importance"</pre>

テイラーファイル

MTA テイラーファイル (`imta_tailor`) は、さまざまな MTA コンポーネントの場所が設定されているオプションファイルです。MTA の機能が正常に動作するには、このファイルが `server-root/msg-instance/config/imta` に保存されていなければなりません。このファイルは、特定のインストールにおける変更を反映させるように編集することができます。ただし、このファイルには編集してはならないオプションもあります。ファイルに変更を加えた後は MTA を再起動してください。MTA が停止しているときに変更を行うのが望ましい方法です。

オプション設定は、次の形式で記述されています。

```
オプション = 値
```

値は、オプションの要件に基づき、文字列または整数のいずれかとなります。この場合、コメントが使用できます。感嘆符 (!) で始まる行は、コメント行として解釈されるため、無視されます。また、空白行も無視されます。編集できるオプションおよび使用可能なオプションについては、表 5-19 を参照してください。

表 5-19 テイラーファイルのオプション

オプション	説明
IMTA_ADMIN_PROPERTY	adminserver プロパティファイルの場所。imsimta dirsync ユーティリティは、このファイルを読み取って MTA が処理するドメインを検索する。デフォルト値は <code>adminserver.properties</code>
IMTA_ALIAS_DATABASE	エイリアスデータベース。デフォルト値は <code>server-root/msg-instance/imta/db/aliasesdb</code>
IMTA_ALIAS_FILE	MTA エイリアスファイル。たとえば <code>postmaster</code> など、ディレクトリに設定されていないエイリアスはこのファイルに設定されている。デフォルト値は <code>server-root/msg-instance/imta/log/aliases</code>
IMTA_CHARSET_DATA	MTA のコンパイル済み文字セットデータがある場所。デフォルト値は <code>server-root/msg-instance/imta/log/charset_data</code>
IMTA_CHARSET_OPTION_FILE	文字セット変換オプションに使用されるファイル。デフォルト値は <code>server-root/msg-instance/imta/log/charset.dat</code>
IMTA_COM	MTA コマンドの定義ファイルがある場所。デフォルト値は <code>server-root/bin/msg/imta/bin/</code>
IMTA_CONFIG_DATA	MTA 用のコンパイル済み設定。デフォルト値は <code>server-root/msg-instance/imta/lib/config_data</code>
IMTA_CONFIG_FILE	MTA 設定ファイル。このファイルには、書き換え規則とチャネルごとのオプションが設定されている。デフォルト値は <code>server-root/msg-instance/imta/imta.cnf</code>
IMTA_CONVERSION_FILE	変換チャネルの規則を設定するファイル。デフォルト値は <code>server-root/msg-instance/imta/conversions</code>
IMTA_DISPATCHER_CONFIG	MTA ディスパッチャの設定ファイル。デフォルト値は <code>server-root/msg-instance/imta/dispatcher.cnf</code>
IMTA_DOMAIN_DATABASE	追加の書き換え規則を保存するデータベース。デフォルト値は <code>server-root/msg-instance/imta/db/domaindb</code>
IMTA_DNSRULES	MTA DNS 設定ライブラリ。デフォルト値は <code>server-root/msg-instance/imta/lib/imdnsrules.so</code>
IMTA_EXE	MTA 実行可能ファイルの場所。デフォルト値は <code>server-root/msg-instance/bin/msg/imta/bin</code>
IMTA_FORWARD_DATABASE	使用されていない

表 5-19 テイラーファイルのオプション (続き)

オプション	説明
IMTA_GENERAL_DATABASE	各サイトの顧客が使用するためのもの。通常、検索機能はマッピングと書き換え規則に組み込まれている。デフォルト値は <code>server-root/msg-instance/imta/generaldb</code>
IMTA_HELP	MTA ユーティリティのヘルプファイルがある場所。デフォルト値は <code>server-root/msg-instance/imta/lib</code>
IMTA_JBC_CONFIG_FILE	MTA ジョブコントローラの設定ファイル。デフォルト値は <code>server-root/msg-instance/imta/job_controller.cnf</code>
IMTA_LANG	MTA の法規に関するメッセージがある場所。デフォルト値は <code>server-root/msg-instance/imta/locale/C/LC_MESSAGES</code>
IMTA_LIB	MTA ライブラリと実行可能ファイルが保存されているディレクトリ。デフォルト値は <code>server-root/msg-instance/imta/lib/</code>
IMTA_LIBUTIL	MTA ユーティリティライブラリ。デフォルト値は <code>server-root/msg-instance/lib/libimtautil.so.1</code>
IMTA_LOG	MTA ログファイルの場所。デフォルト値は <code>server-root/msg-instance/imta/log</code>
IMTA_MAPPING_FILE	アクセス制御規則、リバースマッピング規則、フォワードマッピング規則などを設定するとき使用するファイル。デフォルト値は <code>server-root/msg-instance/imta/config/mappings</code>
IMTA_NAME_CONTENT_FILE	特定の添付ファイルの処理ラベル用に MTA が使用するファイルの場所。デフォルト値は <code>server-root/msg-instance/imta/config/name_content.dat</code>
IMTA_OPTION_FILE	MTA のオプションファイルの名前。デフォルト値は <code>server-root/msg-instance/imta/config/option.dat</code>
IMTA_QUEUE	MTA メッセージキューディレクトリ。デフォルト値は <code>server-root/msg-instance/imta/queue</code>
IMTA_RETURN_PERIOD	期限切れのメッセージの返送や、警告の生成を制御する。このオプションのデフォルト値は 1。このオプションが N という整数値に設定されている場合は、返送ジョブが N 回実行されるごとに、関連付けられたアクションが実行される。デフォルトでは、返送ジョブが 1 日に 1 回実行される
IMTA_RETURN_SPLIT_PERIOD	mail.log ファイルの分割を制御する。このオプションのデフォルト値は 1。このオプションが N という整数値に設定されている場合は、返送ジョブが N 回実行されるごとに、関連付けられたアクションが実行される。デフォルトでは、返送ジョブが 1 日に 1 回実行される

表 5-19 テイラーファイルのオプション (続き)

オプション	説明
IMTA_REVERSE_DATABASE	MTA リバースデータベース。このデータベースは From アドレスを書き換えるときに使用される。デフォルト値は <i>server-root/msg-instance/imta/db/reversedb</i>
IMTA_ROOT	MTA インストールのベースディレクトリ。デフォルト値は <i>server-root/msg-instance/imta/</i>
IMTA_SCRATCH	MTA がバックアップ用設定ファイルを保存するディレクトリ。完全な <i>dirsync</i> の実行中は、一時データベースファイルもこのディレクトリに作成される。デフォルト値は <i>server-root/msg-instance/imta/tmp/</i>
IMTA_TABLE	MTA 設定ディレクトリ。デフォルト値は <i>server-root/msg-instance/imta/config/</i>
IMTA_USER	postmaster の名前。デフォルト値は <i>inetmail</i> 。この値を変更したときには、必ず <i>server-root/msg-instance/imta/config/aliases</i> ファイルを編集して <i>postmaster</i> アドレスへの変更が反映されるようにする
IMTA_USER_PROFILE_DATABASE	ユーザの休暇、転送、プログラムの配信に関する情報を保存するためのデータベース。デフォルト値は <i>server-root/msg-instance/imta/db/profiledb</i>
IMTA_USER_USERNAME	特定の「権限を必要としない」操作 (普通の MTA アカウントでは実行しない操作) を実行するために MTA が使用する従属アカウントの <i>userid</i> を指定する。デフォルトは <i>nobody</i>
IMTA_VERSION_LIMIT	古いログファイルを消去するときに保持しておくことができるログファイルの最大数 (異なるバージョンの数)。デフォルトは 5
IMTA_WORLD_GROUP	特定の権限を必要とする操作を、このグループのメンバーとして実行できる。デフォルトは <i>mail</i>

Dirsync オプションファイル

注 このファイルはダイレクト LDAP モードでは使用されません。

このファイルは、コマンドラインから設定できない `dirsync` プログラムのオプションを設定するときに使用します。このファイル (`dirsync.opt`) は、MTA 設定ディレクトリに保存されています。感嘆符 (!) で始まる行は、コメント行として解釈されるため、無視されます。また、空白行も無視されます。このファイルのフォーマットは次のとおりです。

オプション = 値

値は、オプションの要件に基づき、文字列または整数のいずれかとなります。このファイル内のオプションを変更した場合は、変更後に完全な `dirsync` 処理を実行してください。使用可能なオプションは以下のとおりです。

表 5-20 `dirsync` ファイルのオプション

オプション	説明
<code>IMTA_DL_DIR</code>	配布リストのメンバーリストファイルを保存するディレクトリを指定する。デフォルト値は <code>server-root/msg-instance/imta/dl/</code>
<code>IMTA_DL_HASHSIZE</code>	<code>dl</code> ディレクトリ内のサブディレクトリの最大数を指定する。この数値は素数でなければならない。デフォルト値は 211
<code>IMTA_PROGRAM_CONFIG</code>	配信プログラムに関する情報を保存するファイルを指定する。デフォルト値は <code>server-root/msg-instance/imta/config/program.opt</code>
<code>IMTA_PROGRAM_DIR</code>	プログラムの配信に使用されるプログラムの場所を指定する。デフォルト値は <code>server-root/msg-instance/imta/programs/</code>
<code>USER_SPEC_INTERNAL</code>	ホストドメインに対し、エイリアスとドメイン書き換え規則を作成する。デフォルトは <code>%u?%d</code> ユーザは <code>%u</code> で、ドメインは <code>%d</code> で表される。
<code>USER_SPEC</code>	チャンネルオプションファイルで仕様が指定されていないチャンネルのアドレスを作成するときに使用される。このオプションは、デフォルトのチャンネルには適用されない

自動返信オプションファイル

このファイルは、自動返信(すなわち休暇用)プログラムのオプションを設定するときに使用されます。このファイルは、MTA 設定ディレクトリに保存されています。感嘆符(!)で始まる行は、コメント行として解釈されるため、無視されます。また、空白行も無視されます。このファイルのフォーマットは次のとおりです。

```
オプション = 値
```

値は、オプションの要件に基づき、文字列または整数のいずれかとなります。

使用可能なオプションは以下のとおりです。

表 5-21 autoreply ファイルのオプション

オプション	説明
DEBUG	自動返信ごとにトレースファイルを生成するかどうかを指定する。デフォルトは0で、この機能はオフになっている。値が1の場合は、自動返信が送られるたびに、MTA ログディレクトリ内に自動返信トレースファイルが生成される。値を3に設定すると、トレースファイルにさらに多くの情報が追加される
RESEND_TIMEOUT	自動返信機能がオンになっている受信者にメールが届いた場合は、この受信者から発信された前回の自動返信メールが特定の送信者に送られるまで、この新しく届いたメールに対する自動返信メールは発信されない。このオプションは、特定の送信者に自動送信メールを送る間隔を時間単位で設定するためのものである。このオプションのデフォルト(設定されていない場合)は168(例:1週間に1回)

ジョブコントローラの設定

ジョブコントローラは、起動時に、パラメータ、プール、およびチャネル処理に関する情報が含まれた設定ファイルを読み取ります。これらの設定情報は、`server-root/msg-instance/imta/config/` ディレクトリの `job_controller.cnf` ファイルに保存されています。

ジョブコントローラの詳細は、『iPlanet Messaging Server 管理者ガイド』の「MTA サービスと設定について」の章を参照してください。

ジョブコントローラ設定ファイル

ジョブコントローラ設定ファイルは、MTA オプションファイルのフォーマットに基づいており、次の形式の行を含んでいます。

```
オプション = 値
```

設定ファイルには、オプション設定のほか、場合によっては以下に示すような角括弧 ([]) で囲まれたセクションと値からなる行があります。

```
[セクション - タイプ = 値]
```

この行は、この行に続くオプション設定が「値」で指定されたセクションにのみ適用されることを意味します。このようなセクションタグよりも前に記述されているオプション設定は、すべてのセクションに適用されます。セクションごとに指定されたオプション設定は、そのセクションに対するデフォルトのグローバル設定より優先されます。ジョブコントローラ設定ファイルで認識されるセクションタイプは、`POOL` (プールとプールのパラメータを定義)、`CHANNEL` (チャネル処理情報を定義)、および `PERIODIC_JOB` (ジョブコントローラが起動するさまざまな定期的ジョブ用) です。

`POOL` または `CHANNEL` セクションに指定できるオプションは、先頭 (一般的なオプション) に指定できるため、それがデフォルトになります。

以下の3つの表 (表 5-22、表 5-23、および表 5-24) で、ジョブコントローラ設定ファイルのオプションについて説明します。これらの表では、それぞれ、一般的なオプション、プールオプション、チャネルオプションについて説明しています。

表 5-22 では、ジョブコントローラ設定の一般的なオプションを示しています。

表 5-22 ジョブコントローラ設定ファイルの一般的なオプション

オプション	説明
COMMAND	PERIODIC_JOB セクションで定期的に行うコマンドを指定する
DEBUG= 整数	<p>DEBUG がゼロ以外の値に設定されている場合、MTA は <code>server-root/msg-instance/imta/log</code> ディレクトリ内の <code>job_controller-</code> 固有 <code>id</code> という名前のファイルにデバッグ情報を書き込む。ここで、「固有 id」はファイル名を識別する固有の ID 文字列。imsimta purge ユーティリティは「<code>uniqueid</code>」を認識するユーティリティで、古いログファイルを削除するのに使用できる。DEBUG の値は、どのようなデバッグ情報が要求されているのかを指定するビットマスクである</p> <ul style="list-style-type: none"> • 1 - ジョブコントローラとその他の MTA コンポーネント間のプロトコルメッセージをトラッキング • 2 - メッセージとインタラクションの詳細な分析 • 4 - 変更イベントを記述 • 8 - 再構築の決定をトラッキング • 16 - 各キューアクションで各キューを削除 • 32 - プールから項目を削除するときは慎重に行う • 64 - 各キュー操作でキューの完全性チェックを実行 • 128 - 選択の操作に関する詳細モード出力 <p>ビット 16 を指定するとログファイルがすぐに大きくなる。また、ビット 32 を指定すると、出力はそれ以上生成されない。これは特別の場合にのみ使用する。DEBUG が指定されていない場合は、デフォルト値の 0 が使用される</p>
INTERFACE_ADDRESS= アダプタ	<p>ジョブコントローラがバインドする IP アドレスインタフェースを指定する。値 (アダプタ) には、ANY、ALL、LOCALHOST、または IP アドレスのいずれかを指定できる。デフォルトで、ジョブコントローラはすべてのアドレスにバインドする (ALL または ANY の指定に相当)。INTERFACE_ADDRESS=LOCALHOST を指定すると、ジョブコントローラは、ローカルマシンからの接続しか受け付けられない。これは、ジョブコントローラではマシン間の操作はサポートされていないため、通常の操作には影響がない。ただし、HA エージェントがジョブコントローラの応答をチェックする HA 環境では、不適切かもしれない。Messaging Server の実行しているマシンが HA 環境にあり、「内部ネットワーク」アダプタと「外部ネットワーク」アダプタを持っている場合で、大きなポート番号への接続をブロックするファイアウォール機能の信頼性が低い場合は、「内部ネットワーク」アダプタの IP アドレスを指定するよう勧める</p>

表 5-22 ジョブコントローラ設定ファイルの一般的なオプション (続き)

オプション	説明
MAX_MESSAGES= <i>integer</i>	<p>ジョブコントローラは、メモリ内構造でメッセージに関する情報を保持する。バックログが大きくなった場合は、この構造のサイズを制限する必要がある。バックログのメッセージ数がこのパラメータ値を超えると、その後のメッセージに関する情報はメモリに保存されない。メールメッセージは常にディスクに書き込まれるため、失われることはないが、ジョブコントローラが認識するメッセージ数の半数になるまで配信されない。この時点では、ジョブコントローラが <code>imsimta cache -sync</code> コマンドを模倣してプールディレクトリをスキャンする</p> <p>デフォルトは 100000</p>
SECRET= <i>file_spec</i>	<p>ジョブコントローラに送信される要求を保護するための共有の秘密情報</p>
SYNCH_TIME= <i>time_spec</i>	<p>ジョブコントローラは定期的にディスク上のプールファイルをスキャンしてファイルが不足していないかどうかをチェックする。デフォルトでは 4 時間ごとにスキャンされる (ジョブコントローラが起動してから 4 時間ごと)。<i>time_spec</i> のフォーマットは、HH:MM/hh:mm または /hh:mm。<i>hh.mm</i> 変数は、イベントの間隔を時間数 (<i>h</i>) と分数 (<i>m</i>) で示す。HH:MM 変数は、1 日の中でイベントが最初に発生する時間である。たとえば 15:45/7:15 と指定すると、15:45 にイベントが開始し、その後 7 時間 15 分ごとにイベントが実行される</p>
TCP_PORT= 整数	<p>ジョブコントローラが要求パケットをリッスンする TCP ポートを指定する。このオプションは、デフォルト値がシステム内の別の TCP アプリケーションと競合しないかぎり変更しない。このオプションを変更する必要がある場合は、対応する MTA テイラーファイル (<code>server-root/msg-instance/imta/config/imta_tailor</code>) の <code>IMTA_JBC_SERVICE</code> オプションも同じように変更する必要がある。TCP_PORT オプションはグローバルに適用され、<code>[CHANNEL]</code> セクションまたは <code>[POOL]</code> セクション内にある場合は無視される</p>
TIME= 時刻_仕様	<p><code>PERIODIC_JOB</code> セクションの定期ジョブを実行する時間と頻度を指定する。デフォルト設定は 14:00 で、ジョブが 4 時間ごとに実行される。時間仕様のフォーマットは HH:MM/hh:mm または /hh:mm です。<i>hh.mm</i> はイベントの間隔の時間数 (<i>h</i>) と分数 (<i>m</i>)。HH:MM は、1 日の中でジョブが発生する最初の時間。たとえば 15:45/7:15 と指定すると、15:45 にイベントが開始し、その後 7 時間 15 分ごとにイベントが実行される</p>

表 5-23 では、ジョブコントローラ設定の POOL オプションについて説明しています。

表 5-23 ジョブコントローラの POOL オプション

オプション	説明
JOB_LIMIT= 整数	プールが同時に使用できるプロセスの最大数を指定する。JOB_LIMIT は各プールに個別に適用される。ジョブの最大合計数は、すべてのプールの JOB_LIMIT パラメータの合計数。この値をセクションの外に設定すると、JOB_LIMIT が指定されていない [POOL] セクションにより、デフォルトとして使用される。このオプションは、[CHANNEL] セクション内では無視される

表 5-24 では、ジョブコントローラ設定の CHANNEL オプションについて説明しています。

表 5-24 ジョブコントローラの CHANNEL オプション

オプション	説明
MASTER_COMMAND= ファイル_仕様	チャンネルを実行し、そのチャンネルからメッセージを取り出すために、ジョブコントローラによって作成された UNIX システムプロセスが実行するコマンドのフルパスを指定する。このオプションをセクションの外に設定すると、MASTER_COMMAND が指定されていない [CHANNEL] セクションによりデフォルトとして使用される。[POOL] セクション内では、このオプションが無視される
MAX_LIFE_AGE= 整数	チャンネルマスタージョブに対する最大のライフタイムを秒数で指定する。このパラメータがチャンネルに指定されていない場合は、グローバルなデフォルト値が使用される。デフォルト値が指定されていない場合は、1800 (30 分) が使用される
MAX_LIFE_CONNS= <i>integer</i>	マスターチャンネルの寿命は、最長使用期間パラメータのほか、メッセージがあるかどうかをジョブコントローラに確認する回数によっても制限される。このパラメータがチャンネルに指定されていない場合は、グローバルなデフォルト値が使用される。デフォルト値が指定されていない場合は 300 が使用される
SLAVE_COMMAND= ファイル_仕様	チャンネルを実行し、そのチャンネルに入れるメッセージをポーリングするために、ジョブコントローラによって作成された UNIX システムプロセスが実行するコマンドのフルパスを指定する。ほとんどの場合、MTA チャンネルには SLAVE_COMMAND がない。その場合は、予約値である NULL を指定する。このオプションをセクションの外に設定すると、SLAVE_COMMAND が指定されていない [CHANNEL] セクションによりデフォルトとして使用される。[POOL] セクション内では、このオプションが無視される

ディスパッチャ

MTA マルチスレッドディスパッチャとは、指定のサービスにおける負担を共有する複数のマルチスレッドサーバを許可するマルチスレッド接続ディスパッチエージェントのことです。ディスパッチャを使用すると、複数のマルチスレッド SMTP サーバを同時実行できるようになります。1つのサービスに対して複数のサーバを使用できるほか、各サーバは1つ以上のアクティブな接続を同時に処理することができます。

ディスパッチャ設定ファイル

ディスパッチャ設定情報は、`server-root/msg-instance/imta/dispatcher.cnf` ファイルで指定されます。インストール時に作成されたデフォルトの設定ファイルをそのまま使用することができます。ただし、セキュリティやパフォーマンスなどの理由でデフォルトの設定ファイルを変更する場合には、`dispatcher.cnf` ファイルを編集します。

設定ファイルのフォーマット

ディスパッチャ設定ファイルのフォーマットは、他の MTA 設定ファイルのフォーマットに似ています。オプションを指定する行は、次の形式で記述されています。

```
オプション = 値
```

「オプション」はオプション名で、「値」はオプションを設定する文字列または整数です。オプションが整数値を受け入れる場合は、`b%v` の文字列表記規則を使って基数を指定することができます。この場合、`b` は底 10 で表す基数であり、`v` は底 `b` で表す実際の値です。これらのオプションの仕様は、次のオプション設定を適用するサービスに対応するセクションに、グループ分けされています。各行では、次の形式が使用されます。

```
[SERVICE= サービス名]
```

サービス名はサービスの名前です。最初のオプション仕様、すなわちこのようなセクションタグよりも前に記述されているオプション仕様はすべてのセクションに適用されます。

表 5-25 に、使用可能なオプションを示します。

表 5-25 ディスパッチャ設定ファイルのオプション

オプション	説明
BACKLOG= 整数	ソケットの TCP バックログキュー範囲を指定する。各サービスのデフォルト値は MAX_CONNS*MAX_PROCS (最低値は 5)。このオプションは、該当する TCP/IP カーネルサポートよりも高く設定しない
DEBUG	デバッグ出力を有効にする。すべてのデバッグを有効にするには、このオプションを -1 に設定する。各ビットの実際の意味については、表 5-26 を参照
DNS_VERIFY_DOMAIN	<p>受信接続のチェックに使用するホスト名と IP アドレスを指定する。迷惑メールの送信元や、オープンリレーサイトに関する情報は、さまざまなグループによって維持されている。一部のサイトでは、受信 IP 接続を、これらのグループが維持する一覧と照合する。各サービスに対し、最高 5 つの DNS_VERIFY_DOMAIN オプションを指定できる。通常は SMTP サービスが、このようなチェックが意味をなす唯一のサービスとなる。たとえば、以下のように記述する</p> <pre data-bbox="534 760 1039 916">[SERVICE=SMTP] PORT=25 DNS_VERIFY_DOMAIN=rbl.maps.siroe.com DNS_VERIFY_DMAIN=dul.maps.siroe.com</pre> <p>よく知られたポート (25、110、または 143) でこのオプションが有効になっている場合、接続を切断する前に次のような標準メッセージが送信される</p> <pre data-bbox="534 1020 1282 1065">500 5.7.1 access_control: host 192.168.51.32 found on DNS list and rejected</pre> <p>MTA でこのような拒否をログしたい場合は、ディスパッチャデバッグの 24 番目のビットである DEBUG オプションを「DEBUG=16%1000000」に設定すると、拒否が dispatcher.log ファイルにログされる。ログエントリは、次の形式をとる</p> <pre data-bbox="534 1229 1239 1274">access_control: host a.b.c.d found on DNS list and rejected</pre>

表 5-25 ディスパッチャ設定ファイルのオプション (続き)

オプション	説明
ENABLE_RBL=0 または 1	<p>ENABLE_RBL=1 を指定すると、ディスパッチャにより受信接続が maps.siroe.com の「ブラックホール」リストと比較される。たとえば、ディスパッチャが 192.168.51.32 から接続を受信した場合、ディスパッチャはホスト名 32.51.168.192.rbl.maps.siroe.com の IP アドレスを取得しようとする。クエリーが成功すると、接続はワーカプロセスにハンドオフされるかわりに、切断される。このオプションが、一般的なポート (25、110、または 143) で有効になっている場合は、接続を閉じる前に以下のような標準メッセージが送信される</p> <pre>5.7.1 Mail from 192.168.51.32 refused, see http://maps.siroe.com/rbl/</pre> <p>MTA でこのような拒否をログする場合は、ディスパッチャデバッグのビット 24 である DEBUG オプションを「DEBUG=16%1000000」に設定すると、拒否が dispatcher.log ファイルにログされる。エントリーは次の形式を取る</p> <pre>access_control: host a.b.c.d found on DNS list and rejected</pre> <p>詳細については、『iPlanet Messaging Server 管理者ガイド』の「メールのフィルタリングとアクセス制御」の章の「SMTP リレーブロッキングに対する RBL 検査を含む DNS 検索を使用するには」を参照</p>
HISTORICAL_TIME= 整数	<p>統計をとる目的で、期限切れの接続 (閉じた接続) やプロセス (終了したプロセス) をリスト内に残しておく期間を指定する</p>
INTERFACE_ADDRESS=IP アドレス	<p>INTERFACE_ADDRESS オプションは、ディスパッチャサービスがバインドする IP アドレスのインタフェースを指定するのに使用される。ディスパッチャは、デフォルトですべての IP アドレスにバインドする。ただし、それぞれに独自の IP アドレスを持つマルチネットワークインタフェースがシステムにあると、異なるサービスをいろいろなインタフェースにバインドするときに役立つ。サービスに INTERFACE_ADDRESS を指定した場合は、それがディスパッチャサービスによってバインドされる唯一のインタフェース IP アドレスとなる。このような専用インタフェース IP アドレスは、1 つの特定サービスに対して 1 つだけ指定できる (他のインタフェース IP アドレスには、他の類似したディスパッチャサービスを定義できる)</p>
IDENT=0 または 1	<p>サービスに IDENT=1 が設定されている場合、ディスパッチャは、そのサービスに対する受信接続について IDENT クエリーを試み、リモートユーザ名 (ある場合) をディスパッチャの統計情報の一部として使用する。デフォルトは IDENT=0 に設定されているため、このようなクエリーは実行されない</p>
IMAGE= ファイル仕様	<p>サーバプロセスで実行されるイメージを指定する。指定したイメージは、ディスパッチャによって制御されるように設計されたものでなければならない</p>

表 5-25 ディスパッチャ設定ファイルのオプション (続き)

オプション	説明
LOGFILE= ファイル仕様	<p>ディスパッチャによって、対応するサーバプロセスの出力が指定ファイルに直接送られるようになる。LOGFILE には、ファイル仕様にローカルシステムのホスト名を含む %s を使用することができる。たとえば <code>freddy</code> ノードの <code>LOGFILE=tcp_smtp_server_%s.log</code> の場合は、ログファイル名が <code>tcp_smtp_server_freddy.log-*</code> になる</p>
MAX_CONNS= 整数	<p>任意のサーバプロセスでアクティブになり得る最大接続数を指定する。MAX_CONNS オプションは、ディスパッチャの接続管理に影響する。同時セッションが最大数に達すると、サーバプロセスは新しい接続のリッスンを停止する。現在開いているすべての接続を閉じると、元のサーバは終了する。MAX_CONNS のデフォルト値は 10。MAX_CONNS の指定可能な最大値は 50。</p> <p>マルチスレッドの SMTP サーバの場合、このオプションの設定は、主にプロセスの数とプロセスの仮想アドレス空間のサイズに関するパフォーマンスにしたがって選択する。</p> <p>MAX_CONNS を高めの値に設定すると、より多くの接続が可能になるが、各接続のパフォーマンス低下に対処する費用がかかる可能性がある。1 に設定すると、受信するクライアント接続ごとにサーバプロセス 1 つだけが使用される。クライアントがシャットダウンすると、サーバプロセスも終了する。MAX_CONNS の値に MAX_PROCS の値を掛けた値が、受入可能な同時接続の最大数を制御する</p>
MAX_HANDOFFS= 整数	<p>サービスポートに新たに確立された TCP/IP 接続に対し、ディスパッチャが同時に処理することのできる非同期ハンドオフの最大数を指定する。デフォルトは 5</p>
MAX_IDLE_TIME= 整数	<p>サーバプロセスの最大アイドル時間を指定する。指定した時間内にサーバプロセスがアクティブにならなかった場合、そのサーバプロセスはシャットダウンする。このオプションは、このサービスに対するディスパッチャのプールに MIN_PROCS の値よりも多いサーバプロセスがある場合にのみ有効である</p>
MAX_LIFE_CONNS	<p>サーバプロセスがそのライフタイム (存続可能な期間) で処理できる最大接続数を指定する。これはワーカプロセスを管理するために使用される</p>
MAX_LIFE_TIME= 整数	<p>指定した秒数の間だけ、サーバプロセスが保持されるように要求する。これは、ディスパッチャのワーカプロセス管理機能の一部である。サーバプロセスが作成されると、カウントダウンタイマーが指定した秒数に設定される。カウントダウン時間を過ぎると、SMTP サーバプロセスがシャットダウンする</p>
MAX_PROCS= 整数	<p>このサービスに対して作成されるサーバプロセスの最大数を制御する</p>

表 5-25 ディスクパッチャ設定ファイルのオプション (続き)

オプション	説明
MAX_SHUTDOWN= 整数	ディスクパッチャがシャットダウンする前のサーバプロセスの最大数を指定する。サービスに対して最低限の利用可能性を提供するために、シャットダウンすることによってそのサービスのサーバプロセス数が MAX_SHUTDOWN よりも少なくなる場合、ディスクパッチャはそれらのサーバプロセスをシャットダウンしない。つまり、それらのサーバプロセスは、シャットダウン「スロット」が空くまで実行し続ける
MIN_CONNS= 整数	使用可能なサーバプロセスのプールに新しいサーバプロセスを追加するにあたり、各サーバプロセスが必要とする最低接続数を決定する。ディスクパッチャは、このプール全体にわたって均等に接続を割り当てようとする
MIN_PROCS= 整数	現在のサービスに対してディスクパッチャが作成するサーバプロセスの最小数を決定する。初期化が終了すると、ディスクパッチャは、指定された数だけプロセスを作成してプールを開始する。プロセスがシャットダウンしても、このサービスのプールには指定数のプロセス数が残る
PARAMETER	PARAMETER オプションの解釈および値は、サービスによって異なる。サービスに対し、PARAMETER オプションを CHANNEL=channelname に設定して、デフォルトの TCP/IP チャンネルをそのサービスのポートに関連付けることができる。以下に例を示す <pre>[SERVICE=SMTP_SUBMIT] PORT=587 ... PARAMETER=CHANNEL=tcp_incoming</pre> <p>これは、複数のポートでサーバを実行する場合に有用である (内部 POP クライアントおよび IMAP クライアントがメッセージの送信に通常のポート番号 25 以外のポートを使用するように設定されており、そのためにメッセージトラフィックが外部のホストからの受信 SMTP メッセージから切り離されるためである)。また、別の TCP/IP チャンネルを他のポート番号に関連付ける場合にも有用である</p>
PORT= 整数 ...	現在のサービスに対し、ディスクパッチャが受信接続をリッスンする TCP ポートを指定する。このポートで確立された接続は、このサービスに対して作成された SMTP サーバプロセスの 1 つに転送される。PORT=0 を指定すると、現在のサービスが無効になる
STACKSIZE	サーバのスレッドスタックサイズを指定する。このオプションの目的は、深くネスティングされた MIME メッセージ (数百レベルのネスティング) を処理するときにサーバがスタックを使い切る可能性を低くすることである。このようなメッセージはスパムメッセージである場合が多く、メールハンドラが破壊される原因となる。したがって、サーバを異常停止させることにより、他のメールハンドラを保護することができる

デバッグとログファイル

ディスパッチャエラーとデバッグ出力 (有効になっている場合) は、MTA ログディレクトリ内の `dispatcher.log` ファイルに書き込まれます。

デバッグ出力は、ディスパッチャ設定ファイルの `DEBUG` オプションを使って有効にするか、または `IMTA_DISPATCHER_DEBUG` 環境変数 (UNIX) を使ってプロセスレベルで有効にすることができます。

`DEBUG` オプションまたは `IMTA_DISPATCHER_DEBUG` 環境変数 (UNIX) は、16 進数で 32 ビットのデバッグマスクを定義するものです。すべてのデバッグ機能を有効にするには、オプションを 1 に設定するか、またはシステム全体で論理 / 環境変数を `FFFFFFFF` に定義します。表 5-26 に、各ビットの説明を示します。

表 5-26 ディスパッチャデバッグビット

ビット	16 進値	10 進値	使用目的
0	x 00001	1	サービスディスパッチャのメインモジュールの基本的なデバッグ
1	x 00002	2	サービスディスパッチャのメインモジュールの特別なデバッグ
2	x 00004	4	サービスディスパッチャ設定ファイルのログ処理
3	x 00008	8	サービスディスパッチャに関するその他の基本的なデバッグ
4	x 00010	16	サービスの基本的なデバッグ
5	x 00020	32	サービスの特別なデバッグ
6	x 00040	64	プロセスに関連するサービスのデバッグ
7	x 00080	128	使用されていない
8	x 00100	256	サービスディスパッチャとプロセス通信の基本的なデバッグ
9	x 00200	512	サービスディスパッチャとプロセス通信の特別なデバッグ
10	x 00400	1024	パケットレベル通信のデバッグ
11	x 00800	2048	使用されていない
12	x 01000	4096	ワーカープロセスの基本的なデバッグ
13	x 02000	8192	ワーカープロセスの特別なデバッグ
14	x 04000	16384	その他のワーカープロセスのデバッグ (特に接続ハンドオフ)
15	x 08000	32768	使用されていない
16	x 10000	65536	サービスディスパッチャ I/O に対するワーカープロセスの基本的なデバッグ
17	x 20000	131072	サービスディスパッチャ I/O に対するワーカープロセスの特別なデバッグ

表 5-26 ディスパッチャデバッグビット (続き)

ビット	16 進値	10 進値	使用目的
20	x 100000	1048576	統計の基本的なデバッグ
21	x 200000	2097152	統計の特別なデバッグ
24	x 1000000	16777216	PORT_ACCESS 拒否を dispatcher.log ファイルにログ

Messaging Multiplexor の構成

この章では、Messaging Multiplexor の設定について説明します。この章には、以下の節があります。

- 暗号化 (SSL) オプション
- Multiplexor の設定

注 HTTP ユーザーメールボックス (たとえば、Messenger Express) を構成するには、『iPlanet Messaging Server 管理者ガイド』、「Multiplexor サポートを設定して管理する」の章を参照してください。

暗号化 (SSL) オプション

iPlanet Messaging Multiplexor は、Messaging Server とメールクライアント間の暗号化 (SSL) 通信および非暗号化通信をサポートしています。

SSL が有効になっている場合、MMP IMAP は、標準 IMAP ポートの STARTTLS とポート 993 の IMAP+SSL をサポートします。また、MMP をポート 995 で POP+SSL をリッスンするように設定することも可能です。

SSL を IMAP サービスまたは POP サービス用に対して有効にするには、それぞれ `ImapProxyAService.cfg` および `PopProxyAService.cfg` ファイルを編集します。また、各 IMAP サーバまたは POP サーバがセキュアサーバであるかどうかに関わらず、`AService.cfg` ファイルの `default:ServiceList` オプションを編集し、ファイル内ですべての IMAP および POP サーバポートを指定する必要があります。

SMTP プロキシサービスに対して SSL 暗号化を有効にするには、`SmtproxyAService.cfg` ファイルを編集します。

SSL 設定パラメータ (Table 6-1) はコメントアウトされているため、デフォルト設定では SSL が無効になっています。証明書は、『iPlanet Messaging Sever インストールガイド』の説明にしたがってインストールします。SSL を有効にするには、コメントアウトを外し、以下のパラメータを設定します。

表 6-1 SSL の設定パラメータ

パラメータ	説明
SSLBacksidePort	<p>SSL を使用するために、Messaging Multiplexor がストアサーバ上で接続しようとするポート番号。このパラメータが設定されていない場合は、ストアに接続する際に SSL が使用されない</p> <p>デフォルト値はないが、POP にはポート 993、IMAP にはポート 995 を使用する このパラメータは SMTP プロキシには適用されない</p>
SSLCacheDir	<p>SSL セッションのキャッシュディレクトリ</p> <p>推奨されるディレクトリの値は、<i>server-root/mmp-</i> ホスト名</p>
SSLCertFile	<p>サーバ証明書データベースファイルの場所 (このサーバの証明書を購入するときに定義する)。Messaging Multiplexor を使用するには、SSL のハンドシェイクの段階でクライアントに提供するためのサーバ証明書が必要になる。ここには、Messaging Multiplexor のインストールディレクトリの絶対パス (相対パスではない) を指定する必要がある</p> <p>推奨される値は <i>server-root/mmp-</i> ホスト名 /cert7.db</p>
SSLCertNicknames	<p>サーバ証明書として提供する、SSL 証明書データベース内の証明書のニックネーム</p> <p>推奨される値は Server-Cert</p>
SSLCipherSpecs	<p>SSL セッションを暗号化するためにこのサーバが使う符号化方式のアルゴリズムを表すもので、コロンで区切られた符号化方式のリスト (あるいは文字列 “all”)。セッションが確立されると、クライアントおよびサーバはその中の 1 つを使用することに同意する。使用可能な符号化方式の仕様は以下のとおり</p> <p>SSL_RSA_WITH_RC4_128_MD5 SSL_RSA_FIPS_WITH_3DES_EDE_CBC_SHA SSL_RSA_FIPS_WITH_3DES_EDE_CBC_SHA SSL_RSA_FIPS_WITH_3DES_EDE_CBC_SHA SSL_RSA_FIPS_WITH_3DES_EDE_CBC_SHA SSL_RSA_EXPORT_WITH_RC4_40_MD5 SSL_RSA_EXPORT_WITH_RC4_40_MD5 SSL_RSA_WITH_NULL_MD5</p> <p>推奨される値は「すべて」</p>

表 6-1 SSL の設定パラメータ (続き)

パラメータ	説明
SSLEnable	<p>SSL を有効にするかどうかを指定する。“True”または“Yes”に設定すると、Multiplexor は標準ポートと SSL ポートの両方をリッスンするようになる</p> <p>SSL が有効になっている場合は、以下に示す変数がすべて設定されていなければならない。空のパラメータを指定するには、空の引用符(“”)を使用する</p> <p>SSLPorts SSLCertFile SSLKeyFile SSLKeyPasswdFile SSLCertNicknames</p> <p>デフォルトは no (SSL が有効)</p>
SSLKeyFile	<p>キーデータベースファイルの場所 (このサーバの証明書を購入するときに定義する)。Messaging Multiplexor を使用するには、SSL サーバ証明書に対応するプライベートキーが必要。ここには、Messaging Multiplexor インストールディレクトリの絶対パス (相対パスではない) を指定する</p> <p>推奨される値は <i>server-root/mmp-</i> ホスト名 /<i>key3.db</i></p> <p>このファイルは、Multiplexor とその他の承認されたサーバ以外は読み取りができないよう、必ず保護する</p>
SSLKeyPasswdFile	<p>プライベートキーファイルへのアクセスを保護するパスワードのファイルの場所。キーがパスワードで保護されていない場合は、パスワードを null にすることができる</p> <p>デフォルトは <i>server-root/mmp-</i> ホスト名 /<i>sslpassword.conf</i></p>
SSLPorts	<p>SSL がオンになるポート (受け入れられた SSL 接続)。構文は、以下のとおり</p> <p>[IP ":"] PORT [" " [IP ":"] PORT]</p> <p>たとえば、以下のように記述する 993 127.0.0.1:1993 は、ポート 993 の IP およびポート 1993 のローカルホストへの接続が、受け入れられた時点で SSL を取得することを意味する</p> <p>デフォルト値はないが、POP にはポート 993、IMAP にはポート 995 を使用するポートを設定しても、そのポートが ServiceList (338 ページの「Multiplexor の設定パラメータ」を参照) に含まれていなければ、実際に Messaging Multiplexor はそのポートへの接続を受け入れない。このパラメータが設定されておらず、SSLEnable が “true” または “yes” に設定されている場合は、IMAP STARTTLS だけが有効になる</p>
SSLSecmodFile	<p>セキュリティモジュールデータベースファイルの場所。SSL 符号化方式のハードウェアアクセラレータを使用している場合は、このファイルによってアクセラレータに関する記述が Messaging Multiplexor に渡される</p> <p>推奨される値は <i>server-root/mmp-</i> ホスト名 /<i>secmodule.db</i></p>

Multiplexor の設定

この節では、Messaging Multiplexor の設定方法について説明します。

Multiplexor の設定ファイル

Messaging Multiplexor を設定するには、Table 6-2 に示す Messaging Multiplexor 設定ファイルの設定パラメータを手作業で編集する必要があります。

表 6-2 Messaging Multiplexor の設定ファイル

ファイル	説明
PopProxyAService.cfg	POP サービス用の設定変数を指定する設定ファイル
PopProxyAService-def.cfg	POP サービスの設定テンプレート。 PopProxyAService.cfg ファイルが存在しない場合、PopProxyAService-def.cfg テンプレートがコピーされて新しい PopProxyAService.cfg ファイルが作成される
ImapProxyAService.cfg	IMAP サービス用の設定変数を指定する設定ファイル
ImapProxyAService-def.cfg	IMAP サービスの設定テンプレート。 ImapProxyAService.cfg ファイルが存在しない場合、ImapProxyAService-def.cfg テンプレートがコピーされて新しい ImapProxyAService.cfg ファイルが作成される
AService.cfg	起動するサービス、および POP サービスと IMAP サービスが共有するオプションを指定する設定ファイル
AService-def.cfg	起動するサービス、および POP サービスと IMAP サービスが共有するオプションを指定する設定テンプレート。AService.cfg ファイルが存在しない場合、AService-def.cfg テンプレートがコピーされて新しい AService.cfg ファイルが作成される

表 6-2 Messaging Multiplexor の設定ファイル (続き)

ファイル	説明
AService.rc	MMP の開始、停止、再起動、および再読み込みに使用するスクリプト 再起動後に MMP が自動的に起動されるように設定するには、AService.rc スクリプトを /etc/init.d にコピーし、適切な /etc/rc?.d ディレクトリへのシンボリックリンクを作成する (? は任意の一字を示す)。初期化および終了に使用するスクリプトについては、マニュアルページの init.d. を参照
SmtproxyAService.cfg	SMTP プロキシサービス用の設定変数を指定するオプションの設定ファイル。POP before SMTP を有効にする場合は必須。POP before SMTP を有効にしない場合でも、SSL ハードウェアのサポートを最大にするのに役立つ。POP before SMTP については、『iPlanet Messaging Server 管理者ガイド』を参照
SmtproxyAService-def.cfg	SMTP プロキシサービス用の設定変数を指定する設定テンプレート。SmtproxyAService.cfg ファイルが存在しない場合、SmtproxyAService-def.cfg テンプレートがコピーされて新しい SmtproxyAService.cfg ファイルが作成される

例として、LogDir パラメータおよび LogLevel パラメータは、すべての設定ファイルで使用されています。これらのパラメータは、ImapProxyAService.cfg ファイルでは IMAP 関連イベントのロギングパラメータを設定する目的で使われており、PopProxyAService.cfg ファイルでは POP 関連イベントのロギングパラメータを設定するために使われています。ただし、AService.cfg ファイルの中で、LogDir および LogLevel は、POP サービスまたは IMAP サービスの起動に失敗した場合など、Messaging Multiplexor に関する全般的な問題を記録するために使用されています。

以下の設定パラメータは、AService.cfg ファイルの中で定義されています。

- ServiceList
- LogDir および LogLevel
- NumThreads
- BeTheUser および BeTheGroup

これらのパラメータの説明については、338 ページの「Multiplexor の設定パラメータ」を参照してください。

Messaging Multiplexor の設定ファイルは、*server-root/mmp-* ホスト名ディレクトリに保存されています。ここで、*server-root* 部分は Messaging Server をインストールしたディレクトリ、*mmp-* ホスト名部分は Messaging Multiplexor インスタンスにちなんで付けられたサブディレクトリを表します。たとえば、*tarpit* というマシンにデフォルトのインストールディレクトリを使って Messaging Multiplexor をインストールした場合、設定ファイルは */usr/iplanet/server5/mmp-tarpit* に保存されます。

Multiplexor の設定パラメータ

Messaging Multiplexor の設定ファイルにあるさまざまな設定パラメータを指定して、Messaging Multiplexor の動作を制御することができます。

Table 6-3 に、設定可能なパラメータを説明します。

注	異なるインスタンスの設定パラメータを同じ設定ファイル内で指定するために、すべてのパラメータの先頭に、デフォルトのセクションであることを示す "default:" が付けられています。詳細については、Table 6-3 の ServiceList パラメータを参照してください。
---	--

表 6-3 Messaging Multiplexor の設定パラメータ

変数	説明
AuthCacheSize AuthCacheTTL	<p>Messaging Multiplexor が事前認証の結果をキャッシュできるようにする。AuthCacheSize パラメータはキャッシュエントリの数を、AuthCacheTTL はエントリが保存される時間 (秒数) をそれぞれ定義する値を大きくするとパフォーマンスが低下するが、サーバパスワードの変更の認識速度が速くなる。値を小さくするとパフォーマンスが向上するが、サーバパスワードの変更の認識速度が遅くなる</p> <p>これらの変数は、PreAuth が yes に設定されているときだけ使用される</p> <p>デフォルトではそれぞれ、AuthCacheSize が 10,000、AuthCacheTTL が 900 になっている</p> <p>このオプションは SMTP プロキシには適用されない</p>

表 6-3 Messaging Multiplexor の設定パラメータ (続き)

変数	説明
AuthService AuthServiceTTL	<p>AuthService が yes に設定されており、かつ AuthServiceTTL がゼロ以外の数値である場合は、POP before SMTP リレーの認証のために Messaging Multiplexor は、現在誰が Messaging Multiplexor にログインしているのかに関するクエリーを受け入れる。AuthServiceTTL は、認証記録が保管される期間を秒で表す</p> <p>デフォルトではそれぞれ、AuthService が no で、AuthServiceTTL が -1 になっている</p> <p>AuthService パラメータをグローバルにオンにする必要はまったくと言ってよいほどない。この設定は仮想ドメインで行う必要がある。AuthService パラメータを yes に設定すると、POP プロトコルで <code>xqueryauth ip-address</code> コマンドでの AuthService キャッシュのプロンプトが許可される</p>
BacksidePort	<p>POP before SMTP サービスの場合、AuthServiceTTL を、PopProxyAService.cfg ファイルで 0 より大きい値に設定する必要がある。他のすべての MMP プロキシ (SMTP および IMAP) の場合、AuthServiceTTL は、省略するか -1 に設定する必要がある。デフォルトでは、AuthServiceTTL パラメータは PopProxyAService.cfg 設定ファイルだけにある</p> <p>メッセージストアサーバに接続するポート。このパラメータにより、Messaging Multiplexor とストアサーバを同一のマシンで実行できるようになる。この場合、ストアサーバは別のポートを使用する。この方法は、フラットな設定すなわち Messaging Multiplexor をすべてのマシン上で実行したい場合に使用するとよいだろう</p> <p>このオプションは SMTP プロキシには適用されない。SmtplRelays パラメータは SMTP プロキシと同等の機能を備えている</p> <p>デフォルトではそれぞれ、POP3 が 110、IMAP が 143 に設定されている (標準ポート)</p>
Banner	<p>見出しの置換文字列。Messaging Multiplexor は、グリーティング行に指定された文字列を使用する</p> <p>デフォルトの見出し文字列には、ソフトウェア名とバージョン情報が含まれている</p>

表 6-3 Messaging Multiplexor の設定パラメータ (続き)

変数	説明
BeTheUser および BeTheGroup	<p>接続をリッスンし始めると、BeTheUser が Messaging Multiplexor のユーザ ID、BeTheGroup が Messaging Multiplexor のグループ ID になる。これらの値は Messaging Server setup インストールプログラムにより設定される。これらの変数は UNIX 専用で、Windows プラットフォームでは無視される</p> <p>BeTheUser パラメータおよび BeTheGroup パラメータは、AService.cfg 設定ファイルだけにある</p>
BGMax	BadGuys 設定パラメータ。特定のクライアント IP アドレスからの認証が失敗すると、それ以降その IP アドレスから認証を試みると「BadGuys」として扱われ、遅延される。認証の失敗の後に認証に成功すると、成功した認証は遅れるが、IP アドレスは以降の試行では「BadGuy」として扱われなくなる
BGPenalty	
BGMaxBadness	BGMax は、同時にトラッキングする BadGuys の最大数を表す (デフォルトは 10,000)
BGDecay	BGPenalty は、認証に失敗した場合に BadGuy の文に追加される秒単位の時間 (デフォルトは 2)
BGLinear	BGMaxBadness は、認証の失敗に対する最大ペナルティの長さを秒単位で表す (デフォルトは 60)
BGExcluded	BGDecay は、BadGuy のペナルティが許されるまでの時間を秒単位で表す (デフォルトは 900)
	BGLinear は、BadGuy のペナルティが時間とともに直線的に減少するのか、あるいは期限が切れたときに突然なくなるのかを定義するためのもの (デフォルトは no でペナルティは期限が切れたときに突然なくなる)
	BGExcluded は、除外された IP/ マスクペアのリスト、またはこれらのペアを調べるために読み取るファイルの名前を表す。これらのクライアントアドレスは、認証が失敗してもペナルティは受けない (デフォルト値はない)
	BadGuys パラメータは、PreAuth が yes に設定されているときだけ使用される。これらのパラメータは SMTP プロキシには適用されない

表 6-3 Messaging Multiplexor の設定パラメータ (続き)

変数	説明
BindDN BindPass	<p>Directory Server への認証に使われる識別名およびパスワード。BindDN には、LdapURL で指定された BaseDN にアクセスするための権限が必要</p> <p>Messaging Server デフォルトディレクトリの ACI では、Directory Server に対してユーザを認証するためのバインドが必要となる。インストールプロセスでは、BindDN が cn=Directory Manager に設定され、BindPass の値の入力が求められる。推測されにくいパスワードを使用する</p> <p>これらのパラメータでは、パフォーマンスとセキュリティが相反するものになる。BindDN に cn=Directory Manager を使用すると、ディレクトリサーバのパフォーマンスが最大になる。これは、ディレクトリ内の ACI をバイパスするためである。MMP に与えられた権限を最小にするもう 1 つの方法は、Messaging Server インストールから、local.ugldapbinddn と local.ugldapbindcred の値を、MMP インストールの BindDN パラメータと BindPass パラメータにコピーすることである</p>
CanonicalVirtualDomainDelim	<p>これらのオプションは ImapProxyAService.cfg と PopProxyAService.cfg の設定ファイルにある。これらのパラメータは SMTP プロキシには適用されない</p> <p>標準の仮想ドメインデリミタ。Messaging Multiplexor によって使用される文字で、メッセージストアサーバおよび LDAP サーバに対して通信を行うときにユーザ ID とその後続く仮想ドメインとを区別する</p> <p>デフォルトは @ で、LDAP およびメッセージストアサーバに渡されるユーザ ID は userid@virtual.domain という形式になる</p> <p>このパラメータは SMTP プロキシには適用されない</p>

表 6-3 Messaging Multiplexor の設定パラメータ (続き)

変数	説明
Capability	<p>能力置換文字列。Messaging Multiplexor は、デフォルト (独自) の能力ではなく Capability に指定された文字列を使って、クライアント (またはその背後にあるサーバ) が何をできるのかを IMAP クライアントに伝える。この変数は、POP3 では効果がない</p> <p>バックエンド IMAP サーバが、同じバージョンのメッセージングサーバインストーラからの iPlanet サーバである場合は、この文字列を変更する必要はない。それ以外の場合は、すべてのバックエンド IMAP サーバがサポートする機能のみが含まれるよう機能リストを必ず指定する。各種類のバックエンドサーバのポート 143 に telnet し、c capability コマンドを入力すると、適切な文字列を決定できる。これにより、すべてのバックエンド IMAP サーバでサポートされている機能のみがリストされる</p> <p>デフォルトの能力を示す文字列は以下のとおり (改行はない)</p> <pre>IMAP4 IMAP4rev1 ACL QUOTA LITERAL+ NAMESPACE UIDPLUS CHILDREN LANGUAGE XSENDER X-NETSCAPE XSERVERINFO AUTH=PLAIN</pre> <p>このパラメータは SMTP プロキシには適用されない EhloKeywords パラメータは SMTP プロキシとある程度同等の機能を備えている</p>
CertMapFile	<p>証明書マップファイル (SSL のクライアントの証明書に基づく認証に使用するファイル) の名前。</p> <p>デフォルトはない</p>
ClientLookup	<p>yes に設定されている場合、クライアント IP アドレスで DNS リバース検索を実行する。リバース検索は無条件で実行されるため、SMTP リレーサーバでこれを実行する必要はない。このオプションはホストドメインごとに設定できる。</p> <p>ClientLookup パラメータによって SMTP のパフォーマンスは向上するが、POP または IMAP といったしよに使用するときには利点はない。ホスト名が、グローバルな TCPAccess フィルタで使用される場合、ドメインごと、またはユーザアクセスフィルタごとに使用される場合、DNS 検索はこの設定とは無関係に実行される</p> <p>このオプションのデフォルトは no。たとえば、以下のように記述する</p> <pre>default:ClientLookup yes</pre>

表 6-3 Messaging Multiplexor の設定パラメータ (続き)

変数	説明
ConnLimits	<p>単一のクライアント IP アドレスから許可される同時接続の数を制限する</p> <p>次の形式で記述され、各エントリはカンマで区切られる</p> <p>IP " " MASK " : " NUM</p> <p>または、これらのエントリを 1 つ以上含む特定ファイルのパスおよび名前。エントリはそれぞれ別の行に記述する。これらのエントリは、最も特定化された IP-MASK のペアを先頭にし、より特定化されているものから順に配置する必要がある</p> <p>デフォルトは 0.0.0.0 0.0.0.0:20</p>
CRAMs	<p>APOP と CRAM-MD5 を含む CRAM (Challenge-Response Authentication Mechanism) を有効にするかどうかを示すブール代数値。これを機能させるには、LDAP に平文形式で保存されているパスワードと、userPassword 属性への読み取りアクセスを持つ BindDN が必要</p> <p>デフォルトは no。このパラメータは SMTP プロキシには適用されない</p>
DefaultDomain	<p>POP ユーザと IMAP ユーザは、認証を行うとき、通常は資格のないユーザ ID (ドメイン部のないユーザ ID) を指定する。</p> <p>DefaultDomain パラメータの値は、資格のないユーザ ID に付け加えられる。このパラメータを MMP 仮想ドメインパラメータとして使用すると、複数の IP アドレスを持つ MMP サーバで複数のホストドメインに対する資格のないユーザ ID をサポートできる。また、サービス全体のパラメータとして設定することもできる</p> <p>このパラメータは SMTP プロキシには適用されない</p>

表 6-3 Messaging Multiplexor の設定パラメータ (続き)

変数	説明
EhloKeywords	<p>クライアントとデフォルトのセットに渡すプロキシの EHLO 拡張キーワードのリスト。MMP は、SMTP リレーによって返される EHLO リストから、認識されない EHLO キーワードを削除する。EhloKeywords は、リストから削除されない追加の EHLO キーワードを指定する。デフォルトは空だが、SMTP プロキシは以下のキーワードをサポートする。これらのキーワードをこのオプションにリストする必要はない。8BITMIME、PIPELINING、ENHANCEDSTATUSCODES、EXPN、HELP、XLOOP、ETRN、SIZE、STARTTLS、AUTH</p> <p>以下に、ほとんど使用しない TURN 拡張を使用するサイトでの使用例を示す</p> <p>デフォルト: EhloKeywords TURN</p> <p>このパラメータは SmtProxyAService.cfg ファイルだけにある</p>
FailoverTimeout	<p>SMTP リレーへの接続に失敗すると、MMP は、フェイルオーバーのタイムアウトに相当する時間 (分)、その SMTP リレーを試行できないようにする。たとえば、フェイルオーバーのタイムアウトが 10 秒のときに、リレーが失敗すると MMP は 10 分間、そのリレーを試そうとしない</p> <p>デフォルトは 10 秒</p>
HostedDomains	<p>HostedDomains をサポートするかどうかを表すブール代数值</p> <p>iPlanet Messaging Server ディレクトリスキーマを使用する場合は、デフォルトの「Yes」に設定する。Netscape Messaging Server (NMS) ディレクトリスキーマ (たとえば、DC ツリーのないスキーマ) を使用する場合は、「No」に設定する。この場合、ldapUrl は、DC ツリーのルートではなく、ユーザ / グループツリーのルートをポイントする</p> <p>デフォルトは Yes。このパラメータは SMTP プロキシには適用されない</p>

表 6-3 Messaging Multiplexor の設定パラメータ (続き)

変数	説明
LdapCacheSize LdapCacheTTL	<p>Messaging Multiplexor はユーザの検索結果をキャッシュすることができる。LdapCacheSize パラメータはキャッシュエントリの数を、LdapCacheTTL はエントリが保存される時間 (秒数) をそれぞれ定義する。値を大きくするとパフォーマンスが低下するが、LDAP ユーザ設定の変更の認識速度が速くなる。値を小さくするとパフォーマンスが向上するが、LDAP ユーザ設定の変更の認識速度が遅くなる</p> <p>デフォルトは LdapCacheSize が 10,000 で、LdapCacheTTL が 900</p> <p>これらのパラメータは SMTP プロキシには適用されない</p>
LdapUrl	<p>HostedDomains が yes (デフォルト) に設定されている場合の、サイトの DC ディレクトリツリーにおける最上位へのポインタ。HostedDomains が no に設定されている場合の、ユーザ/グループディレクトリツリーへの LdapUrl ポインタ。Messaging Multiplexor を正確に動作させるためには、このパラメータを必ず設定しなければならない</p> <p>SSL (LDAPS) はサポートされているが、SSL の設定が正しく、SSL を使用できる状態になっていなければならない。フェールオーバーを有効にするには、URL のホスト部分をスペースで区切ったホストのリストにする。URL にスペースが含まれる場合は、URL 全体を二重引用符で囲む。たとえば、以下のように記述する</p> <pre>"ldap://ldap1 ldap2/o=isp"</pre> <p>デフォルトは ldap:// ローカルホスト /o=isp</p> <p>このパラメータは SMTP プロキシには適用されない</p>
LogDir LogLevel	<p>LogDir は、Messaging Multiplexor がログファイルを作成するディレクトリ。存在しないディレクトリを指定すると、ログファイルは作成されない。ログファイルの名前は、サービスを区別できるように付けられる。たとえば、IMAP のログファイルは ImapProxy_yyyymmdd.log という形式になる</p> <p>LogLevel は、ログファイルに記録される情報の量を示す、ログの詳細レベルを表す。最高の詳細レベルを 10 として、0 から 10 までの数字を指定できる。レベルが高いほどログに記録される量も多くなる</p> <p>LogDir および LogLevel は、次のすべての設定ファイルに含まれている ImapProxyAService.cfg、PopProxyAService.cfg、AService.cfg、および SmtpproxyAService.cfg</p> <p>LogDir のデフォルトは <i>server-root</i>/mmp- ホスト名 /log で、LogLevel のデフォルトは 1</p>

表 6-3 Messaging Multiplexor の設定パラメータ (続き)

変数	説明
MailHostAttrs	<p>スペースで区切られた、ユーザのメールホストを識別する LDAP 属性のリスト。Messaging Multiplexor は、リストで指定された順に、検索によって返された各属性を試す</p> <p>デフォルトは mailHost。このパラメータは SMTP プロキシには適用されない</p>
NumThreads	<p>割り当てるワーカースレッドの最大数。マシンに複数の CPU が搭載されている場合は、ワーカースレッドとともに Messaging Multiplexor を実行することによりパフォーマンスを向上させることが可能。最適なワークスレッドの数はマシンに搭載されているプロセッサの数と同じになる。たとえば、CPU を 2 つ搭載したマシンの場合には 2 を指定する。シングルプロセッサのマシンの場合は 0 を指定することにより、最適なパフォーマンスを得られる</p> <p>このパラメータがあるのは、AService.cfg 設定ファイルだけである</p> <p>デフォルトは 0 (メインスレッドがすべての作業を行う)</p>
PopBeforeSmtpKludgeChannel	<p>POP before SMTP 認証済み接続用に使用する MTA チャンネルの名前。デフォルトは空で、POP before SMTP を有効にするユーザに対する通常の設定は tcp_intranet。たとえば、以下のように記述する</p> <pre>default:PopBeforeSmtpKludgeChannel tcp_intranet</pre> <p>このパラメータは SmtproxyService.cfg 設定ファイルだけにある</p>
PreAuth	<p>MMP による事前認証を有効にする。PreAuth が yes に設定されているとき、ユーザは、バックエンドのメールストアサーバに対して接続が行われる前に、LDAP サーバに対して認証される。PreAuth が no に設定されているとき、MMP はバックエンドのメールストアサーバに接続し、単に認証情報を再生する。PreAuth は追加の認証ステップのために全体的なパフォーマンスを低下させるが、バックエンドのメールストアサーバを承認されていないユーザによるサービス拒否攻撃から保護する。MMP の POP-before-SMTP および BadGuys 機能では、PreAuth は必須</p> <p>HostedDomains を使用する場合は、LDAP サーバのドメインコンポーネント (DC) ツリーの mailAccessProxyPreAuth 属性によってこのオプションが上書きされる</p> <p>デフォルトは no。このパラメータは SMTP プロキシには適用されない</p>

表 6-3 Messaging Multiplexor の設定パラメータ (続き)

変数	説明
ReplayFormat	<p>メッセージストアサーバへ再生するユーザ ID の作成方法を示す Printf スタイル形式の文字列。有効なエスケープシーケンスは次のとおり</p> <p>%U (ユーザ id のみ) %V (仮想ドメインのみ) %A[attr] (ユーザの属性 "attr" の値)</p> <p>たとえば、ユーザ ID が joe で domain=siroe.com の %A[uid]@%V は、次のようになる</p> <p>joe@siroe.com.</p> <p>HostedDomains を使用する場合は、LDAP サーバのドメインコンポーネント (DC) ツリーの mailAccessProxyReplay 属性によってこのオプションが上書きされる</p> <p>デフォルトは NULL (ユーザ id だけが再生される)。このパラメータは SMTP プロキシには適用されない</p>
SearchFormat	<p>仮想ドメインが有効であるときに、ユーザのメールホストに対するユーザ/グループ LDAP クエリーを作成するための printf スタイル形式の文字列。有効なエスケープシーケンスは次のとおり</p> <p>%s (ユーザ id + 仮想ドメイン) %U (ユーザ id のみ) %V (仮想ドメインのみ) %C (クライアント IP アドレス) %S (サーバ IP アドレス) %D (クライアント証明書 DN)</p> <p>デフォルト値は、HostedDomains が yes の場合は uid=%U、HostedDomains が no の場合は uid=%s</p> <p>HostedDomains を使用する場合は、LDAP サーバのドメインコンポーネント (DC) ツリーの inetDomainSearchFilter 属性によってこのオプションが上書きされる</p> <p>このパラメータは SMTP プロキシには適用されない</p>
ServerDownAlert	<p>IMAP 専用。Messaging Multiplexor がユーザストアサーバに接続できないとき、IMAP ALERT メッセージとしてクライアントに返される文字列</p> <p>デフォルトの文字列は「Your IMAP server appears to be temporarily out of service. (IMAP サーバは一時的に使用できない状態になっているようです)」</p>

表 6-3 Messaging Multiplexor の設定パラメータ (続き)

変数	説明
ServiceList	<p>どのサービスを開始するか、および Messaging Multiplexor がそれらのサービスをリッスンするポート/インタフェースを指定する。以下の形式で、すべてのサービスを一行に並べて記述する</p> <pre data-bbox="511 387 1182 439">DLLNAME [" " INSTANCENAME [" " SECTION]] "@" HOSTPORT [" " HOSTPORT]</pre> <p><i>DLLNAME</i> は、ロードする AService DLL に対する絶対パスとファイル名 (DLL ファイルの拡張子 <i>.so</i> や <i>dll</i> などを取り除いたもの)。<i>DLLNAME</i> が 1 つも指定されていない場合、または指定されているものを読み込んだり初期化できない場合は、AService デーモンが終了する。カスタム提供の DLL (共有ライブラリ) は使用できない</p> <p><i>INSTANCENAME</i> は、IMAP、POP、または SMTP サービスで使用される設定ファイルの名前を表す (<i>.cfg</i> 拡張子を取り除いたもの)。デフォルトはそれぞれ <i>ImapProxyAService</i>、<i>PopProxyAService</i>、および <i>SmtproxyAService</i>。</p> <p><i>INSTANCENAME</i> は、オプションで <i>SECTION</i> パラメータをとることができる。このパラメータを使うと、設定ファイルで定義されている Messaging Multiplexor のどのインスタンスを開始するのかを指定することができる。そうすれば、同じ Messaging Multiplexor の下で独自の SSL 証明書または他の設定を備えた複数のインタフェース上で、複数の POP/IMAP インスタンスを実行することが可能になる。デフォルトの <i>SECTION</i> は <i>default</i></p> <p><i>ServiceList</i> パラメータがあるのは、AService.cfg 設定ファイルだけである</p> <p>デフォルトの <i>ServiceList</i> エントリは以下のとおり (すべて一行に記述されている)</p> <pre data-bbox="511 1116 1213 1168">server-root/bin/msg/mmp/lib/ImapProxyAService@143 993 server-root/bin/msg/mmp/lib/PopProxyAService@110</pre>
SmtproxyPassword	<p>SMTP リレーサーバでソースチャンネルの変更を承認するために使われるパスワード。このオプションは必須で、デフォルトはなく、SMTP チャンネルのオプションファイルの <i>PROXY_PASSWORD</i> オプションと一致する必要がある。たとえば、以下のように記述する</p> <pre data-bbox="511 1324 882 1345">default:SmtproxyPassword password</pre> <p>このパラメータは <i>SmtproxyAService.cfg</i> 設定ファイルだけにある</p>

表 6-3 Messaging Multiplexor の設定パラメータ (続き)

変数	説明
SmtptRelays	ラウンドロビンリレーに使用する SMTP リレーサーバホスト名 (オプションのポート付き) の、スペースで区切られたリスト。これらのリレーは XPEHLO 拡張をサポートする必要がある。このオプションは必須で、デフォルトはない。たとえば、以下のように記述する default:SmtptRelays sesta:485 gonzo mothra このパラメータは SmtptProxyAService.cfg 設定ファイルだけにある
SpoofMessageFile	POP3 Inbox のスプーフィングに使用するファイル。Messaging Multiplexor は、クライアントストアマシンに接続できない場合に POP3 サーバの基本的な機能を模倣できる。そのとき、Messaging Multiplexor はユーザのために Inbox を作成し、この 1 つのメッセージをその Inbox に入れる。このファイル内のメッセージの形式は RFC 822 に準拠していなければならない (最後の '!' を含む) デフォルトでは、スプーフメッセージファイルはない
StoreAdmin StoreAdminPass	StoreAdmin は、SSL クライアント証明書と RFC 2595 形式のプロキシ認証のサポートに必要なプロキシ認証に対するストア管理者のユーザ名を表す。StoreAdmin と StoreAdminPass にはデフォルトはない このパラメータは SMTP プロキシには適用されない
TCPAccess	Messaging Multiplexor の TCP アクセス制御を記述するラップスタイルのフィルタ (グローバル) このオプションの構文の説明は、『iPlanet Messaging Server 管理者ガイド』の「セキュリティとアクセス制御を設定する」の章にある「POP、IMAP、および HTTP サービスへのクライアントアクセスを設定する」を参照 デフォルトは NULL
TCPAccessAttr	ユーザの TCP アクセス制御を記述したラップスタイルのフィルタを含むユーザごとの属性 デフォルトは mailAccessServiceDomain
Timeout	秒単位のセッションタイムアウト。標準に準拠するため、このパラメータの値を IMAP に対して 1800 秒 (30 分) 以下、POP または SMTP に対して 600 秒 (10 分) 以下に設定することは避ける デフォルトは 1800 秒

表 6-3 Messaging Multiplexor の設定パラメータ (続き)

変数	説明
VirtualDomainDelim	受け入れられる仮想ドメインデリミタの文字列。この文字列内の文字はすべて、Messaging Multiplexor が受け取るユーザ ID のドメインデリミタとして扱われる。Messaging Multiplexor は最後からユーザ ID を検索する デフォルトのデリミタは@。このパラメータは SMTP プロキシには適用されない
VirtualDomainFile	仮想ドメインマッピングを含んだファイルの名前 デフォルトファイルは、 <i>server-root</i> /mmp- ホスト名 /vdmap.cfg。仮想ドメインのサポートを有効にするには、設定ファイルのこの行をコメント解除する

サポート規格

この付録では、iPlanet Messaging Server でサポートされている電子メッセージング関連の国内規格および国際規格、産業規格を紹介します。これらの規格のほとんどは、IETF (Internet Engineering Task Force) によって発行され、IAB (Internet Activities Board) によって承認されたインターネット規格です。その他の団体による規格には、その旨を記載してあります。

また、記載されている参考資料の中には、古いステータスのものも含まれています。これらの資料では廃止または新しいバージョンに置き換えられたプロトコル機能について述べていますが、現在でも幅広く使用されているため、ここで取り上げています。

メッセージング

次に示すのは、メッセージング、特にメッセージング構造に関する特定国の国内および国際的な参考資料です。

基本的なメッセージ構造

次の表 A-1 に、基本的なメッセージ構造に関する参考資料を紹介します。

表 A-1 基本的なメッセージ構造

規格	ステータス	説明
RFC 822 STD 11	規格	David H. Crocker, University of Delaware, <i>Standard for the Format of ARPA Internet Text Messages</i> , August 1982.
RFC 1123	規格	Robert Braden (Editor), <i>Requirements for Internet Hosts - Application and Support</i> , Internet Engineering Task Force, October 1989.
RFC 2822	規格化提案	P. Resnick (Editor), <i>Internet Message Format</i> , April 2001.

アクセスプロトコルとメッセージストア

表 A-2 に、アクセスプロトコルとメッセージストアに関する参考資料を紹介します。

表 A-2 アクセスプロトコルとメッセージストア

規格	ステータス	説明
RFC 1730	規格化提案	Mark R. Crispin, (University of Washington), <i>Internet Message Access Protocol - Version 4</i> , December 1994.
RFC 1731	規格化提案	John G. Myers, (Carnegie-Mellon University), <i>IMAP4 Authentication Mechanisms</i> , December 1994.
RFC 1939	STD 53	John G. Myers (Carnegie-Mellon University) and Marshall T. Rose (Dover Beach Consulting), <i>Standard Post Office Protocol - Version 3</i> , May 1996.
RFC 2060	規格化提案	Mark Crispin (University of Washington), <i>Internet Message Access Protocol - Version 4rev1</i> , December 1996.
RFC 2061	情報	Mark R. Crispin (University of Washington), <i>IMAP4 Compatibility With IMAP2bis</i> , December 1996.
RFC 2062	規格化提案	Mark R. Crispin (University of Washington), <i>Internet Message Access Protocol - Obsolete Syntax</i> , December 1996.
RFC 2086	規格化提案	John G. Myers, <i>IMAP4 ACL Extension</i> , January 1997.
RFC 2087	規格化提案	John G. Myers, <i>IMAP4 QUOTA Extension</i> , January 1997.
RFC 2088	規格化提案	John G. Myers, <i>IMAP4 Non-Synchronizing Literals</i> , January 1997.
RFC 2180	情報	M. Gahrns, <i>IMAP4 Multi-Accessed Mailbox Practice</i> , July 1997.
RFC 2342	規格化提案	M. Gahrns, <i>IMAP4 Namespaces</i> , July 1997.
RFC 2359	規格化提案	John G. Myers, <i>IMAP4 UIDPLUS Extension</i> , June 1998.
RFC 2449	規格化提案	R. Gellens, C. Newman, L. Lundblade, <i>POP3 Extension Mechanism</i> , November 1998. (Not yet supported by MMP)
RFC 2683	情報	B. Leiba, <i>IMAP4 Implementation Recommendations</i> , September 1999.

SMTP と拡張 SMTP

表 A-3 に、SMTP (Simple Mail Transfer Protocol) と拡張 SMTP に関する参考資料を紹介します。

表 A-3 SMTP と拡張 SMTP

規格	ステータス	説明
RFC 821 STD 10	規格	Jonathan B. Postel, USC/Information Sciences Institute, <i>Simple Mail Transfer Protocol</i> , August 1982.
RFC 974 STD 14	規格	C. Partridge, <i>Mail Routing and the Domain System</i> , January 1986.
RFC 1123 STD 3	規格	R.T. Braden, <i>Requirements for Internet Hosts - Application and Support</i> , October 1989.
RFC 1428	情報	Greg Vaudreuil, Corporation for National Research Initiatives, <i>Transition of Internet Mail from Just-Send-8 to 8bit-SMTP/MIME</i> , February 1993.
RFC 1652	規格草案	John Klensin (United Nations University), Einar Stefferud (Network Management Associates, Inc.), Ned Freed (Innosoft), Marshall Rose (Dover Beach Consulting), David Crocker (Brandenburg Consulting), <i>SMTP Service Extension for 8bit-MIME transport</i> , July 1994.
RFC 1869 STD 10	規格	John Klensin (United Nations University), Ned Freed (Innosoft), Marshall Rose (Dover Beach Consulting), Einar Stefferud (Network Management Associates, Inc.), David Crocker (The Branch Office), <i>SMTP Service Extensions</i> , November 1995.
RFC 1870 STD 10	規格	John Klensin (United Nations University), Ned Freed (Innosoft), Keith Moore (University of Tennessee), <i>SMTP Service Extension for Message Size Declaration</i> , November 1995.
RFC 1893	規格化提案	Greg Vaudreuil (Corporation for National Research Initiatives), <i>Enhanced Mail System Status Codes</i> , January 15, 1996.
RFC 1985	規格化提案	J. De Winter, <i>SMTP Service Extension for Remote Message Queue Starting</i> , August 1996.
RFC 2034	規格化提案	Ned Freed, <i>SMTP Service Extension for Returning Enhanced Error Codes</i> , October 1996.
RFC 2442	情報	J. Belissent, <i>The Batch SMTP Media Type</i> , November 1998.
RFC 2476	規格化提案	R. Gellens, <i>Message Submission</i> , December 1998.
RFC 2821	規格化提案	J. Klensin (Editor), <i>Simple Mail Transfer Protocol</i> , April 2001.
RFC 2920 STD 60	規格	Ned Freed, <i>SMTP Service Extension for Command Pipelining</i> , September 2000.
RFC 3028	規格化提案	T. Showalter, <i>Sieve: A Mail Filtering Language</i> , January 2001.

メッセージの内容と構造

次の参考資料では、メッセージの内容の処理が指定されています。これらのほとんどは、MIME (Multipurpose Internet Mail Extensions) でカバーされています。また、SIMS 製品では、規格外のメッセージ内容 RFC もいくつかサポートされています。こちらについては、表 A-4 で紹介します。

表 A-4 メッセージの内容と構造

規格	ステータス	説明
RFC 1847	規格化提案	J. Galvin, S. Murphy, S. Crocker, N. Freed, <i>Security Multiparts for MIME: Multipart/Signed and Multipart/Encrypted</i> , October 1995.
RFC 2017	規格化提案	Ned Freed (Innosoft), Keith Moore (University of Tennessee), <i>Definition of the URL MIME External-Body Access-Type</i> , October 1996.
RFC 2045	規格草案	Nathaniel Borenstein (First Virtual Holdings) and Ned Freed (Innosoft), <i>Multipurpose Internet Mail Extensions (MIME) Part One: Format of Internet Message Bodies</i> , November 1996.
RFC 2046	規格草案	Nathaniel Borenstein (First Virtual Holdings) and Ned Freed (Innosoft), <i>MIME Part Two: Media Types</i> , November 1996.
RFC 2047	規格草案	Keith Moore (University of Tennessee), <i>MIME Part Three: Message Header Extensions for Non-ASCII Text</i> , November 1996.
RFC 2048	方針	Ned Freed (Innosoft), John Klensin (MCI), Jon Postel (USC/Information Sciences Institute), <i>MIME Part Four: Registration Procedures</i> , November 1996.
RFC 2049	規格草案	Nathaniel Borenstein (First Virtual Holdings) and Ned Freed (Innosoft), <i>MIME Part Five: Conformance Criteria and Examples</i> , November 1996.
RFC 2231	規格化提案	N. Freed, K. Moore, <i>MIME Parameter Value and Encoded Word Extensions: Character Sets, Languages, and Continuations</i> , November 1997.

配信ステータス通知

表 A-5 に、配信ステータス通知に関する参考資料を紹介します。

表 A-5 配信ステータス通知

規格	ステータス	説明
RFC 1891	規格化提案	<i>SMTP Service Extension for Delivery Status Notifications</i> , Keith Moore (University of Tennessee), January 15, 1996.

表 A-5 配信ステータス通知 (続き)

規格	ステータス	説明
RFC 1892	規格化提案	Greg Vaudreuil (Corporation for National Research Initiatives), <i>The Multipart/Report Content Type for the Reporting of Mail System Administrative Messages</i> , January 15, 1996.
RFC 1894	規格化提案	Keith Moore (University of Tennessee), Greg Vaudreuil (Corporation for National Research Initiatives), <i>An Extensible Message Format for Delivery Status Notifications</i> , January 15, 1996.

セキュリティ

表 A-6 に、セキュリティプロトコルに関する参考資料を紹介します。

表 A-6 セキュリティ

規格	ステータス	説明
RFC 1731	規格化提案	John G. Myers, <i>IMAP4 Authentication Mechanisms</i> , December 1994.
RFC 2195	規格化提案	J. Klensin, R. Catoe, P. Krumviede, <i>IMAP/POP AUTHorize Extension for Simple Challenge/Response</i> , September 1997.
RFC 2222	規格化提案	John G. Myers, <i>Simple Authentication and Security Layer (SASL)</i> , October 1997.
RFC 2246	規格化提案	T. Dierks, C. Allen, <i>The TLS Protocol Version 1.0</i> , January 1999.
RFC 2487	規格化提案	P. Hoffman, <i>SMTP Service Extension for Secure SMTP over TLS</i> , January 1999.
RFC 2505 BCP 30	現在の最良の 実践	G. Lindberg, <i>Anti-Spam Recommendations for SMTP MTAs</i> , February 1999.
RFC 2554	規格化提案	John G. Myers, <i>SMTP Service Extension for Authentication</i> , March 1999.
RFC 2595	規格化提案	C. Newman, <i>Using TLS with IMAP, POP3, and ACAP</i> , June 1999. (IMAP のサポートのみ)
RFC 2831	規格化提案	P. Leach, C. Newman, <i>Using Digest Authentication as a SASL Mechanism, May 2000.</i> (MMP では未サポート)

ドメイン名サービス

表 A-7 に、インターネットの名前付け機能と、これらの機能がメッセージングで使用される方法に関する参考資料を紹介します。

表 A-7 ドメイン名サービス

規格	ステータス	説明
RFC 920	方針	Jonathan B. Postel and Joyce K. Reynolds, USC/Information Sciences Institute, <i>Domain Requirements</i> , October 1984.
RFC 974	規格	Craig Partridge, CSNET CIC BBN Laboratories Inc., <i>Mail Routing and the Domain System</i> , January 1986.
RFC 1032	情報	Mary K. Stahl, SRI International, <i>Domain Administrators Guide</i> , November 1987.
RFC 1033	情報	Mark K. Lottor, SRI International, <i>Domain Administrators Operations Guide</i> , November 1987.
RFC 1034	規格	Paul V. Mockapetris, USC/Information Sciences Institute, <i>Domain Names - Concepts and Facilities</i> , November 1987.
RFC 1035	規格	Paul V. Mockapetris, USC/Information Sciences Institute, <i>Domain Names - Implementation and Specification</i> , November 1987.

テキストと文字セットの仕様

次の表に、米国および日本の国内電気通信、国際電気通信、および情報処理の必要要件に関する参考資料を紹介します。

注 iPlanet Messaging Server では、ここにリストされていない文字セットや言語規格もサポートされています。

国内規格と国際規格

表 A-8 に、米国および日本の国内電気通信、国際電気通信、および情報処理規格に関する参考資料を紹介します。

表 A-8 国内および国際情報交換

規格	ステータス	説明
IA5	国際規格	ITU-T Recommendation T.50, Fascicle VII.3, Malaga-Torremolinos, <i>International Alphabet No. 5</i> , International Telecommunication Union, 1984, Geneva, 1989.

表 A-8 国内および国際情報交換 (続き)

規格	ステータス	説明
ISO 2022	国際規格	International Organization for Standardization (ISO), <i>Information processing - ISO 7-bit and 8-bit coded character sets - Code extension techniques</i> , Ref. No. ISO 2022-1986.
JIS X 0201	国内規格 (米国)	日本規格協会、JIS X 0201-1976 情報交換用符号
JIS X 0208	国内規格 (米国)	日本規格協会、JIS X 0208-1990 情報交換用漢字符号
JUNET	パブリックネットワーク	JUNET 利用の手引き作成委員会、JUNET 利用の手引き、第1版、1988年2月
printableString ASN.1	国際規格	ITU-T X.680, aligned with ISO/IEC-8824-1 Abstract Syntax Notation One (ASN.1). Appears in LDAP/X.500 attribute data types. Defined jointly by the ISO, ITU-T standards bodies and have been reused in Internet RFCs and ISO, ITU-T standards.
US ASCII	国内規格 (米国)	American National Standards Institute, ANSI X3.4-1986, <i>Coded Character Set-7-bit American National Standards Code for information interchange</i> . New York, 1986.
US LATIN	国内規格 (米国)	American National Standards Institute, ANSI Z39.47-1985, <i>Coded Character Set-Extended Latin alphabet code for bibliographic use</i> . New York, 1985.

インターネットの参考資料

表 A-9 に、インターネット通信規格に関する参考資料を紹介します。

表 A-9 インターネットの参考資料

規格	ステータス	説明
RFC 1345	情報	Keld Simonsen, Rationel Almen Planlaegning, Internet Activities Board RFC 1345, <i>Character Mnemonics & Character Sets</i> , June 1992.
RFC 1468	情報	Jun Murai (Keio University), Mark Crispin (University of Washington), <i>Japanese Character Encoding for Internet Messages</i> , June 1993.
RFC 1502	情報	Harald Tveit Alvestrand, SINTEF DELAB, Internet Activities Board RFC 1502, <i>X.400 Use of Extended Character Sets</i> , August 1993.

テキストと文字セットの仕様

用語集

/var/mail 新しいメールメッセージを順番に単一のフラットテキストファイル内に格納する Berkeley 方式の受信箱を示すために使用される名前。

A レコード (A record) ホスト名および関連付けられた IP アドレスを含む DNS レコードの一種。A レコードは、Messaging Server がインターネット上で電子メールをルーティングするために使用します。ドメイン名システム (DNS)、MX レコードも参照してください。

Administration Server 管理者 (administration server administrator) Directory Server に接続していない場合でも、サーバの起動および停止を行う管理権限を持つユーザ。Administration Server 管理者は、ローカルサーバグループ内のすべてのサーバに対する制限されたサーバタスク (通常はサーバの再起動と停止のみ) を実行できます。Administration Server をインストールすると、この管理者のエントリが自動的にローカルに作成されます (この管理者はユーザディレクトリ内のユーザではありません)。

APOP Authenticated Post Office Protocol の略。POP (Post Office Protocol) に似ていますが、認証にはプレーンテキストによるパスワードではなく、暗号化したパスワードとチャレンジ文字列を使用します。

AUTH SMTP コマンドの 1 つ。SMTP クライアントがサーバに対して認証方法を指定したり、認証プロトコル交換を実行したり、必要に応じて後続プロトコルの相互対話で使用するセキュリティ層をネゴシエートしたりできるようにします。

Berkeley DB トランザクション用のデータベースストアで、読み取りと書き込みの同時実行の負荷が大きく、さらにトランザクションと回復可能性が要求されるアプリケーションで使用します。

CA 認証局。デジタル証明書 (デジタルの識別子) を発行し、その公開鍵を対象者が広く利用できるようにする組織。

capability クライアントに提供され、特定の IMAP サービスで利用可能な機能を定義する文字列。

cipher 暗号化で使用されるアルゴリズム。

ciphertext (暗号文) 暗号化されたテキスト。**cleartext (平文)** の対語です。

cleartext (平文) 暗号化されていないテキスト。

CLI コマンドラインインタフェースを参照してください。

cn 共通名を表す LDAP エイリアス。

CNAME レコード (CNAME record) ドメイン名のエイリアスをドメイン名にマップする DNS レコードの一種。

Configuration Directory Server 単一サーバまたはサーバのセットの構成情報を保持する Directory Server。

cookie 特定の Web サイトを訪れたときにブラウザのメモリに自動的に入力されるテキストのみの文字列。**cookie** は、Web ページ作成者によってプログラムされます。ユーザは、**cookie** を受け入れることも、拒否することもできます。**cookie** を受け入れると、Web ページを高速に読み込むことができます。ユーザのマシンのセキュリティを脅かすものではありません。

CRAM-MD5 RFC 2195 に記述されている軽量な標準化過程の認証方法。ネットワークでユーザのログインパスワードだけを保護する場合に、TLS (SSL) の代わりに使用できます。TLS より高速ですが、やや強度が落ちます。

cronjob UNIX 専用。指定した時間に **cron** デーモンによって自動的に実行されるタスク。**crontab ファイル** も参照してください。

crontab ファイル (crontab file) UNIX 専用。指定した時間に自動的に実行されるコマンドのリスト。1 行に 1 つずつ記述されています。

daemon 端末から独立してバックグラウンドで動作し、必要に応じて機能を実行する UNIX プログラム。デーモンプログラムの一般的な例として、メールハンドラ、ライセンスサーバ、印刷デーモンなどがあります。Windows NT マシンの場合、この種のプログラムはサービスと呼ばれます。**サービス** も参照してください。

DC ツリー (DC Tree) ドメインコンポーネント (Domain Component) ツリー。DNS ネットワーク構造を反映するディレクトリ情報ツリー。DC ツリー内の識別名は、**cn=billbob, dc=bridge, dc=net, o=internet** のようになります。

Delegated Administration Server ホストドメインによるディレクトリへのアクセス制御を処理するデーモンプログラム。

Delegated Administrator Console Web ブラウザベースのソフトウェアコンソール。ドメイン管理者はこれを使用して、ホストドメインに対してユーザやグループの追加または変更を行うことができます。また、エンドユーザは、これを使用して、自分のパスワードの変更、メッセージ転送規則の設定、Vacation 規則の設定、メールリスト購読の一覧表示などを行うことができます。

Delegated Administrator for Messaging and Collaboration ドメイン管理者がホストドメインに対してユーザやグループの追加または変更を行うために使用する一連のインタフェース (GUI とユーティリティ)。

DIGEST-MD5 CRAM-MD5 より安全で軽量な標準化過程の認証方法。RFC 2831 に記述されています。RFC 2831 には、TLS (SSL) のような設定の手間をかけずに接続全体を保護するオプションも記述されています。

Directory Manager ディレクトリサーバデータベースの管理権限を持つユーザ。アクセス制御はこのユーザには適用されません。Directory Manager はディレクトリのスーパーユーザと考えることができます。

Directory Server LDAP に基づく iPlanet のディレクトリサービス。ディレクトリサービス、Lightweight Directory Access Protocol、Configuration Directory Server、Users and Groups Directory Server も参照してください。

DIT ディレクトリ情報ツリーを参照してください。

DN 識別名を参照してください。

dn 識別名のための LDAP エイリアス。識別名も参照してください。

DNS ドメインネームシステムを参照してください。

DNS エイリアス (DNS alias) DNS サーバが、別のホスト (DNS CNAME レコード) へのポインタとして認識するホスト名。マシンの実際の名前は 1 つですが、1 つまたは複数のエイリアスを持つことができます。たとえば、www.siroe.domain を現在サーバが置かれている realthing.siroe.domain という実際のマシンをポイントするエイリアスとすることができます。

DNS スプーフィング (DNS spoofing) DNS サーバが不正情報を提供するように仕向けるネットワーク攻撃の形態。

DNS データベース (DNS database) ドメイン名 (ホスト名) および対応する IP アドレスのデータベース。

DNS ドメイン (DNS domain) 共通の接尾辞 (ドメイン名) の付いたホスト名を持つコンピュータのグループ。構文的には、ピリオド (ドット) で区切られた一連の名前 (ラベル) から成るインターネットドメイン名です。たとえば corp.mktng.siroe.com などです。ドメインも参照してください。

DSN 配信ステータス通知を参照してください。

dserved ディレクトリ情報が格納されたデータベースにアクセスし、LDAP プロトコルを使用してディレクトリクライアントと通信するデーモン。

dssetup 既存の Directory Server を iPlanet Messaging Server で使用できるように準備する Directory Server 準備ツール。

EHLO コマンド (EHLO command) サーバが拡張 SMTP コマンドをサポートするかどうかをサーバに照会するための SMTP コマンド。RFC 1869 に定義されています。

ESMTP Extended Simple Mail Transfer Protocol を参照してください。

ESP Enterprise Service Provider (エンタープライズサービスプロバイダ) の略。

ETRN クライアントからサーバに対して、サーバ上でクライアントマシンを待機しているメッセージのメールキューの処理を開始するように要求する SMTP コマンド。RFC 1985 に定義されています。

EXPN メールリストを展開するための SMTP コマンド。RFC 821 に定義されています。

Extended Simple Mail Transfer Protocol (ESMTP) インターネットメッセージ転送プロトコルの一種。ESMTP では、SMTP コマンドセットにオプションのコマンドを追加することで、その機能が拡張されています。ESMTP サーバが、リモートサイトで実装されているコマンドを検出する機能などが含まれます。

facility (機能) Messaging Server ログファイルエントリ内での、ログエントリを生成したソフトウェアサブシステム (ネットワークやアカウントなど) の指定。

FQDN 完全指定ドメイン名を参照してください。

GUI グラフィカルユーザインタフェース。

HA 高可用性を参照してください。

hashdir 特定ユーザのメッセージストアが含まれるディレクトリを調べるためのコマンドラインユーティリティ。

HTTP HyperText Transfer Protocol を参照してください。

HyperText Transfer Protocol (HTTP) Web 上でハイパーテキストドキュメントの転送を可能にするための標準プロトコル。iPlanet Messaging Server は、Web ベースの電子メールをサポートするために HTTP サービスを提供しています。**Messenger Express** も参照してください。

IDENT Identification Protocol を参照してください。

Identification Protocol 特定の TCP 接続のリモート端末を制御するリモートプロセスを識別できるようにするプロトコル。RFC 1413 に定義されています。

IMAP4 Internet Message Access Protocol Version 4 を参照してください。

imsadmin コマンド (imsadmin commands) ドメイン管理者、ユーザ、およびグループを管理するためのコマンドラインユーティリティのセット。

imsimta コマンド (imsimta commands) MTA (Message Transfer Agent) の各種の保守、テスト、管理を行うためのコマンドラインユーティリティのセット。

INBOX メール配信用のユーザのデフォルトメールボックス用に予約されている名前。INBOX は、大文字と小文字が区別されない唯一のフォルダ名です。たとえば、以下のよう
に記述する INBOX、Inbox、inbox は、すべてユーザのデフォルトのメールボックスとして有効な名前です。

Internet Message Access Protocol Version 4 (IMAP4) ユーザがメインのメッセージ送信システムから切断された場合でもメールを処理できるようにする標準プロトコル。IMAP 仕様により、切断されたユーザの管理制御が可能になるとともに、メッセージングシステムに再接続したときにユーザのメッセージストアの同期化が可能になります。

IP インターネットプロトコル を参照してください。

IP アドレス (IP address) 198.93.93.10 のような、ドットで区切られた一連の数値で、イントラネットまたはインターネット上でのマシンの実際の場所を示します。TCP/IP を使用するホストには、32 ビットのアドレスが割り当てられます。

iPlanet Setup すべての iPlanet サーバおよび iPlanet Console 用のインストールプログラム。

ISP Internet Service Provider (インターネットサービスプロバイダ) の略。電子メール、電子カレンダー、World Wide Web へのアクセス、Web ホスティングなどのインターネットサービスを顧客に提供する会社です。

LDAP Lightweight Directory Access Protocol を参照してください。

LDAP Data Interchange Format (LDIF) Directory Server エントリをテキスト形式で表すために使用する形式。

LDAP 検索文字列 (LDAP search string) ディレクトリ検索に使用される属性を定義する、置換可能なパラメータを含む文字列。たとえば、「uid=%s」という LDAP 検索文字列は、検索の基準がユーザ ID 属性であることを意味します。

LDAP サーバ (LDAP Server) LDAP ディレクトリを管理し、そのディレクトリに対する照会サービスを提供するソフトウェアサーバ。iPlanet ディレクトリサービスは LDAP サーバの実装です。

LDAP サーバフェイルオーバー (LDAP server failover) LDAP サーバのバックアップ機能。1 つの LDAP サーバに障害が発生した場合、システムは、別の LDAP サーバに切り替えることができます。

LDAP 参照 (LDAP referrals) 別の LDAP エントリへのシンボリックリンク (参照) から成る LDAP エントリ。LDAP 参照は、LDAP ホストと識別名から構成されます。通常、LDAP 参照は、データを複製せずに、既存の LDAP データを参照するために使用されます。また、移動された特定のエンタリに依存するプログラムの互換性を維持するためにも使用されます。

LDAP フィルタ (LDAP filter) 特定の属性または属性値の有無に基づいて一連のエンタリを指定する方法。

LDBM LDAP Data Base Manager の略。

LDIF LDAP Data Interchange Format を参照してください。

Legato Networker Legato® が提供するサードパーティ製バックアップユーティリティ。

Lightweight Directory Access Protocol (LDAP) TCP/IP を介して複数のプラットフォーム上で実行できるように設計されたディレクトリサービスプロトコル。X.500 Directory Access Protocol (DAP) を簡素化したもので、ユーザプロファイル、メールリスト、複数の iPlanet サーバ上の設定データなどの情報の格納、検索、および配布を単一の場所で管理できるようにします。iPlanet Directory Server は、LDAP プロトコルを使用します。

MD5 RSA Data Security によって提供されるメッセージダイジェストアルゴリズム。MD5 を使用すると、一意になる確率が高い短い形式のダイジェストデータを生成できます。同一のメッセージダイジェスト電子メールが生成されるようなデータを作成することは数学的に非常に困難です。

Message Handling System (MHS) 接続されている MTA、ユーザエージェント、およびメッセージストアのグループ。

Message Transfer Agent (MTA) メッセージのルーティングと配信専用のプログラム。複数の MTA が連携してメッセージを転送し、目的の受取人に配信します。MTA は、メッセージをローカルのメッセージストアに配信するのか、リモート配信のために別の MTA にルーティングするのかを決定します。

Messaging Multiplexor (MMP) 複数のメールサーバに対する単一接続ポイントとして機能し、複数のメールボックスホストを利用する多数のユーザへの配信を円滑に行うための特別な iPlanet Messaging Server。

Messaging Server 管理者 (Messaging Server administrator) iPlanet Messaging Server インスタンスのインストールや管理などの権限を持つ管理者。

Messenger Express ユーザがブラウザベース (HTTP) のインタフェースを介してメールボックスにアクセスできるようにするメールクライアント。メッセージ、フォルダ、その他のメールボックス情報は、HTML 形式でブラウザのウィンドウに表示されます。**Web メール**も参照してください。

Messenger Express Multiplexor マルチプレクサとして機能するメッセージングプロキシサーバで、ユーザが iPlanet Messaging Server の HTTP サービス (Messenger Express) に接続できるようにします。Messenger Express Multiplexor を使用すると、複数のサーバマシンにユーザを分散できるようになります。

MHS Message Handling System を参照してください。

MIME Multipurpose Internet Mail Extension を参照してください。

MMP Messaging Multiplexor を参照してください。

MTA Message Transfer Agent を参照してください。

MTA 設定ファイル (MTA configuration file) Messaging Server のすべてのチャンネル定義と、ルーティングのためのアドレス書き換え規則を含むファイル (imta.cnf)。**チャンネル**、**書き換え規則**も参照してください。

MTA ディレクトリキャッシュ (MTA directory cache) ユーザおよびグループに関するディレクトリサービス情報のスナップショットで、MTA がメッセージを処理するために必要とします。**ディレクトリの同期**も参照してください。

MTA ホップ (MTA hop) MTA 間でメッセージをルーティングする処理。

MUA ユーザエージェントを参照してください。

Multiplexor Messaging Multiplexor を参照してください。

Multipurpose Internet Mail Extension (MIME) 電子メールメッセージ内にマルチメディアファイルを追加できるようにするために使用されるプロトコル。

MX レコード (MX record) メール交換レコード。ホスト名を別のホスト名にマップする、DNS レコードの一種。

NDN 非配信通知を参照してください。

NOTARY メッセージ (notary messages) RFC 1892 の NOTARY 仕様に準拠した非配信通知 (NDN) および配信ステータス通知 (DSN)。

OSI ツリー (OSI tree) Open Systems Interconnect ネットワーク構造を反映するディレクトリ情報ツリー。OSI ツリー内の識別名は、cn=billt,o=bridge,c=us のようになります。

POP3 Post Office Protocol Version 3 を参照してください。

Post Office Protocol Version 3 (POP3) 標準の配信方法を提供するプロトコル。このプロトコルを使用する場合、MTA (Message Transfer Agent) はユーザのメールフォルダへのアクセス権を持っている必要はありません。アクセス権が不要なことは、メールクライアントと MTA が別のコンピュータに置かれることが多いネットワーク環境で利点となります。

RC2 RSA Data Security によって提供される可変鍵サイズによるブロック暗号化方式。

RC4 RSA Data Security によって提供されるストリーム暗号化方式。RC2 よりも高速に処理できます。

RDN 相対識別名。実際のエントリ自体の名前。この文字列にエントリの祖先を付加すると完全な識別名になります。

RFC Request For Comments の略。1969 年に開始されたドキュメントシリーズで、インターネットの一連のプロトコルと、関連する実験について記述されています。インターネット標準について記述した RFC の数はわずかですが、すべてのインターネット標準が RFC として公開されています。<http://www.imc.org/rfc.html> を参照してください。

SASL Simple Authentication and Security Layer を参照してください。

SCM Service Control Manager を参照してください。

Secure Sockets Layer (SSL) クライアントとサーバの間での安全な接続を確立するソフトウェアライブラリ。

sendmail UNIX マシンで使用される一般的な MTA。ほとんどのアプリケーションでは、sendmail の代わりに iPlanet Messaging Server を使用できます。

service (1) サーバが提供する機能。たとえば、iPlanet Messaging Server は、SMTP、POP、IMAP、HTTP などのサービスを提供します。(2) ユーザインタフェースを持たない Windows NT 上のバックグラウンドプロセス。iPlanet サーバは、Windows NT プラットフォーム上ではサービスとして稼働します。UNIX プラットフォーム上の **デーモン** と同じです。

Service Control Manager サービスを管理するための Windows NT の管理プログラム。

Sieve メールのフィルタリング言語。

Simple Authentication and Security Layer (SASL) POP、IMAP、または SMTP クライアントがサーバから識別されるようにするためのメカニズムを制御する手段。iPlanet Messaging Server での SMTP SASL の使用は、RFC 2554 (ESMTP AUTH) に準拠していません。SASL は、RFC 2222 に定義されています。

Simple Mail Transfer Protocol (SMTP) インターネットでもっとも一般的に使用される電子メールプロトコルで、iPlanet Messaging Server でもサポートされています。RFC 821 に定義されています。また関連するメッセージ形式が RFC 822 に記述されています。

SIMS Sun Internet Mail Server の略。

SIZE クライアントが特定のメッセージのサイズをサーバに対して宣言できるようにする SMTP 拡張機能。サーバは、宣言されたメッセージサイズに基づいて、メッセージ受信の可否をクライアントに示すことができます。サーバは、受信可能なメッセージの最大サイズをクライアントに宣言できます。RFC 1870 に定義されています。

SMTP Simple Mail Transfer Protocol を参照してください。

SMTP AUTH AUTH を参照してください。

sn 苗字を表すエイリアスディレクトリ属性。

SSL Secure Sockets Layer を参照してください。

SSR サーバ側規則を参照してください。

TCP Transmission Control Protocol を参照してください。

TCP/IP Transmission Control Protocol/Internet Protocol を参照してください。

TLS Transport Layer Security を参照してください。

Transmission Control Protocol (TCP) 2つのホスト間での信頼性の高い接続指向のストリームサービスを提供するインターネットプロトコル群内の基本転送プロトコル。

Transmission Control Protocol/Internet Protocol (TCP/IP) インターネットプロトコルで 사용되는複数のネットワークプロトコルの総称。この名前は、トランスポート層のプロトコルである TCP (Transmission Control Protocol) とネットワーク層のプロトコルである IP (Internet Protocol) の2つの主要ネットワークプロトコルを指します。

Transport Layer Security (TLS) SSL を標準化したもの。Secure Sockets Layer も参照してください。

UA ユーザエージェントを参照してください。

UBE Unsolicited Bulk Email を参照してください。

UID (1) ユーザ識別子。システムでユーザを識別するための一意の文字列。ユーザ ID とも呼ばれます。(2) ユーザ ID (ログイン名) のエイリアスディレクトリ属性。

Unsolicited Bulk Email (UBE) 一般に宣伝目的でメール送信業者から大量に送信される迷惑メール。

Users and Groups Directory Server (User/Groups Directory Server) 組織内のユーザおよびグループに関する情報を保持する Directory Server。

UUCP UNIX to UNIX Copy Program (UNIX から UNIX へのコピープログラム) の略。UNIX システム間での通信に使用されるプロトコルです。

Veritas Cluster Server iPlanet Messaging Server と統合できる Veritas Software 製の高可用性クラスタリングソフトウェア。

VERFY ユーザ名を確認するための SMTP コマンド。RFC 821 に定義されています。

Web サーバ (Web server) World Wide Web アクセスを提供するために導入されるソフトウェアプログラムまたはサーバコンピュータ。Web サーバは、ユーザからの要求を受け取り、要求されたファイルやアプリケーションを検索し、さらにエラーメッセージを発行します。

Web メール (webmail) ブラウザベースの電子メールサービスを示す一般的な用語。ブラウザベースのクライアントは、多くの処理をサーバに任せるので、「シンクライアント」とも呼ばれ、常にサーバ上に格納されるメールにアクセスします。**Messenger Express** も参照してください。

X.400 メッセージ処理システムの標準。

アカウント (account) 特定のユーザまたはユーザグループを定義する情報。この情報には、ユーザやグループの名前、1 つまたは複数の有効な電子メールアドレス、および電子メールの配信方法と配信先が含まれます。

アクセス制御 (access control) サーバ、またはサーバ上のフォルダやファイルへのアクセスを制御する方法。

アクセス制御規則 (access control rules) 特定のディレクトリエントリまたは属性のセットに対するユーザの権限を指定する規則。

アクセス制御情報 (access control information) ACI。アクセス制御リストの単一の情報項目。

アクセス制御リスト (access control list) ACL。ディレクトリに対するユーザやグループのアクセス権を定義するためにディレクトリに関連付けられた一連のデータ。

アクセスドメイン (access domain) 指定したドメイン内から利用できる Messaging Server 操作を制限します。たとえば、アクセスドメインを使用すると、特定のアカウント宛てのメールを収集できる場所を制限できます。

アドレス (address) 電子メールメッセージの送信先と送信方法を決定するメッセージ内の情報。アドレスはメッセージヘッダーとメッセージエンベロープの両方に表示されます。エンベロープアドレスは、メッセージのルーティング方法と配信方法を決定します。ヘッダーアドレスは表示専用です。

アドレス指定プロトコル (addressing protocol) 電子メールの利用を可能にするアドレス指定規則。RFC 822 は、インターネット上でもっとも幅広く使用されているプロトコルで、iPlanet Messaging Server でサポートされています。その他のプロトコルには、X.400 や UUCP (UNIX to UNIX Copy Protocol) などがあります。

アドレス処理 (address handling) アドレス指定のエラーを検出し、必要に応じてアドレスを書き換え、アドレスと受取人の照合を行うために MTA によって実行される処理。

アドレストークン (address token) 書き換え規則パターン of アドレス要素。

暗号化 コードキーを持つ特定の受取人以外には解読できないように情報を隠すプロセス。

安全なファイルシステム (safe file system) システムがクラッシュした場合に、データをクラッシュ前の状態にロールバックし、すべてのデータをリストアできるようにログを記録しているファイルシステム。安全なファイルシステムの例として、Veritas File System (VxFS) などがあります。

一時的な失敗 (transient failure) メッセージ処理中に発生するエラー状態。リモート MTA が、配信時にメッセージを処理できない場合でも、あとで処理可能になることがあります。ローカル MTA は、メッセージをキューに戻し、あとで再転送されるようにスケジューリングします。

インスタンス (instance) 個別に実行可能なサーバの設定、または特定のホスト上にあるその他のソフトウェアエンティティ。インストール済みの 1 組のバイナリファイルから、独立して実行およびアクセスできる複数の iPlanet サーバのインスタンスを作成できます。

インスタンスディレクトリ (instance directory) サーバの特定のインスタンスを定義するファイルを含むディレクトリ。Messaging Server の場合は、サーバルートのサブディレクトリ (*server-root/msg-instance/*) です。*instance* は、インストール時に指定したサーバの名前です。インスタンスディレクトリ、サーバルートも参照してください。

インストールディレクトリ (installation directory) サーバのバイナリ (実行可能) ファイルがインストールされるディレクトリ。Messaging Server の場合は、サーバルートのサブディレクトリ (*server-root/bin/msg/*) です。インスタンスディレクトリ、サーバルートも参照してください。

インターネット (Internet) TCP/IP プロトコルを使用する、世界規模のネットワークのネットワーク。

インターネットプロトコル (IP) (Internet Protocol) インターネットおよびイントラネットの基礎となる基本ネットワークレイヤープロトコル。

インターネットプロトコルアドレス (internet protocol address) IP アドレスを参照してください。

イントラネット (intranet) 企業や組織内における複数の TCP/IP ネットワークのネットワーク。イントラネットでは、World Wide Web で使われているものと同種のサーバおよびクライアントソフトウェアを、企業 LAN 上で提供される社内アプリケーションとして使用できます。インターネットと通信するイントラネット上の機密情報は、通常はファイアウォールで保護されます。**ファイアウォール**、**エクストラネット**も参照してください。

永続的な失敗 (permanent failure) メッセージ処理中に発生するエラー状態。この状態が発生すると、メッセージストアは電子メールメッセージのコピーを削除します。MTA はメッセージを差出人に戻し、メッセージのコピーを削除します。

エイリアス (alias) 電子メールアドレスの別名。

エイリアスの参照解除 (dereferencing an alias) バインドまたは検索で、ディレクトリサービスがエイリアス識別名をエントリの実際の識別名に変換するように指定すること。

エイリアスファイル (alias file) ポストマスターエイリアスなど、ディレクトリ内に設定されていないエイリアスを設定するために使用されるファイル。

エクストラネット (extranet) 企業イントラネットで顧客や供給業者がアクセスできる部分。**イントラネット**も参照してください。

エクспанダ (expander) メッセージをアドレスのリストに配信できるようにする、電子メール配信システムの一部。メールエクспанダは、メーリングリストを実装するために使用されます。ユーザが 1 つのアドレス (hacks@somehost.edu など) にメッセージを送信すると、メールエクспанダがリスト内のメールボックスへの配信を行います。メールエクスプロダとも呼ばれます。**EXPN** も参照してください。

エクスパンド (expansion) この用語は、MTA によるメールリストの処理で使用されます。メールリスト宛てのメッセージを、各メールリストのメンバーに必要な数のコピーに変換することです。

エラーハンドラ (error handler) エラーを処理するプログラム。Messaging Server では、エラーメッセージを発行し、ポストマスターが入力したエラーアクションフォームを処理します。

エラーハンドラアクションフォーム (Error-Handler Action form) Messaging Server が処理できない受信メッセージとともにポストマスターアカウントに送信されるフォーム。ポストマスターは、フォームに入力して、メッセージの処理方法をサーバに指示します。

エラーメッセージ (error message) エラーやその他の状況をレポートするメッセージ。iPlanet Messaging Server は、処理できない電子メールメッセージを受け取った場合など、さまざまな状況でメッセージを生成します。また、情報の通知だけを目的とする通知エラーと呼ばれるメッセージもあります。

エンタープライズネットワーク (enterprise network) 地理的に分散している相互接続されたネットワークの集合で構成されるネットワーク。エンタープライズネットワークは、広範囲に分散している企業のニーズを満たすもので、企業のミッションクリティカルなアプリケーションで使用されます。

エンベロープ (envelope) 電子メールメッセージの差出人と受取人に関する情報を転送するためのコンテナ。これらの情報は、メッセージヘッダーには含まれません。エンベロープは、さまざまな電子メールプログラムで、メッセージを別の場所に移動するときに使用します。ユーザには、メッセージのヘッダーと本文だけが表示されます。

エンベロープフィールド (envelope field) メッセージエンベロープ内の名前付きの情報項目。RCPT TO などがあります。

オブジェクトクラス (object class) エントリが記述するオブジェクトの種類と、そのエントリに含まれる属性のセットを指定するテンプレート。たとえば、iPlanet Directory Server では、commonname、mail (電子メールアドレス)、mailHost、mailQuota などの属性を持つ emailPerson オブジェクトクラスが指定されます。

オフライン状態 (off-line state) メールクライアントがサーバシステムからクライアントシステムにメッセージをダウンロードして、メッセージの表示や返信の作成ができる状態。サーバ上のメッセージは、削除される場合と削除されない場合があります。

オンライン状態 (online state) メッセージをサーバ上に残したまま、メールクライアントがリモートから返信する状態。

書き換え規則 (rewrite rules) ドメイン書き換え規則とも呼ばれます。MTA が配信メッセージを正しいホストにルーティングするために使用するツールです。書き換え規則には、以下の機能があります。(1) 受信メッセージのアドレスからホストまたはドメインの仕様を抽出する。(2) ホストまたはドメイン仕様を書き換え規則のパターンと照合する。(3) ドメインテンプレートに基づいてホストまたはドメイン仕様を書き換える。(4) メッセージを置くチャネルキューを決定する。

鍵データベース (key database) サーバの証明書用の鍵のペアを含むファイル。鍵ファイルとも呼ばれます。

仮想ドメイン (virtual domain) (1) ISP ホストドメイン。(2) Messaging Multiplexor によってクライアントのユーザ ID に追加されるドメイン名。LDAP 検索やメールボックスサーバへのログインで使用します。**ドメイン**、**ホストドメイン**も参照してください。

完全指定ドメイン名 (FQDN) (fully-qualified domain name) 特定のインターネットホストを識別する一意の名前。**ドメイン名**も参照してください。

管理権限 (administration privileges) ユーザ管理の役割を定義する一連の権限。

管理コンソール (administration console) **コンソール**を参照してください。

管理者 (administrator) 定義済みの一連の管理権限を持つユーザ。**構成管理者**、**Directory Manager**、**Administration Server 管理者**、**サーバ管理者**、**メッセージストア管理者**、**トップレベル管理者**、**ドメイン管理者**、**組織管理者**、**ファミリーグループ管理者**、**メールリスト所有者**も参照してください。

管理対象オブジェクト (managed object) 設定可能な属性の集まり。たとえば、ディレクトリサービスの属性の集まりです。

管理ドメイン (administration domain) 管理制御の対象範囲。**ドメイン**も参照してください。

キュー (queue) **メッセージキュー**を参照してください。

共有フォルダ (shared folder) 複数のユーザが読み取り可能なフォルダ。共有フォルダに対しては所有者が指定されます。所有者は、フォルダに対する読み取りアクセス権を指定したり、共有フォルダからメッセージを削除したりできます。共有フォルダにはモデレータを指定することもできます。モデレータは、受信メッセージの編集、ブロック、転送などを行うことができます。共有できるのは IMAP フォルダだけです。**個人用フォルダ**も参照してください。

許可フィルタ (Allow filter) 次のサービスへのアクセスを許可されているクライアントを識別するための、Messaging Server のアクセス制御規則。POP、IMAP、または HTTP。**拒否フィルタ**も参照してください。

拒否フィルタ (Deny filter) 次のサービスへのアクセスを拒否されているクライアントを識別するための、Messaging Server アクセス制御規則。POP、IMAP、または HTTP。**許可フィルタ**も参照してください。

クライアント (client) サーバにサービスまたは情報を要求するソフトウェアエンティティ。

クライアントサーバモデル (client-server model) ネットワーク接続されたコンピュータがほかのクライアントコンピュータに特定のサービスを提供する処理モデル。例として、DNS のネームサーバとネームリゾルバのパラダイム、NFS やディスクレスホストなどのファイルサーバとファイルクライアントの関係などがあります。

クラスパス (class path) サブレットエンジンとサブレットテンプレートを実行するために必要なディレクトリおよび .jar ファイルへのパス。

グリーティングフォーム (greeting form) ユーザのアカウントが作成されたときにユーザに送信されるメッセージ。このフォームは、新しいアカウントを確認し、その内容を検証するために使用されます。

グループ (group) 識別名によって編成された LDAP メールエントリのグループ。通常は、メールリストとして使用されますが、グループのメンバーに特定の管理権限を与えるために使用される場合もあります。**動的グループ**、**静的グループ**も参照してください。

グループフォルダ (group folders) これらのフォルダには、共有フォルダとグループフォルダが含まれます。**共有フォルダ**も参照してください。

ゲートウェイ (gateway) ゲートウェイおよびアプリケーションゲートウェイという用語は、1つのネイティブフォーマットから別のフォーマットへの変換を行うシステムを指します。例として、X.400 と RFC 822 間の送受信を行う電子メールゲートウェイがあります。複数の電子メールシステム (特に、2つの異なるネットワーク上の類似性のないメールシステム) を接続し、その間でメッセージを転送するマシンです。マッピングと変換は複雑になることもあり、一般的に、あるシステムからメッセージを完全に受け取ってから適切な変換を行って次のシステムに送信するようなストアアンドフォワードのしくみが必要です。

検索ベース (search base) ベース DN を参照してください。

公開鍵暗号化 (public key encryption) 公開コンポーネントと非公開コンポーネントの2つの部分から成る鍵 (コード) を使用する暗号化方式。メッセージの暗号化には、受取人の公開鍵が使われます。メッセージを解読する場合は、受取人が、自分だけが知っている非公開の鍵を使用します。

高可用性 (High Availability) サービスの中断を検出できるようにし、システム障害やプロセス失敗時の回復メカニズムを提供します。さらに、一次システムに障害が発生した場合には、バックアップシステムがサービスを引き継ぐことができるようにします。

構成管理者 (configuration administrator) iPlanet トポロジ全体のサーバおよび構成ディレクトリデータの管理権限を持つユーザ。構成管理者は、iPlanet トポロジ内のすべてのリソースに無制限にアクセスできます。ほかの管理者にサーバアクセス権を割り当てることができる唯一の管理者です。構成管理者は、管理者グループとそのメンバーが配置されるまで初期の管理構成を管理します。

個人用フォルダ (personal folder) 所有者だけが読み取り可能なフォルダ。**共有フォルダ**も参照してください。

コマンドラインインタフェース (command line interface) コマンドラインから実行できるコマンド。ユーティリティとも呼ばれます。

コメント文字 (comment character) 行の最初に配置することで、その行を実行されないコメントに変換する文字。

コンソール (Console) 多くの iPlanet コンポーネントの設定、監視、管理、およびトラブルシューティングを行うことができる GUI (グラフィカルユーザインタフェース)。

サーバインスタンス (server instance) インストールされた特定のサーバを表す、ディレクトリ、プログラム、およびユーティリティ。

サーバ側規則 (SSR) (server side rules) サーバ側でメールをフィルタリングできるようにする規則のセット。Sieve メールフィルタリング言語に基づいています。

サーバ管理者 (server administrator) サーバ管理タスクを実行するユーザ。サーバ管理者は、タスク ACI に基づいて、特定のサーバのタスクに制限付きのアクセス権を提供します。構成管理者が、ユーザにサーバへのアクセス権を割り当てる必要があります。サーバへのアクセス権を与えられたユーザは、サーバ管理者となり、サーバへのアクセス権をほかのユーザに与えることができます。

サーバルート (server root) 特定のホスト上にある Administration Server に関連付けられたすべての iPlanet サーバがインストールされているディレクトリ。通常、*server-root* と記述します。インストールディレクトリ、インスタンスディレクトリも参照してください。

サービス拒否攻撃 (denial of service attack) 個人が意図的にまたは誤ってメッセージを大量に送信したために、メールサーバが処理不能になる状態。サーバのスループットに著しい悪影響を与えたり、サーバ自体が過負荷状態になって機能しなくなることがあります。

サーブレット (servlet) Web サーバがクライアントの要求に応じてコンテンツを生成するために実行するサーバ側の Java プログラム。サーブレットは、サーバ側で実行されますが、ユーザインタフェースを使用しないという点でアプレットに似ています。

再組立 (defragmentation) MIME (Multipurpose Internet Mail Extension) の機能で、大きいサイズのメッセージが小さなメッセージ (断片) に分割された場合に、そのメッセージを再現します。各断片の Message Partial Content-Type ヘッダーフィールドには、断片を 1 つのメッセージに再組立するために使用する情報が含まれています。断片化も参照してください。

サブドメイン (subdomain) ドメインの一部。たとえば、corp.siroe.com というドメイン名では、corp は、ドメイン siroe.com のサブドメインを示します。ホスト名、完全指定ドメイン名も参照してください。

サブネット (subnet) ホスト ID のブロックを識別する IP アドレスの一部分。

参照 (referral) Directory Server が情報要求を送信したクライアントに対し、そのクライアントが通信する必要がある DSA (Directory Service Agent) に関する情報とともに情報要求を返すプロセス。知識情報も参照してください。

識別名 (distinguished name) ディレクトリ情報ツリー内のエントリの位置を一意に指定する、カンマで区切られた一連の属性と値。通常、DN と略記されます。

自動返信オプションファイル (autoreply option file) Vacation 通知ファイルなどの自動返信オプションを設定するために使用するファイル。

自動返信ユーティリティ (AutoReply utility) 自動返信機能が有効になっているアカウント宛てに送信されたメッセージに対し、自動的に返信するためのユーティリティ。iPlanet Messaging Server 内のすべてのアカウントは、受信メッセージに対して自動的に返信するように設定できます。

従属参照 (subordinate reference) ディレクトリサーバによって保持される名前付きコンテキストの子の名前付きコンテキスト。**知識情報**も参照してください。

上位参照 (upper reference) ディレクトリ情報ツリー (DIT) 内で、ディレクトリサーバの名前付きコンテキストの上位にある名前付きコンテキストを保持するディレクトリサーバを示します。

使用可能な属性 (allowed attributes) 特定のオブジェクトクラスを使用するエントリについて指定できるが、必須ではない属性。**属性、必須の属性**も参照してください。

証明書データベース (certificate database) サーバのデジタル証明書 (1 つまたは複数) が含まれているファイル。証明書ファイルとも呼ばれます。

証明書に基づく認証 (certificate-based authentication) クライアントが提供したデジタル証明書によるユーザの識別。**パスワード認証**も参照してください。

証明書名 (certificate name) 証明書とその所有者を特定する名前。

ジョブコントローラ (Job Controller) ほかのさまざまな MTA コンポーネントの要求に応じてタスクをスケジュールおよび実行する MTA コンポーネント。

シングルサインオン (single sign-on) ユーザを一度認証するだけで、複数のサービス (メール、ディレクトリ、ファイルサービスなど) にアクセスできるようにする機能。

スキーマ (schema) iPlanet Directory Server 内にエントリとして格納できる情報のタイプの定義 (構造と構文を含む)。スキーマと一致しない情報がディレクトリに格納されていると、ディレクトリにアクセスするクライアントが適切な結果を表示できない場合があります。

スプーフィング (spoofing) ネットワーク攻撃の形態の 1 つで、サーバにアクセスまたはメッセージ送信しようとしているクライアントに、不正なホスト名を使用させること。

スマートホスト (smart host) ほかのメールサーバが受取人を認識できない場合に、メッセージの転送先となる、ドメイン内のメールサーバ。

スレーブチャネルプログラム (slave channel program) リモートシステムによって開始された転送を受け入れるチャネルプログラム。**マスターチャネルプログラム**も参照してください。

スレッド (thread) プロセス内の小さな実行インスタンス。

正規表現 (regular expression) パターンマッチングのために、文字の範囲またはクラスを表す特殊文字を使った文字列。

静的グループ (static group) 各グループメンバーを列挙することにより静的に定義されたメールグループ。**動的グループ**も参照してください。

セキュリティモジュールデータベース (security-module database) SSL 暗号化方式用のハードウェアアクセラレータを記述する情報を含むファイル。secmod とも呼ばれます。

セッション (session) クライアントサーバ接続のインスタンス。

切断状態 (disconnected state) メールクライアントはサーバに接続し、選択したメッセージのキャッシュコピーを作成してからサーバとの接続を切断します。

設定ファイル (configuration file) iPlanet Messaging システムの特定のコンポーネントに対する設定パラメータが含まれているファイル。

相対識別名 (relative distinguished name) RDN を参照してください。

属性 (attributes) LDAP データは、属性と値のペアとして表されます。個々の情報は、記述属性に関連付けられています。**使用可能な属性、必須の属性**も参照してください。

組織管理者 (organization administrator) Delegated Administrator for Messaging and Collaboration の GUI または CLI を使用して、組織またはサブ組織内のメールユーザとメールリストの作成、変更、および削除を行う管理権限を持つユーザ。

代替アドレス (alternate address) アカウントの二次的なアドレス。通常はプライマリアドレスを変化させたものです。1つのアカウントに複数のアドレスがあると便利な場合があります。

単一フィールド置換文字列 (single field substitution string) 書き換え規則において、ホストまたはドメインアドレスの指定アドレστοークンを動的に書き換えるドメインテンプレートの一部分。**ドメインテンプレート**も参照してください。

断片化 (fragmentation) 大きなメッセージを複数の小さなメッセージに分割できるようにする Multiple Internet Mail Extensions (MIME) 機能。**再組立**も参照してください。

知識情報 (knowledge information) ディレクトリサービスインフラストラクチャ情報の一部。Directory Server は、知識情報を使用して、情報要求をほかのサーバに渡します。

チャネル (channel) メッセージを処理する基本的な MTA コンポーネント。チャネルは、別のコンピュータシステムまたはシステムグループとの接続を表します。各チャネルは、1つまたは複数のチャネルプログラムと1つの送信メッセージキューから構成されます。送信メッセージキューには、そのチャネルに関連付けられている1つまたは複数のシステム宛てのメッセージが格納されます。**チャネルブロック、チャネルホストテーブル、チャネルプログラム**も参照してください。

チャネルプログラム (channel program) 次の機能を実行するチャネルの一部。(1) メッセージをリモートシステムに送信し、送信後にメッセージをキューから削除する。(2) リモートシステムからメッセージを受信して適切なチャネルキューに置く。**マスターチャネルプログラム、スレーブチャネルプログラム**も参照してください。

チャンネルブロック (channel block) 単一のチャンネル定義。チャンネルホストテーブルも参照してください。

チャンネルホストテーブル (channel host table) チャンネル定義のセット。

通知メッセージ (notification message) Messaging Server によって送信されるメッセージの一種で、メッセージ配信処理のステータスと、配信に関する問題や障害の理由などを知らせます。このメッセージは、情報提供を目的とし、ポストマスターに対してアクションを要求するものではありません。**配信ステータス通知**も参照してください。

次のホップリスト (next-hop list) メール経路で、メッセージの転送先を判別するために使用される近接システムのリスト。次のホップリスト内のシステムの順序によって、メール経路内でシステムにメッセージが転送される順序が決まります。

データストア (data store) ディレクトリ情報の保存場所。通常はディレクトリ情報ツリー全体の情報が含まれます。

ディスパッチャ (Dispatcher) 定義済み TCP ポートへの接続要求を処理する MTA コンポーネント。ディスパッチャは、複数のマルチスレッドサーバが特定のサービスを分担できるようにするマルチスレッド接続ディスパッチエージェントです。ディスパッチャを使用すると、複数のマルチスレッド SMTP サーバプロセスを同時に実行できるようになります。

ディレクトリエントリ (directory entry) 識別名で特定されるディレクトリ属性とその値のセット。各エントリには、エントリが記述するオブジェクトの種類を指定し、エントリに含まれる属性のセットを定義するオブジェクトクラス属性が含まれています。

ディレクトリ検索 (directory lookup) ユーザやリソースの名前またはその他の特性を基準として、ディレクトリ内で特定のユーザやリソースに関する情報を検索するプロセス。

ディレクトリコンテキスト (directory context) メッセージストアへのアクセスに対して、ユーザとパスワードの認証に使用するエントリの検索を開始するディレクトリツリー情報内のポイント。**ベース DN**も参照してください。

ディレクトリサービス (directory service) 組織内の人材とリソースに関する、論理的に集中化された情報のリポジトリ。**Lightweight Directory Access Protocol**も参照してください。

ディレクトリ情報ツリー (directory information tree) ディレクトリエントリを編成する、ツリー状の階層構造。DITとも呼ばれます。DITはDNS(DCツリー)またはOpen Systems Interconnectネットワーク(OSIツリー)に従って編成できます。

ディレクトリスキーマ (directory schema) ディレクトリに保存できるデータを定義する一連の規則。

ディレクトリ同期 (directory synchronization) MTA ディレクトリキャッシュをディレクトリサービスに保存された現在のディレクトリ情報で更新 (同期化) するプロセス。MTA ディレクトリキャッシュも参照してください。

転送 (forwarding) メッセージの転送を参照してください。

転送プロトコル (transport protocols) SMTP や X.400 など、MTA 間でのメッセージ転送手段を提供するプロトコル。

統一メッセージング (unified messaging) 電子メール、ボイスメール、FAX、およびその他の通信形態に関して単一のメッセージストアを使用するという概念。iPlanet Messaging Server では、完全な統一メッセージングソリューションの基盤を提供します。

同期 (synchronization) (1) マスターディレクトリサーバのデータによる複製ディレクトリサーバのデータの更新。(2) MTA ディレクトリキャッシュの更新。

動的グループ (dynamic group) LDAP 検索 URL で定義されるメールグループ。通常、ユーザはディレクトリエントリ内で LDAP 属性を設定することによってグループに参加します。

ドキュメントルート (document root) iPlanet Web Server にアクセスするユーザに対して表示されるファイル、イメージ、データを含むサーバマシン上のディレクトリ。

トップレベル管理者 (top-level administrator) Delegated Administrator for Messaging and Collaboration の GUI または CLI を使用して、Messaging Server ネームスペース全体のメールユーザ、メールリスト、ファミリーアカウント、およびドメインの作成、変更、および削除を行う管理権限を持つユーザ。デフォルトでは、このユーザは、トポロジ内のすべての Messaging Server のメッセージストア管理者として作業することができます。

ドメイン (domain) 単一のコンピュータシステムの制御下にあるリソース。管理ドメイン、DNS ドメイン、ホストドメイン、仮想ドメインも参照してください。

ドメインエイリアス (domain alias) 別のドメインを指すドメインエントリ。ホストドメインはエイリアスを使用することにより、複数のドメイン名を持つことができます。

ドメイン書き換え規則 (domain rewrite rules) 書き換え規則を参照してください。

ドメイン管理者 (domain administrator) Delegated Administrator for Messaging and Collaboration の GUI または CLI を使用して、ホストドメイン内のメールユーザ、メールリスト、およびファミリーアカウントの作成、変更、および削除を行うための管理権限を持つユーザ。デフォルトでは、このユーザは、トポロジ内のすべての Messaging Server のメッセージストア管理者として作業することができます。

ドメイン制限容量 (domain quota) 電子メールメッセージ用にドメインに割り当てられる容量で、システム管理者によって設定されます。

ドメイン組織 (domain organization) 組織ツリー内でホストドメインの下にあるサブドメイン。ドメイン組織は、企業内でユーザとグループのエントリを部門別に編成する場合に有用です。

ドメインテンプレート (domain template) 書き換え規則の一部で、アドレスのホスト部分とドメイン部分の書き換え方法を定義します。テンプレートは、完全に静的なホストアドレスおよびドメインアドレス、または単一フィールド置換文字列、あるいはその両方を含む場合があります。

ドメインネームシステム (DNS) (Domain Name System) コンピュータが、ネットワークまたはインターネット上のほかのコンピュータをドメイン名で見つけることができるようにする分散型名前解決ソフトウェア。システムは、標準 IP アドレスをホスト名 (www.siroe.com など) に関連付けます。通常、各マシンはこの情報を DNS サーバから取得します。DNS サーバは、ホスト名をインターネットアドレスに変換するための、複製された分散型のデータ照会サービスを提供します。**A レコード**、**MX レコード**、**CNAME レコード**も参照してください。

ドメイン部分 (domain part) 電子メールアドレスの @ 記号の右側にある部分。たとえば、siroe.com は、電子メールアドレス dan@siroe.com のドメイン部分です。

ドメインホスティング (domain hosting) 共有 Messaging Server 上で1つまたは複数のドメインをホストする機能。たとえば、siroe.com と sesta.org の両方のドメインを siroe.net メールサーバ上でホストできます。ユーザは、ホストドメインとの間でメールの送受信を行います。メールサーバの名前は、電子メールアドレスには表示されません。

ドメイン名 (domain name) (1) 電子メールアドレス内で使用されるホスト名。(2) 管理組織を定義する一意の名前。ドメインにはほかのドメインを含めることができます。ドメイン名は右から左の方向に解釈されます。たとえば、siroe.com は、Siroe Company のドメイン名であり、かつトップレベルの com ドメインのサブドメインです。siroe.com ドメインをさらに corp.siroe.com などのサブドメインに分割することもできます。**ホスト名**、**完全指定ドメイン名**も参照してください。

名前解決 (name resolution) IP アドレスを対応する名前にマップするプロセス。DNS も参照してください。

名前付きコンテキスト (naming context) ディレクトリ情報ツリーの特定の接尾辞。DN によって識別されます。iPlanet Directory Server では、特定のタイプのディレクトリ情報が名前付きコンテキストに格納されます。たとえば、Siroe Corporation のボストンオフィスのマーケティング部門の社員すべてのエントリを格納する名前付きコンテキストは、ou=marketing, ou=Boston, o=siroe, c=US のようになります。

名前付き属性 (naming attribute) ディレクトリ情報ツリーの識別名の最後の属性。**相対識別名**も参照してください。

認証 (authentication) (1) iPlanet Messaging Server に対し、クライアントユーザであることを立証するプロセス。(2) クライアントまたは別のサーバに対し、iPlanet Messaging Server であることを立証するプロセス。

認証局 (Certificate Authority) CA を参照してください。

認証証明書 (authentication certificate) 相手を検証し認証するために、サーバからクライアント、またはクライアントからサーバに送信されるデジタルファイル。証明書は、その所有者 (クライアントまたはサーバ) の信頼性を保証します。証明書は譲渡できません。

ネームスペース (namespace) LDAP ディレクトリのツリー構造。**ディレクトリ情報ツリー**も参照してください。

ネットワークマネージャ (network manager) SNMP データの読み取り、フォーマット、および表示を行うプログラム。SNMP クライアントとも呼ばれます。

ノード (node) DIT 内のエントリ。

パーティション (partition) **メッセージストアパーティション**を参照してください。

配信 (delivery) **メッセージの配信**を参照してください。

配信ステータス通知 (delivery status notification) 受取人に配信中のメッセージに関するステータス情報を示すメッセージ。たとえば、ネットワークが停止したために配信が遅れていることを知らせるメッセージなどがあります。

配布リスト (distribution list) **メールリスト**を参照してください。

配布リスト所有者 (distribution list owner) **メールリスト所有者**を参照してください。

バインド DN (bind DN) 操作実行時に Directory Server に対する認証に使用される識別名。

パスワード認証 (password authentication) ユーザ名とパスワードによるユーザの識別。**証明書に基づく認証**も参照してください。

パターン (pattern) 許可フィルタや拒否フィルタなどで、マッチングのために使用される文字列表現。

バックアップ (backup) メッセージストアのフォルダの内容をバックアップデバイスにバックアップするプロセス。**リストア**も参照してください。

バックエンドサーバ (backend server) 電子メールメッセージの保管と取り出しの機能だけを持つ電子メールサーバ。メッセージストアサーバとも呼ばれます。

バックボーン (backbone) 分散システムの主要な接続メカニズム。バックボーン上の中間システムに接続するすべてのシステムは、相互に接続されます。バックボーンがある場合でも、コスト、パフォーマンス、セキュリティなどの理由から、バックボーンを迂回するようにシステムを設定することができます。

バニティドメイン (vanity domain) 特定のサーバまたはホストドメインではなく、個別のユーザに関連付けられているドメイン名。MailAlternateAddress 属性を使用して指定されます。バニティドメインのドメイン名には LDAP エントリが含まれません。バニティドメインは、個人または小さな組織が、独自のホストドメインを持つための管理負荷をかけずに、カスタマイズしたドメイン名を使用する場合に便利です。カスタムドメインとも呼ばれます。

ハブ (hub) システムの単一接続ポイントとして機能するホスト。たとえば、2つのネットワークがファイアウォールで分離されている場合は、しばしばファイアウォールコンピュータがメールハブとして機能します。

必須の属性 (required attributes) 特定のオブジェクトクラスを使用するエントリ内に存在している必要がある属性。**使用可能な属性**、**属性**も参照してください。

非配信通知 (nondelivery notification) メッセージ転送中に、アドレスパターンと書き換え規則の間に一致するものが見つからない場合、MTA は、オリジナルのメッセージとともに非配信レポートを差出人に返します。

ファイアウォール (firewall) ネットワーク構成の1つで、通常はハードウェアおよびソフトウェアの両方を使用して、組織内のネットワーク接続されたコンピュータと組織外のコンピュータの間の防護壁を構成します。一般に、ファイアウォールは物理的な建物または組織のサイト内にある、ネットワークの電子メール、ディスカッショングループ、データファイルなどの情報を保護するために使用されます。

ファミリーグループ管理者 (family group administrator) ファミリーグループ内のファミリーメンバーの追加と削除を行う管理権限を持つユーザ。このユーザは、グループのほかのメンバーに管理アクセス権を与えることができます。

フェイルオーバー (failover) 冗長バックアップを提供するために、あるシステムから別のシステムにコンピュータサービスを自動転送すること。

フォルダ (folder) メッセージの名前付きのコレクション。フォルダにはほかのフォルダを含めることができます。メールボックスとも呼ばれます。**個人用フォルダ**、**共有フォルダ**、**INBOX** も参照してください。

複製ディレクトリサーバ (replica directory server) データのすべてまたは一部のコピーを受信するディレクトリ。

輻輳しきい値 (congestion thresholds) システム管理者が設定できるディスク容量の上限。システムリソースが不足しているときに新しい操作を制限することによって、データベースへの過重負荷を防ぐことができます。

プレーンテキスト (plaintext) データの転送方法を表します。意味は状況によって異なります。たとえば、SSL のプレーンテキストパスワードは暗号化され、**cleartext** (平文) としては送信されません。SASL では、プレーンテキストパスワードはハッシュされ、パスワードのハッシュだけがテキストとして送信されます。**SSL**、**SASL** も参照してください。

プレーンテキスト認証 (plaintext authentication) **パスワード認証**を参照してください。

プロキシ (proxy) 1つのシステムが別のシステムの代理でプロトコルの要求に応答するメカニズム。プロキシシステムをネットワーク管理で使用すると、モデムなどの単純なデバイスに完全なプロトコルスタックを実装する必要がなくなります。

プロセス (process) オペレーティングシステムによって設定される、独立して完全に機能する実行環境。通常、アプリケーションの各インスタンスは個別のプロセスで実行されません。**スレッド**も参照してください。

プロトコル (protocol) 情報を交換する2つ以上のシステムが従う必要がある規則と、交換されるメッセージに関する公式の記述。

プロビジョニング (provisioning) iPlanet Directory Server のエントリを追加、変更、または削除するプロセス。これらのエントリには、ユーザ、グループ、およびドメイン情報が含まれます。

ベース DN (base DN) 検索が開始されるディレクトリ内の識別名エントリ。検索ベースとも呼ばれます。たとえば、ou=people, o=siroe.com などです。

ヘッダー (header) 電子メールメッセージで本文の前にある部分。ヘッダー内では、フィールド名のあとにコロンと値が続きます。ヘッダーには、電子メールプログラムとユーザにとって、メッセージが意味をなすようにするために有用な情報が含まれています。たとえば、配信情報、内容の概要、トレース、MIME 情報などが含まれます。これらは、メッセージの受取人、差出人、送信日時、内容を示します。ヘッダーは、電子メールプログラムが読み取れるように RFC 822 に従って記述されている必要があります。

ヘッダーフィールド (header field) メッセージヘッダー内の名前付きの情報項目。From:、To: などがあります。ヘッダー行と呼ばれることもあります。

ポート番号 (port number) ホストマシン上の個々の TCP/IP アプリケーションを指定する番号。転送されたデータの宛先を提供します。

ホスト (host) 1つ以上のサーバが置かれているマシン。

ホストドメイン (hosted domain) ISP にアウトソースされた電子メールドメイン。ISP は、企業の電子メールドメインのホスティングを提供し、その企業の電子メールサービスの運営および管理を行います。ホストドメインは、ほかのホストドメインと同一の **Messaging Server** ホストを共有します。初期の LDAP ベースの電子メールシステムでは、1つのドメインが1つまたは複数の電子メールサーバホストによってサポートされていました。

Messaging Server では、複数のドメインを単一のサーバ上でホストできます。各ホストドメインには、そのドメインのユーザとグループのコンテナを指す LDAP エントリがあります。ホストドメインは、仮想ホストドメインまたは仮想ドメインとも呼ばれます。**ドメイン**、**仮想ドメイン**も参照してください。

ポストマスターアカウント (postmaster account) Messaging Server からのシステム生成メッセージを受信する電子メールグループおよび電子メールアドレスのエイリアス。ポストマスターアカウントには、1つ以上の有効なメールボックスを指定する必要があります。

ホスト名 (host name) ドメイン内の特定マシンの名前。ホスト名は、IP ホスト名です。IP ホスト名としては、「短縮形」のホスト名 (mail など) または完全指定ホスト名が使用されます。完全指定ホスト名は、ホスト名とドメイン名の2つの部分から成ります。たとえば、mail.siroe.com は、ドメイン siroe.com 内のマシン mail を表します。ホスト名は、ドメイン内で一意にする必要があります。組織内の異なるサブドメイン内にある場合は、複数のマシンに mail という名前と付けることができます。たとえば、mail.corp.siroe.com と mail.field.siroe.com を使用できます。ホスト名は、常に、特定の IP アドレスにマップされます。**ドメイン名**、**完全指定ドメイン名**、**IP アドレス**も参照してください。

ホスト名の非表示 (host name hiding) 特定の内部ホスト名を含まないドメインベースの電子メールのアドレスを使用すること。

ホップ (hop) 2台のコンピュータ間での転送。

本文 (body) 電子メールメッセージの一部分。ヘッダーとエンベロープは標準書式に従う必要がありますが、メッセージの本文は、テキスト、グラフィックス、マルチメディアなどを使って差出人が自由に作成できます。構造化された本文は MIME 標準に従う必要があります。

マスターチャネルプログラム (master channel program) リモートシステムへの転送を開始するチャネルプログラム。**スレーブチャネルプログラム**も参照してください。

マスターディレクトリサーバ (master directory server) 複製されるデータを含むディレクトリサーバ。

見出し (banner) クライアントがはじめて接続したときに IMAP などのサービスによって表示されるテキスト文字列。

無効なユーザ (invalid user) メッセージ処理中に発生するエラー状態。この状態が発生すると、メッセージストアは、MTA と通信して、メッセージのコピーを削除します。MTA はメッセージを差出人に戻し、メッセージのコピーを削除します。

メーリングリスト (mailing list) メールリストを参照してください。

メーリングリスト所有者 (mailing list owner) メールリスト所有者を参照してください。

メールクライアント (mail client) ユーザが電子メールを送受信する際に利用するプログラム。さまざまなネットワークやメールプログラムの一部で、ユーザがもっとも頻繁に使用する部分です。メールクライアントは、配信するメッセージを作成して送信し、新たに受信したメールを確認し、受信メールを受理して整理します。

メール交換レコード (mail exchange record) MX レコードを参照してください。

メールボックス (mailbox) メッセージの格納と表示を行う場所。**フォルダ**も参照してください。

メールリスト (mail list) 電子メールアドレスのリスト。メールリストのアドレスを指定することによってそれらの電子メールアドレス宛てにメッセージを送信できます。グループと呼ばれることもあります。

メールリスト所有者 (mail list owner) メールリストのメンバーの追加と削除を行う管理権限を持つユーザ。

メールリレー (mail relay) MUA または MTA からのメールを受け取り、そのメールを受取人のメッセージストアや別のルーターに中継するメールサーバ。

メールルーター (mail router) **メールリレー**を参照してください。

メッセージ (message) 電子メールの基本単位。メッセージは、ヘッダーと本文で構成され、多くの場合、差出人から受取人に転送される間はエンベロープに格納されます。

メッセージアクセスサービス (message access services) Messaging Server メッセージストアへのクライアントアクセスをサポートするプロトコルサーバ、ソフトウェアドライバ、およびライブラリ。

メッセージキュー (message queue) クライアントやほかのメールサーバから受け取ったメッセージを (即時または指定日に) 配信するために保管するディレクトリ。

メッセージストア (message store) Messaging Server インスタンスに対してローカルに配信されたすべてのメッセージのデータベース。メッセージは、単一の物理ディスクに格納することも、複数の物理ディスクに格納することもできます。

メッセージストア管理者 (message store administrator) Message Server のメッセージストアを管理する管理権限を持つユーザ。このユーザは、メールボックスの表示と監視、およびストアへのアクセス制御の指定を行うことができます。プロキシ認証の権限を使用して、ストアを管理するための特定のユーティリティを実行できます。

メッセージストアパーティション (message store partition) 単一の物理ファイルシステムパーティション上に置かれたメッセージストアまたはメッセージストアのサブセット。

メッセージ制限容量 (message quota) 特定のフォルダが消費できるディスク容量を定義する制限。

メッセージの削除 (delete message) 削除するメッセージにマークを付けること。削除したメッセージは、別の処理で消去 (パージ) するまで、メッセージストアからは削除されません。メッセージのパージ、メッセージの消去も参照してください。

メッセージの消去 (expunge message) メッセージに削除マークを付け、その後 INBOX から永久に削除すること。メッセージの削除、メッセージのパージも参照してください。

メッセージの送信 (message submission) クライアントのユーザエージェント (UA) は、メールサーバにメッセージを転送し、配信を要求します。

メッセージの転送 (message forwarding) MTA が、特定のアカウントに配信されたメッセージを、アカウントの属性で指定された 1 つまたは複数の新しい宛先に送信するときの処理。転送は、ユーザが設定できます。メッセージの配信、メッセージのルーティングも参照してください。

メッセージのパージ (purge message) ユーザおよびグループフォルダ内で削除マークを付け、参照することのなくなったメッセージを永久に削除し、使用していた領域をメッセージストアのファイルシステムに戻すプロセス。メッセージの削除、メッセージの消去も参照してください。

メッセージの配信 (message delivery) MTA がメッセージをローカルの受取人 (メールフォルダまたはプログラム) に配信するときの処理。

メッセージのルーティング (message routing) 最初の MTA が、受取人がローカルアカウントではなくほかの場所にいると判断したときに、別の MTA にメッセージを転送する処理。通常、ルーティングを設定できるのはネットワーク管理者だけです。メッセージの転送も参照してください。

メンバー (member) メールリスト宛での電子メールのコピーを受け取るユーザまたはグループ。メールリスト、エクスパンド、モデレータ、所有者も参照してください。

モデレータ (moderator) メールリスト宛でのすべての電子メールを最初に受信して、以下の処理を選択実行するユーザ。(A) 配布リストにメッセージを転送する。(B) メッセージを編集してからメールリストに転送する。(C) メッセージをメールリストに転送しない。メールリスト、エクスパンド、メンバーも参照してください。

ユーザアカウント (user account) サーバにアクセスするためのアカウント。ディレクトリサーバ上のエン트리として管理されます。

ユーザエージェント (UA) (user agent) ユーザがメールメッセージを作成、送信、受信できるようにするクライアントコンポーネント。Netscape Communicator などがあります。

ユーザエン트리またはユーザプロフィール (user entry or user profile) 各ユーザに関する必須および任意の情報を記述するフィールド。識別名、氏名、役職、電話番号、ポケットベルの番号、ログイン名、パスワード、ホームディレクトリなどがあります。

ユーザ制限容量 (user quota) 電子メールメッセージ用にユーザに割り当てられる容量で、システム管理者によって設定されます。

ユーザフォルダ (user folders) ユーザの電子メールのメールボックス。

リストア (restore) フォルダの内容をバックアップデバイスからメッセージストアに復元するプロセス。バックアップも参照してください。

リスンポート (listen port) サーバがクライアントやその他のサーバと通信するために使用するポート。

リバース DNS 検索 (reverse DNS lookup) 数値 IP アドレスを対応する完全指定ドメイン名に解釈するために DNS に照会するプロセス。

リレー (relaying) メッセージサーバ間でメッセージを渡すプロセス。

ルーター (router) 複数のネットワークトラフィック経路から利用する経路を決定するシステム。ルーターは、ネットワークに関する情報を取得するためのルーティングプロトコルを使用し、さらに、「ルーティングマトリクス」と呼ばれるいくつかの条件に基づいて最善の経路を決定するアルゴリズムを使用します。OSI の用語では、ルーターはネットワークレイヤーの中間システムになります。ゲートウェイも参照してください。

ルーティング (routing) メッセージのルーティングを参照してください。

ルートエントリ (root entry) ディレクトリ情報ツリー (DIT) 階層のトップレベルのエントリ。

ルックアップ (lookup) 検索の同義語。特定のパラメータを使ってデータを並べ替えます。

レベル (level) ログの詳細度の指定。ログファイルに記録するイベントの種類の相対的な数を意味します。たとえば、Emergency レベルでは、ログに記録されるイベントはわずかですが、Informational レベルでは数多くのイベントがログに記録されます。

ローカル部分 (local part) 電子メールアドレス内の受取人を識別する部分。ドメイン部分も参照してください。

ログディレクトリ (log directory) サービスのすべてのログファイルが保存されているディレクトリ。

ログ有効期限 (log expiration) 有効期間が過ぎたログファイルは、ログディレクトリから削除されます。

ログローテーション (log rotation) 現在のログファイルとして使用する新しいログファイルを作成すること。以後のログイベントは、新しいログファイルに書き込まれます。以前のログファイルはログディレクトリ内に残りますが、ログが書き込まれることはありません。

ワークグループ (workgroup) ローカルワークグループ環境。サーバは、ローカルオフィスまたはワークグループ内で、独自のルーティングおよび配信を実行します。部門間のメールは、バックボーンサーバにルーティングされます。**バックボーン**も参照してください。

ワイルドカード (wildcard) 1つまたは複数のほかの文字または文字範囲を表すことができる検索文字列内の特殊文字。

記号

- < (小なり記号), 217
 - ファイルを含める, 217
- [] (角括弧), 322

数字

- 2桁の日付表示, 234
- 733, 226
- 822, 226

A

- addrreturnpath, 226
- addrspfile, 227
- addrspjob, 227
- addrspjob キーワード, 227
- aliaslocal, 227
- aliaspostmaster, 228
- allowetrn, 228
- allowswitchchannel, 228
- authrewrite, 228
- autoreply ファイルのオプション, 321

B

- bangoverpercent, 229
- bangstyle, 230
- bidirectional, 230
- blocketrn, 230
- blocklimit, 230
- BLOCK_SIZE, 246

C

- cacheeverything, 230
- cachefailures, 230
- cachessuccess, 231
- channelfilter, 231
- charset7, 231
- charset8, 231
- CHARSET-CONVERSION マッピングテーブル, 286
- charsetesc, 232
- checkehlo, 232
- commentinc, 232
- commentmap, 232
- commentomit, 232
- commentstrip, 232
- commenttotal, 233

configutil, 18
connectalias, 233
connectcanonical, 233
CONVERSIONS マッピングテーブル, 286
copysendpost, 233
copywarnpost, 233
counterutil, 22

D

daemon, 234
datefour, 234
datetwo, 234
dayofweek, 234
defaulthost, 234
defaultmx, 235
defaultnameservers, 235
deferred, 235
defragment, 235
Delegated Administration のコマンドラインユー
ティリティ, 133
deliver, 23
dequeue_removertime, 235
destinationfilter, 235
dirsync オプションファイル, 320
disableetrn, 236
dispatcher.cnf ファイル, 326
domainetrn, 236
domainvrfy, 236
dropblank, 236

E

ehlo, 236
eightbit, 236
eightnegotiate, 237
eightstrict, 237
errsendpost, 237
errwarnpost, 237

expandchannel, 237
expandlimit, 238
exproute, 238

F

fileinto, 238
filesperjob, 239
filter, 239
forwardcheckdelete, 239
forwardchecknone, 239
forwardchecktag, 240
From: アドレス, 238

H

hashdir, 25
header_733, 240
header_822, 240
headerlabelalign, 240
headerlinelength, 241
headerread, 241
headertrim, 241
header_uucp, 240
holdexquota, 241
holdlimit, 241

I

identnone, 242
identnonelimited, 242
identnonenumeric, 242
identnonenumeric, 242
identnonenumeric, 242
identntcp, 242
identntcplimited, 242
identntcpnumeric, 243
identntcpsymbolic, 243
ignoreencoding, 243

- imadmin admin add, 136
- imadmin admin remove, 138
- imadmin admin search, 139
- imadmin domain create, 141
- imadmin domain delete, 143
- imadmin domain modify, 144
- imadmin domain purge, 146
- imadmin domain search, 149
- imadmin family-admin add, 159
- imadmin family-admin remove, 161
- imadmin family-admin search, 162
- imadmin family create, 150
- imadmin family delete, 152
- imadmin family-member create, 164
- imadmin family-member delete, 166
- imadmin family-member remove, 167
- imadmin family-member search, 169
- imadmin family modify, 153
- imadmin family purge, 155
- imadmin family search, 158
- imadmin group create, 170
- imadmin group delete, 173
- imadmin group modify, 174
- imadmin group purge, 176
- imadmin group search, 178
- imadmin user create, 180
- imadmin user delete, 182
- imadmin user modify, 183
- imadmin user purge, 185
- imadmin user search, 189
- imadmin コマンド, 133
- improute, 243
- imsasm, 27
- imsbackup, 30
- imscripter, 39
- imsimta cache, 69
- imsimta chbuild, 70
- imsimta cnbuild, 73
- imsimta convertdb, 77
- imsimta counters, 78
- imsimta crdb, 80

- imsimta dirsync, 83
- imsimta find, 85
- imsimta kill, 86
- imsimta process, 87
- imsimta program, 89
- imsimta purge, 91
- imsimta qclean, 92
- imsimta qm, 94
- imsimta qtop, 112
- imsimta refresh, 114
- imsimta renamedb, 115
- imsimta restart, 116
- imsimta return, 117
- imsimta run, 118
- imsimta start, 119
- imsimta stop, 120
- imsimta submit, 120
- imsimta test, 121
- imsimta version, 131
- imsimta view, 131
- imsimta コマンド, 67
- imsrestore, 36
- imta.cnf 設定ファイル, 216
 - 構造, 216
 - コメント, 216
 - コメント行, 216
 - 他のファイルを含める, 217
- IMTA_MAPPING_FILE オプション, 295
- imta_tailor, 316
- includefinal, 243
- inner, 243
- innertrim, 243
- interfaceaddress, 244
- interpretencoding, 244

J

- job_controller.cnf
 - ファイル, 322

L

language, 244
lastresort, 244
linelength, 244
linelimit, 244
local.conf ファイル, 19
localvrfy, 245
logging, 245
loopcheck, 245

M

mailfromdnsverify, 245
master, 245
master_debug, 246
maxblocks, 246
maxheaderaddrs, 246
maxheaderchars, 246
maxjobs, 246
maxlines, 247
maxprocchars, 247
maysaslserver, 247
maytls, 247
maytlsclient, 247
maytlsserver, 247
mboxutil, 40
Messaging Server のコマンドラインユーティリティ
, 17
missingrecipientpolicy, 248
mkbackupdir, 44
MMP
 AService.cfg ファイル, 336
 AService-def.cfg, 336
 AService.rc ファイル, 337
 ImapMMP.config, 336
 ImapProxyAService.cfg ファイル, 336
 ImapProxyAService-def.cfg, 336
 PopProxyAService.cfg ファイル, 336
 PopProxyAService-def.cfg, 336
 SmtproxyAService.cfg, 337
 SmtproxyAService-def.cfg, 337

MoveUser, 47
msexchange, 248
msg.conf ファイル, 19
MTA
 imta.cnf ファイル, 216
 ディスパッチャ, 326
MTA オプションファイル, 301
MTA オプションファイルのオプション, 302
MTA 設定ファイル, 214
MTA 設定ファイル、「imta.cnf」を参照
MTA テイラーファイル, 316
MTA データベースファイル, 215
MTA のコマンドラインユーティリティ, 67
MTA マッピングファイル, 295
multiple, 248
Multiplexor
 AuthCacheSize, 338
 AuthCacheTTL, 338
 AuthService, 339
 AuthServiceTTL, 339
 BacksidePort, 339
 Banner, 339
 BGDecay, 340
 BGExcluded, 340
 BGLinear, 340
 BGMax, 340
 BGMaxBadness, 340
 BGPenalty, 340
 BindDN, 341
 BindPass, 341
 CanonicalVirtualDomainDelim, 341
 Capability, 342
 CertMapFile, 342
 ConnLimits, 343
 CRAMs, 343
 DefaultDomain, 343
 HostedDomains, 344
 LdapCacheSize, 345
 LdapCacheTTL, 345
 LdapURL, 345
 LogDir, 345
 LogLevel, 345
 MailHostAttrs, 346
 NumThreads, 346

- PreAuth, 346
- ReplayFormat, 347
- SearchFormat, 347
- ServerDownAlert, 347
- ServiceList, 348
- SpoofMessageFile, 349
- SSLBacksidePort, 334
- SSLCacheDir, 334
- SSLCertFile, 334
- SSLCertNicknames, 334
- SSLCipherSecs, 334
- SSLEnable, 335
- SSLKeyFile, 335
- SSLKeyPasswdFile, 335
- SSLPorts, 335
- SSLSecmodFile, 335
- StoreAdmin, 349
- StoreAdminPass, 349
- TCPAccess, 349
- TCPAccessAttr, 349
- Timeout, 349
- VirtualDomainDelim, 350
- VirtualDomainFile, 350
- インストール (Unix), 338
- 設定パラメータ, 338

mustsaslsrver, 248

musttls, 249

musttlsclient, 249

musttlsserver, 249

mx, 249

N

nameservers, 249

noaddrreturnpath, 249

nobangoverpercent, 249

nocache, 250

nochannelfilter, 250

nodayofweek, 250

nodefaulthost, 250

nodeferred, 250

nodefragment, 250

nodestinationfilter, 250

nodropblank, 251

noehlo, 251

noexproute, 251

noexquota, 251

nofileinto, 251

noheaderread, 251

noheadertrim, 251

noimproute, 251

noinner, 252

noinnertrim, 252

nolinelimit, 252

nologging, 252

noloopcheck, 252

nomailfromdnsverify, 252

nomaster_debug, 252

nomx, 252

nonrandommx, 253

nonurgentblocklimit, 253

nonurgentnotices, 253

noreceivedfor, 254

noreceivedfrom, 254

noremotehost, 254

norestricted, 254

noreturnaddress, 254

noreturnpersonal, 254

noreverse, 254

normalblocklimit, 255

normalnotices, 255

norules, 255

nosasl, 255

nosaslserver, 256

nosendetrm, 256

nosendpost, 256

noservice, 256

noslave_debug, 256

nosmtp, 256

nosourcefilter, 256

noswitchchannel, 256

notices, 257

notls, 257

notlsclient, 257

notlsserver, 257

novrfy, 257
nowarnpost, 257
nox_env_to, 258

P

percentonly, 258
percents, 258
personalinc, 258
personalmap, 258
personalomit, 258
personalstrip, 258
pool, 259
port, 259
postheadbody, 259
postheadonly, 259

R

randommx, 259
readership, 59
receivedfor, 260
receivedfrom, 260
Received: ヘッダー, 243
reconstruct, 60
remotehost, 260
restricted, 260
restricted チャネルキーワード, 260
returnaddress, 260
returnenvelope, 261
returnpersonal, 261
reverse, 261
routelocal, 261
Rulefile, 54
rules, 261

S

sasls witchchannel, 262
sendetrn, 262
sendpost, 262
sensitivitycompanyconfidential, 262
sensitivitynormal, 262
sensitivitypersonal, 262
sensitivityprivate, 263
service, 263
sevenbit, 263
silentetrn, 263
single, 263
single_sys, 263
single_sys キーワード, 239
slave, 263
SLAVE_COMMAND オプション, 325
slave_debug, 263
SMTP
 メッセージング規格, 353
smtp, 264
smtp_cr, 264
smtp_crlf, 264
smtp_crorlf, 264
smtp_lf, 264
SMTP チャネルオプションファイル, 278
SMTP ディスパッチャ
 設定ファイルのフォーマット, 326
SMTP ディスパッチャ設定オプション, 327
sourceblocklimit, 264
sourcecommentinc, 265
sourcecommentmap, 265
sourcecommentomit, 265
sourcecommenttotal, 265
sourcefilter, 265
sourcepersonalinc, 266
sourcepersonalmap, 266
sourcepersonalomit, 266
sourcepersonalstrip, 266
sourceroute, 266
sroucecommentstrip, 265
start-msg, 63

stop-msg, 64
stored, 64
streaming, 266
subaddressexact, 267
subaddressrelaxed, 267
subaddresswild, 267
subdirs, 267
submit, 267
suppressfinal, 267
switchchannel, 268

T

TCP/IP チャンネル, 278
threaddepth, 268
tlsswitchchannel, 268
To: アドレス, 227

U

unrestricted, 268
urgentblocklimit, 269
urgentnotices, 269
useintermediate, 269
user, 269
USE_REVERSE_DATABASE のビット値, 313
uucp, 269

V

var/mail チャンネルオプションファイル, 277
viaaliasoptional, 269
viaaliasrequired, 270
vrfyallow, 270
vrfydefault, 270
vrfyhide, 270

W

warnpost, 270

X

x_env_to, 271

あ

アクセスプロトコルとメッセージストア
規格, 352

宛先アドレス, 263

アドレス

From:, 238

To:, 227

宛先, 263

規則, 225

タイプ, 225

アドレスキーワード, 225

暗号化

Multiplexor, 333

定義, 369

い

インターネット通信規格, 357

お

オプション

SLAVE_COMMAND, 325

オプションファイルのオプション, MTA, 302

か

書き換え規則

構造, 217
書き換え規則のコントロールシーケンス, 224
拡張 SMTP
 メッセージング規格, 353
環境変数, 変換用, 293

き

キーワード
 アドレス, 225
規格
 SMTP と拡張 SMTP, 353
 基本的なメッセージ構造, 351
 サポート, 351
 テキストの仕様, 356
 電気通信と情報交換, 356
 ドメイン名サービス, 356
 配信ステータス通知, 354
 メッセージの内容と構造, 354
 メッセージング, 351
 文字の仕様, 356
基本的なメッセージ構造
 メッセージング規格, 351

く

空白のエンベロープアドレス, 261

け

権限
 設定ファイル, 214

こ

個々のチャンネル定義, 224
コマンドラインユーティリティ
 configutil, 18

counterutil, 22
Delegated Administration コマンド, 133
deliver, 23
hashdir, 25
imadmin add, 136
imadmin admin remove, 138
imadmin admin search, 139
imadmin domain create, 141
imadmin domain delete, 143
imadmin domain modify, 144
imadmin domain purge, 146
imadmin domain search, 149
imadmin family-admin add, 159
imadmin family-admin remove, 161
imadmin family-admin search, 162
imadmin family create, 150
imadmin family delete, 152
imadmin family-member create, 164
imadmin family-member delete, 166
imadmin family-member remove, 167
imadmin family-member search, 169
imadmin family modify, 153
imadmin family purge, 155
imadmin family search, 158
imadmin group create, 170
imadmin group delete, 173
imadmin group modify, 174
imadmin group purge, 176
imadmin group search, 178
imadmin user create, 180
imadmin user delete, 182
imadmin user modify, 183
imadmin user purge, 185
imadmin user search, 189
imadmin コマンド, 133
imsasm, 27
imsbackup, 30
imscripiter, 39
imsimta cache, 69
imsimta chbuild, 70
imsimta cnbuild, 73
imsimta convertdb, 77
imsimta counters, 78
imsimta crdb, 80
imsimta dirsyntax, 83
imsimta find, 85
imsimta kill, 86

- imsimta process, 87
- imsimta program, 89
- imsimta purge, 91
- imsimta qclean, 92
- imsimta qm, 94
- imsimta qtop, 112
- imsimta refresh, 114
- imsimta renamedb, 115
- imsimta restart, 116
- imsimta return, 117
- imsimta run, 118
- imsimta start, 119
- imsimta stop, 120
- imsimta submit, 120
- imsimta test, 121
- imsimta version, 131
- imsimta view, 131
- imsimta コマンド, 67
- imsretore, 36
- mboxutil, 40
- Messaging Server のコマンド, 17
- mkbackupdir, 44
- MoveUser, 47
- MTA のコマンド, 67
- readership, 59
- reconstruct, 60
- start-msg, 63
- stop-msg, 64
- stored, 64

- コメント行
 - チャンネル定義内の, 224

さ

- サービスジョブ
 - メッセージを配信する, 259
- サポートメッセージング規格, 351
- 産業規格
 - 電子メッセージング, 351

し

- 自動返信オプションファイル, 321

- ジョブコントローラ
 - 設定, 322
 - 設定ファイルのフォーマット, 322
- ジョブコントローラ設定ファイル, 322
 - セクションタイプ, 322

せ

- 設定オプション
 - SMTP ディスパッチャ, 327
- 設定の修正, 214
- 設定ファイル
 - dispatcher.cnf, 326
 - imta.cnf, 216
 - 構造, 216
 - コメント行, 216
 - MTA, 214
- 設定ファイル内のコメント行, 216
- 設定ファイルに他のファイルを含める, 217

そ

- ソースファイル
 - 含める, 217

ち

- チャンネル定義, 224
 - 個々の, 224
- チャンネルテーブル, 268
- チャンネルブロック, 224
- チャンネルホストテーブル, 224

て

- ディスパッチャ, 326
- ディスパッチャ設定ファイル, 326

テイラーファイル, MTA, 316
データベースファイル
 IMTA, 215
テキストの仕様, 356
電気通信と情報交換に関する規格, 356
テンプレートの置換, 224

と

ドメイン名サービス
 メッセージング規格, 356

は

配信ステータス通知
 規格, 354

ひ

日付
 2桁, 234
ビットフラグ, 261

ふ

ファイル
 imta.cnf
 空白行, 216
 構造, 216
 コメント行, 216
 コメントを追加する, 216
 imta.cnfに含める, 217
 job_controller.cnf, 322
 ジョブコントローラの設定, 322
 設定
 権限, 214
 コメント行, 216
 設定ファイルに含める, 217

へ

ヘッダー
 メッセージ, 225
ヘッダーオプションファイル, 313
 場所, 314
 フォーマット, 314
変換, 286
変換制御パラメータ, 289
変換チャンネル
 環境変数, 293

ほ

ホスト、定義, 382

ま

マッピングエントリのテンプレート, 299
マッピングエントリのパターン, 297
マッピングテンプレート内の代替, 299
マッピングテンプレート内のメタ文字, 299
マッピングテンプレートの代替とメタ文字, 299
マッピングの動作, 297
マッピングパターンのワイルドカード, 298
マッピングファイル, 295
 検索する / 読み込む, 295
 ファイルフォーマット, 295
マルチスレッド接続ディスパッチエージェント
 , 326

め

明示的ルーティング, 238
メッセージの内容と構造
 メッセージング規格, 354
メッセージヘッダー, 225
メッセージング

規格, 351
メッセージング規格, 351
 アクセスプロトコルとメッセージストア, 352

も

文字セット変換テーブル, 287
文字の仕様, 356

る

ルーティング
 明示的, 238

ろ

ローカルチャネル
 オプション, 277

わ

ワイルドカード文字、マッピング, 298

